埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第123集

鴻巣市

新屋敷遺跡

—B区—

埼玉県鴻巣保健所関係埋蔵文化財発掘調査報告

1992

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

遺跡全景

女子人物埴輪出土状況

15号墳跡出土埴輪

17号墳跡出土埴輪

序

人形の町として知られている鴻巣は、荒川と元荒川に挟まれた大宮台地上を中心とし、中山道の宿場町として発展しました。近年、開発に伴う発掘調査が盛んとなるにつれて、数多くの遺跡が発見されるようになり、この地における原始から近世に至るまでの歴史が次第に明らかになりつつあります。特に市の北東部を中心として都市整備事業が進められ、公共機関の移転・新設等に関連する発掘調査が顕著となっています。中でも当事業団が昭和60・61年に発掘調査を実施した中三谷遺跡では、縄文時代から平安時代に至る集落跡と中世の館跡が調査され、当地の歴史を知るうえで貴重な資料を得ることができました。

このような開発の一環として鴻巣保健所の改築工事が実施されることになり、その用地内に新屋敷遺跡が所在するため、関係機関の協議が重ねられた結果、埋蔵文化財の取り扱いについては当事業団が発掘調査を実施し、記録保存をすることになりました。

発掘調査の結果、縄文時代の落とし穴と推定される遺構や古墳の跡など数多くの遺構と遺物の良好な資料を検出することができました。特に第15号墳跡は、直径20ｍに満たない小円墳ながら、多量の円筒埴輪やバラエティに富んだ形象埴輪が出土しています。

本書はこれらの成果をまとめたものでありますが、今後、埋蔵文化財の保護、啓蒙普及に、さらには学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に関する調整に御尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から本書の刊行に至るまで御協力いただきました埼玉県衛生部衛生総務課、鴻巣市教育委員会ならびに関係者各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成４年12月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　荒　井　修　二

例　言

1　本書は、埼玉県鴻巣市東４丁目384番１号他に所在する新屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
　文化庁指示通知は平成３年12月17日付け委保第５－1834号である。
　遺跡名の略号はSNYSKである。

2　発掘調査は埼玉県鴻巣保健所改築工事に伴うものであり、埼玉県教育局指導部文化財保護課が調整し、埼玉県衛生部衛生総務課の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

3　発掘調査は高崎光司、赤熊浩一が担当し、平成３年６月１日から平成４年３月31日まで実施した。整理作業は高崎が担当し、平成４年４月１日から平成４年９月30日まで実施した。
　なお、発掘調査・整理作業の組織は第１章に示した。

4　分析については下記へ委託した。分析結果は第５章に掲載した。
　重鉱物・テフラ分析　パリノ・サーヴェイ株式会社

5　本書の執筆は、第１章第１節を埼玉県文化財保護課、第６章第７、８表を田中貴美江、第９表を大谷徹が担当し、その他を高崎が担当した。

6　図版作成、写真撮影は下記の者が行なった。
　図版作成　　高崎　植木智子
　発掘調査撮影　浜野美代子　田中正夫　高崎　赤熊
　遺物撮影　　高崎

7　本書の編集は、資料部資料整理第１課の高崎が行なった。

8　本書にかかる資料は、平成５年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

9　本書の作成に当たり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。
　植田千佳穂　辰巳和弘　古谷毅　宮崎まゆみ　望月幹夫　本村豪章　山崎武　若松良一

10　新屋敷遺跡は数次に及ぶ調査がおこなわれているため、便宜上、本書にかかる調査対象区を新屋敷遺跡Ｂ区と称することにする。

凡　例

1　全体図などに記した座標は国家標準直角座標第Ⅸ系に基づく座標値を表し、方位はすべて座標北を示す。

2　図の縮尺は基本的に次のようにして作成した。

遺跡周辺図	1／2000
遺構全体図	1／500
溝全体図	1／400
古墳跡を除く遺構実測図	1／60
古墳跡遺構実測図	1／160
古墳跡断面図	1／80
円筒埴輪を除く遺物実測図	1／4
円筒埴輪実測図	1／5
遺物出土状況図等	1／15　1／20　1／30　1／40

3　遺構の略称は次のとうりである

住居跡	ＳＪ
古墳跡	ＳＳ
掘立柱建物跡	ＳＢ
溝	ＳＤ
土壙（Ｔピットを含む）	ＳＫ

4　挿図中のスクリーントーン等は以下のことを示している

◎　遺物実測図の網かけは赤色塗彩

◎　遺物実測図の断面黒塗りは須恵器および陶器

◎　遺構実測図の中の網かけは火山灰

5　調査区グリッドは10ｍ単位とし新屋敷遺跡Ａ区（鴻巣警察署関係）からの通しのアルファベットと数字で示した。

6　遺物観察表中の法量の単位はcmである。なお法量における（　）内の数字は復元推定値である。

7　図版の作成に当り、新屋敷遺跡１、２次調査ならびに生出塚遺跡の調査成果について、鴻巣市教育委員会の協力を得た。

目　次

序
Ⅰ　発掘調査の概要……1
　1　調査に至るまでの経過……1
　2　発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織……2
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
Ⅲ　遺跡の概観……6
Ⅳ　遺構と遺物……9
　1　縄文時代の遺構……9
　2　古墳時代の遺構と遺物……13
　3　鎌倉～室町時代の遺構と遺物……74
Ⅴ　自然科学的分析……102
Ⅵ　考察……110

挿図目次

第１図　周辺の主要遺跡……4
第２図　新屋敷遺跡周辺図……5
第３図　遺跡全体図……7
第４図　試掘位置図……8
第５図　Ｔピット(1)……10
第６図　Ｔピット(2)……11
第７図　Ｔピット(3)……12
第８図　第12号住居跡出土遺物……13
第９図　第12号住居跡……13
第10図　第15号墳跡(1)……14
第11図　第15号墳跡(2)……15
第12図　第15号墳跡出土土器……16
第13図　第15号墳跡土器出土位置図……17
第14図　第15号墳跡出土円筒埴輪(1)……19
第15図　第15号墳跡出土円筒埴輪(2)……20
第16図　第15号墳跡出土円筒埴輪(3)……21
第17図　第15号墳跡出土円筒埴輪(4)……22
第18図　第15号墳跡出土円筒埴輪(5)……23
第19図　第15号墳跡出土円筒埴輪(6)……24
第20図　第15号墳跡出土円筒埴輪(7)……25
第21図　第15号墳跡出土円筒埴輪(8)……26
第22図　第15号墳跡円筒埴輪出土位置図……27
第23図　第15号墳跡朝顔形埴輪出土位置図…28
第24図　第15号墳跡ヘラ記号を有する
　　円筒埴輪出土位置図……29
第25図　第15号墳跡出土形象埴輪(1)……32・33
第26図　第15号墳跡出土形象埴輪(2)……34
第27図　第15号墳跡出土形象埴輪(3)……35
第28図　第15号墳跡出土形象埴輪(4)……36・37
第29図　第15号墳跡出土形象埴輪(5)……38
第30図　第15号墳跡出土形象埴輪(6)……39
第31図　第15号墳跡出土形象埴輪(7)……40・41
第32図　第15号墳跡出土形象埴輪(8)……42
第33図　第15号墳跡出土形象埴輪(9)……44・45
第34図　第15号墳跡出土形象埴輪(10)……46・47
第35図　第15号墳跡出土形象埴輪(11)……48
第36図　第15号墳跡形象埴輪・
　　大甕出土位置図……49
第37図　第16号墳跡出土遺物……50
第38図　第16号墳跡遺物出土状況図……50
第39図　第16号墳跡……51
第40図　第17号墳跡……53
第41図　第17号墳跡出土土器・紡錘車……54
第42図　第17号墳跡出土円筒埴輪(1)……55
第43図　第17号墳跡出土円筒埴輪(2)……56
第44図　第17号墳跡出土円筒埴輪(3)……57
第45図　第17号墳跡出土円筒埴輪(4)……58
第46図　第17号墳跡出土円筒埴輪(5)……59
第47図　第17号墳跡出土形象埴輪……60・61
第48図　第17号墳跡遺物出土位置図……62
第49図　第17号墳跡遺物出土状況図……63
第50図　第18号墳跡出土遺物……64
第51図　第18号墳跡……65
第52図　第19号墳跡出土遺物……66
第53図　第19号墳跡……67
第54図　第20号墳跡……68
第55図　第20号墳跡出土遺物……68
第56図　第20号墳跡遺物出土状況図……69
第57図　第21号墳跡……71
第58図　第21号墳跡出土遺物……72
第59図　第22号墳跡……73
第60図　第22号墳跡出土遺物……73
第61図　第2号掘立柱建物跡……74
第62図　第3号掘立柱建物跡……75
第63図　溝跡全体図……76・77
第64図　第23・24号溝跡出土遺物(1)……78
第65図　第23・24号溝跡出土遺物(2)……79
第66図　第25・26・28・34号溝跡出土遺物…80

第67図　土壙……83
第68図　第28号土壙出土遺物……83
第69図　第４号井戸跡……84
第70図　第４号井戸跡出土遺物……84
第71図　グリッド出土および表採遺物……85
第72図　Ｂ区Ｖ-35深掘の模式柱状図
　　および鉱物分析試料採取位置……103
第73図　Ｂ区Ｖ-35深掘断面試料の重鉱物
　　組成および火山ガラス比……105
第74図　各地点の層序対比……108
第75図　埴輪製作技法模式図（女子頭部）……111
第76図　埴輪等樹立状況想定図……112・113
第77図　土器等の出土位置図……114
第78図　古墳造営順列図……115
第79図　三環鈴形埴輪（伝安孫子出土）……116

表目次

第１表　土器観察表……86
第２表　円筒埴輪観察表……88
第３表　形象埴輪観察表……96
第４表　石製品観察表……100
第５表　Ｂ区Ｖ-35深掘断面試料の
　　重鉱物組成および火山ガラス比……104
第６表　新屋敷遺跡Ｂ区出土埴輪の
　　新古対照……110
第７表　埴輪弾琴像一覧……117
第８表　埴輪琴一覧……117
第９表　埼玉県形象埴輪出土遺跡地名表……119

図版目次

図版１　新屋敷遺跡Ｂ区全景
図版２　Ｂ区全景（西から）
　　Ｂ区全景（東から）
図版３　第15号墳（南から）
　　第15号墳（西から）
図版４　第15号墳遺物出土状況（北側）
　　第15号墳遺物出土状況（西側）
図版５　第15号墳人物埴輪出土状況
　　第15号墳形象埴輪出土状況
図版６　第16号墳（西から）
　　第16号墳遺物出土状況
図版７　第17号墳（西から）
　　第17号墳ブリッジ
図版８　第17号墳周溝土層断面（ＳＰＢ－Ｂ´）
　　第17号墳周溝土層断面（ＳＰＡ－Ａ´）
図版９　第17号墳土師器坏出土状況
　　第17号墳紡錘車出土状況
図版10　第17号墳人物埴輪出土状況（左下）
　　第17号墳遺物出土状況
図版11　第18号墳（南西から）
　　第19号墳（西から）
図版12　第20号墳周溝内火山灰分布状況
　　第20号墳（西から）
図版13　第20号墳周溝土層断面
　　第20号墳遺物出土状況
図版14　第21号墳（北東から）
　　第22号墳（南東から）

図版15　第21号墳周溝土層断面
同上断面拡大
図版16　第29・30・31号土壙
第32・34号土壙
図版17　第33号土壙(南東から)
第35号土壙(南東から)
図版18　第36号土壙土層断面
第21号墳周溝・第41号土壙土層断面
図版19　第36号土壙(南から)
第36号土壙と補助員さん
図版20　第23号溝(西から)
第23号溝土層断面
図版21　第27・28号溝(南東から)
第28号溝土層断面
図版22　第24・28・29号溝土層断面
第31号溝(第15号墳周溝内北側)
図版23　第25・26号溝(北西から)
第31号溝(第15号墳周溝内西側)
図版24　第１号掘立柱建物跡(南東から)
第２号掘立柱建物跡(東から)
図版25　第４号井戸(北から)
地山の基本土層断面(Ｖ30グリッド)
図版26　土器
朝顔形埴輪
図版27　円筒埴輪
図版28　円筒埴輪
(第15、17号墳跡出土)
図版29　人物埴輪
(女子)
図版30　人物埴輪
(女子)
図版31　人物埴輪(弾琴)
三環鈴形埴輪
図版32　人物埴輪
(女子)
図版33　人物埴輪
(男子頭)
図版34　人物埴輪
(腕)
図版35　動物埴輪
(猪・鹿)
図版36　動物埴輪
(犬・脚)
図版37　動物埴輪(馬)
家形埴輪(堅魚木)・紡錘車
図版38　Ｂ区Ｖ-35深掘断面試料中の重鉱物
および火山ガラス
図版39　Ｂ区古墳周溝埋積土試料中のテフラ

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至るまでの経過

鴻巣市東４丁目の農事試験場跡地利用をめぐって、国をはじめ、県警察本部、埼玉県住宅供給公社などにより開発事業が計画されて、埼玉県においても鴻巣保健所の建設計画が進行しているところである。

このような、開発に対して埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、県の開発部局と事前協議を実施し、文化財の保護について遺漏のないように調整を進めているところである。

同地は、平成元年当時は、国から県及び埼玉県住宅供給公社に対して土地の払い下げが実施されていない現状であったが、各機関の開発計画は進行中であったことから、開発側を代表し、埼玉県住宅供給公社理事長から平成元年11月20日付け元埼住公企第109号で、埋蔵文化財の取り扱いに対する照会が出された。

同地内には新屋敷遺跡が所在することが周知されていた。しかし、詳細な範囲及び分布密度・内容等について不明な点があるため、文化財保護課では、関係各課との協議の後、鴻巣市教育委員会の協力を得て遺跡の確認調査を実施し、平成元年12月25日付け教文第1274号をもって、次のとおり埼玉県住宅供給公社理事長へ通知した。

１、建設予定地内には、縄文・古墳・奈良・平安・近世の各時代の集落跡、古墳跡があること。

２、上記の取扱については現状で保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更する場合は、事前に文化財保護法57条の３の規定に基づいて文化庁長官あての発掘届けを提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

なお、発掘調査の実施については当教育局指導部文化財保護課と協議すること。

この通知を基に、関係各機関と埋蔵文化財の扱いについて協議が行われることとなった。

鴻巣保健所の建設予定地における埋蔵文化財の扱いについては、衛生部衛生総務課と文化財保護課において、保存に関しての協議を重ねたが、計画変更が不可能となったため、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することとなった。また、発掘調査は(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施することとなった。

これにより、埼玉県と(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団は、発掘調査にかかる委託契約を締結した。また、埼玉県知事から文化財保護法57条の３に基づく埋蔵文化財発掘通知が、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団から調査届が各々文化庁長官へ提出され、発掘調査が平成３年８月１日から開始された。

なお、文化庁長官から(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長当てに、平成３年12月17日付け委保第５－1834号で発掘調査の実施についての指示通知があった。

（文化財保護課）

2　発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織

a．発掘調査（平成３年度）

主体者　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長	荒井修二
副理事長	早川智明
常務理事兼管理部長	倉持悦夫
理事兼調査部長	栗原文藏
管理部	
庶務課長	高田弘義
主査	松本晋
主事	長滝美智子
経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主事	福田昭美
主事	腰塚雄二
主事	菊池久
調査部	
副部長	梅沢太久夫
調査第四課長	鈴木敏昭
主任調査員	高崎光司
主任調査員	赤熊浩一

b．整理・報告書刊行事業（平成４年度）

主体者　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長	荒井修二
副理事長	早川智明
常務理事兼管理部長	倉持悦夫
理事兼調査部長	栗原文藏
管理部	
庶務課長	萩原和夫
主査	贄田清
主事	長滝美智子
経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主事	福田昭美
主事	腰塚雄二
主事	菊池久
資料部	
部長	中島利治
副部長兼整理第一課長	増田逸朗
主任調査員	高崎光司

Ⅱ　遺跡の立地と環境

東京の北方、関東平野のほぼ中央には、低平な大宮台地が横たわっている。新屋敷遺跡はこの台地の北東部に位置し、元荒川に面した斜面に立地する。行政的な位置は、鴻巣市東４丁目384番地に所在し、交通上の位置は国道17号に面する鴻巣警察署の裏手にある。鴻巣市域は荒川と元荒川に挾まれ、北西方向に細長く伸びたこのローム台地の縁辺に主に遺跡が点在している。現状で見るかぎり、台地西側には荒川の侵食による深い小谷が目立ち、対して東側では比較的なだらかに低地へと連続しているようであるが、近年の調査によれば、台地が急傾斜で落ち込み、数ｍの深さで黒色粘質土が堆積している場所も何カ所かで確認されている。したがって比高差は異なるとしても、東側もまた西側同様、小支谷が複雑に入り込んだ地形であったことが予想される。Ｂ区調査区の場合は西から東にかけて地盤は緩やかに傾斜しており、標高は15ｍから14ｍを測る。150ｍほど離れているＡ区と比べると、約４ｍほど低い位置にあたる。そのため、Ａ区に比べて水はけなどはきわめて悪い。

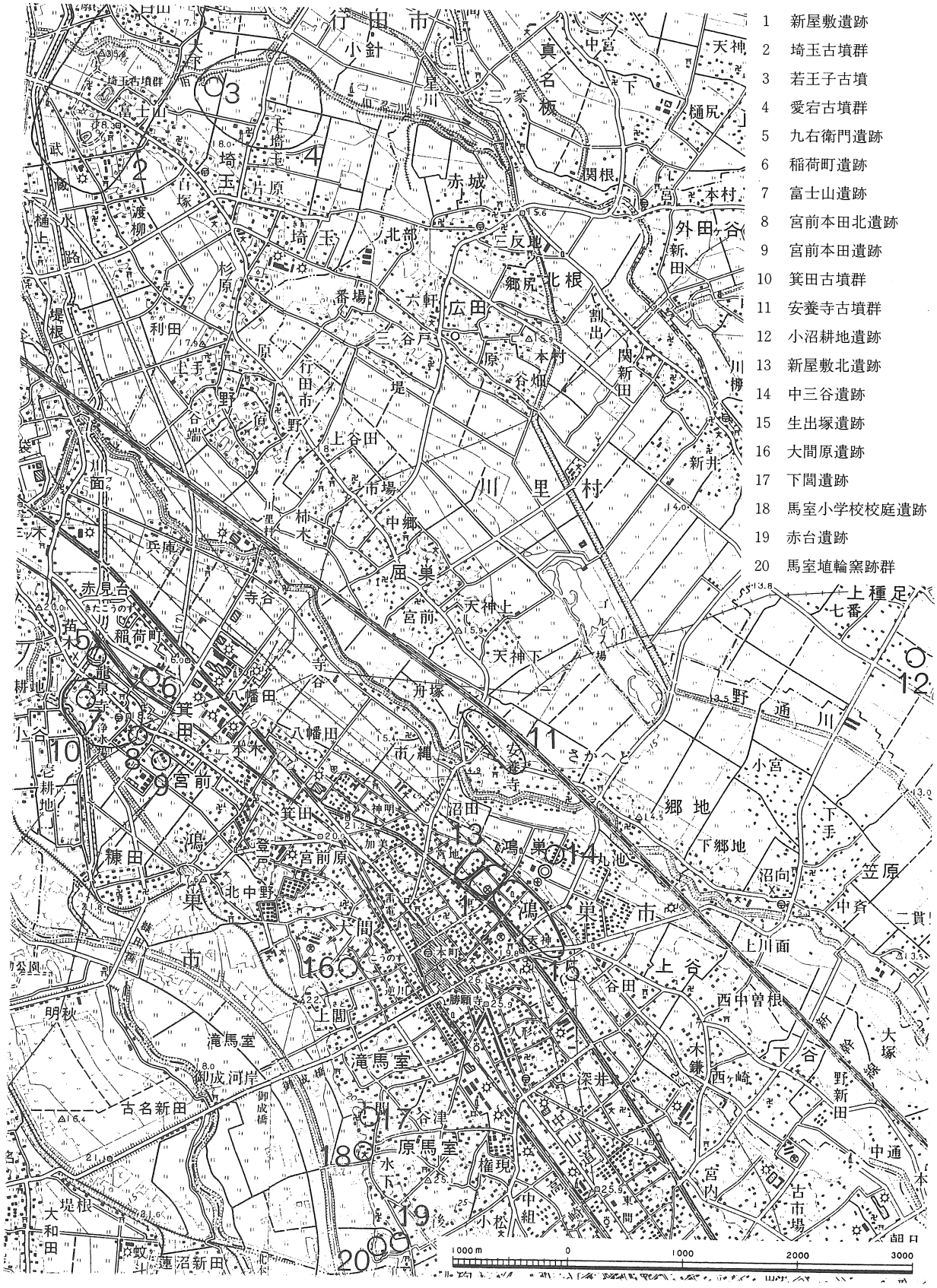
台地西側に分布する古墳時代の遺跡としては、本遺跡の約4㎞北西の位置に９基の古墳が散在する箕田古墳群がある。特に第９号墳は、榛名山系の角閃石安山岩を用いた胴張りの横穴式石室を有している点で注目されている。古墳群としては他に、大半が消滅しているが南方３㎞に馬室古墳群がある。集落遺跡では、古墳時代前期の住居跡が調査された宮前本田遺跡、大間原遺跡、下閭遺跡、馬室小学校校庭遺跡、弥生時代終末から古墳時代後期にまでおよぶ住居跡が36軒調査された赤台遺跡がある。さらに赤台遺跡の西側台地斜面には、昭和７年に後藤守一により発掘調査が行なわれ学史的にも注目される県指定遺跡、馬室埴輪窯跡がある。この他に、九右衛門遺跡、稲荷町遺跡、富士山遺跡、宮町本田北遺跡等においても古墳時代の遺物や遺構があることが確認されている。

台地東側では、全国的に見ても規模において傑出した埴輪窯跡である、生出塚遺跡が筆頭に挙げられよう。平成４年７月段階において古墳跡16基、埴輪窯跡38基、古墳時代中期の住居跡５軒、古墳時代後期の住居跡９軒が確認されている。新屋敷遺跡と古墳～平安時代の遺物が採集されている新屋敷北遺跡、そして生出塚遺跡は、南北１㎞にわたり連続した遺跡と捉えることも可能であり、主として南側では古墳時代の遺構が密で、北側では平安時代の集落が展開していることが、市教育委員会および当埋蔵文化財調査事業団の多次にわたる調査により明かとなった。

本遺跡の古墳群が造られたのは古墳時代後期であるが、後期を中心とする集落遺跡としては東側500ｍに中三谷遺跡がある。前期より続く古墳時代の住居跡が42軒検出され、その内26軒が後期のものであった。ただし、本遺跡との間には埋没谷があり隔絶されているため、直接的な関わり、すなわち新屋敷遺跡の古墳の造営母体という性格付けは避けておきたい。なおこの遺跡では鎌倉～室町時代の館跡があったことが確認され、本遺跡の溝跡の推定時期とほぼ一致している。

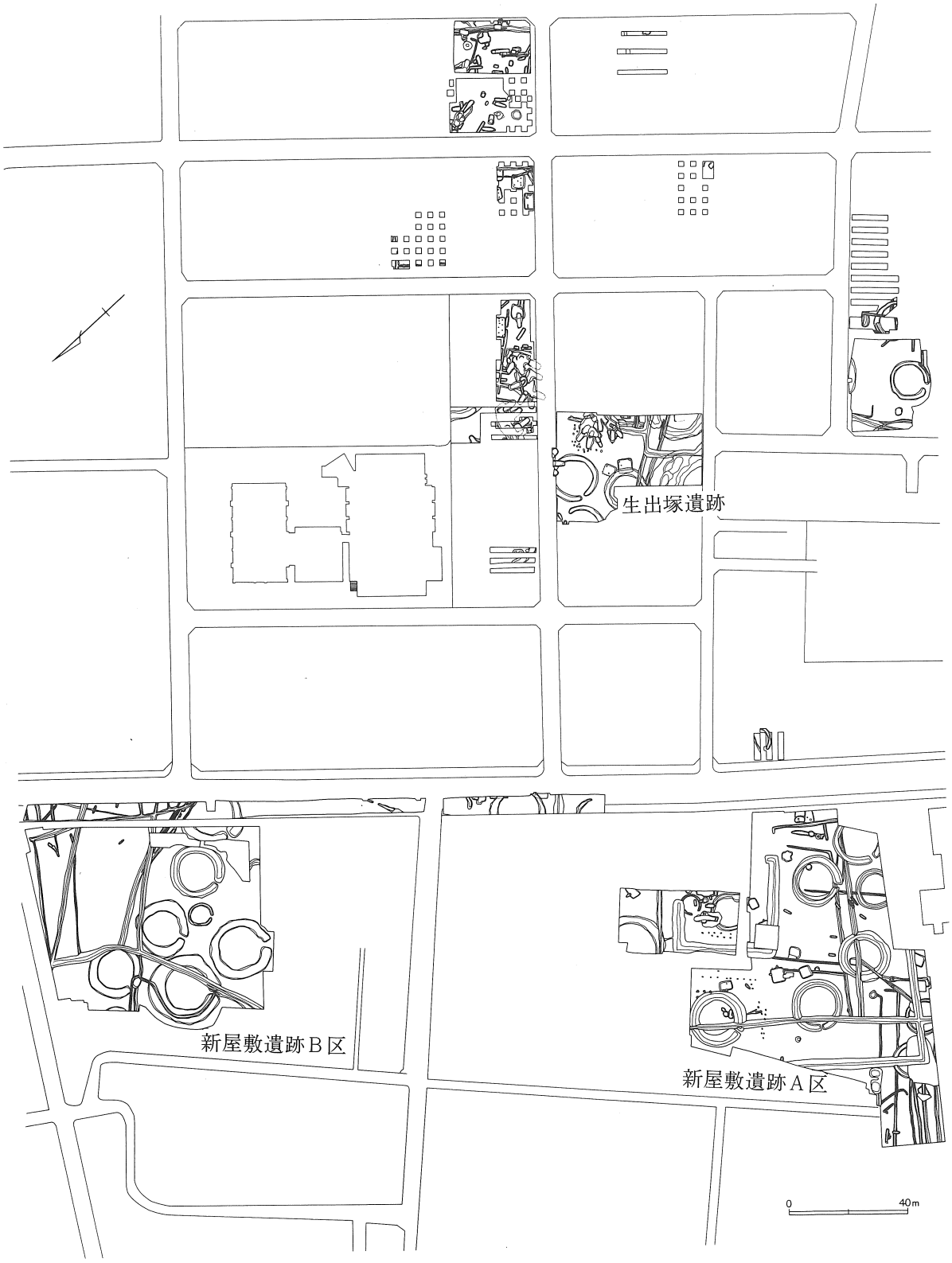
元荒川を隔てた対岸には安養寺古墳群、そして、東方４㎞に全長39ｍの前方後円墳を中心とした小沼耕地遺跡がある。いずれも埴輪を出土する遺跡であり、生出塚遺跡から供給されている。

本遺跡周辺に限ると際だった古墳は見当たらないが、辛亥銘鉄剣を出土した稲荷山古墳や、直径102ｍという最大規模の円墳丸墓山古墳などから成る埼玉古墳群や、消滅はしたが100ｍを超す主軸長があったとされる若王子古墳を擁した愛宕古墳群は北西約7.5㎞に位置している。



1　新屋敷遺跡
2　埼玉古墳群
3　若王子古墳
4　愛宕古墳群
5　九右衛門遺跡
6　稲荷町遺跡
7　富士山遺跡
8　宮前本田北遺跡
9　宮前本田遺跡
10　箕田古墳群
11　安養寺古墳群
12　小沼耕地遺跡
13　新屋敷北遺跡
14　中三谷遺跡
15　生出塚遺跡
16　大間原遺跡
17　下間遺跡
18　馬室小学校校庭遺跡
19　赤台遺跡
20　馬室埴輪窯跡群

第１図　周辺の主要遺跡



第２図　新屋敷遺跡周辺図

Ⅲ　遺跡の概観

新屋敷遺跡は、市教育委員会が４次、当事業団が２地区で、合計６回におよぶ発掘調査が実施されている。市教委１、３、４次調査は道路拡張・造成部分、２次調査は鴻巣警察署裏の宅地造成部分である。事業団では警察署改築に伴う発掘区をＡ区、鴻巣保健所建築に伴う発掘区をＢ区とした。

Ｂ区で検出された遺構は、縄文時代と推定されるＴピット９基､古墳時代の住居跡１軒、古墳跡８基、鎌倉～室町時代と推定される掘立柱建物跡２棟、溝16条、土壙５基、井戸跡１基である。

Ｔピット（ＳＫ29～36、41）は調査区の４隅に散在しており、41号土壙のように１基単独であるものや、29～31号土壙のように複数が群集するものなどパターンは一様でない。長軸の方向も東西を向くもの５基、南北を向くもの４基とこれも一定していないが、基本的には地形の傾斜方向に直交する。出土遺物は未検出だが、調査区内で縄文時代の遺物が比較的多く表採されていること、41号土壙が21号墳により切られていること等を考慮して、縄文時代のＴピットと理解しておきたい。

住居跡は22号墳跡の周溝内で１軒確認された。ほとんど全形を留めていないが、住居床面において、古墳時代前期に属すると推定される土師器片が出土している。

古墳跡は、８基全てがブリッジを持つ円墳である。墳丘部の直径は最小が20号墳で6.5ｍ、最大が16号墳で14.5ｍを測る。古墳はほぼ南北に２列縦隊で行儀よく並び、その間隔は１～３ｍと極めて狭い。ブリッジの方向は古墳により少しづつ差はあるが、全般に西向きであり、墓道等の存在を予測させる。これらの古墳の画一性から、造営においては強い規制が働いていたと見てよいだろう。

新屋敷遺跡の古墳跡は市側で６基（１～６号墳）、Ａ区で８基（７～14号墳）、Ｂ区で８基（15～22号墳）の合計22基が検出された。調査面積は全体の１割にも満たないが、新屋敷、生出塚両遺跡で検出された古墳跡はすべて円墳で、直径20ｍ未満という墳丘の規模、ブリッジの方向と形態、埴輪を主体とする出土遺物等ほとんど同一と言ってよい。したがって、古墳群として見るかぎり、新屋敷22基、生出塚12基（北支台）の古墳群は、連続する一つの群集墳と理解できる。その密集の度合いから推定して、さらに数十基の古墳が地下に眠っていると思われる。

掘立柱建物跡（ＳＢ２、３）は古墳の周溝を切って建てられているので、少なくとも古墳時代およびそれ以前に遡ることはありえない。僅かではあるが調査区内で平安時代の須恵器片が表採されているので、その時期の可能性も否定できないが、２棟ともに、明らかに溝を意識して建てられていることから、溝と同時代の遺構として捉えておきたい。

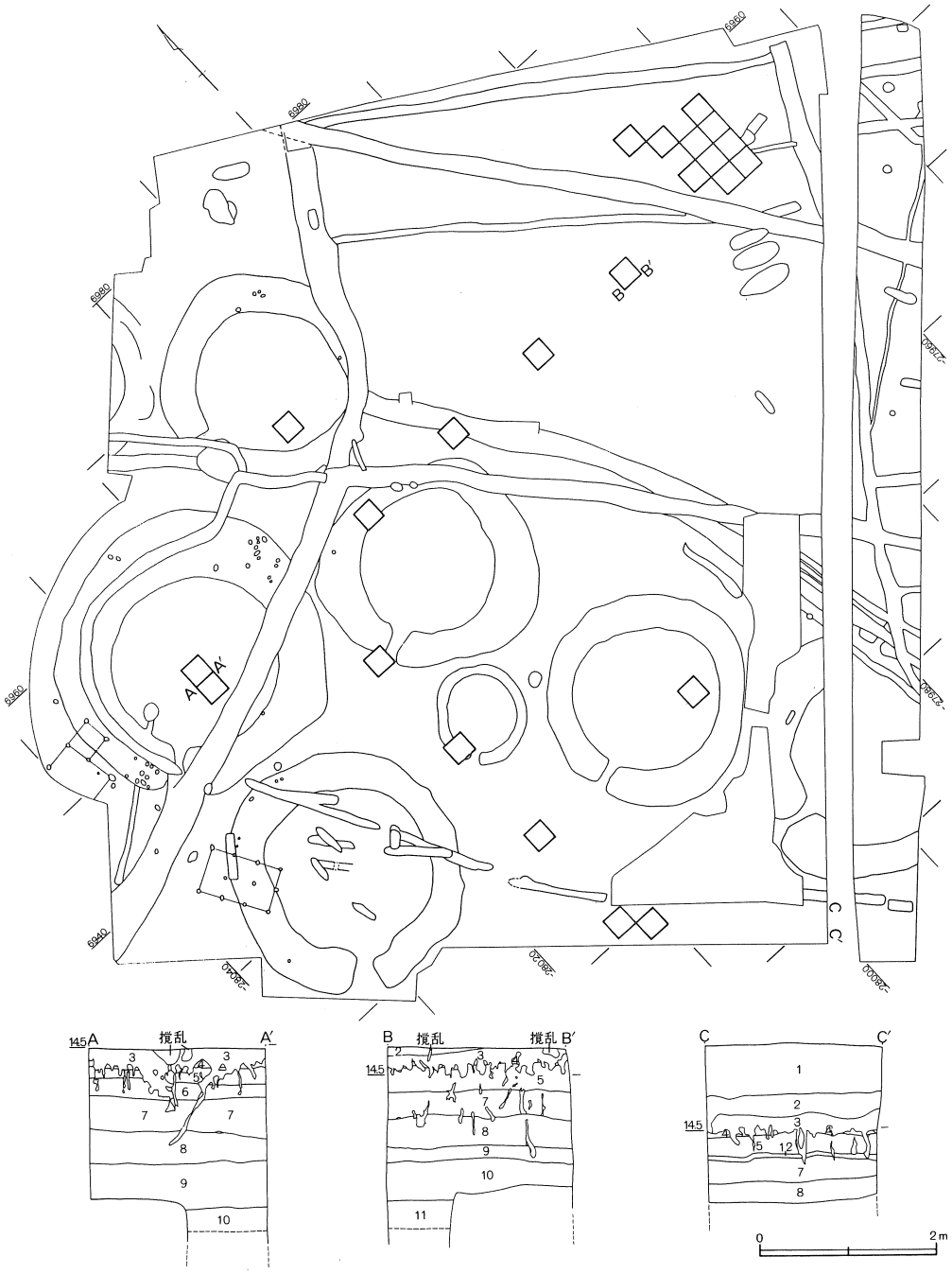
溝は調査区を横切るものと調査区内で鍵形に曲がるものとがある。上巾・深さが１ｍ前後の溝は断面が端正な逆台形を呈している。31号溝は、あたかも古墳の墳丘を避けるように、周溝内をめぐって掘られている。23号、24号溝も一部では墳丘を破壊してはいるが、周溝に沿ってカーブしている部分がある。従って、溝が掘られた段階では未だ墳丘は健在だった可能性が高い。出土遺物は、古墳からの流れ込みの埴輪片と鎌倉～平安時代の陶磁器片が主体である。

井戸跡および土壙からは若干の陶磁器、埴輪片が出土しているが、所属する時期は不明である。

新屋敷という地名は「新編武蔵風土記稿」の鴻巣宿の項中、小名の記載に「古へ鴻巣御殿在りし頃、御鷹部屋ありし所」という記述があることから、将軍の鷹狩に使う鷹を飼育していた施設があ

第３図　遺跡全体図

った場所として考えられてきた。市教委２次調査およびＡ区の調査区で検出された幅４ｍ深さ３ｍの堀跡はこの鷹部屋の構堀かとも考えられる。Ａ区ではさらにその外周に鍵形に曲がる溝跡が検出されたが、これはＢ区内の溝とは方向、規模が異なり、連続するものではない。出土遺物から判断するとＢ区の溝は鎌倉時代～室町時代、Ａ区の溝は室町時代～江戸時代に中心があるようである。



基準土層

1　黒褐色土層　表土
2　暗褐色土層　漸移層
3　ソフト・ローム層
4　ハード・ローム層
5　褐色ローム層1　B－B′では炭化物、白色粒子を含む　C－C′では鉄分多い。
6　褐色ローム層2　下半に、鉄分の堆積が多く見られるが、帯状にはなっていない。
7　黒　色　帯1　白色粒子をわずかに含む　B－B′では炭化物　C－C′では鉄分多い。
8　黒　色　帯2　白色粒子をほとんど含まない　C－C′では鉄分多い。
9　明黄褐色土層　全体に粘性強い　白色粘土粒子はほとんど含まない。
10　褐　色　土　層　よくしまった粘土層　9層（A－A′）11層（B－B′）との境目に湧水点がある。
11　明 褐 色 土 層　よくしまった土。粘性つよい。ごく小さな石が少量混る。
12　鉄分が凝固している層　この層の上層まで水をかぶっていたことを示す。

第4図　試掘位置図

Ⅳ　遺構と遺物

1　縄文時代の遺構

Ｔピット

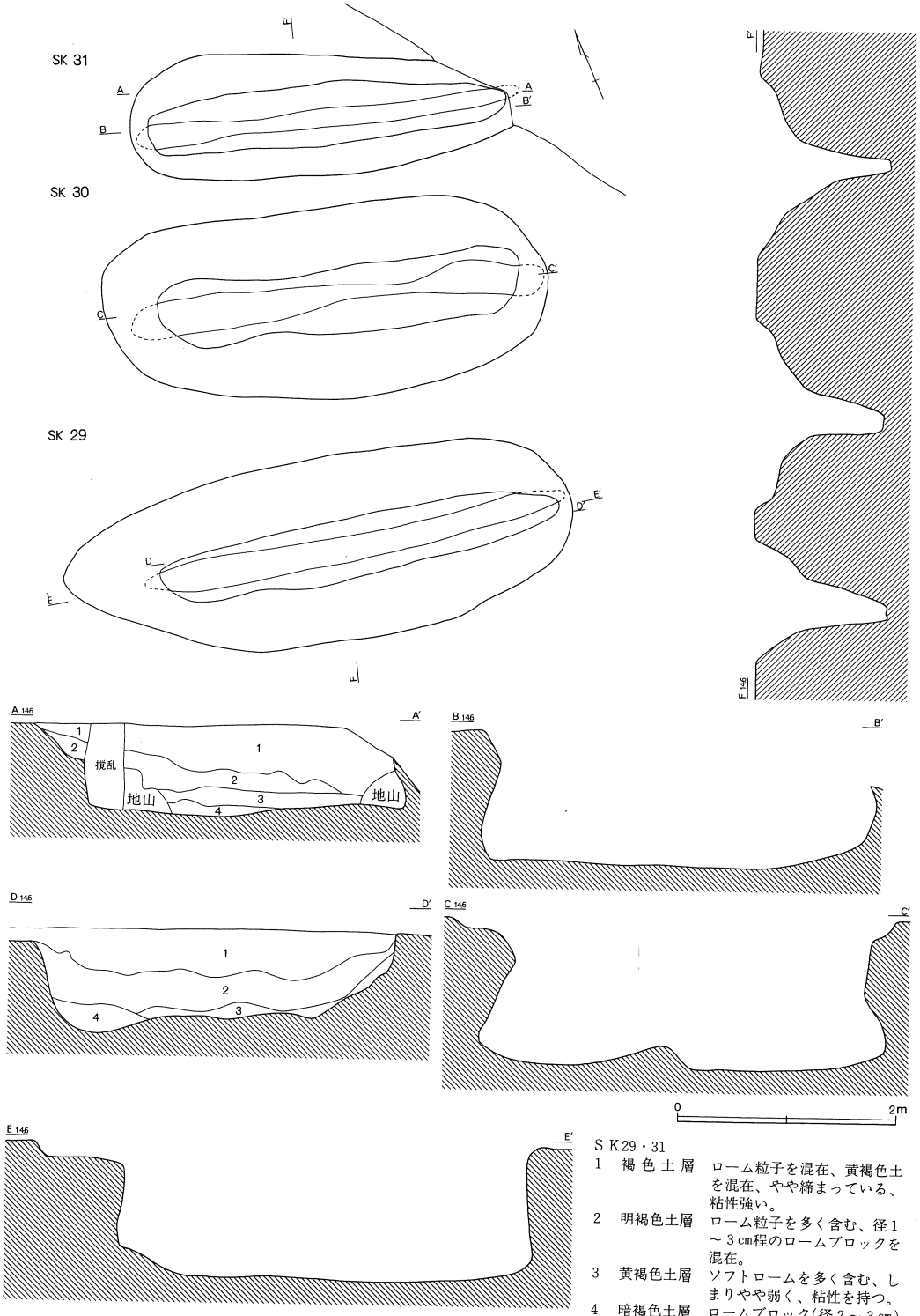
Ｂ区では、長さ４ｍ、深さ約1.3ｍ前後の狭長な土壙が9基検出された。一般にＴピット（トラップピット）と呼ばれる遺構である。本書では、調査時に付けた土壙番号で表記し、報告することにする。遺物は9基とも皆無であるが、前章で触れたように、遺構間の切り合い関係や、表採されている遺物に縄文時代の遺物があることから、これらの属する時代を縄文時代と判断した。

なお、記述は前後するが、遺構の調査終了後、縄文時代以前の遺構の存在を確認するため、調査区グリッドに合わせ、東西、南北方向に２×２ｍ枡の試掘を行なった。14地点でロームを掘り下げ、さらに調査区南隅でも１ケ所掘り下げた。調査区東側は台地の落ち際に近く、立地としては可能性が高いので、桝を拡張し、面積40㎡を約１ｍの深さまで精査したが、いわゆる旧石器時代の遺物には恵まれなかった。したがって、Ｂ区においては、このＴピットが最も古い遺構である。

29号～31号土壙は３基が平行して並ぶ。大きさは29号が上端の長さ4.5ｍ、幅1.7ｍ、30号が長さ4.0ｍ、幅1.8ｍで、31号が長さ約3.7ｍ、幅1.0ｍである。規模的にはこの順で小さくなり、また、地形の傾斜もこの順で下がってゆく。西側端部はそろっていないが、東側の端はきっちりと揃えているようである。断面形は長軸方向がオーバーハングしたいわゆる袋状を呈し、短軸方向が漏斗状になっている。特に30号土壙はオーバーハングの度合いが強い。深さはほぼ一定しており、いずれも約1.3ｍである。31号土壙は下面の幅が10㎝足らずと異常に狭く、人が屈むことも困難で、掘り上げるまでにはかなりの時間を要した。

32号～34号土壙は長軸の方向はばらばらだが、隣接して造られている。32号および34号は、上面で攪乱を受けている。そのため、両者の切りあいが不明確だが、精査の過程では34号が32号を切っているように捉えられた。32号は上端の長さ3.4ｍ、幅およそ1.5ｍである。長軸方向断面のオーバーハングはきわめてきつい。深さは1.25ｍ。33号は上端長さ3.1ｍ、幅1.3ｍ。長軸方向の断面は比較的箱型に近い。短軸側も深くなる部分は漏斗状というよりも幅の狭い溝に近い。34号土壙は上端の浅い部分だけが検出されている。狭くなる深部は掘られなかったと考えている。長軸の方向が33号に平行することから、あるいはこの２基は同時に造られるはずだったのが、何らかの理由により34号土壙の掘削は中止されたものと推定される。

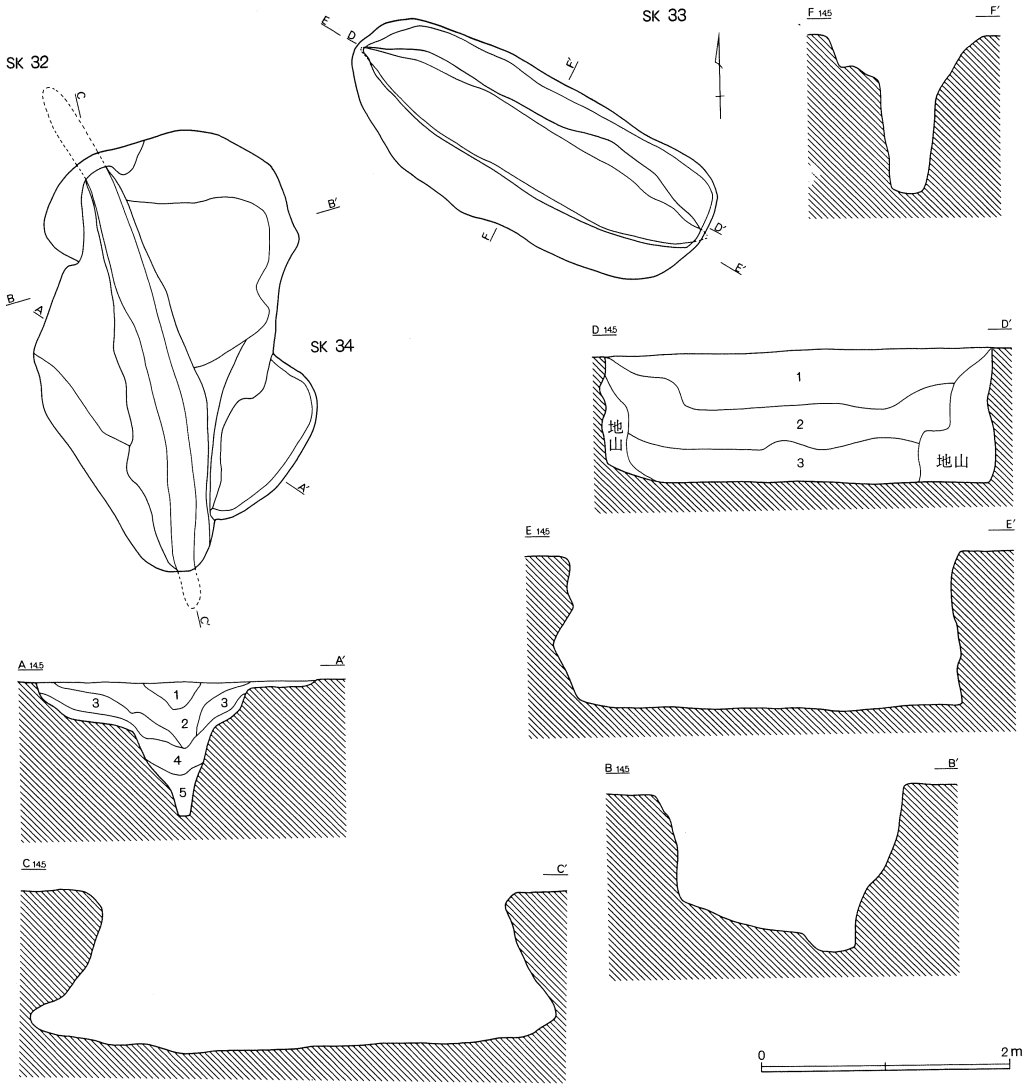
35号土壙は他の8基に比べて形態が異なっている。掘り方は、壁が直立し箱型をなす。上端長さ1.75ｍ、幅0.8ｍ、深さ1.1ｍである。覆土が似ていること、黒色帯まで掘り下げていることなどから、Ｔピットとして同列に扱った。36号土壙は上端長さ2.85ｍ、幅0.7ｍ、深さ1.15ｍ。わずかながら長軸断面は袋状を呈する。35号と36号は、上記の土壙と比べると、20～30㎝ほど高所に立地している。遺構検出時の表土除去作業において、低所よりも掘削が深かったとも考えられ、上端の規模が小振りであることはそのことに由来するのかもしれない。41号土壙は21号墳の周溝に切られている。図示した土層中で１～５層が古墳の周溝覆土である。電灯線関係の施設があるため全掘はできなかった。幅0.1ｍ、周溝底からの深さ0.3ｍ。漏斗状の最深部のみが残った。



SK29・31

1	褐色土層	ローム粒子を混在、黄褐色土を混在、やや締まっている、粘性強い。
2	明褐色土層	ローム粒子を多く含む、径1～3㎝程のロームブロックを混在。
3	黄褐色土層	ソフトロームを多く含む、しまりやや弱く、粘性を持つ。
4	暗褐色土層	ロームブロック(径2～3㎝)黒褐色土粒、ローム粒を混在。

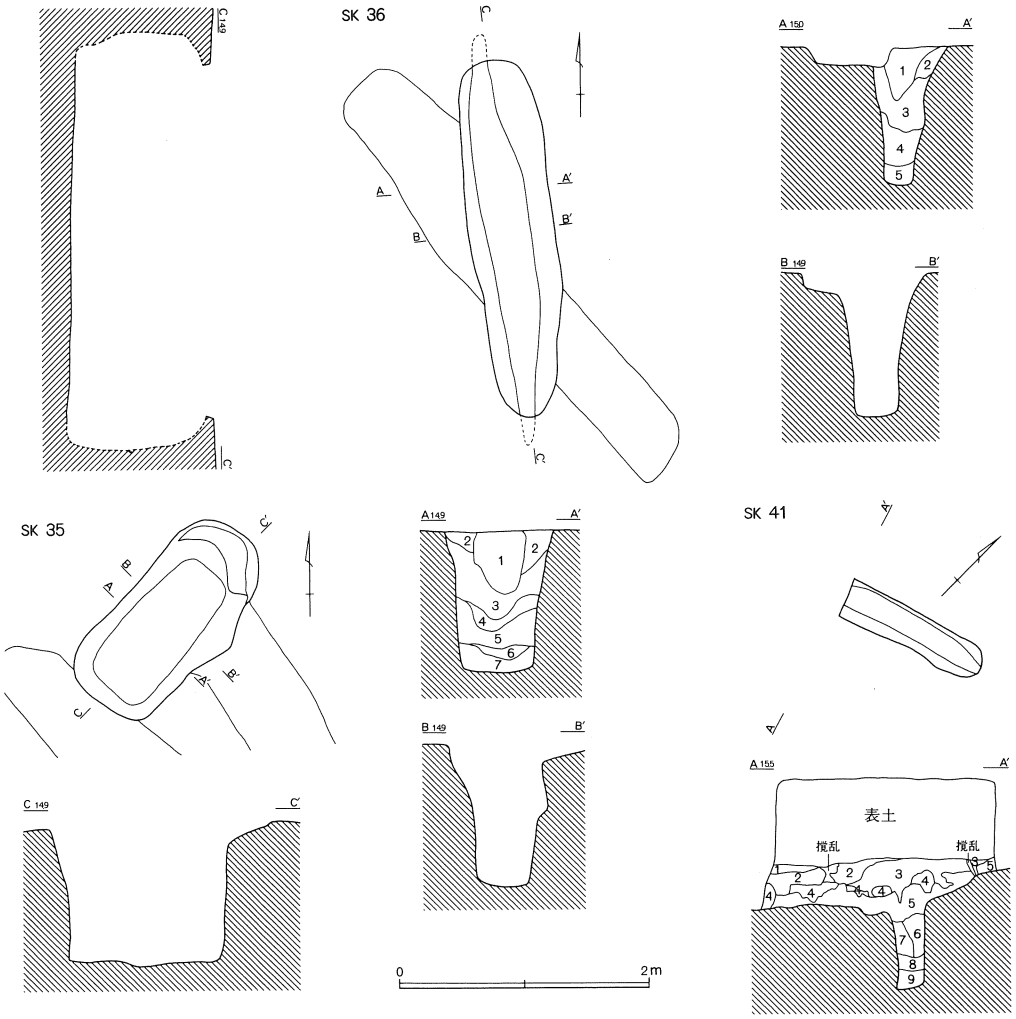
第5図　Tピット (1)



S K32
1　撹　　乱
2　褐 色 土 層　黄褐色土粒子、暗褐色土粒子を混入する。
3　明 褐 色 土 層　黄褐色土粒子を混入する、やや粘質。
4　黄 褐 色 土 層　黄褐色土ロームを多量に混入する。
5　暗黄褐色土層　黄褐色土ローム、暗褐色ロームブロックを多く混入する。

S K33
1　褐 色 土 層　黄褐色ローム粒子を混入する。
2　黄 褐 色 土 層　黄褐色ローム主体、暗褐色土を混入する。
3　暗 褐 色 土 層　黄褐色ローム、暗褐色ロームを多く混入する。

第6図　Tピット (2)



S K35

1　黒褐色土層　ブラックのロームを主体とする、ローム粒子、白色粒子を含む、堅くしまる。
2　暗褐色土層　炭化物粒子を含む、ローム粒子を混入。
3　黄褐色土層　ローム粒子(径0.5～0.1cm)を均一に含む、しまりやや弱い。
4　黄褐色土層　3層に比べ暗い、ローム粒子を含み、炭化物粒子を混在する。
5　黒褐色土層　炭化物粒子を若干混在、ローム粒子、ブロックを小量含む。
6　黄褐色土層　ソフトロームを堆積する。
7　黄褐色土層　粘性強い、ローム粒子多い。

S K36

1　褐色土層　黄褐色ローム粒子、暗褐色土粒子を混入する。
2　暗黄褐色土層　黄褐色ローム粒子を多く混入する。
3　黄褐色土層　黄褐色ローム主体、暗褐色土粒子を混入する、しまっている。
4　暗黄褐色土層　黄褐色ローム、茶褐色ロームブロック、粒子からなる、非常にしまっている。
5　黒褐色土層　微粒のローム粒子を含む、しまりやや弱い。

S K41

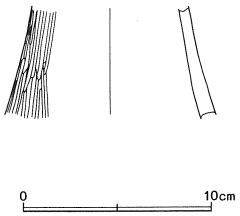
1　赤褐色土層　酸化鉄を含み、粘性ややあり。
2　黒褐色土層　ロームの微粒、焼土粒、炭化物粒を含む。
3　黒褐色土層　ローム粒を均質に多く含む、焼土、炭化物粒を混在。
4　黄褐色土層　ロームブロック(径1～2cm)を多く含む。
5　暗黄褐色土層　4層に似る、ロームブロックを多く含む、ややしまっている。
6　暗茶褐色土層　ローム粒、酸化鉄粒を含む、きめ細かい。
7　黄褐色土層　粘性強い、ローム粒子を含む。
8　黒褐色土層　ローム粒、ブロックを含む。
9　黒褐色土層　8層に似る、ローム粒子を含む。

第7図　Tピット (3)

2　古墳時代の遺構

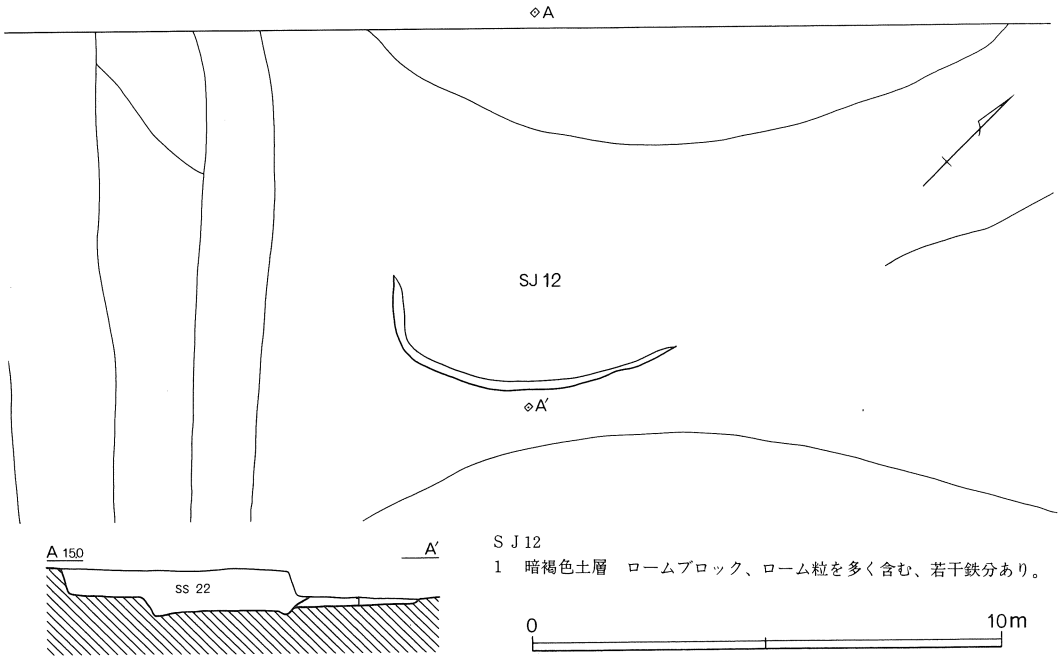
第12号住居跡

第22号墳跡の周溝に切られるように住居の跡が検出された。壁は南のコーナー付近でおよそ10cmが確認された。大半が古墳により破壊されているため、覆土はわずかに１層が確認されただけである。住居の平面形はやや丸みを帯びているが、おそらく一辺が６ｍ前後の規模になると予想される。22号墳の墳丘裾には切り合いの痕跡は認められず、規模から考えて古墳の周溝の中で納まるものと思われる。床上には焼土等の分布は認められなかった。若干レベルの下がる古墳の周溝底にも焼土は検出されず、竈は設置されていなかったものと推定される。



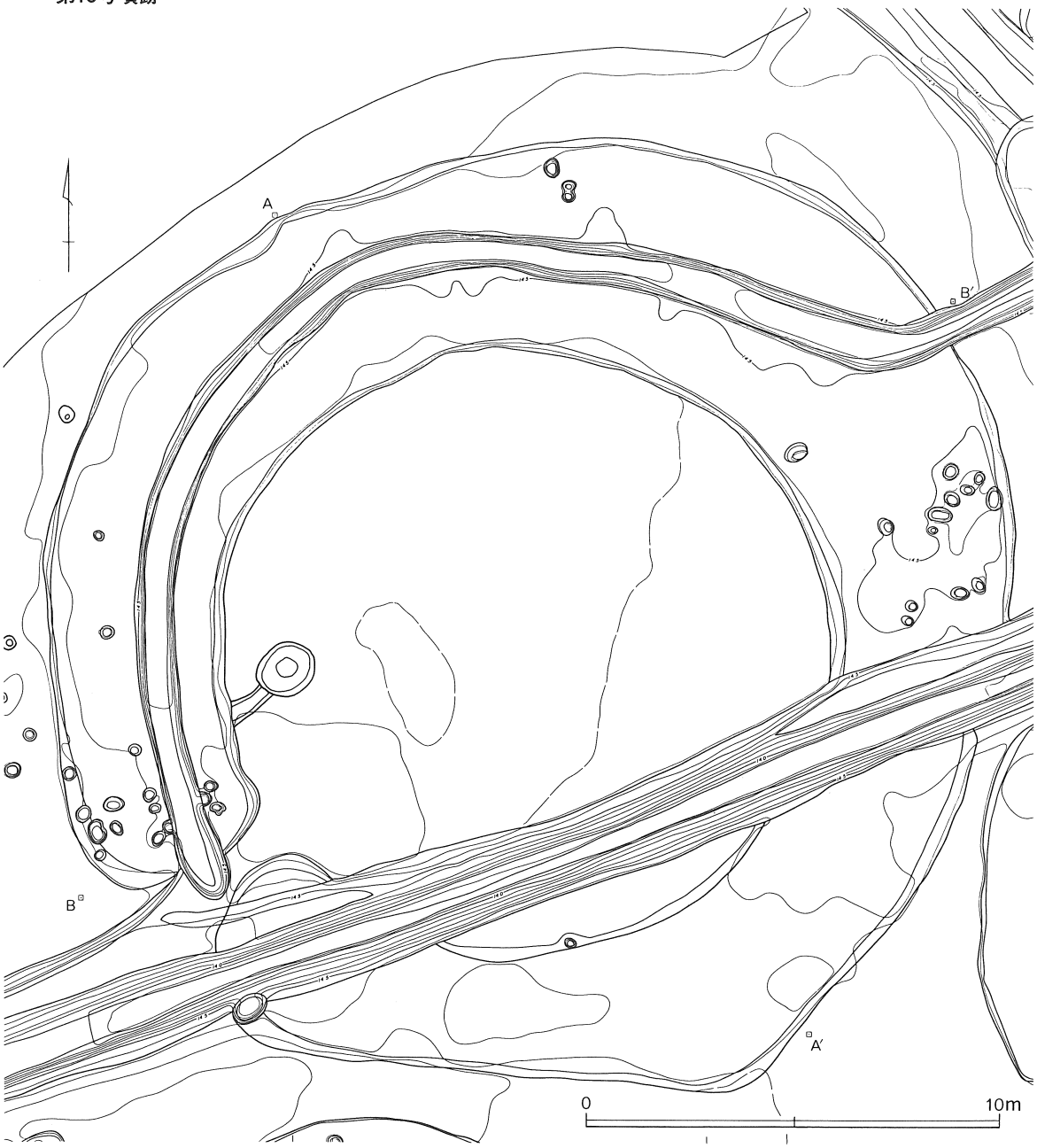
第８図　第12号住居跡出土遺物

遺物は覆土上面において埴輪片が数点拾えただけで、ほとんど検出されなかった。わずかに土師器の破片が一点（第９図１）発見されただけである。１はほぼ住居床面から出土。外面にていねいな細かいヘラミガキが施され、内面も工具により平滑に仕上げられている。形状は土器の脚部のようであるが、古墳時代の通例のものとしては少々直径が大きすぎるかもしれない。調整技法からすれば、１の土器は古墳時代前期のものと推定されるが、そうなると器種は特定しがたい。いずれにしても古墳が築かれる以前においては、この地域に住居が営まれ、生活の場があったことは確実である。



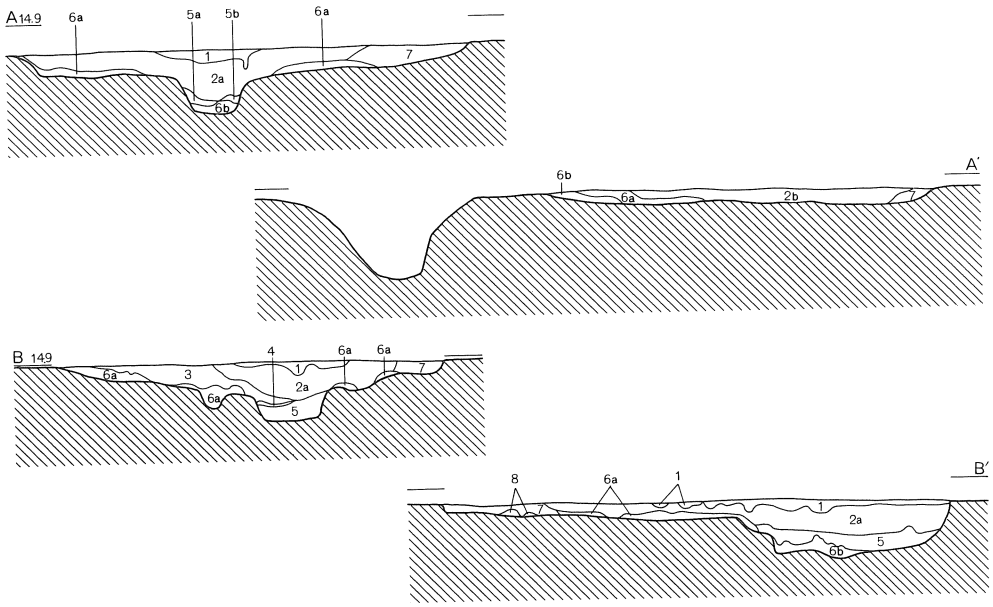
第９図　第12号住居跡

第15号墳跡



第10図　第15号墳跡 (1)

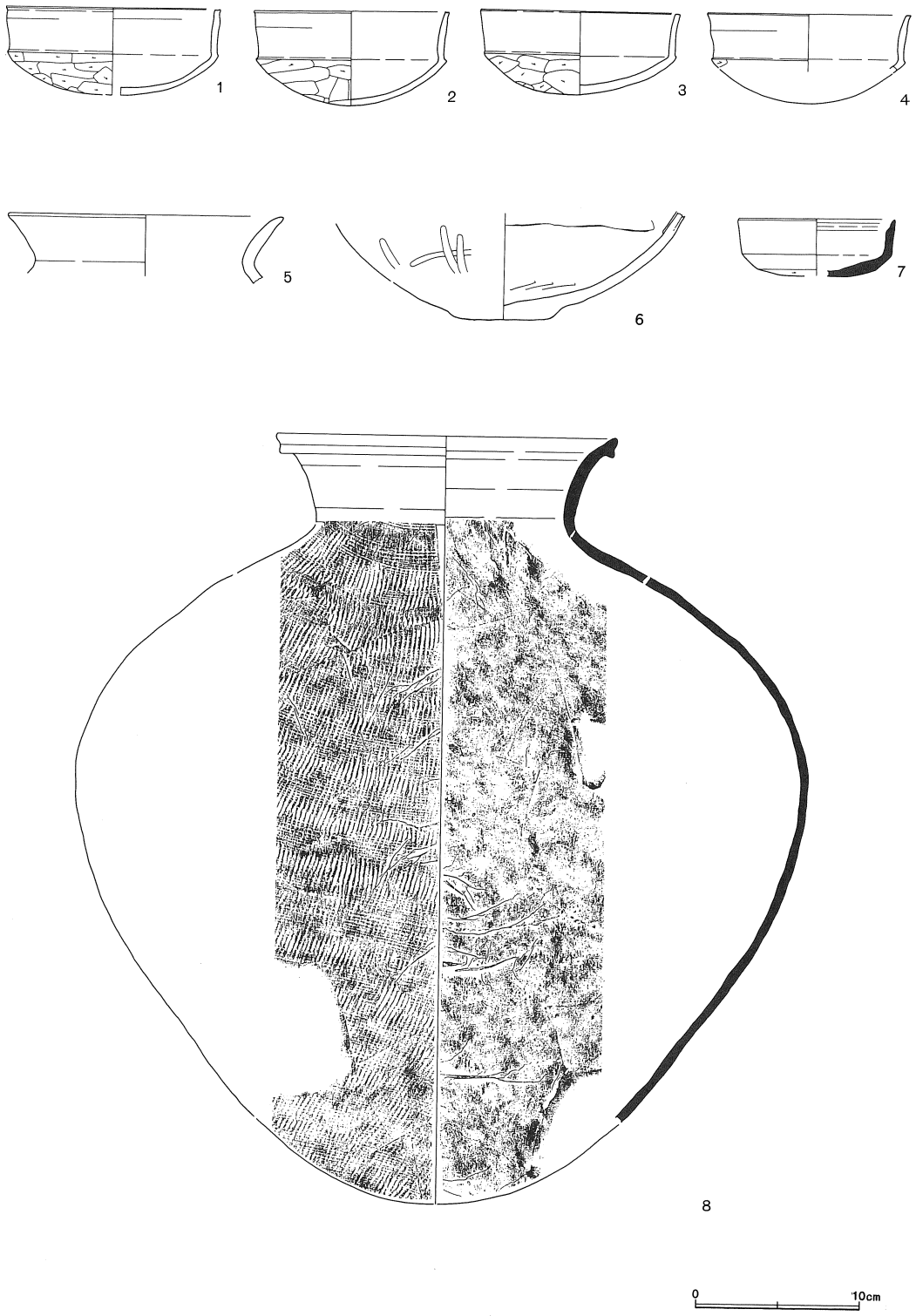
第15号墳跡は墳丘の直径14.3m、周溝を含めた直径23.2mでB区においては、見かけ上では最大である。墳丘規模では16号墳とほとんど差はないが、周溝の幅においては群を抜いて広い。平均すると4.8mである。少なくとも、占地面積では他の古墳よりも大きいことは確かである。周溝の外側の壁は若干傾斜するが、墳丘側の壁は直立する。周溝はブリッジを中心として左右に分割した場



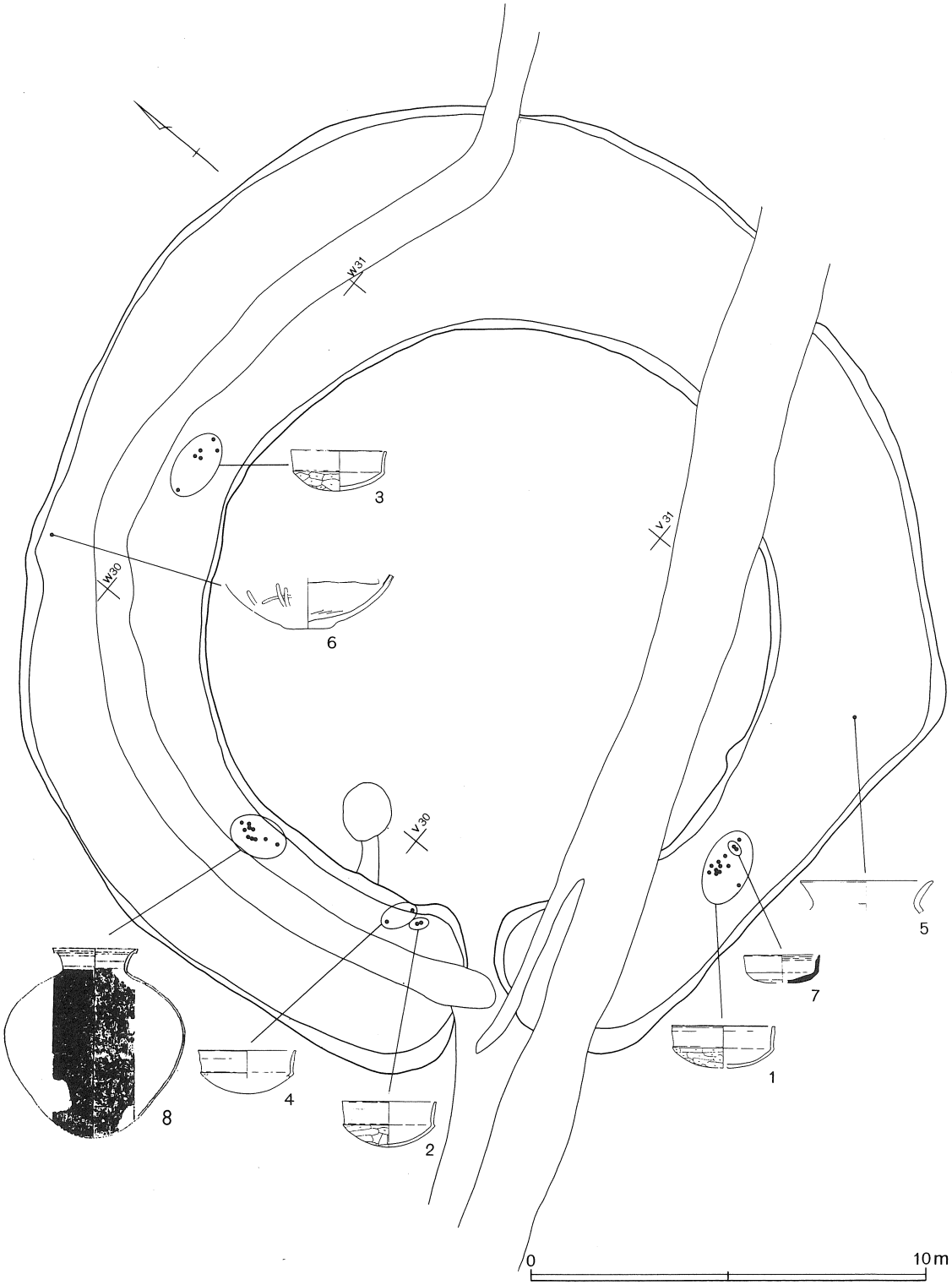
ＳＳ15
1　灰色がかった黒褐色土　やや砂質微粒、かたい(新しい堆積)。
2a　暗褐色土　ロームブロック２～８cm大、ローム粒、多量に混じる(整地？土)遺物多し。
2b　暗褐色土　2aよりローム少ない、黒色土もブロック状ではない。自然堆積に近い、整地土か。
3　黒褐色土　性格は２に同じだがロームブロック少なく、黒色土部分多い、やや軟　整地土？
4　黒　色　土　ロームの混ざりなし、きわめて軟、短期日の堆積(水性堆積)。
5a　明黒色土　ロームの混ざりなし、やや砂質、遺物少ない、短期日の堆積(水性堆積)。
5b　明黒色土　5aよりも若干ローム含む。
6a　ローム崩土　黒褐色土が混在するロームの二次堆積。
6b　ローム崩土　6aよりもブロックが主体。
7　暗褐色土　ローム粒、全体に混じる、比較的軟(墳丘の自崩土)。
8　黄褐色土　ローム粒を主体に黒色土粒混在、ボロボロしている。

第11図　第15号墳跡 (2)

合、向かって左側が比較的深く、約0.25ｍである。対して、右側は全般に浅く、0.17ｍほどである。遺物も右側ではほとんど検出されず、大半が左半分の２a層から出土している。23号溝が墳丘南側をすっぱりと切って掘られているが、Ｂ区に関するかぎり、墳丘が溝で壊されているのはここだけである。31号溝は23号溝とは異なり、周溝の北半分の中央を周溝のカーブに添って走っている。まるで、墳丘を避け、周溝を利用するが如き状況である。しかもブリッジ左側から掘られ始め、ブリッジの後ろ正面で周溝外に突き抜け、底面の傾斜はわずかながら19号墳に向かって下がっている。



第12図　第15号墳跡出土土器



第13図　第15号墳跡土器出土位置図

周溝内には多くのピットが検出できたが、特にブリッジ左側とブリッジの後ろ正面に集中している。ブリッジ左側の集合は３号掘立柱建物跡に関係すると推定される。なお、墳丘内に４号井戸があるが、当然ながら古墳時代の井戸ではない。墳丘北側には３ｍ四方にわたり黒色土とローム崩壊土が混じりあう部分があったので、トレンチを入れて確認したが、掘り込みは中華鍋のような形状で壁は直立せず、遺物も皆無であった。したがって、古墳に伴う埋葬施設等ではなく、後世の攪乱であると判断した。

遺物は埴輪、土器等が細片になって周溝内から出土している。平面的には西および北の墳丘裾ラインと31号溝との間に集中する。反対に古墳の南と東側すなわちブリッジを手前にして向かって右側には遺物が希薄である。この遺物分布の疎密は、他の古墳においても同様である。特に2a層とした暗褐色土中に大半が含まれているが、この層は31号溝の上にも広がりをみせている。この31号溝の性格については現場作業中から問題としてあったが、少なくとも、ブリッジを壊して掘られていること、31号溝の中位から底面にかけての覆土中には全く古墳時代の遺物が含まれていないことを考えると、墳丘裾に配置されたと推定される埴輪は、古墳より後に掘られたと考えられる31号溝が埋まり始めた段階で、周溝に流れ込んだということになる。

出土遺物

土器（第12図）

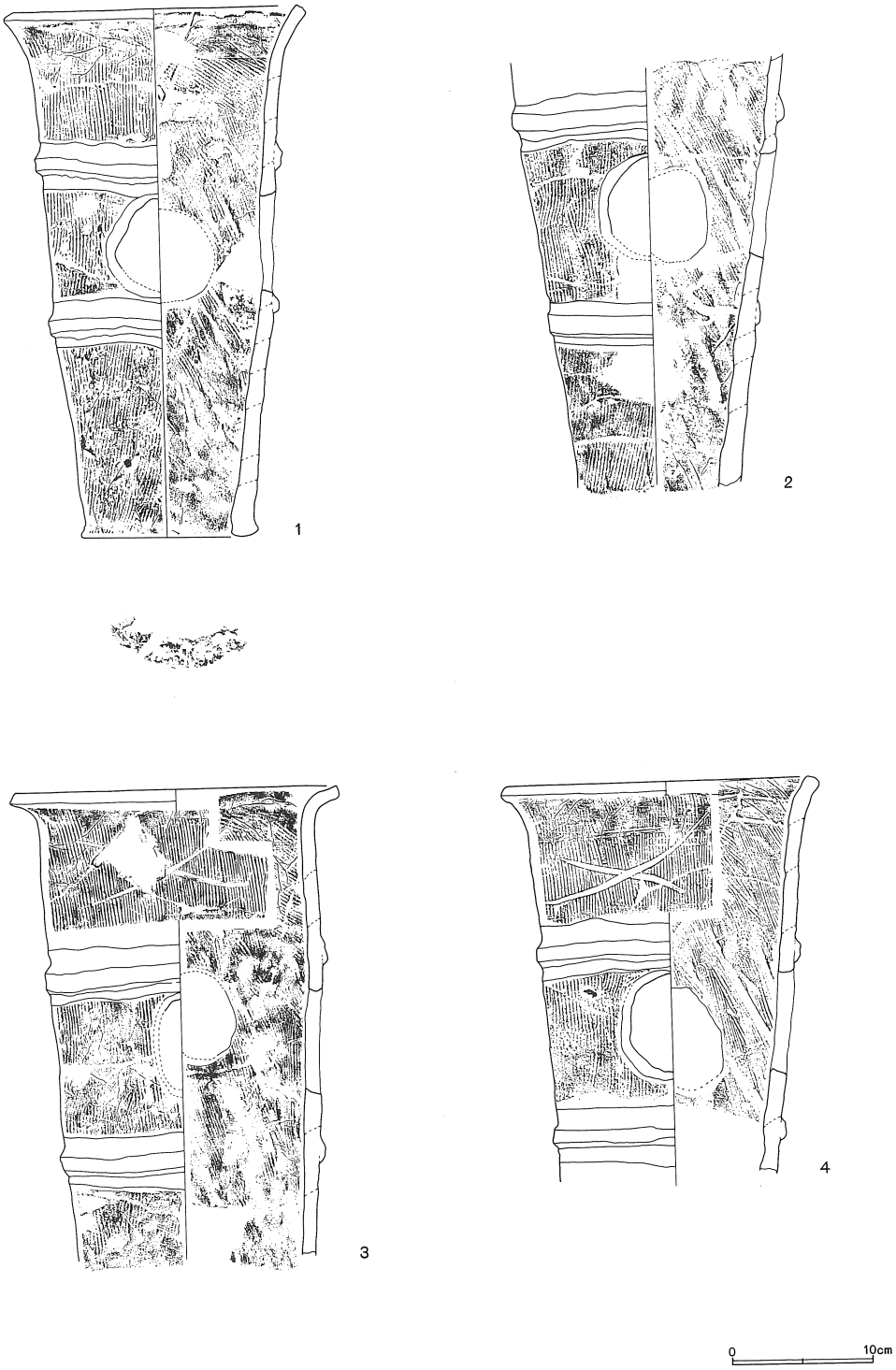
15号墳で取り上げた遺物の総点数は3228点である。そのうち土器片は100点にも満たない、他は全て埴輪片である。第12図１～４は土師器の坏。１は口縁が波を打ちながら直立し、口唇が凹む。２は口縁が若干外反する。４つの中では最もシャープに稜線が削りだされている。３は口唇がフラットに削られる。４は口縁中段に弱い稜線がある。これらの坏は僅かずつ差はあるものの、身と口縁とのバランス、削り等の調整、全体のプロポーション等において共通しており、ほとんど時期差はないものと考える。５、６は土師器の甕。５は器面が荒れている。６は破片の歪みからか、復元実測では胴部が開いてしまったが、もう少し絞れるかと思われる。７は須恵器の坏もしくは蓋であろう。８は須恵器の大甕。内面には細かい青海波の叩き痕跡がある。外面も全面に叩き目。胴部は大きさに反して器壁がきわだって薄く、厚さ約0.5㎝である。７と８は東海産と推定される。

土器は、１～７についてはほぼ２～３個のセットを形成して、周溝の墳丘側に地点を別にして置かれている（第13図）。それに対して８の大甕は、形象埴輪が集中して出土した区域から検出されており（第36図）、相違が見られる。これは墓前祭祀のありかたの一端を示す点で興味深い。

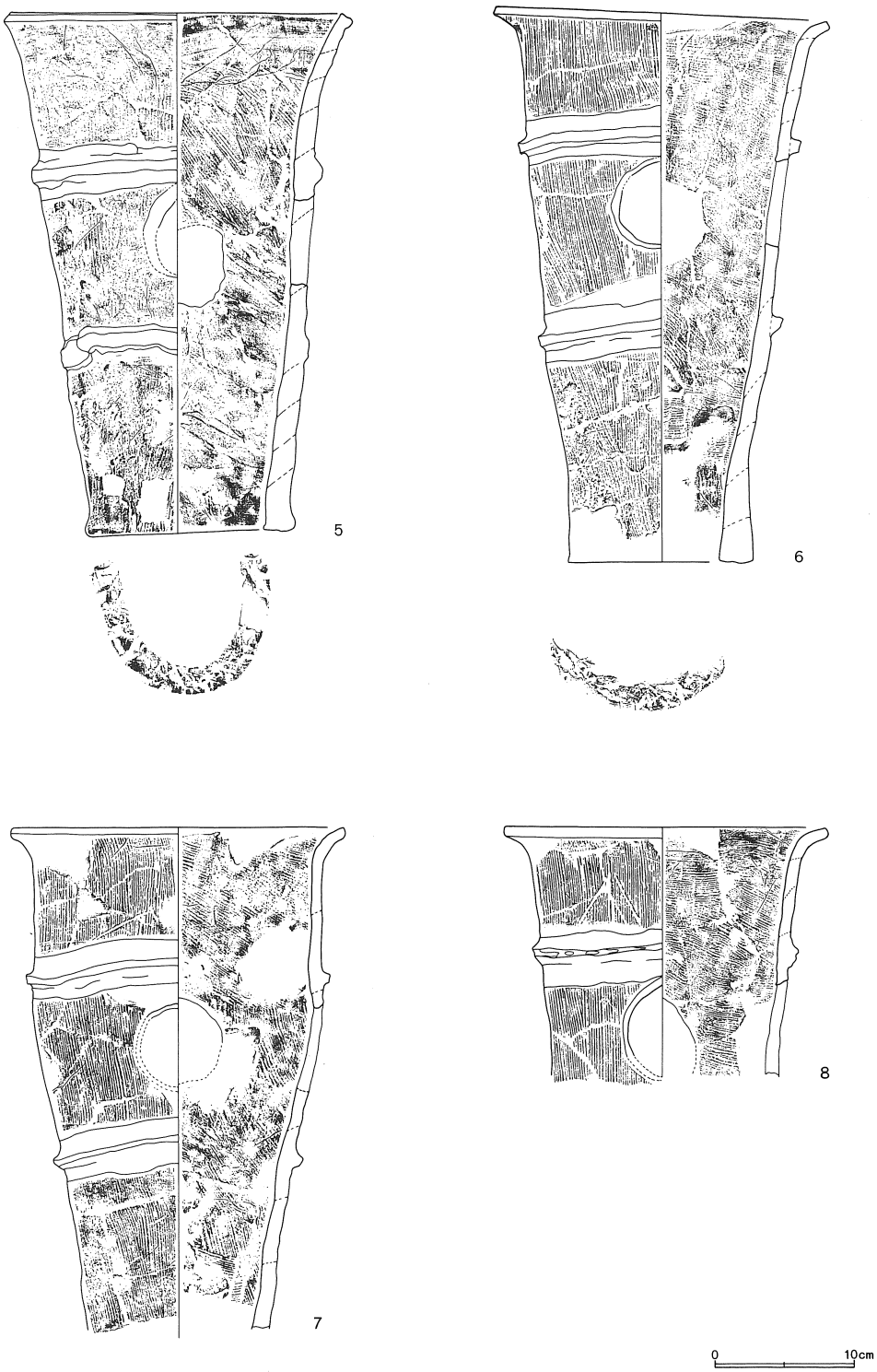
円筒埴輪（第14～21図）

15号墳の円筒埴輪は１点を除きほとんどが２条凸帯である。色調は褐色のものが多い。胎土には赤色の土粒が目立ち、火山灰のスコリアであると判断した。したがって、粘土はローム台地の地下から採集しているものと推定される。底部調整のあるものは１点も検出されていない。

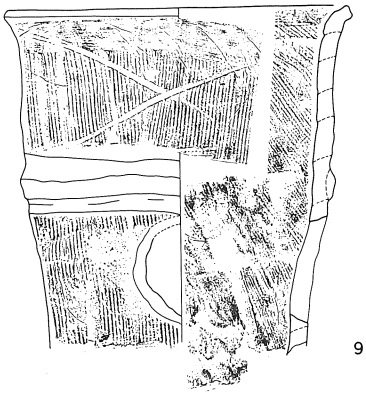
１は15号墳で最もポピュラーな資料である。口縁は緩く外反し外面にヘラ記号がある。外面タテハケ、内面はナナメハケ。凸帯はやや丸みを帯びるが、断面形は台形でしっかりしている。透かし孔は大きく開口する。２は１と同様の凸帯を持つ。２段目の幅は比較的広い。透かし孔の下に黒斑が認められる。３は口縁が強く外反し、ヨコナデも強い。外面に×印ヘラ記号がある。凸帯は低く

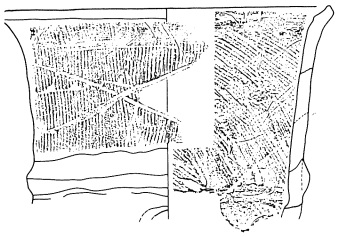


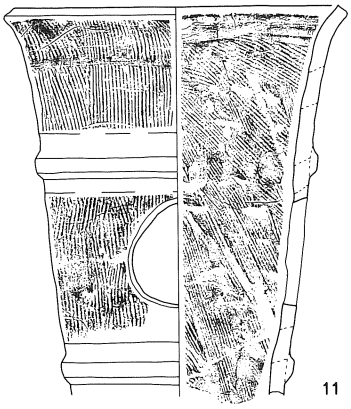
第14図　第15号墳跡出土円筒埴輪（1）

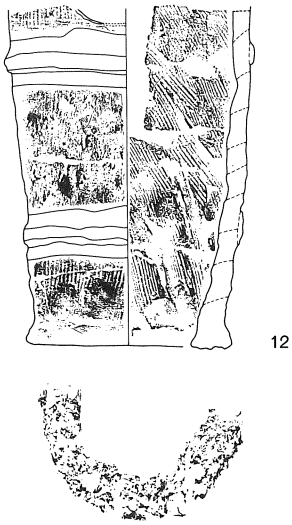


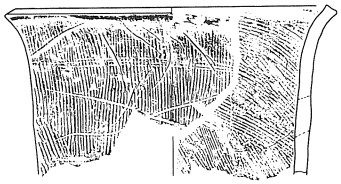
第15図　第15号墳跡出土円筒埴輪 (2)

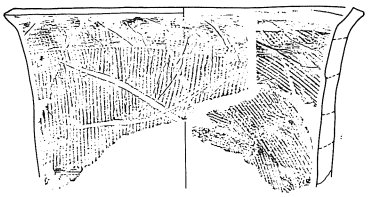


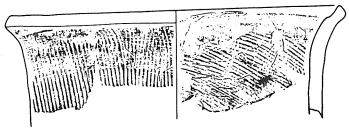


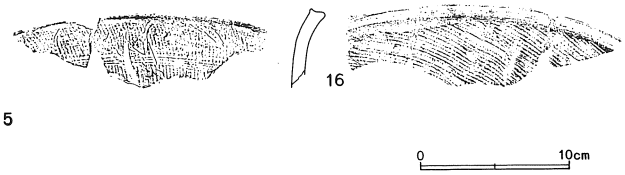






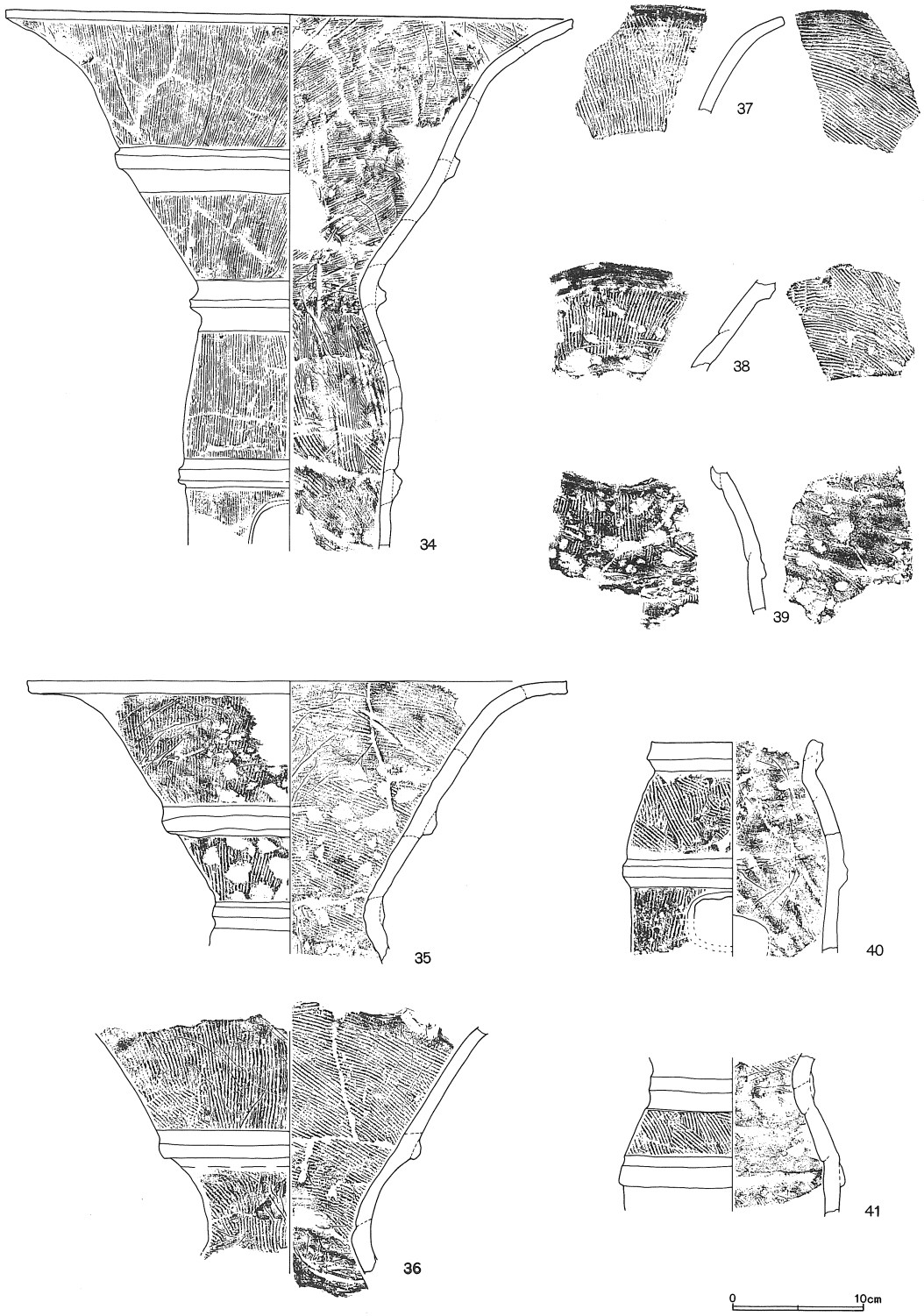




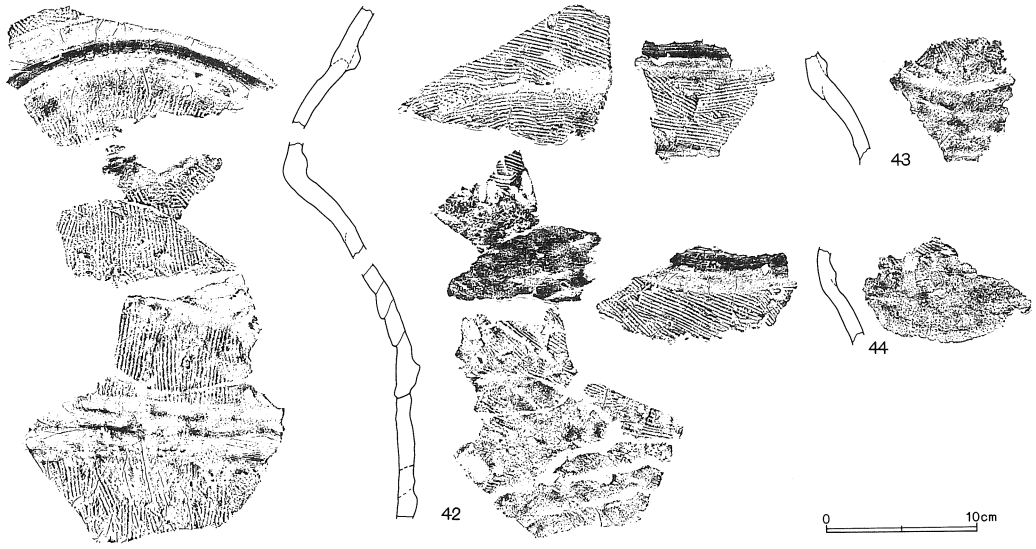


第16図　第15号墳跡出土円筒埴輪 (3)

第17図　第15号墳跡出土円筒埴輪（4）



第18図　第15号墳跡出土円筒埴輪 (5)



第19図　第15号墳跡出土円筒埴輪（6）

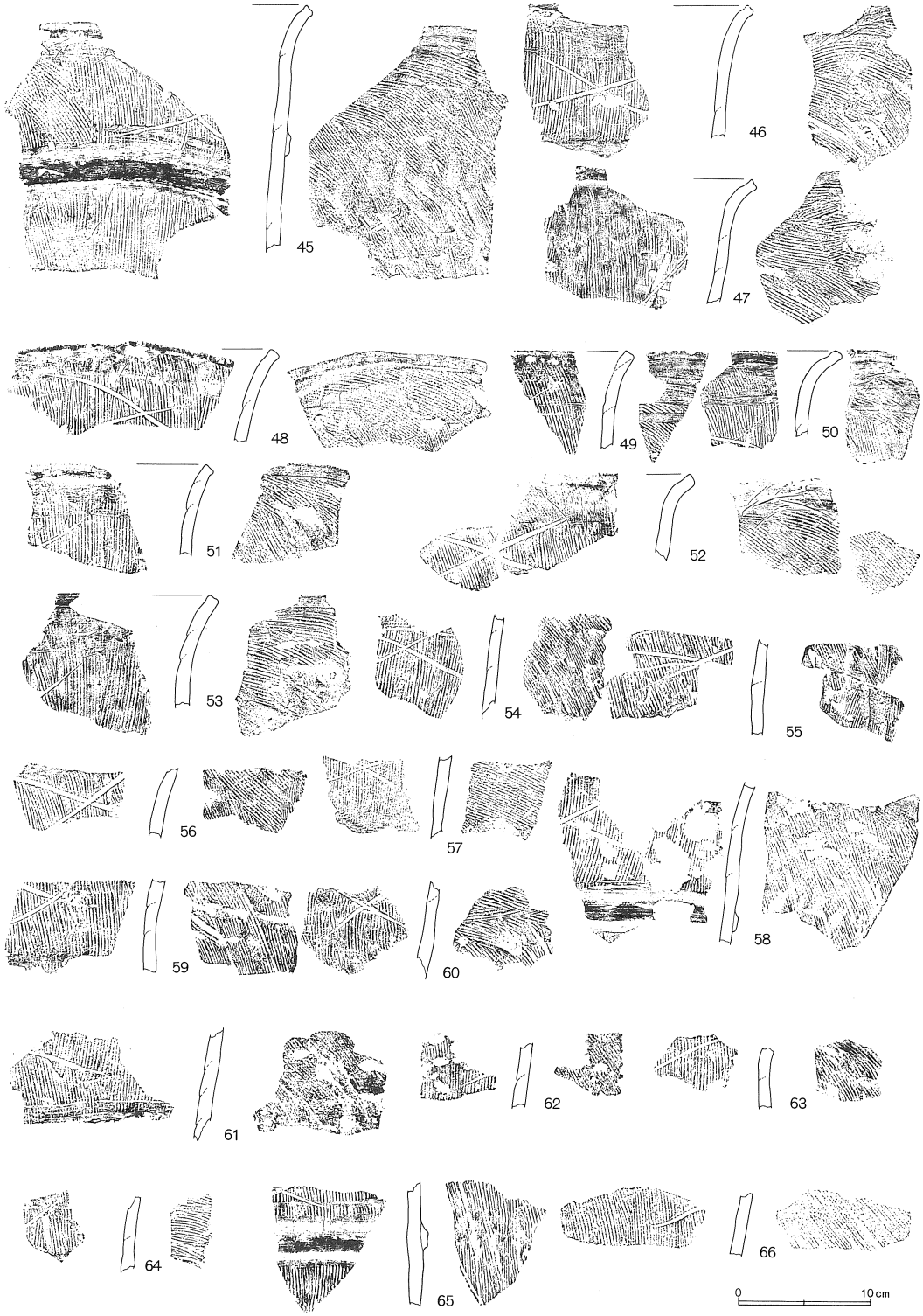
下方に垂れている。４は内面口唇付近は凹む。外面に×印のヘラ記号あり。凸帯は低いが断面は台形を呈する。５は15号墳の中では色調、調整、器壁の厚さなど他と著しく異なる。この１本は供給元が別なのだろう。口縁外面は緩くナデられ、外面のタテハケは当たりが浅い。下の凸帯はきわめて不整形で、粘土紐の合わせ目が観察できる。貼り付け後のナデは行なわれない。底面にはいくつかの圧痕があるが、何に由来するかは不明。６～８そして後述するが17、24、25、26は、ハケメの単位が細かい一群である。６は口縁が強く外反し、凸帯は高く突出している。断面も端正な台形でナデもていねいである。が、貼り付けは円筒の周りを波打つように巡っており、必ずしも手慣れた製品とは言いがたい。底部は厚く、安定感がある。５と同じく底面に圧痕がある。７はハケメ、凸帯は６に似るが、形は２段目が若干胴膨れになっている。口縁外面に傘印のヘラ記号がある。８は形、調整など６に近似。ただし凸帯は断面台形でなく雑な作りである。外面のヘラ記号は傘。９、10、13、14、15、16は口縁を強くナデて、口唇と内面口唇付近が凹む。これらも一つのグループを形成している。９は外面に×印ヘラ記号。凸帯は低いが断面は台形。10も外面に×印ヘラ記号。凸帯は丸みを帯びる。11は９ほどではないがやはり口縁を強くナデる。凸帯は丸みを帯びた台形。12は３条凸帯と判断される唯一の資料である。１段目の高さは２段目のほぼ2／3と低い。凸帯は低い。底部は荷重によってか潰れたように厚くなる。底面はザラついている。13は外面ハケの当たりが弱い。14は外面に×印ヘラ記号。15、16は10の口縁に似る。17は６と同様の突出が高く幅の狭い凸帯を持つ。18は凸帯が低く断面はやや丸みを帯びた台形。19も凸帯は低いが断面形は端正な台形。若干２段目が胴膨らみである。20は外面に×印ヘラ記号。口縁部の外反は弱い。21、22、23は凸帯が丸みを帯び突出は低い。23は直径が他よりかなり小さい。24～26はハケメが細かく、先述のように６の資料に近い。いずれも底部端は肥厚している。27～33はハケメ幅の広い一群である。27は内面をていねいにナデている。28は底面に棒状の工具痕がある。29、30は底面が潰れたように外へ張る。

30は粘土が表裏で2枚に剝離しているが、たぶん粘土素材の練り方が不十分だったのであろう。31は器表面の摩滅が激しい。32は歪みがあり、断面は正円ではない。33は外面をていねいにナデている。底面は幅広く、指の跡が観察できる。作業台から製品を起こす際のものか。

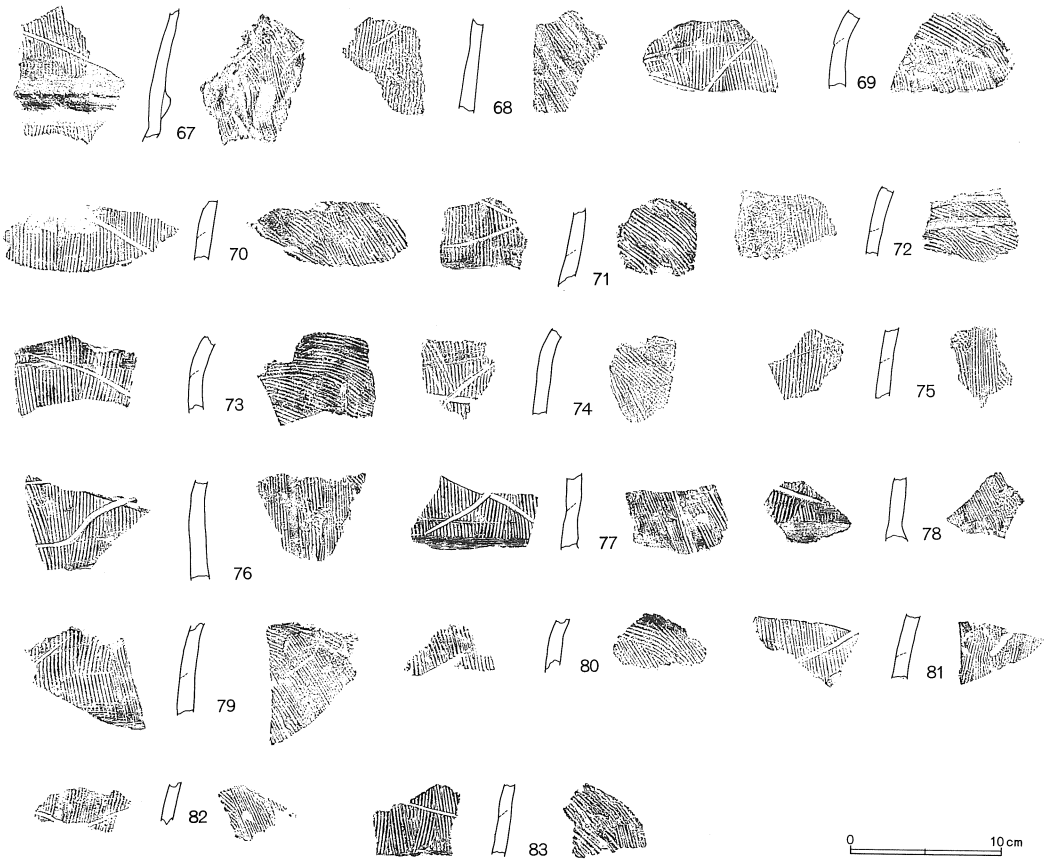
34～44は朝顔形円筒埴輪である。頸部に凸帯を巡らし、胴部上段はさほど丸みを持たない。口縁部は中間に凸帯を巡らし、直線的に開く。色調は褐色のものが多い。

34は口縁部が若干膨らみをもって外反する。内面にヨコハケを施す。中間の位置で、横方向に押圧が認められる。ちょうど凸帯が貼り付く裏側に当たり、口縁を継ぎ足す際の作業に関わるものであろう。胴部最上段は直線的ではないがほとんど膨らみを持たない。内外面ともにタテハケ、ハケメは他の朝顔と比べると細かい。凸帯は断面が台形で、貼り付け後のヨコナデもていねいに行なわれ、非常に端正である。特に頸部の凸帯は高く突出している。35は口縁が直線的に開き、上端ではほとんど水平に近い。頸部の凸帯は低く、ダレ気味である。器表面の剝離が激しい。36は口唇部を欠くが、35と同様に口縁が直線的に開く。頸部のところで割れているため、この部分の凸帯は不明。中間にある凸帯は35よりも丸みを帯び下方に垂れている。以上の34～36は大きさや形状、調整技法等似通っている。しいて分ければハケメが少しずつ異なる点で、34が最も細かく、36がこの中では一番粗い。いずれにせよ大きな違いはないと言える。37は口縁のみ。34に近い。38は口縁中位にある凸帯の部分で剝離している。34で触れたようにこの位置で口縁の継ぎ足しが行なわれていることを示している。39は胴部最上段。膨らみを持たない。凸帯はダレ気味。40は胴部最上段の高さが低めである。凸帯は断面形が丸みを帯びた台形。頸部凸帯のところで割れている。41はさらに胴部最上段の高さが低い。ほとんど直線で頸部につながる。凸帯は非常に低く、断面形は丸くなる。42は３つの破片に別れているが、同一固体と思われる。頸部がきつく絞られ、胴部最上段もカーブして強く張る。34～41の資料とは明らかに違っている。口縁部の凸帯は端正で、断面形は台形。胴部の方はやや低く、ダレ気味である。43、44は胎土、色調などにおいて他のものとは大いに異なる。タガは低く、断面は三角形である。

以上から胎土、色調、調整、工具等の違いに基づいてグループ分けをすると、一般の円筒埴輪では、(A)、５が単独で、(B)、６～８、17、24～26のハケメの細かい一群があり、(C)、９～11、13～16もまた口縁の調整の点で共通するグループを形成し、(D)、残りの大半が、３のような特徴のあるものも含めて、１に代表される比較的ハケメの粗いものでまとまりを持つ。朝顔形の場合も分類が可能であるが、数が少ないため、まとまりとしてのグループとなると把握が難しい。が、強いてあげれば、ハケメの細かさと凸帯の形状が端正である34などは、一般円筒の（B）に対応するかのようである。残りのものは際だった特徴がないが、(C)、(D) に応じるのではないだろうか。ヘラ記号では傘印が（B）に限られ、×印は（C)、(D) にのみ見られるという傾向も注意しておく必要がある。実におおまかな分類ではあるが、15号墳に供給された円筒埴輪は決して一様なものではなく、そこには複数のタイプの埴輪が並存していたということは確かである。



第20図　第15号墳跡出土円筒埴輪（7）



第21図　第15号墳跡出土円筒埴輪（8）

ヘラ記号のある埴輪は総点数で48点を数え、その内、少しなりとも形の復元ができたものは９点で、すでに記した。15号墳のヘラ記号は、すべてが円筒外面に付けられている。48点中、傘印の資料は７、８の２例だけで、残りの46点は×印である。いずれも幅0.2～0.5㎝の鋭利な工具で施され、深さは浅いもので0.1㎝、深いもので0.4㎝程である。４のヘラ記号が最も幅、深さとも大きい。線の長さは傘印が４～５㎝、×印が13㎝前後である。筆順（沈線の施工順）は傘印が、左斜線＞右斜線＞中心線の順で、×印が右下がりの線＞右上がりの線の順である。ただし、76の一例のみ、右上がりの線＞右下がりの線の順になっている。なお、新屋敷Ａ区の近くで、鴻巣市教育委員会が行なった２次調査の際には、波線に横２本の直線が重なったヘラ記号のある円筒埴輪が出土しているが、15号墳を含めてＢ区では一例も検出されていない。

円筒埴輪の出土位置（第22～24図）

既に記したが、遺物のほとんどが、ブリッジを手前正面にして古墳左半分の周溝から出土している。周溝は深さ0.2ｍ前後と浅く、大半のものが割れて小破片になっていた。中には数ｍ離れた場所の遺物が接合する例もある。これらの遺物は、後世の古墳削平時に、人為的に周溝に落としこまれたと考えられなくもない。したがって、発掘調査時の出土位置から、本来樹立されていた位置を

第22図　第15号墳跡円筒埴輪出土位置図

推定することはかなり危険な点があることは言うまでもない。そのことを念頭に置きながら、遺物取り上げ時の記録に基づいて知りえた埴輪の出土位置について、以下に記しておきたい。

主な円筒埴輪の出土位置を、出土分布の中心に絞って、ブリッジから始めて列挙すると、27、９、７、14、８、17、22、19、12、１、６、18、２、10、11、３、13、15、４、５の順になる。これをタイプ別記号に置き換えるとＤＣＢＣＢＢＤＤＤＤＢＤＤＣＣＤＣＣＤＡである。これから次のことが読み取れる。

第23図　第15号墳跡朝顔形埴輪出土位置図

(1)　Aは１例のみの特別な埴輪であるが、古墳の真後ろにあたる埴輪列の末端にある。

(2)　Bは埴輪列の先頭にまとまって置かれ、やや離れて列の中ほどにも１本が置かれた。

(3)　Cは列の尻に近い所に多くあり、先頭にも若干のまとまりがある。

(4)　BとCは樹立の中心を逆にしながらも、各々比較的近い位置にある。

(5)　Dは本数が多いことも反映して、ほぼ全体に散らばるが、列の中ほどに最も集中する。

さらに、この分布に朝顔形埴輪の分布を重ね合わせると、41が先頭で40が８、17付近に、42が19

第24図　第15号墳跡ヘラ記号を有する円筒埴輪出土位置図

と12の間、36が12付近、34が１と６の間、35が15と４の間に位置する。34と６は同じＢグループで並列しているのであろう。樹立の疎密はあるものの、一般円筒の間に間隔をおいて配置されていることが確認できる。ヘラ記号を有する埴輪の分布は、Ｂ、Ｄの配列と関連し、傘印（■、□）が列の先頭に、×印（●、○）が列の全域に認められる。

形象埴輪（第25～35図）

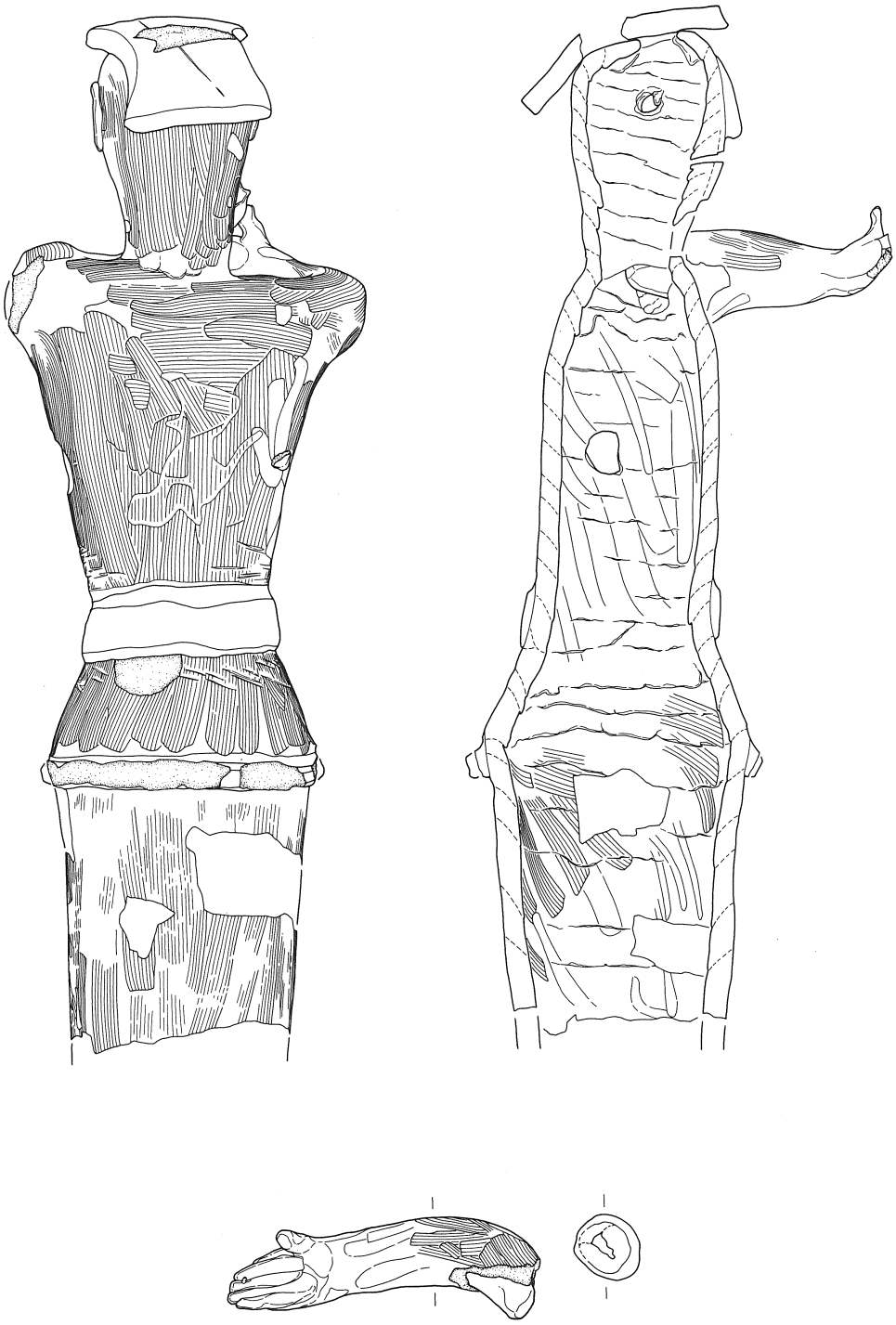
形象埴輪は円筒埴輪列の中間やや先頭よりに、長さ約８ｍにわたって出土する。ブリッジを正面にしてちょうど古墳の左側面にあたり、その分布域は墳丘円周のおよそ1／6である。

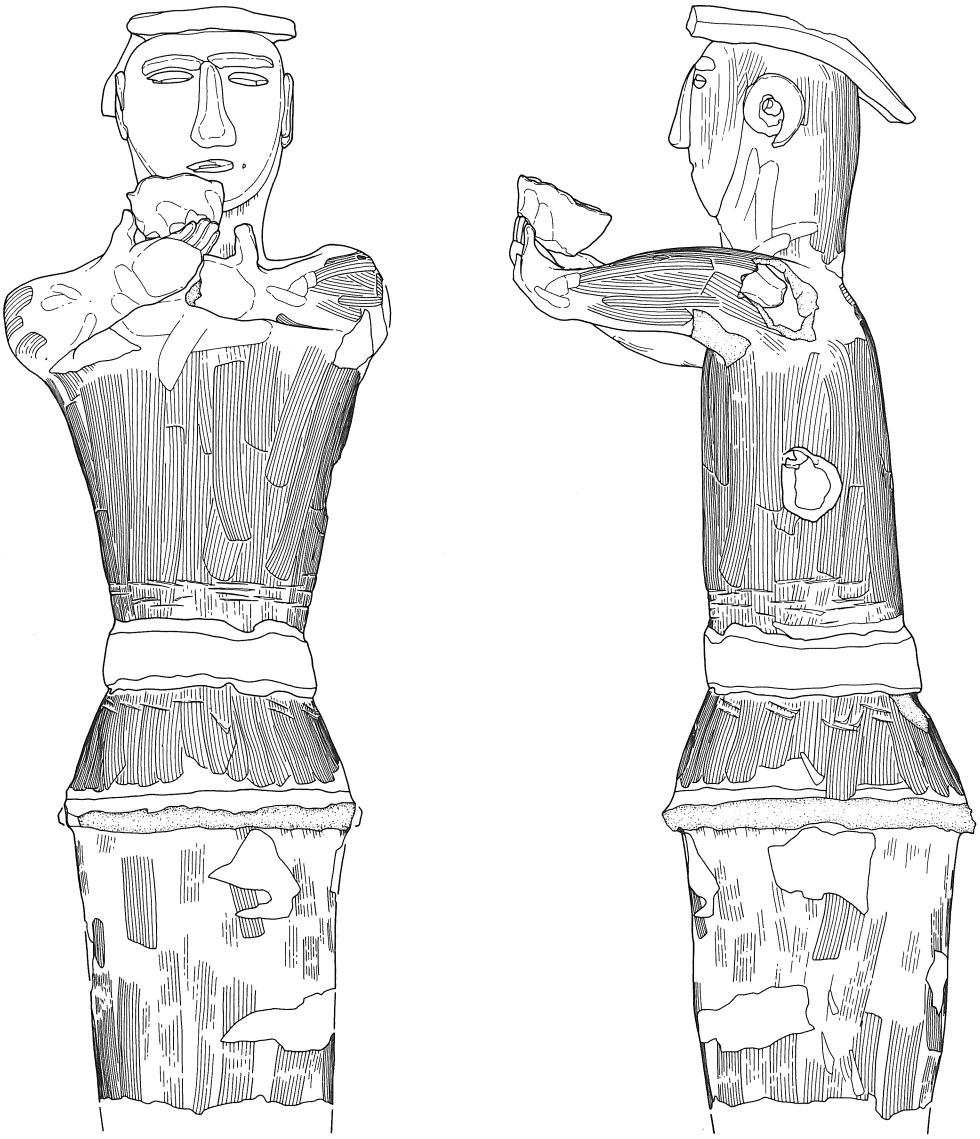
形象の種類は人物（坏持ちの女子、座る女子、棒状道具を持つ人物、琴を弾く男子、冠を被る男子、帽子を被る男子など）、動物（馬、猪、鹿、犬）、その他（三環鈴）の３種に限られる。家形埴輪や、器財形埴輪などは１片として検出されていない。比較的ポピュラーな楯形埴輪すら出土していないのである。ただし、人物、動物ともに小振りながら個々のバラエティは豊かで、15号墳は小規模な円墳にしてはきわめて特異な存在であると言える。

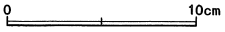
84は坏を捧げ持つ女子である。唯一全体を知ることのできる資料であり、周溝に平行して頭下がりの仰向け状態で倒れていた。立像で、腰から下の表現はない。基部が欠けているが全高60㎝を超える。顔、髷、手、腰帯以外はハケメが消されずに残り、衣服の表現はほとんど無く、わずかに腰帯と、その下の広がりが、上着の裾を表現すると思われる。乳首の表現はない。左脇腹に透かし孔があるが反対側には穿孔されない。髷はいわゆる島田で、ハケメを丁寧にスリ消している。上面に前から後ろへかけて、斜方向のヘラ記号のような意図的な傷がつけられている。髷と頭部の接合は頭部頂をカットせずに行なう。顔は円筒状の頭本体に薄い粘土板を貼り付けて成形し、ハケメ調整をていねいにナデ消している。眉毛は粘土紐を左右１本ずつ貼り付ける。目は比較的細長く切り込まれる。鼻は大きめで、やや丸みを持ち、鼻孔はない。耳は穿孔され、穴の周りに粘土紐を渦巻き状に貼り付けている。耳朶の表現であろうか。中空作りの両腕は差し込み式で、前方やや上向きに差し出し、右手の平には坏を持つ。その右手の甲に４本の指の跡が観察できるので、右手に左手を添えていたことが解かる。指は一本ずつ貼り付けられ、リアルである。一見すると、甲と指の境が手甲のように見えるのは15号墳の資料の特徴である。坏は手捏ねで、口縁をつまんで作り出すが、波を打つ。底部も不整形で全体に粗雑な作りである。背中の中央には斜に黄色く変色した部分がある。何かの剝離痕跡かとも考えられるが、ハケメは潰れずによく残っている。

85は84と同様の作りの女子頭部である。耳朶状の渦巻きの下端、粘土紐の合わせ目の所に、２環の耳飾りを貼り付けている。頭の大きさはほとんど84と同じだが、髷は85の方が約２㎝長い。86は髷。下面に円弧状の剝離痕がある。長さは84と同じである。87～91は装身具の部品と推定される遺物である。87は平たい。何であるかは不明。88～90は首飾りの一部であろう。91は足結い。92は女子の下半身である。腰帯の端が表現されている。93は腰掛けた人物の膝下部分である。指が表現された裸足の足は若干爪先を外へ向ける。踵、足裏には剝離痕があり、円筒基部への接合を示している。２段に表現された衣服は上が上着の裾、下が裳の裾であろう。この足と衣服裾との接合は、断面図に表したように、粘土塊や帯状の粘土板を複数使用して組み立てている。

94は右手に有頭棒状具とでも表現すべき道具を持った人物の立像上半身である。腰周り、肩幅などは84と変わらないが、首の付け根から腰帯までの長さは94の方が３㎝ほど長い。84と同じく上半身衣服および玉飾りなどの装飾表現はない。脇腹の透かし穴は両側面とも穿孔されている。棒状道具は全長8.3㎝、柄の長さ6.3㎝、直径1.4～1.9㎝、頭の長さ2.0㎝、直径2.0～2.2㎝である。柄は握りの部分で太く、尻はすぼまっている。頭は頭頂の方が直径が大きく、平坦に作られている。右

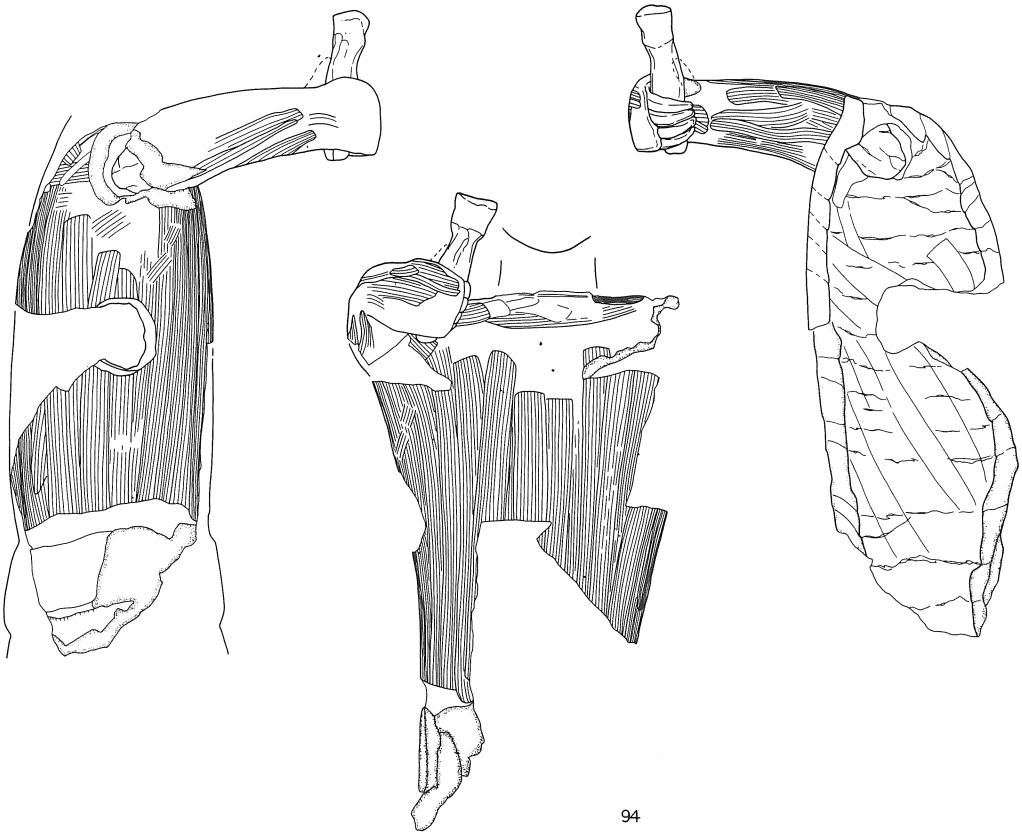




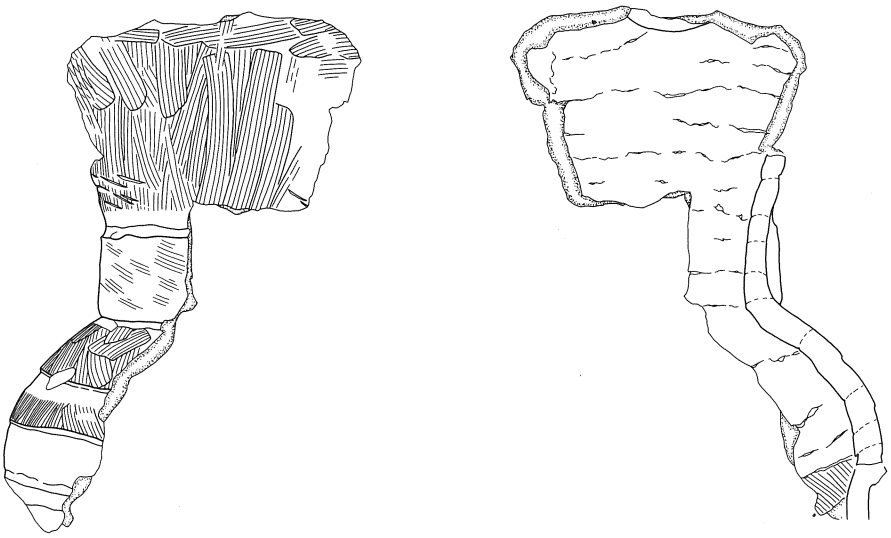


第25図　第15号墳跡出土形象埴輪（1）

第26図　第15号墳跡出土形象埴輪（2）



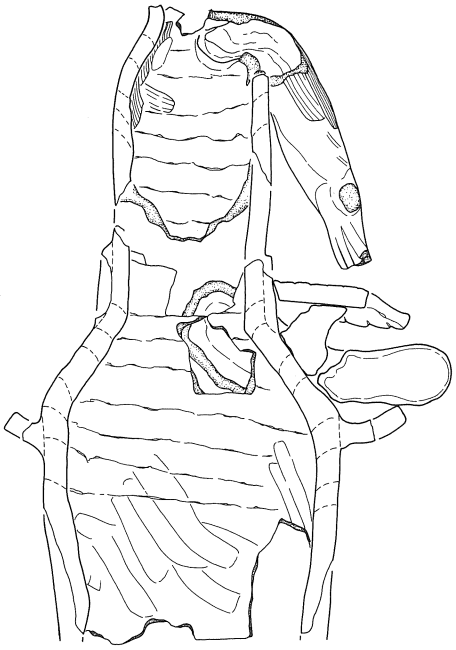
94

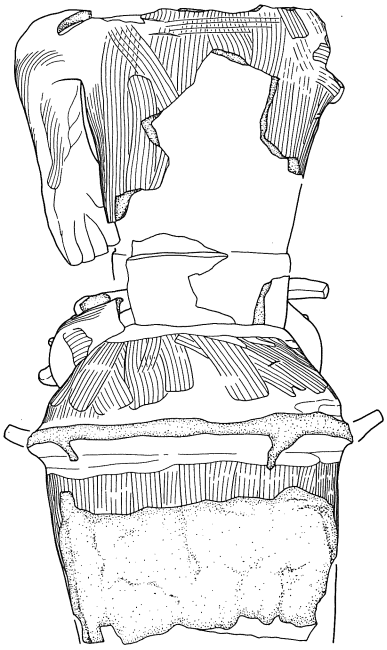


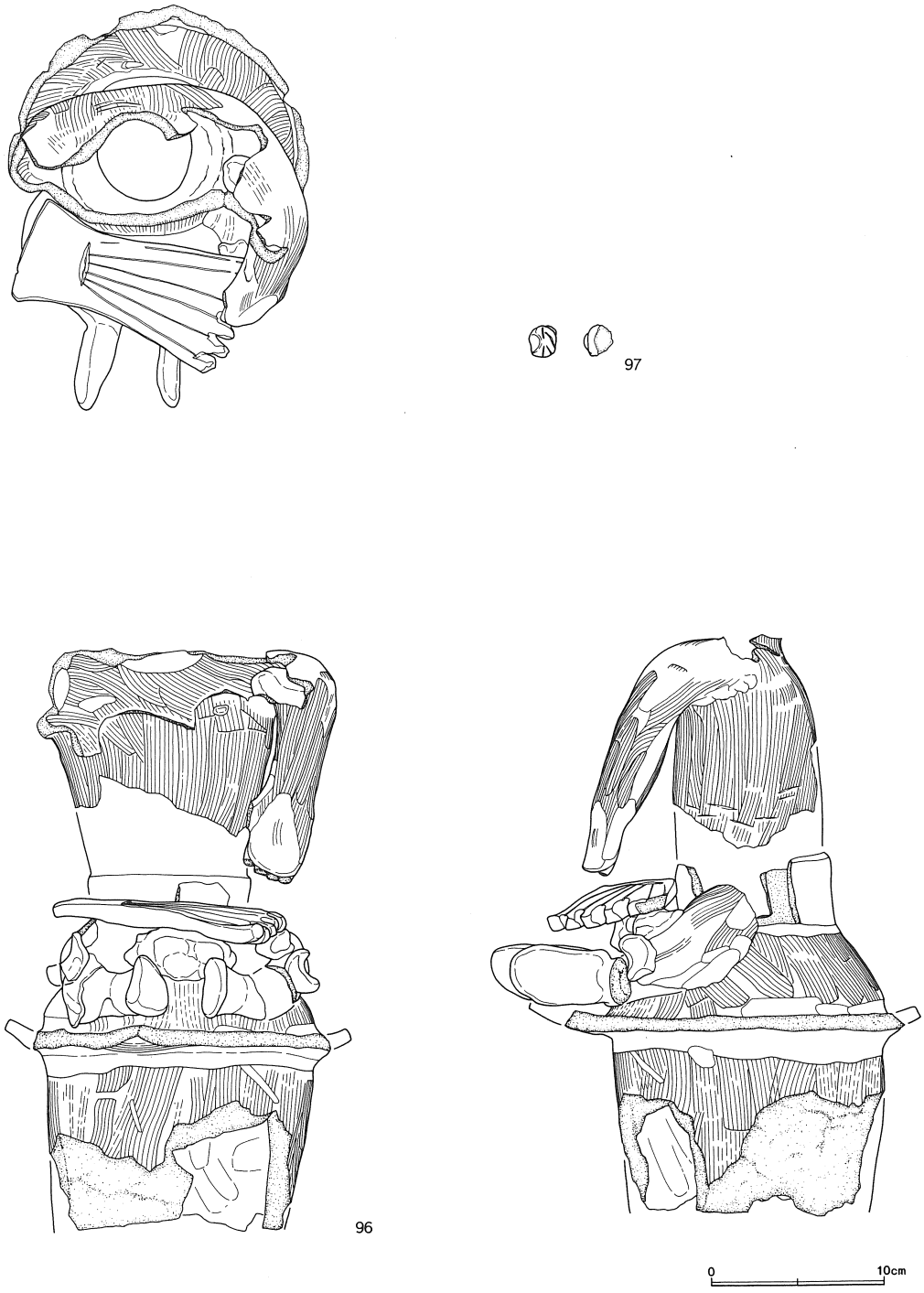
95

0 10cm

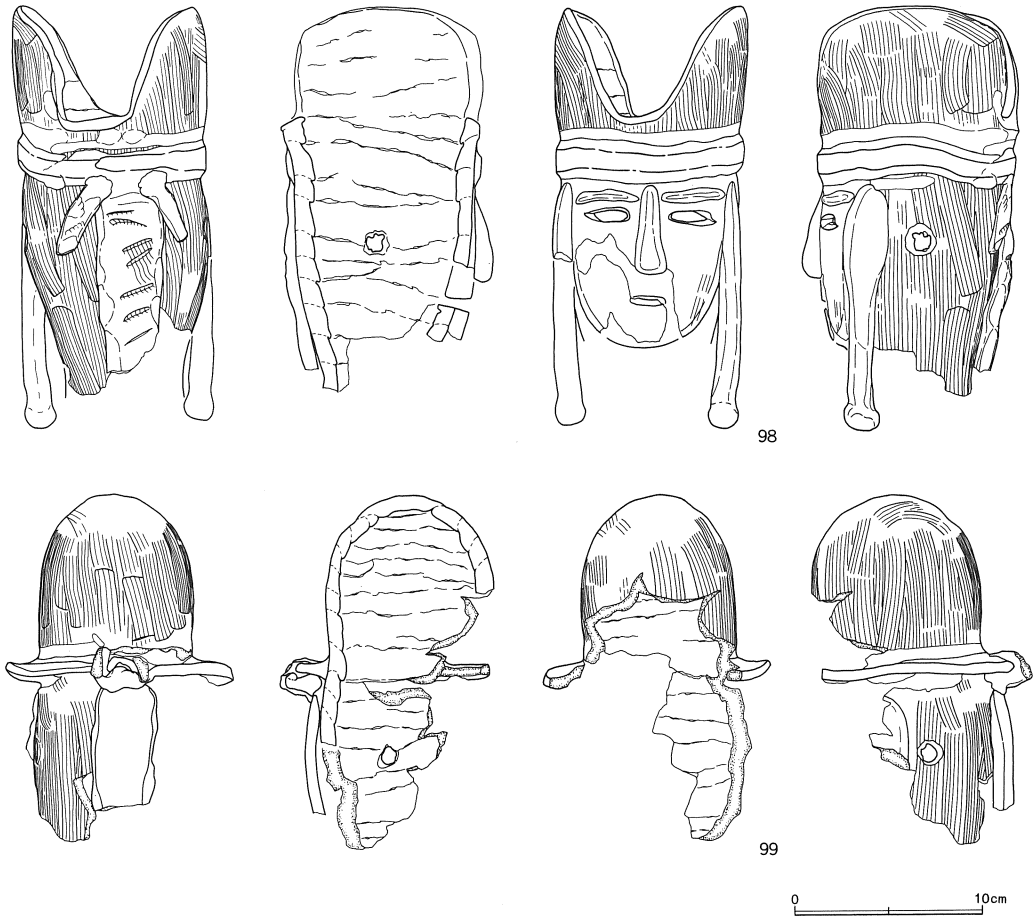
第27図　第15号墳跡出土形象埴輪 (3)







第28図　第15号墳跡出土形象埴輪（4）

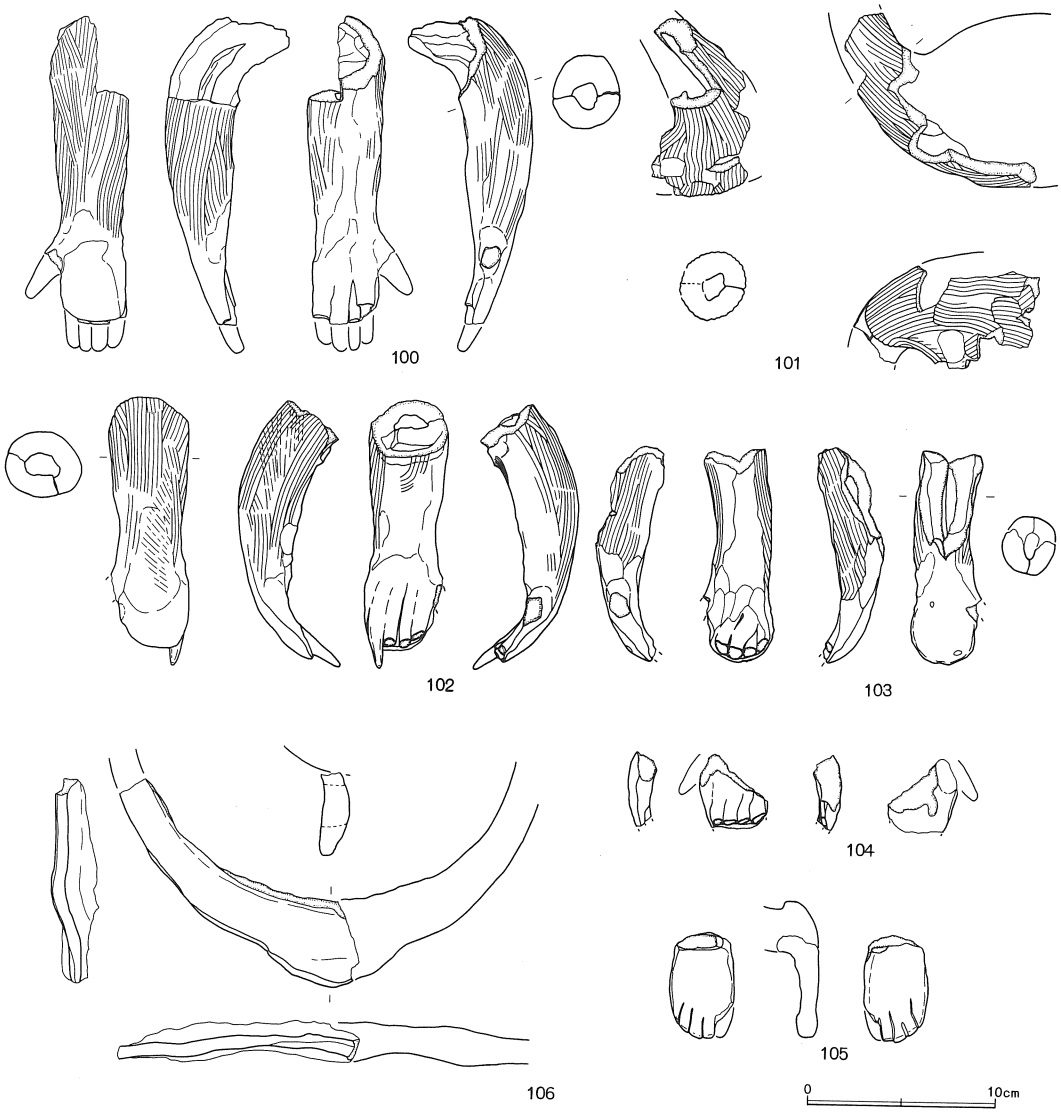


第29図　第15号墳跡出土形象埴輪（5）

手の４本の指で棒の下半分を握り、親指を立てて支え、若干腕の内側に傾けている。腕は84と同じ角度でやや上方に挙げ、前方へまっすぐに延ばしている。何らかの動作を一瞬凍結させたような情景である。確証はないが他の例との類同から考えると女子像と思われる。95は座像の背面である。腰帯の幅が広く、その下に２段で構成される衣服の裾が、ふっくらとしたカーブをもって表されている。そのカーブが93の剝離面の曲線にほぼ一致する。ハケメも８～９本／２㎝と共通し、色調も95の背面は褐色だが、前付近は93のように暗褐色に変化している。これらの条件を考慮すると93と95は接合部位はないものの同一固体である可能性がきわめて高い。

96、98、99は男子像である。女子像と比較して胎土、色調、焼成の諸点で微妙に異なっている。

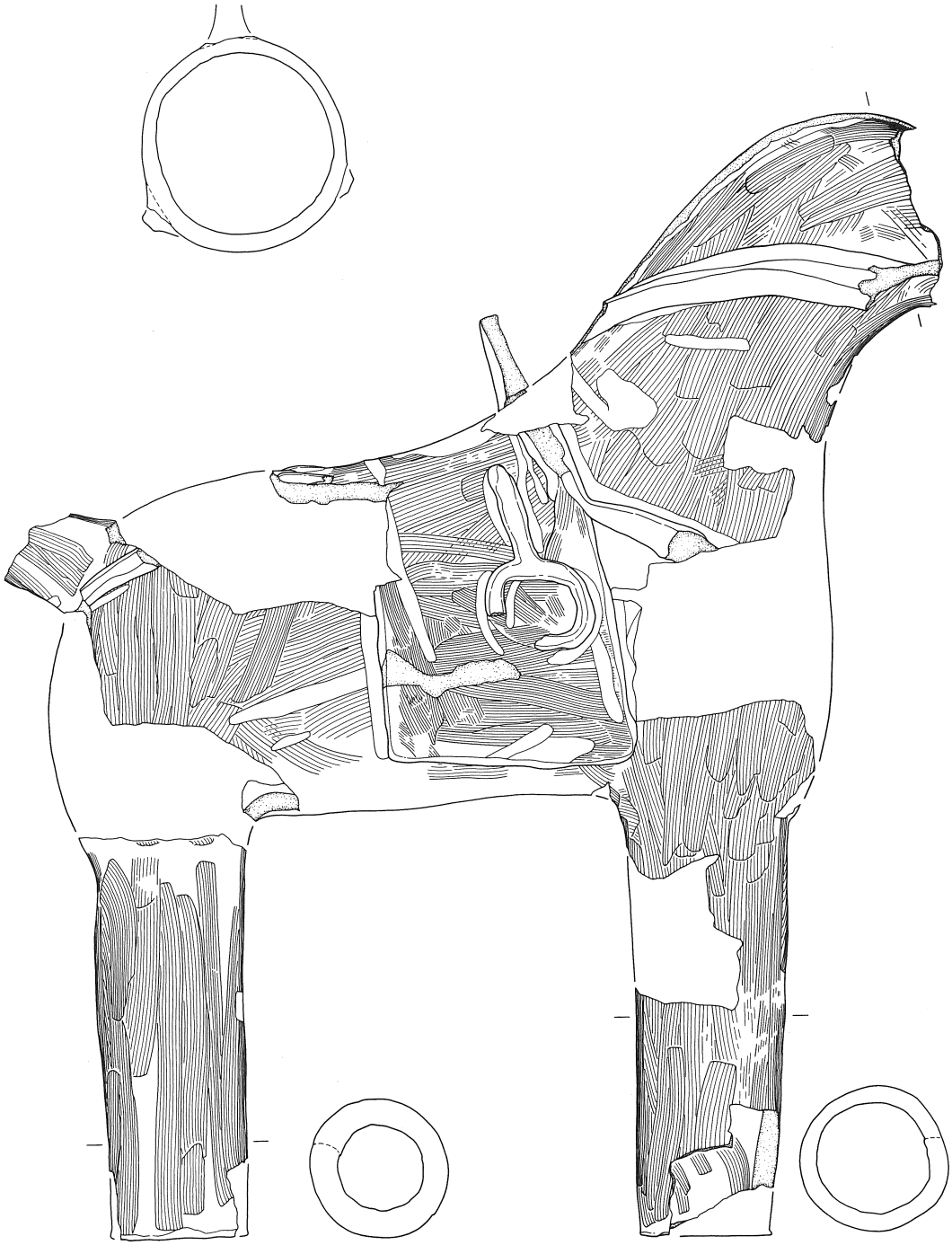
96はいわゆる弾琴男子像である。膝を曲げた胡座像だが足は組まずに足裏を向かい合わせる。足結の表現はあるが指の表現はなく、してがって93例のような素足ではない。その両足の間に粘土塊を貼り付けて、さらに左足にも小さな粘土塊を付け足して、これら2点で支えとし、上に琴を乗せる。琴は厚さ1.0㎝の板状で共鳴槽はない。６本の弦が深さ、幅ともに0.1㎝の線刻で表され、突起を左、弦孔を右にしてやや左下がりで置かれる。弦は突起の間に掛けられ、弦孔は細長く、わずか

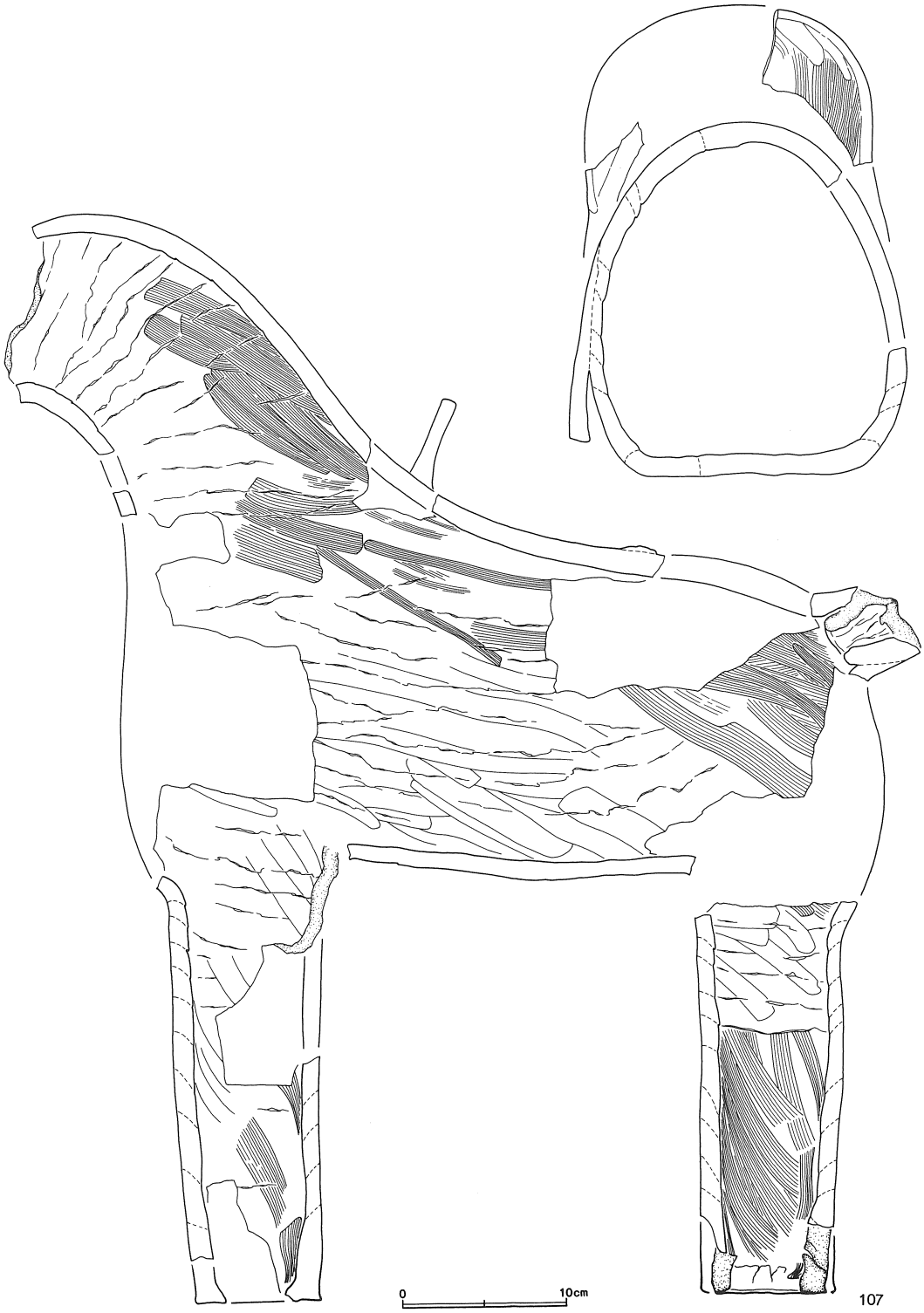


第30図　第15号墳跡出土形象埴輪（6）

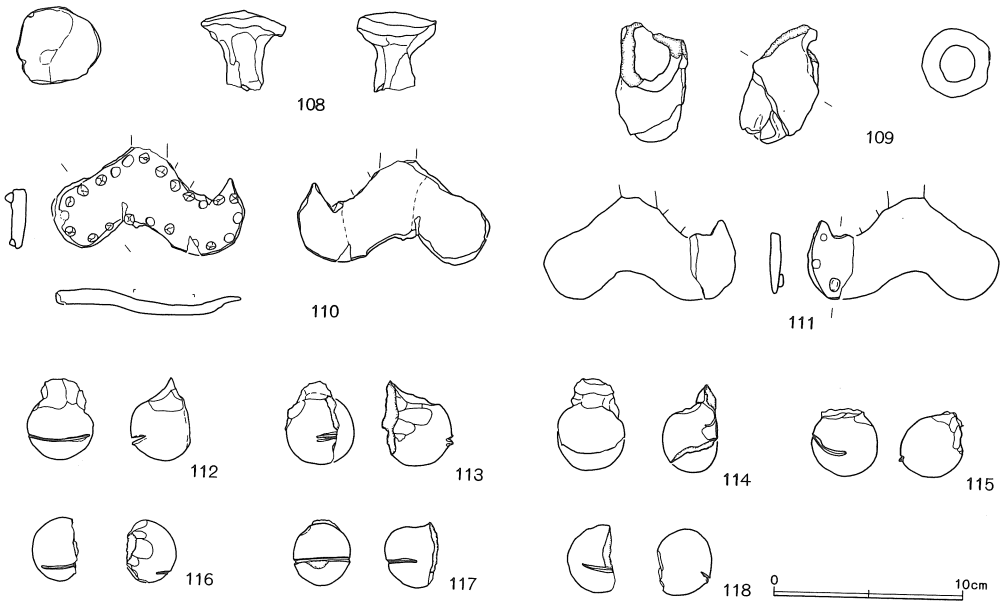
だが貫通している。衣服、装飾等の表現はほとんどない。左腕はまっすぐに下ろしている。指先は欠けているが、琴の直上まであったと思われる。ただし、指は琴に触れてはいない。背面の首の下にはヨコハケが施されるが、垂髪等が接着していた痕跡は認められない。97は焼成、色調ともに96と同じである。ボタンのような形の上面に、葉脈に似た刻み目が施される。96に付属する刀剣類の把頭の可能性がある。なお、96は女子像に比べると全体に小振りである。

98は二山形の冠を被った男子である。冠は幅広の隆帯で表される鉢巻らしきものをもって、頭に固定されるようである。後頭部には、その鉢巻のところでハの字に紐が垂れ、その間に垂髪と思われるが、細長い板状のものが垂れ下がっている。ハの字表現は鉢巻の結び目であろう。下げみづらは棒状で下端は丸く肥大する。耳は穿孔され、耳朶などの表現はない。顔の成形、細かな造作、表





第31図　第15号墳跡出土形象埴輪 (7)



第32図　第15号墳跡出土形象埴輪 (8)

情など、全て84以下の女性達と同じである。特に眉、目、鼻、口の大きさと位置は、84と98の実測図を重ねてみるとぴたりと一致する。違いと言えば、全体の大きさが98の方がひとまわり大きく、逆に鼻だけは84が大きい程度である。したがって、すくなくとも造形に関して見るかぎり、製作者は同一工人であると考えられる。99は帽子を被った男子。帽子は粘土紐を巻き上げ、頂部を最後に塞ぐ。つばは幅2.0㎝前後で小振りである。頭部後側のつばに結びのような造作があり、垂髪がその直下から垂れ下がっている。耳の穴、下げみづらなど98と同一である。内面は器表面の剝離が激しく、黄色に変色している。こういった剝離、色調の変化は男子像の一群の特徴である。

100～104は人物の腕、手である。この内、100、102が左腕、101が左肩、103、104が右腕、右手である。腕は4点とも2枚の粘土を貼り合わせた中空作りである。焼成、色調等の違いから、100、102は女子、101、103と104は男子であろう。100は付け根の先端を絞ってソケットにする。やや内湾しながら下方に下がるようである。ソケット部分の断面形状と、94の左腕の付け根の形状がかろうじて合うので、あるいは同一固体の可能性がある。101はほとんど胴部が残らないが、腕は若干下方向にまっすぐ伸びているようである。102は内湾がきつい。小指のみ残った。103はわずかに内湾する。女子の手に比べて短い。96との接合を検討したが、可能性は見いだせなかった。104は剝落が激しく、かろうじて右手と判断できたのみである。105は踵の剝離した右足。93と同じ作りである。106は座像の人物の基部に貼り巡らされる縁である。幅の広い位置に足が乗るのだろう。

107～122は動物埴輪の一群である。色調は褐色がほとんどで、ハケメも８～９本／㎝と共通する。焼成も良好で、女子の埴輪と同一の製作によると推定される。

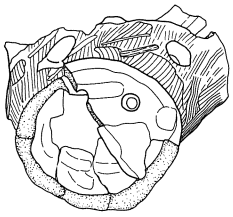
107は飾り馬である。首から先はない。断面が古い破面であり、相当古い時期に失われたと考えられる。鞍、輪鐙、障泥、面繋、尻繋などが粘土板や粘土紐を貼り付けて表現されている。全身に

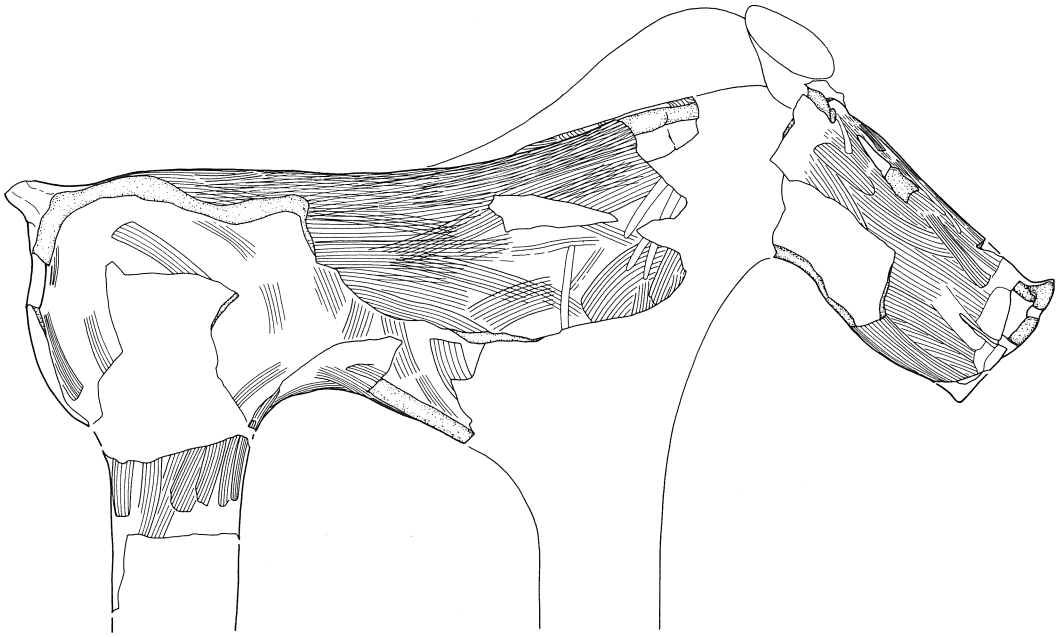
ハケメ調整が施されるが特に消してはいない。たてがみは約3.0㎝の幅で剝離している。面繋、尻繋は断面が台形。鞍は鋤先に似た形状の粘土板を貼り付ける。障泥は幅15㎝、長さ12㎝の粘土板を貼り付けている。腰にあったはずの雲珠の中心部は失われているが、放射状に伸びる紐帯様の粘土は認められる。尻尾は短いソケットで接続する。胸、尻ともにさほど膨らみをもたずに脚へ続く。胴は腹部底面がフラット。その幅が比較的狭いので、左右の脚の間隔も影響を受けてきわめて狭い。脚は蹄の表現がなく、直線的な円筒である。4本とも縦に分割痕がある。

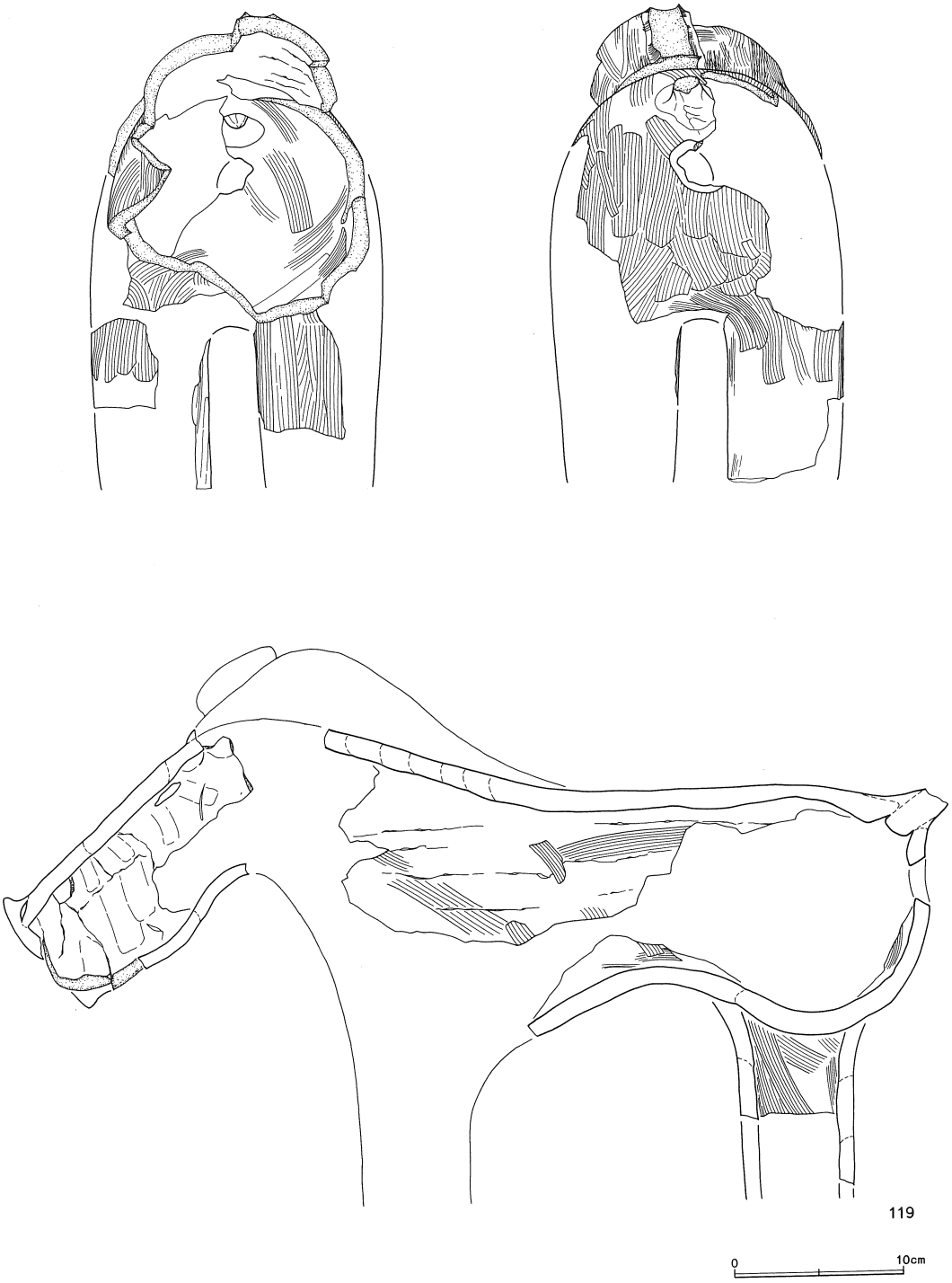
108～118は馬形埴輪の部品である。11点とも107のものと思われるが、残念ながら頭が失われているため、108～111については検証できない。また、残存する面には一ケ所も鈴の剝離痕はないので112～118に関しても厳密には同一固体とは断じきれない。ただし、胎土、焼成などは同じである。108はまえがみの結束部分。板状のたてがみとは別に独立している。109は耳。後述するが他の動物とは異なり、ソケット状の絞りから耳朶までの距離が長い。110、111は一対のｆ字鏡板。顎の曲線に対応して波を打つ。裏面には縦に剝離痕あり。粘土粒を貼り、鋲留めを表現してる。112～118はスリットを鋭利な工具で切り込んだ鈴。115以外は裏面に大きな剝離面がある。

119は猪である。馬と同様全身にハケメが残る。頭部と胴体は直接接点はないが、胎土、色調、調整の諸点において似通っており、同一固体と判断した。特に、色調は他の動物埴輪が褐色であるのに対し暗褐色であること、ハケメの当たりが浅いことなどが他と比べて異なっている。顔は円筒を加工して成形され、上下にひしゃげており、のっぺりとした印象を受ける。顎は緩やかに膨らみを持つ。鼻面および口先は円筒の端部を２～３枚の粘土板で塞ぎ、いわゆるつぶれた豚鼻のつくりである。鼻の上端は鋭角にはねあげている。牙の表現はない。鼻孔は貫通するが、両側面に工具で長さ３㎝程切り込まれた口は貫通していない。目は縦長に穿孔され、左に寄っている。したがって視覚的には、首をわずかに左に傾けているように見える。耳は基部のみ残る。耳の間に粘土の盛り上がりがあり、たてがみの痕跡である。たてがみは首から背中にかけて剝離痕があり、幅約3.0㎝。背中から脇腹にかけてのハケメは特に浅く、何度も重ねて施されている。粘土の乾燥がかなり進んだ段階でハケメ調整がなされたようである。尻尾はソケット部分が残る。尻尾の直下には透かし穴がある。おそらく対面の位置、胸部分にもあったであろう。尻は丸みを持つ。腹部も馬とは異なり、大きく湾曲しており、がっちりとした胴前半部へと続くのであろう。全体としての印象は、顔がやや漫画的ではあるものの、実物の観察に基づいた高いリアリティを保っていると言える。

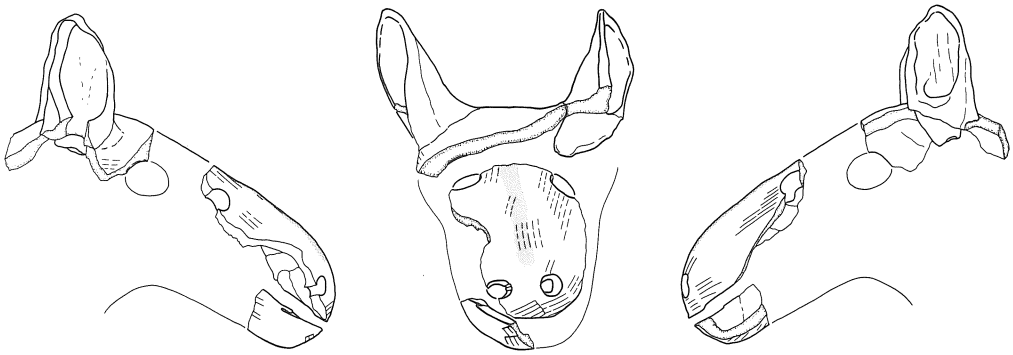
120は鹿の頭部である。整理作業当初においては耳と顔を別々に扱っていたが、いくつかの可能性の消去を重ねるうちに一体となった。まず、顔の場合は、目の間から鼻へかけて付けられた白色粘土が問題になった。次に記する122は犬であるが、犬の顔としては表現がふさわしくない。また、119はすでに頭部があった。107の馬なら白色筋の表現に違和感がないが、逆に小さすぎてしまう。したがって、犬、猪、馬以外の動物である。次に、耳部分であるが、たてがみがないので馬、猪ではない。耳間の幅は現存で12㎝を超える。これにカーブをつけて復元すると頭部はかなり大きくなり、首幅でゆくと119の大きさである。より小柄な122では顔がはみ出してしまうことがわかった。さらにこの耳の破片には、右耳の2㎝ほど前に円形の穿孔があることが確認されたが、目の穴とするには位置的に無理がある。類例を探したところ、最も適当なものとして角の穴が候補にあがった。



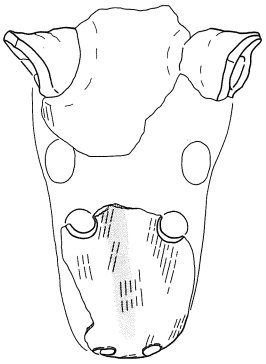


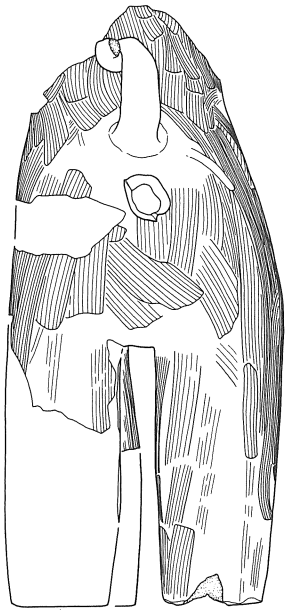


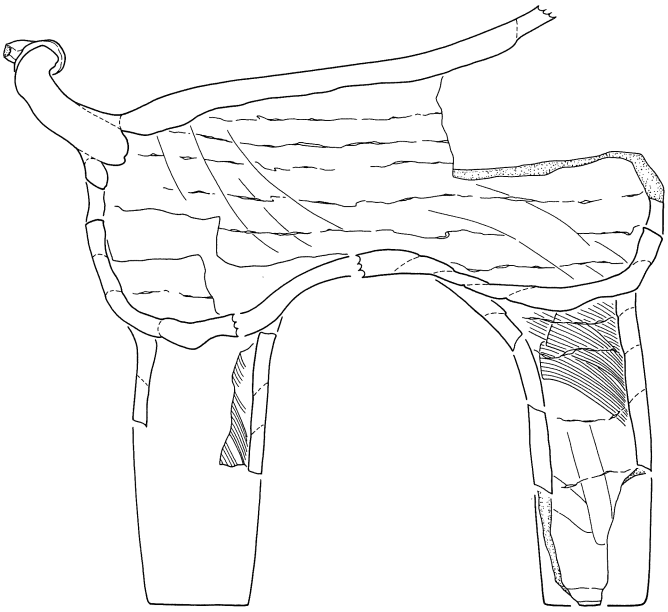
第33図　第15号墳跡出土形象埴輪 (9)

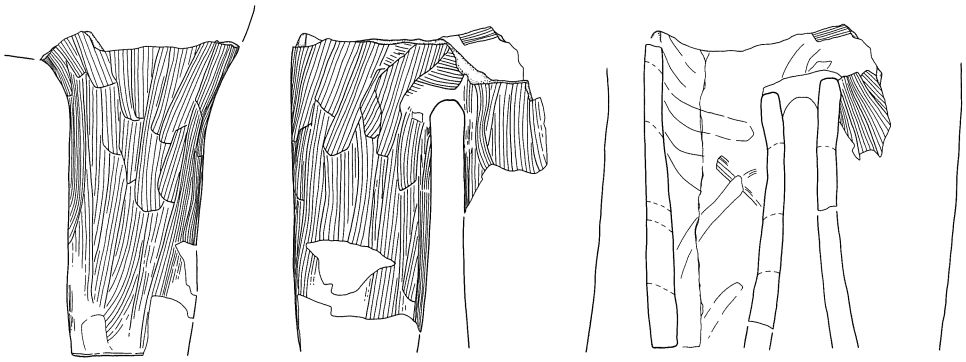


120

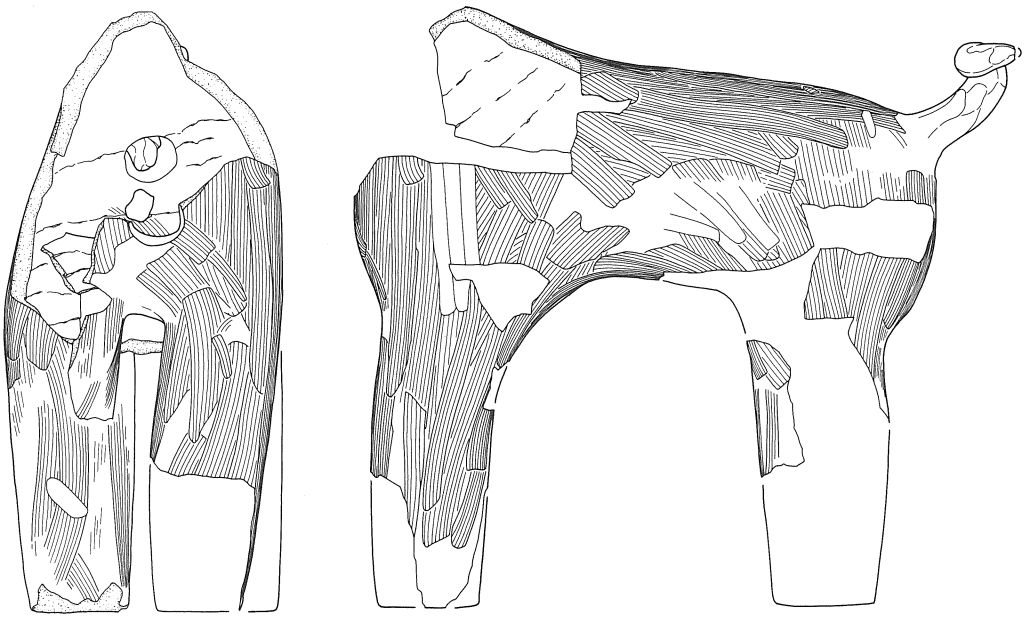








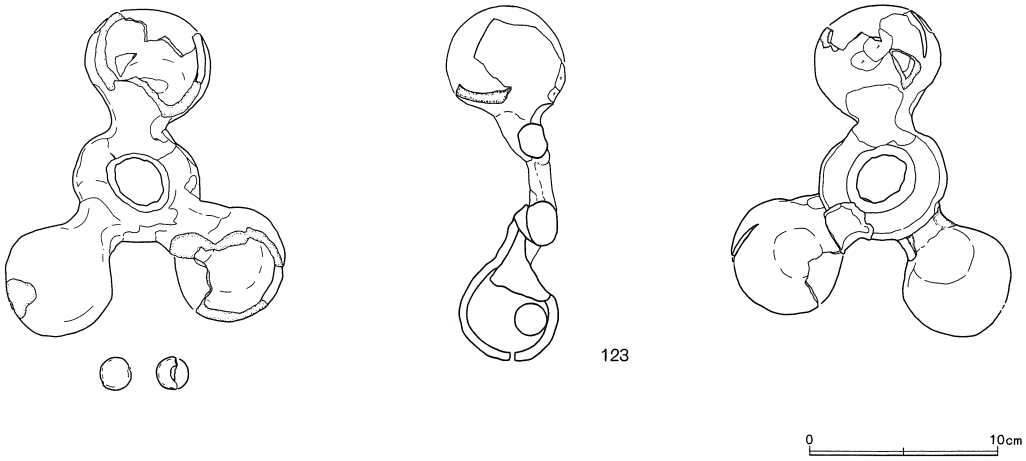
121



122

0　10cm

第34図　第15号墳跡出土形象埴輪 (10)



第35図　第15号墳跡出土形象埴輪 (11)

以上の検討の結果、耳の前に角があること、鼻筋に白色の筋があることから、ともに鹿の頭部であると判断した。ハケメ調整が消されていること、色調、焼成などが共通することも裏付けとなっている。第34図に少々大胆な復元図を載せたが、目の位置から見てこれも猪同様わずかに顔を左に向けている。口は猪と異なり完全に切り込んでいる。耳は耳朶とソケットとの間隔が短い。

121は動物の脚。前脚か後脚かは不明。縦に分割痕がある。幅は122より広いが、119の胴前部には接続しない。断定はできないが、出土位置も近いことから120の鹿の脚と考えておきたい。

122は犬である。119よりもひとまわり小柄である。尻尾が巻尾であること、たてがみがないことから犬と判断した。胸と尻に透かし孔がある。脚は縦に分割痕がある。尻、腹部の丸みなど、119に近似し、焼成、ハケメの当たり等微妙に違う点もあるが、両者はほぼ同一の作りと言える。

123は三環鈴である。リングの直径6.5㎝、鈴の直径6.0㎝。若干リングが大きい。リングはやや楕円形で、鈴の配置も整った三分割配置ではない。鈴は数枚の粘土板を貼り合わせて成形。スリットを切り込むが方向は統一されず、必ずしもリングに平行してはない。部分的に小さな黒斑がある。丸も土製である。鈴の中に入ったままで出土している。どの部分にも他の埴輪から剝離した痕跡は認められない。したがって、123は単独で機能し、古墳に置かれたものである。

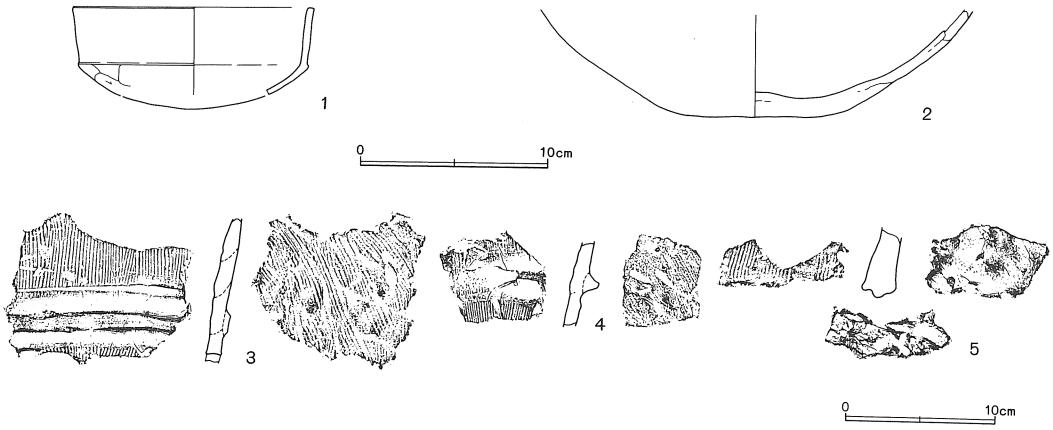
形象埴輪の出土位置（第36図）

形象埴輪は埴輪列のほぼ中央、W-30グリッド杭から南へ約８ｍの範囲にわたって集中する。既に触れたが、樹立された原位置を保つものは１点もない。が、出土の中心範囲を拾いだせば、ある程度の位置の推定は可能である。ブリッジ側から順に見ると、初めに須恵器大甕が据え置かれ、次に小型獣の集団、女子立像が並ぶ。その次に座像の女子。帽子の男子も近くに居る。そして弾琴像と冠の男子。混在するように三環鈴がある。最後に飾り馬が列を締めくくるように佇む。おおざっぱではあるが、以上のような配列が平面分布の分析から推察できる。

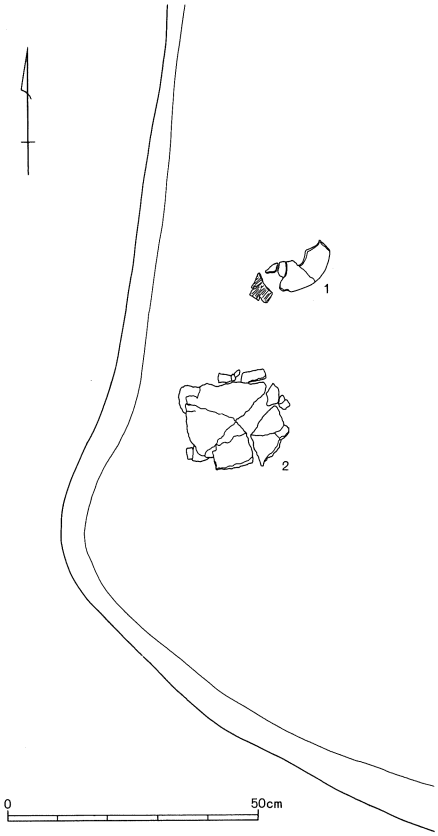
第36図　第15号墳跡形象埴輪・大甕出土位置図

第16号墳跡

15号墳の南東に位置する。ブリッジは南西に向く。北側で最も15号墳と近接しており、その間隔は狭く約1m30cmの空きがあるだけである。周溝は極めて浅く、0.1m程度である。特に、東北の一画は平面形が検出できないほどである。墳丘部分、周溝部分とも東西方向に比較的新しい時期の溝



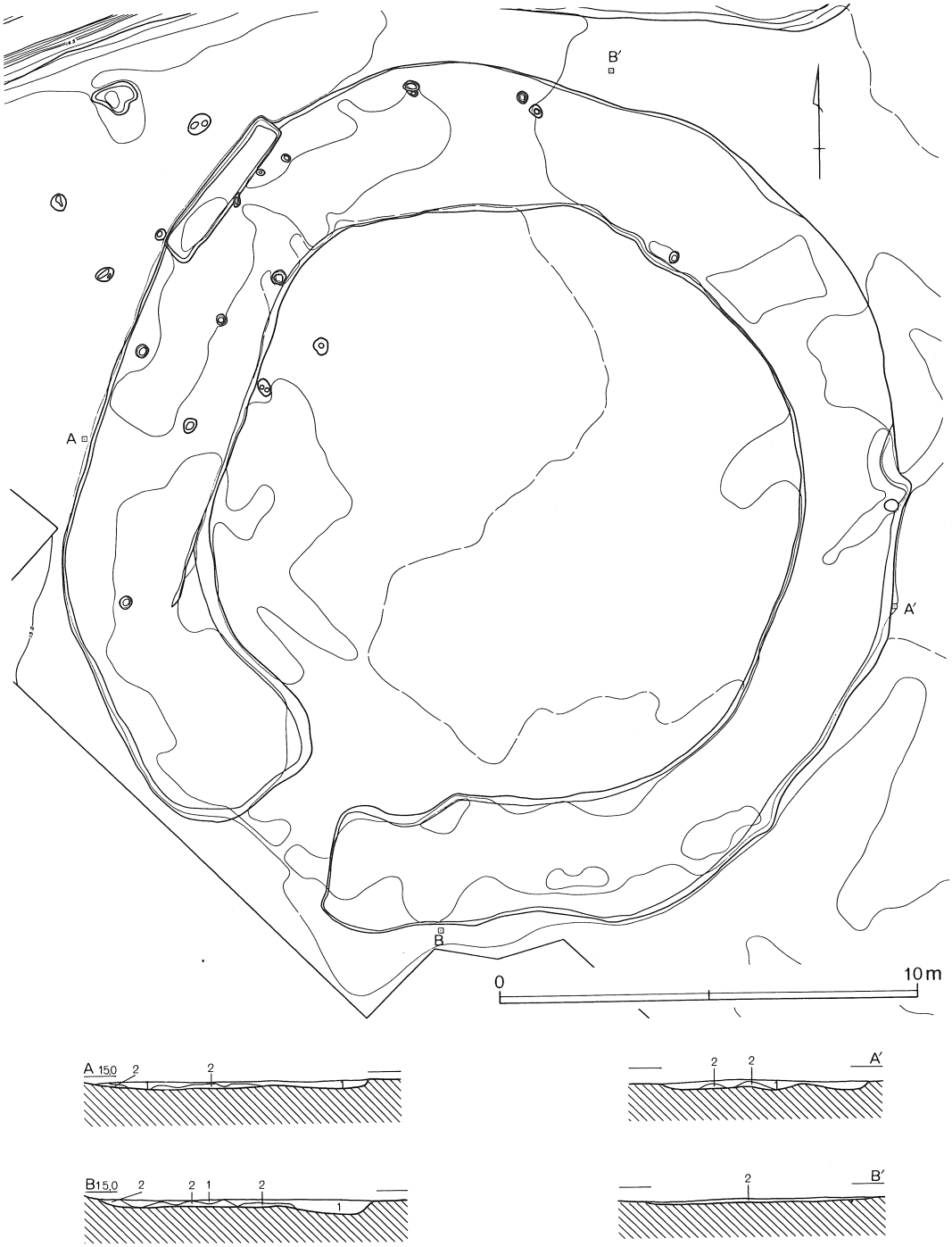
第37図　第16号墳跡出土遺物



第38図　第16号墳跡遺物出土状況図

が何本も走っており、破壊が激しい。特に西側では溝と周溝が同方向にほぼ重なっているため、周溝の平面形が著しく歪められてしまった。一部には長さ4mの長方形の遺構があり、後世の土壙かもしくは近年の攪乱と思われる。形状が端整な方形であるので、後者の可能性が高い。時期不明の須恵器の破片が若干出土している。

遺物は全体に少なく、埴輪は接合可能な破片は検出されていない。土器はブリッジの向かって右側に土師器が2点出土している。いずれも周溝底から5cmばかり浮き、底を下にした正立状態で確認された。1は15号墳の坏に近似した器形である。摩耗が激しく体部は薄い。2はぼろぼろで細片になっていた。甕の底部と考えられる。3は凸帯が低いがきっちりした台形である。凸帯の上方のナデの端には深い工具痕がある。4も凸帯の突出は顕著でハケメが細かい。色調も他の遺物とは異なる。5は底部に棒状の圧痕があり、埴輪を起こした際の工具の痕跡か。



S S 16
1　暗 褐 色 土 層　ロームブロック(直径２cm)、ローム粒を多く含む、粘性やや強い。
2　暗黄褐色土層　ロームブロック(直径３cm)、ローム粒を多く含む、粘性やや強い。

第39図　第16号墳跡

第17号墳跡

第18、21号墳の間に位置する。直径12.7ｍで、14ｍを超える15、16号墳よりひとまわり小さい。だが、周溝は深さ１ｍ以上あり、８基の中では最も深く、壁は直立する。南側は樹木の保護のため周溝の肩が掘り切れていない。そのため図上では若干いびつに見えるが、本来の古墳平面形はきれいな正円に近い。また、ブリッジは直線的で16号墳のように撥状には広がらない。このように17号墳は、古墳の掘り方だけで言うならば多くの点でＡ区の古墳に似ており、むしろＢ区では異端の存在である。Ｂ区では水位が高いために、深い周溝では常に水が湧いていたと思われる。溝底に鉄分の付着が目立つのは、まさにそのことを示すものである。周溝の断面は比較的端正な箱形であるが、ブリッジの右側面とさらにその南方にステップ状の掘り残しがある。溝底はほぼ全面が平だが、北側の一部に浅い掘り込みが認められた。隣接する21号墳とはほとんど接しているが、中間に攪乱があるため、両者の切り合いは確認できなかった。遺物は15号墳同様、ブリッジを手前にして古墳の左半分に集中して出土する。周溝内ほぼ中位の覆土中に砂状の火山灰が薄く分布していた。分析の結果、浅間Ｂ軽石であることが判明した。遺物、特に形象埴輪は、その直上から多く出土する。

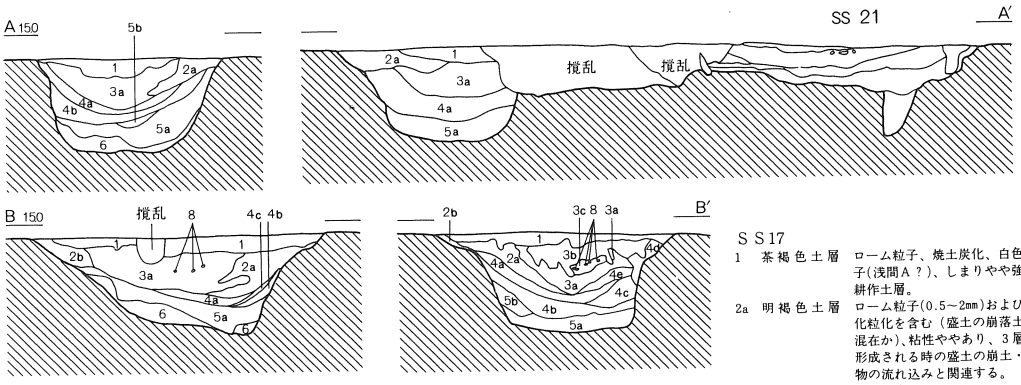
遺物は土器、紡錘車、円筒埴輪および形象埴輪である。周溝が深い割には遺物総量は多くはない。15号墳では整理箱20箱であったが、17号墳は8箱にすぎない。

土器は全部で４点、土師器のみで須恵器はない。１は甕。球形に近いプロポーションである。口縁は短く外反し、頸部の屈曲はきつい。内面はヘラナデ、器表面の摩滅が激しく観察が困難であるが、胴部外面は平滑に調整しているようである。底部も屈曲がつき、底面は広がる。胴部下半に黒斑がある。２は坏。口縁が直に立ち上がる。口唇はフラット。稜線が鋭く削りだされる。身の外面は横方向に規則的にヘラケズリが施される。15号墳の坏に形の上では似ているが、身の深さを比べると17号墳の方が浅い。若干の型式差を与えてよいだろう。３も坏。口縁は外反し、短い。口唇はフラット。身も浅く、外面の削りは粗くて砂粒の移動が顕著である。2.3はともに完形品で出土した。４は赤彩のある坏。内湾し、短い口縁が立つ。赤彩は内面全面と外面口縁直下に施される。５は滑石製の紡錘車。表面はきめ細かく磨かれ光を帯びる。傾斜面はやや内側にカーブする。この傾斜面に幅0.2㎝前後のミガキ痕が明瞭に残っている。

17号墳の円筒埴輪は、全般に器壁が厚いこと、色調が赤褐色であること、内面調整にヨコハケが多いこと、ハケメの幅が狭いこと、口縁部を強くナデること、ヘラ記号に×印がないこと等の点で、明らかに15号墳の円筒埴輪とは一線を画している。

１、２はこの２本だけに限られる大型円筒埴輪である。口径36㎝。現存で4条の凸帯が残るが、本来は５～６条あったと推定される。上から２段目と３段目に、各々透かし孔が直行して配置される。凸帯は低いが断面はほぼ台形である。１は内面に指による凹線が、左上がり２本、右上がり５本の合計７本付けられている。調整と見るには不自然であり、ヘラ記号的なものか。３段目は胴膨らみがあるが、この位置で上段と下段の器壁の厚さが違う。内面で横方向に割れており、おそらく、上部と下部を別々に作り、３段目で両者を積み重ね、接合しているのではないだろうか。

３、４は外面に傘印のヘラ記号がある。ヘラ記号の筆順は、15号墳例と同じく左斜線＞右斜線＞中央線の順である。口縁は強くヨコナデ調整され、内面の口唇付近が凹み、外面もハケメがほとん



SS17

1　茶褐色土層　ローム粒子、焼土炭化、白色粒子(浅間A？)、しまりやや強い、耕作土層。

2a　明褐色土層　ローム粒子(0.5～2mm)および炭化粒化を含む（盛土の崩落土の混在か)、粘性ややあり、3層が形成される時の盛土の崩土・遺物の流れ込みと関連する。

2b　明褐色土層　2層に同じだがよりローム多し。

3a　黒褐色土層　浅間B軽石の堆積が斑点状に認められる。ローム粒、炭化粒を含む、粘性弱い。

3b　黒褐色土層　火山灰はない、この層の下面で堆輪出土多い。

3c　3層中の特に黒色の部分　浅間B多し。

4a　灰黒褐色土層　微粒のローム粒子、および炭化粒化を混在、しまり弱いが粘性をもつ(水性)。

4b　淡黒褐色土層　第4a層に比べローム粒子を多く均一的に含む(水性堆積である)。

4c　やや黄色味をおびた淡黒褐色土層　4bに近いがよりローム多し。

4d　やや黄色味おびた黒褐色土層　4aと4cとの中間の色、小ロームブロックを若干含む。

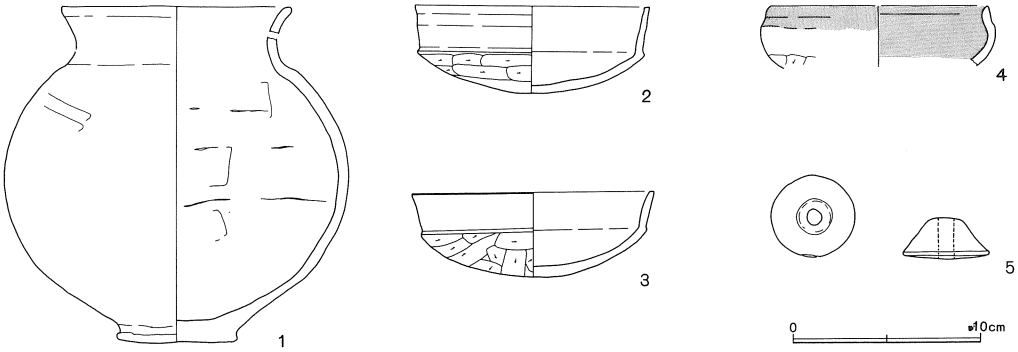
4e　やや茶色をおびた淡黒褐色土層　やわらかい、若干遺物あり。

5a　黄褐色土層　ローム粒子1～3mmを主体的に含む、しまり、粘性をもつ。

5b　黄褐色土層　ローム粒子(1～5mm)、ロームブロック(0.5～1.0cm)を多く含む、茶褐色のハードロームブロック(径1～2cm)を混在、しまり、粘性もつ。

6　茶褐色土層　ハードロームブロックを主体とする、しまり強い。

第40図　第17号墳跡



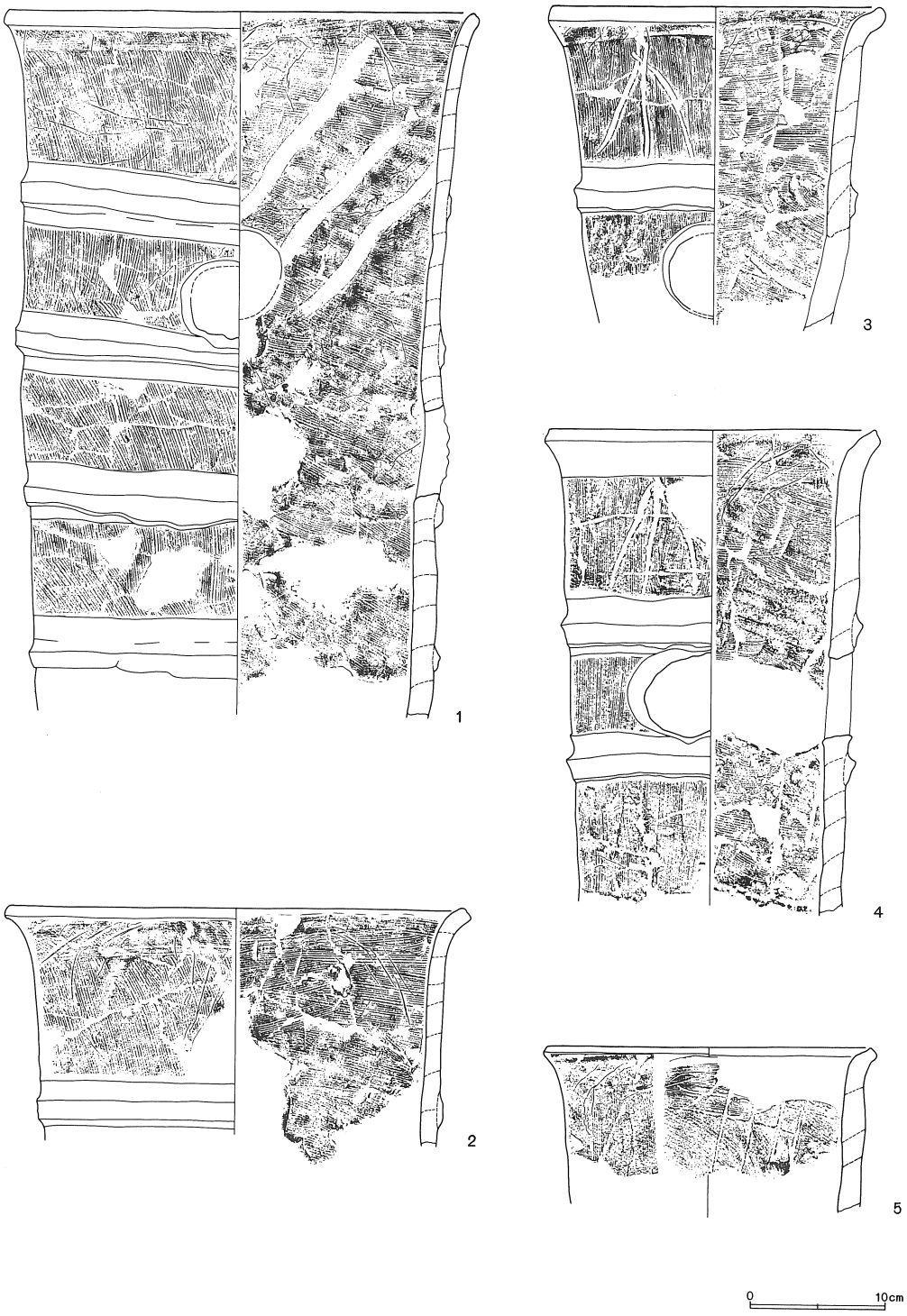
第41図　第17号墳跡出土土器・紡錘車

ど消えている。凸帯は、貼り付けはていねいだが、断面はM字もしくは下向きの三角形を呈する。3は段によって径が変化し口縁が開くが、4はあまり変化がなくずん胴に近い。5は内面に格子状のヘラ記号がある。口縁のナデは強い。6は4同様ずん胴である。口縁は強く外反し、ヨコナデも若干弱く、ハケメが一部残っている。7は外面のハケメをていねいにナデ消している。8は凸帯の幅が広くかつ端正で1に近い。9～11、13、14、16、18の口縁も3同様強くナデる。12、19、20の凸帯は断面M字、ただし、貼り付け後のナデはていねいである。15、21は内面に格子状のヘラ記号。17は全面にひびがあり、脆くなっている。18～25は焼成不良のため黒色に変色し、比重も軽く、まるで炭の如くである。脆いが、成形、調整等は他の資料と変わらない。26は外面に傘印ヘラ記号。凸帯は幅広く低い。27、28、32は凸帯が低い。30、31は凸帯断面がM字。29、33は内面に格子ヘラ記号がある。34は器表面の剝離が激しい。厚さも3、4などと比べて薄い。口縁は17号墳では最も外反する。口縁のナデは若干弱い。内面に格子ヘラ記号がある。35、36、38は口縁を強くナデる。37、39は内面に格子ヘラ記号。40の凸帯は際だって低い。

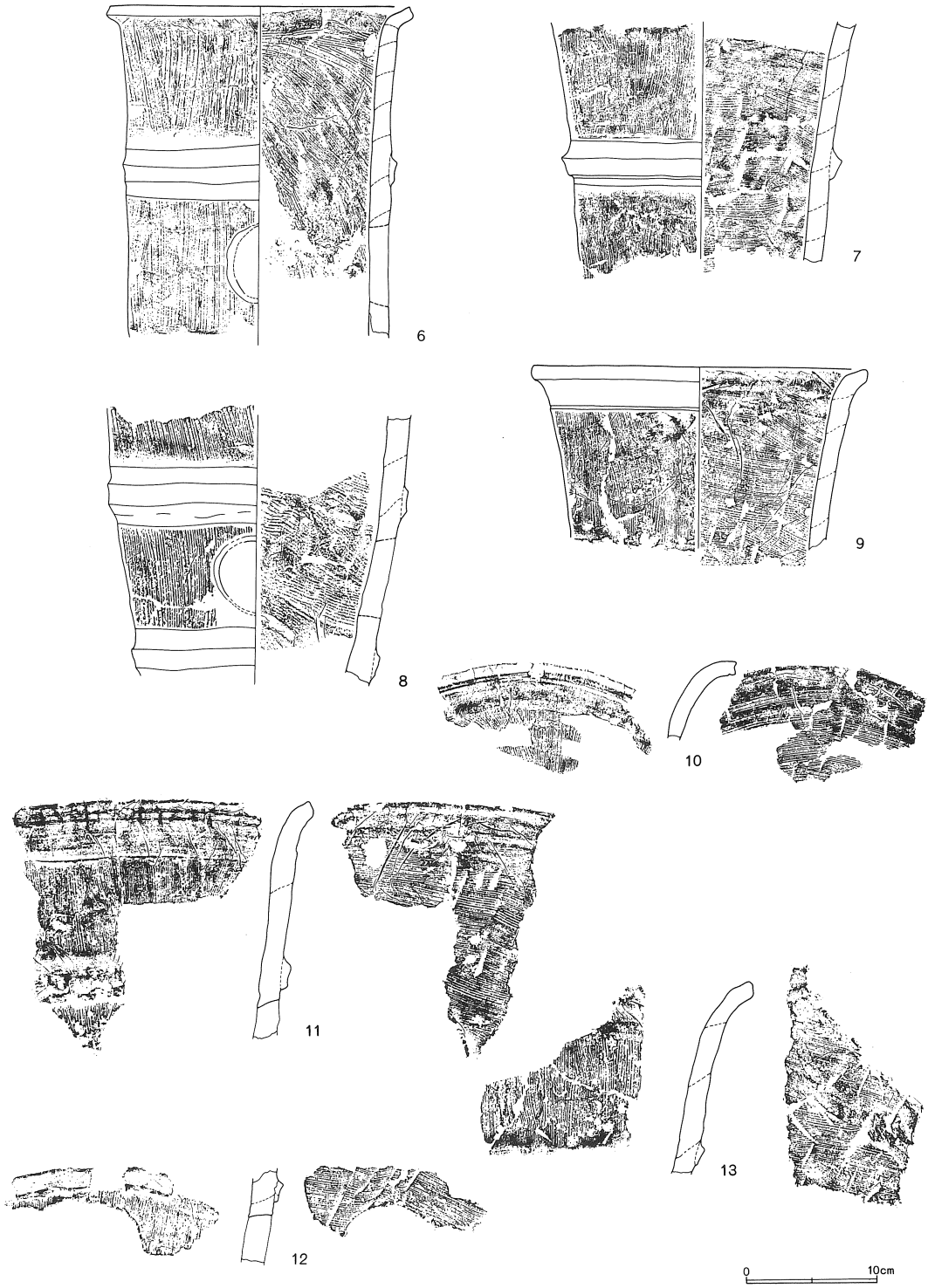
41、42は朝顔形埴輪である。41は比較的混入物のない胎土が使われている。凸帯は厚みがあり、端正な作りである。焼成も良好。42は頸部の屈曲が弱く、口縁の開きも顕著ではない。朝顔としてはずん胴な印象を受ける。胴部の凸帯は高さがあるが、頸部の凸帯は低い。

43～47は底部である。43、46の底面には指痕跡がある。44、45の底面は工具で平滑に調整されている。45は外面に一部タテナデがある。47も外面にタテナデ。器壁がきわめて厚い。

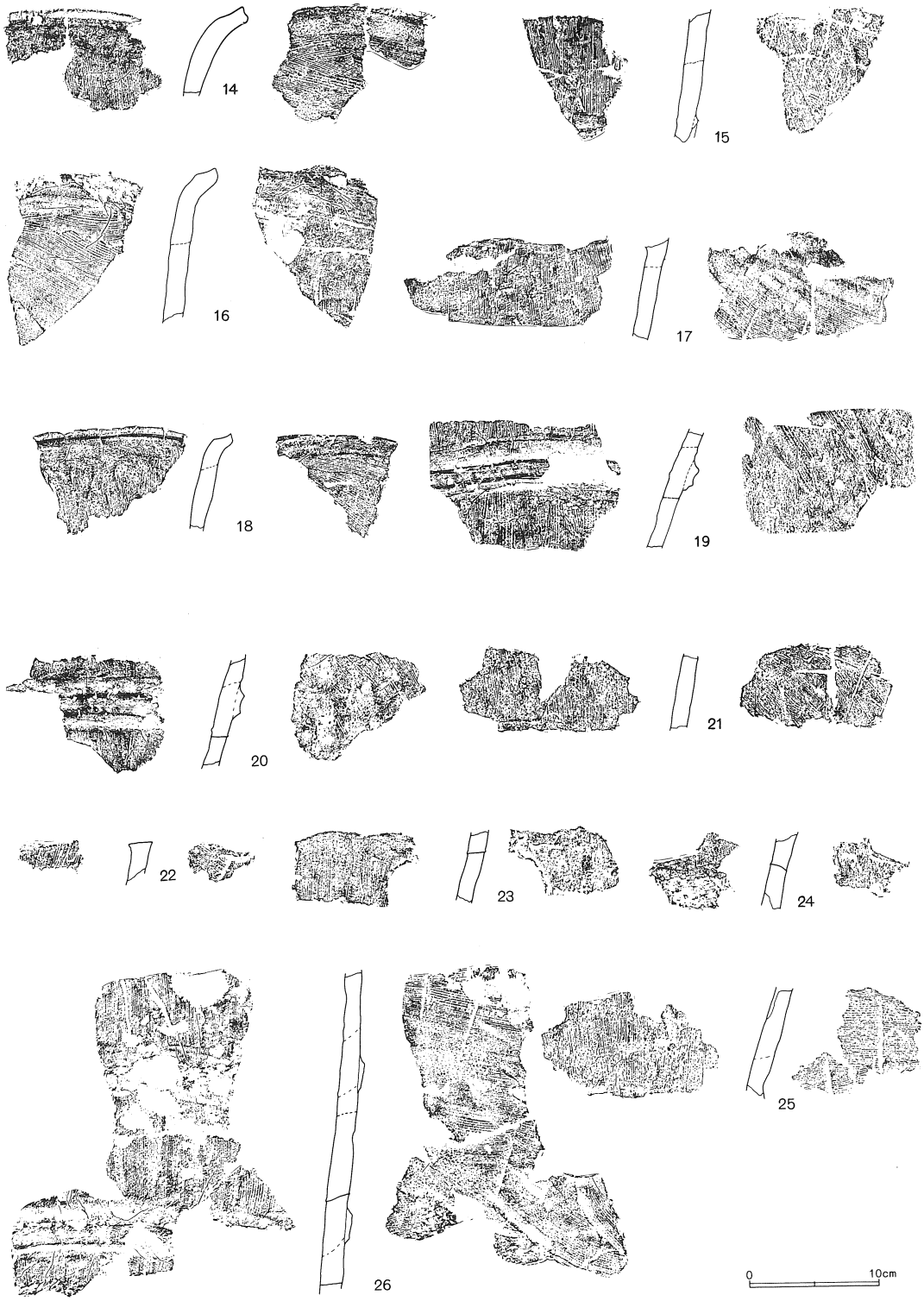
形象埴輪は人物（女子、腕）、動物（馬の脚、馬具）の2種類である。出土量、種類とも15号墳に比べると少ない。48は島田髷の女子。頭部頂を水平に切り、蓋をするかのように髷を貼り付ける。眉は左右が一本の隆帯になっている。目、口は楕円形。鼻は三角形に隆起し鼻孔が鋭利な工具で刻まれる。耳穴の下に耳環を貼り付ける。首飾りは玉が剝落しているが勾玉が一つおきにあったとおもわれる。後頭部以外はていねいにハケメを消している。腕は中実である。49は人物の右腕。中実で、ハケメを消す。親指以外の指は個別に表現されない。48とは色調など全く違う。50、51はf字鏡板。粘土粒の鋲留め表現がある。52は障泥。二枚に剝がれる。裏面は接合のための条痕がある。53は鈴。54は杏葉の一部か。55は動物の脚、大きさから馬であろう。縦に分割痕あり。50～55の脚、



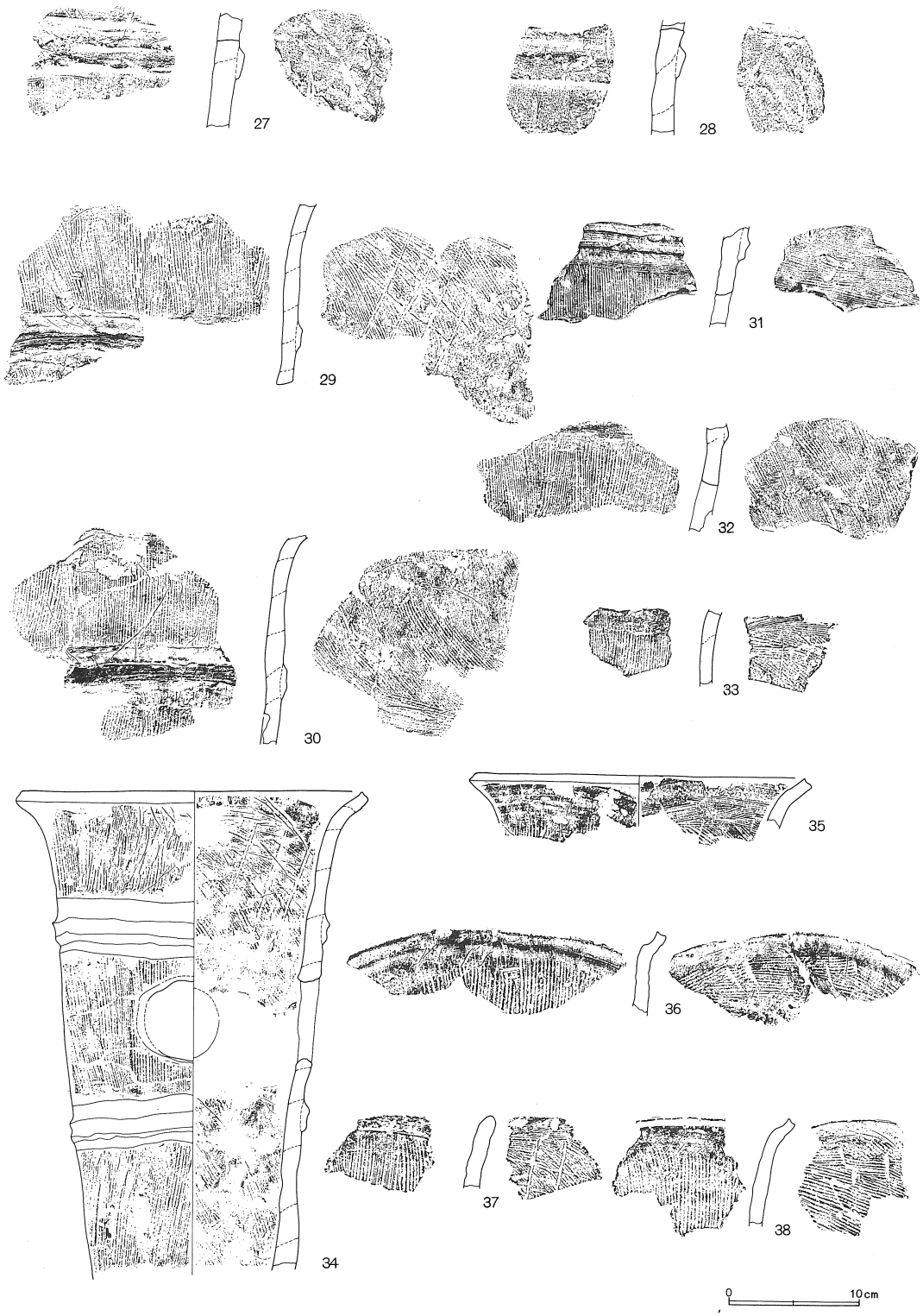
第42図　第17号墳跡出土円筒埴輪（1）



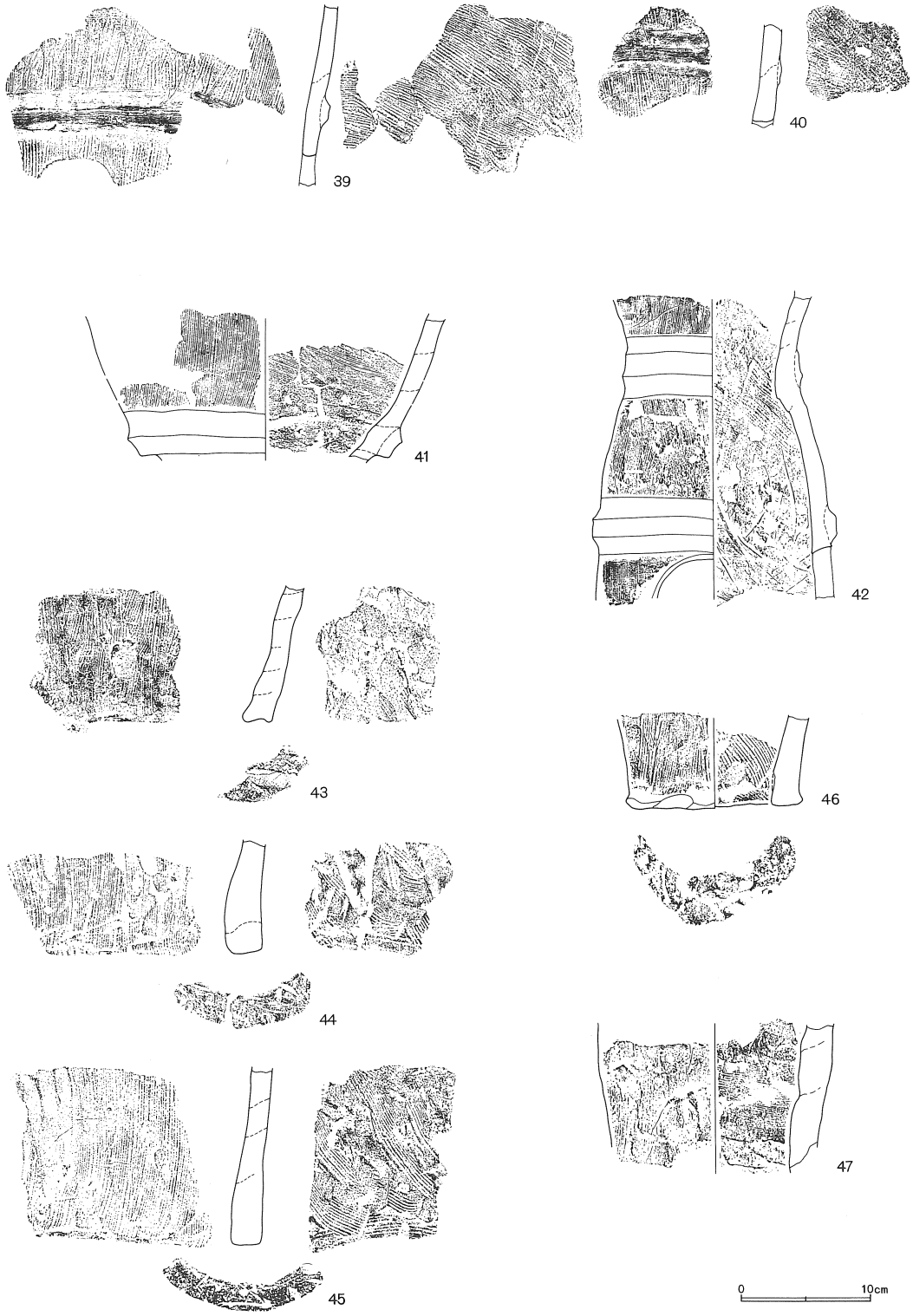
第43図　第17号墳跡出土円筒埴輪 (2)



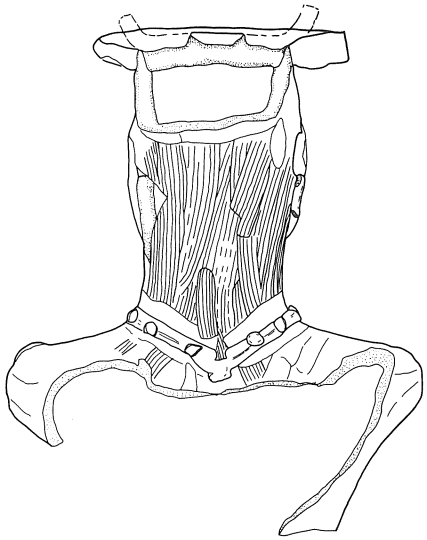
第44図　第17号墳跡出土円筒埴輪（3）

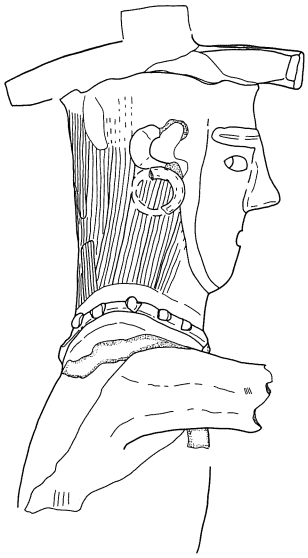


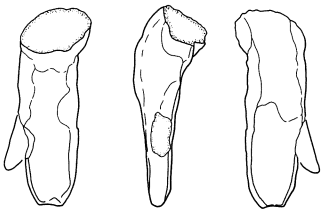
第45図　第17号墳跡出土円筒埴輪（4）



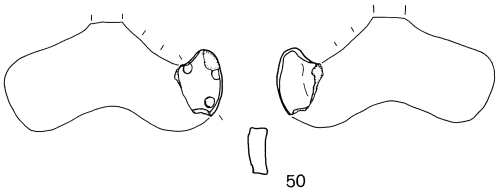
第46図　第17号墳跡出土円筒埴輪（5）



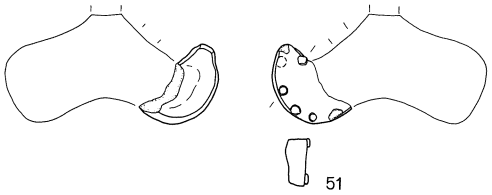




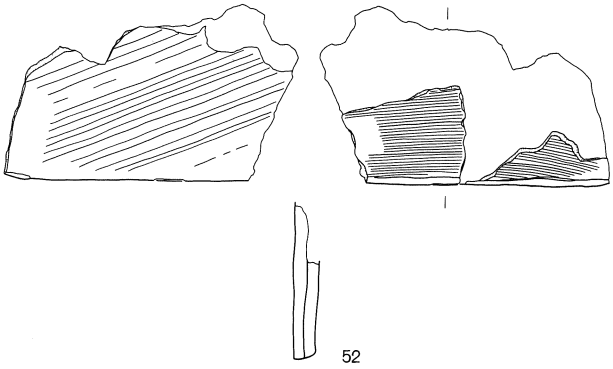
49



50



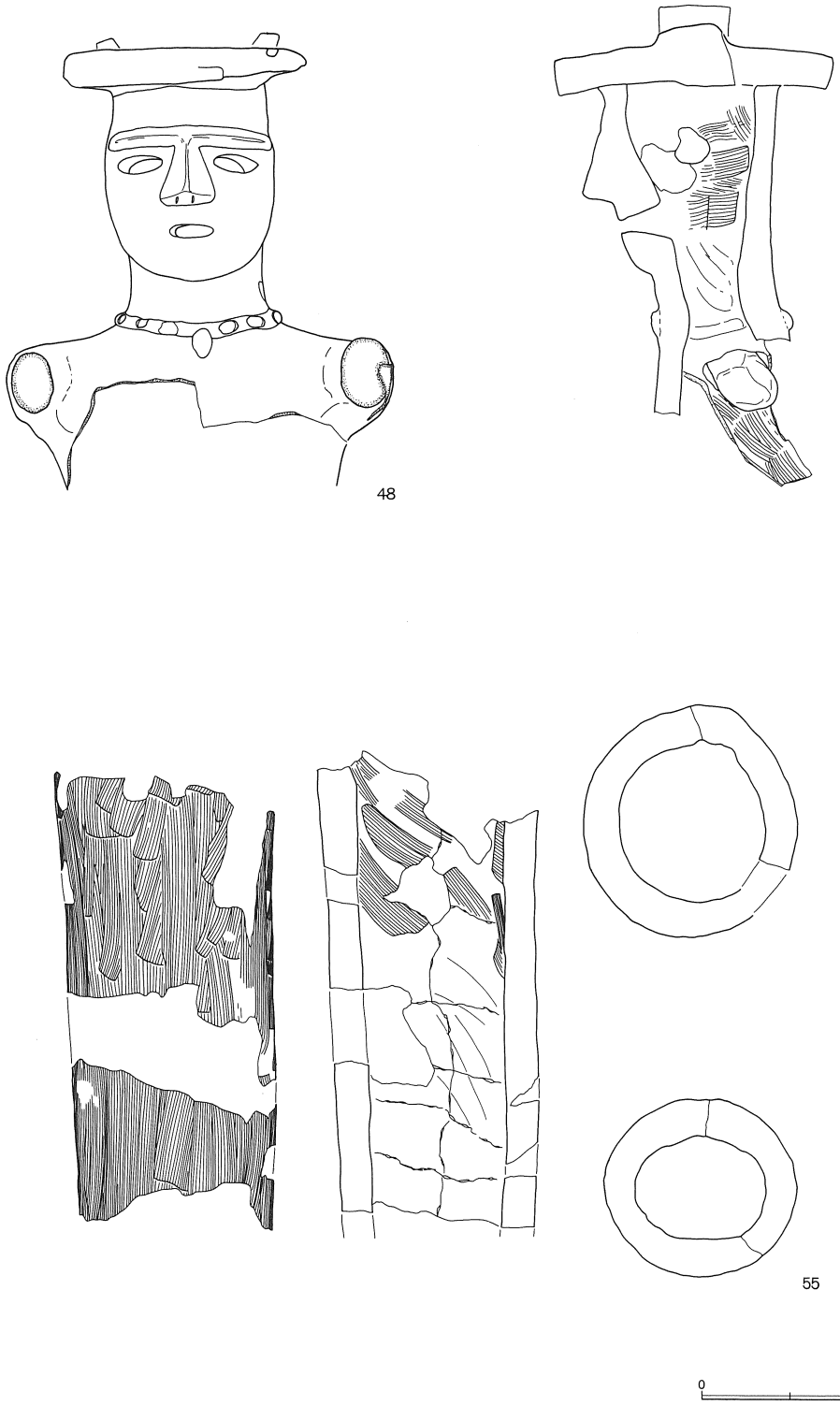
51



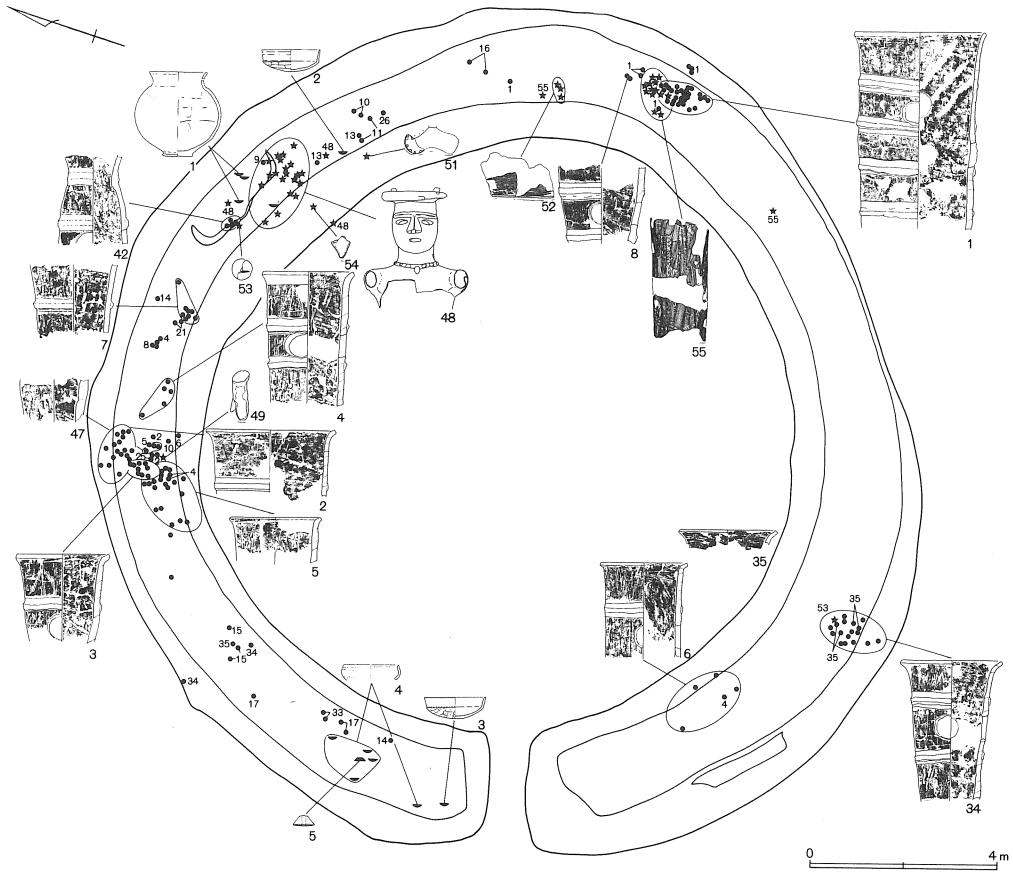
52

53

54



第47図　第17号墳跡出土形象埴輪



第48図　第17号墳跡遺物出土位置図

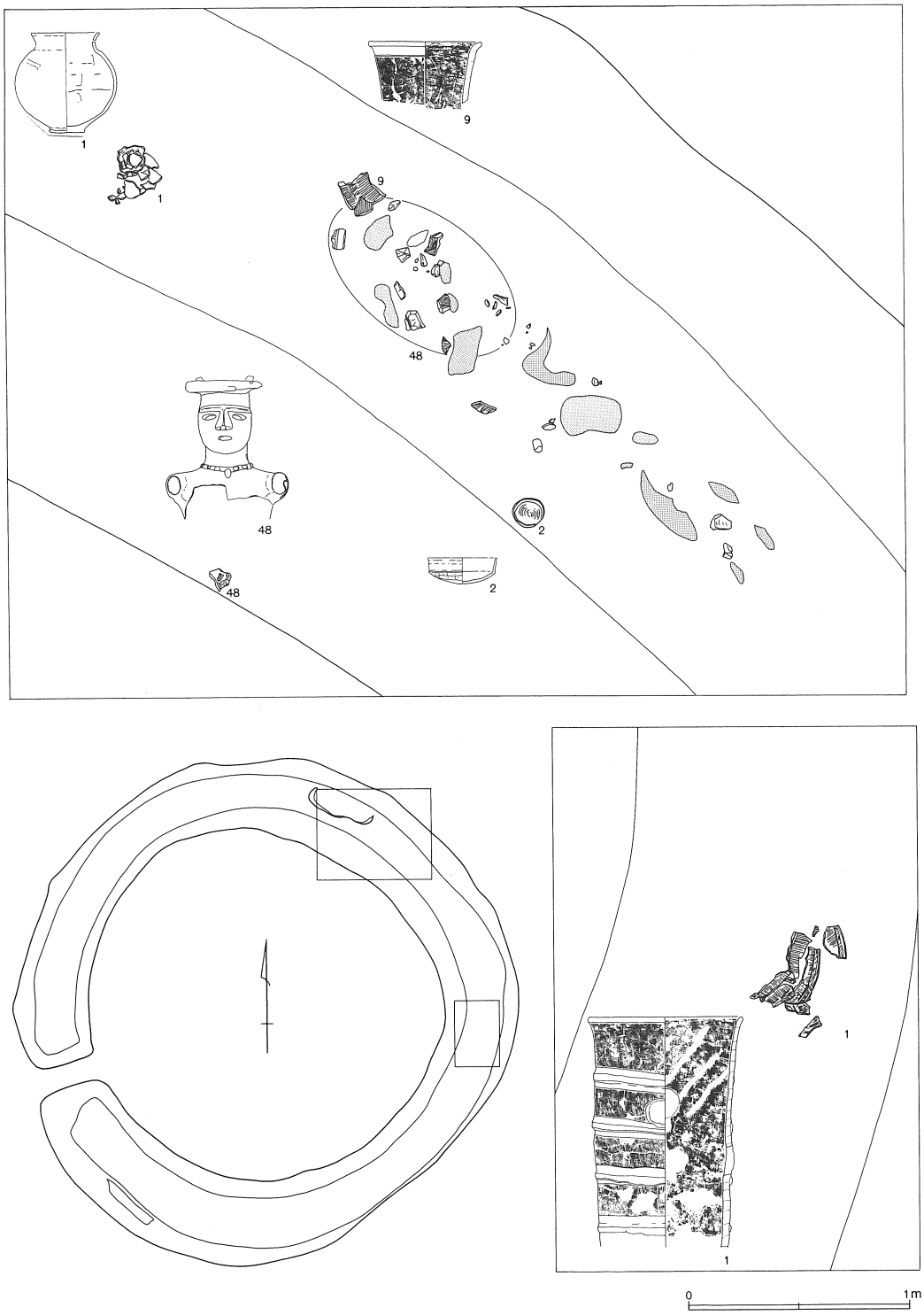
馬具ともに大振りである。ちなみに脚の直径は15号墳が９㎝、17号墳は12㎝である。

遺物の出土位置

土器は出土レベルに違いがある。最も深いのは２の坏で、溝底から12㎝である。ほとんど底に近い。残りの３点は、３の坏が27㎝で、５の紡錘車もほぼ同レベルである。４の坏と１の甕が33㎝とやや高い。平面的にも一様ではなく、２は周溝の壁際であるが他のものは周溝中央部にある。分布の上では、１と２が近く、３、４、５がまとまっている。このうち、据え置きの出土状況および完形品である２、３が元位置を示すとすれば、土器を使用した祭祀は少なくとも、２時期、２ケ所に及ぶ。

埴輪は、１、２の大型円筒が、ブリッジを正面にして古墳の真左と、若干右によった後方の位置に別れて配置されている。また、口縁の作りや全体のプロポーションが他と異なる34が、古墳右側に離れて出土している。最も量の多い３、４に代表されるタイプは、古墳の左側、Ｂ区の古墳では定番の区域に集中している。ヘラ記号のある埴輪では、分布の偏りは特に見られない。

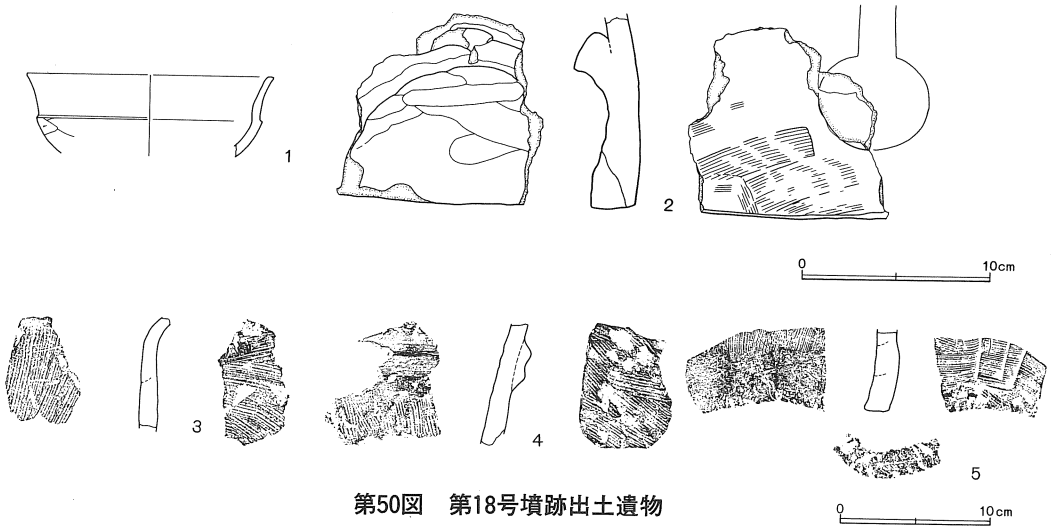
形象埴輪は古墳の左後方を中心に分布する。この区域には円筒埴輪はほとんど見られない。円筒、形象には配置区分があったのだろう。48等は浅間Ｂ軽石の上から出土している（第49図）。したがって、Ｂ軽石降下までは、埴輪は墳丘上にあり健在であったことになる。



第49図　第17号墳跡遺物出土状況図

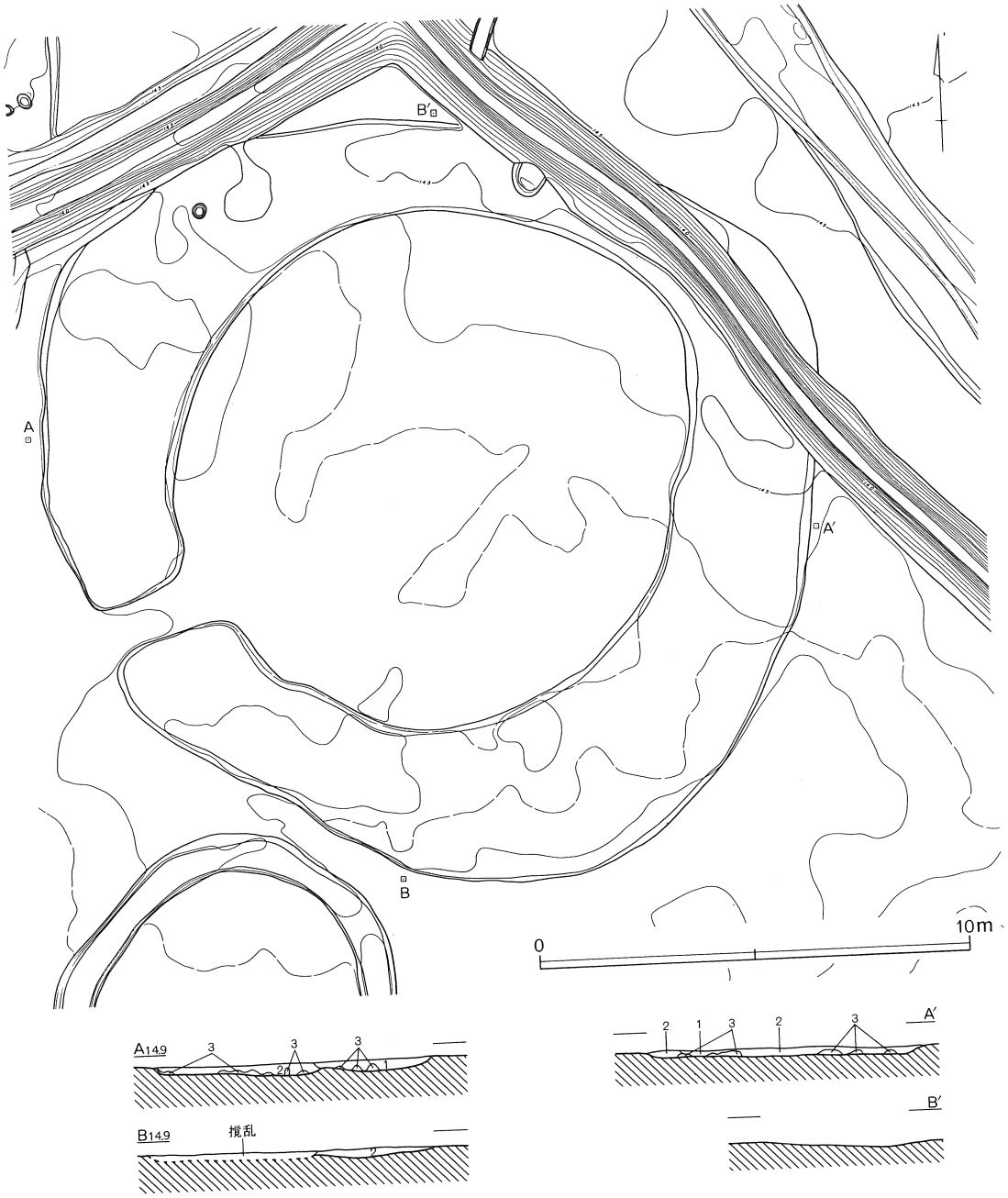
第18号墳跡

19号墳と20号墳との間に造られている。ブリッジは南西を向き、他の古墳と比べるとやや細い。20号墳との間の距離は１ｍ未満できわめて接近しているが、20号墳を意識してその近辺の周溝外側は若干変形している。全体に周溝の形は不整形である。西側では23号溝が周溝をかすめ切り、東側では同じく鍵型に曲がった同溝が周溝の真ん中を切っている。周溝は浅く、10㎝未満の部分が大半を占める。特にブリッジ付近では平面形が確認しがたいほど浅い。東側では23号溝以外の攪乱が激しくＵ字溝、排水桝、土管等が埋設されていた。墳丘部分には倒木痕がいつくかあり、ロームと黒色土が混じりあい層位が逆転していた。また、縦横に溝などの攪乱が多く、墳形を破壊していた。



第50図　第18号墳跡出土遺物

遺物は周溝が浅いため少ない。西側の23号溝の中に埴輪片が若干落ち込んでいた。本墳の遺物と断定しがたいので、溝の出土遺物として別記した。したがって図示したものは周溝から出土したものに限ってある。１は土師器坏の小破片である。口縁は外反し、口唇はフラットである。17号墳の３番の土師器坏よりも外反の角度は強い。２は形象埴輪。馬の一部と推定される。外形が板状であることと円形の剝離痕が輪鐙の痕跡と考えられることから、障泥の破片と思われる。そうであるとすれば15号墳の馬型埴輪の障泥より２倍以上も厚く、かなりの大きさ、重さのものになる。ただ、内側には円形にカーブした部分があり、15号墳の例の右障泥から類推して、脚へ連続する曲面と理解しているが、若干疑問な点もある。３は円筒埴輪の口縁破片である。口縁の外反は屈曲気味。４は器表面がぼろぼろで観察困難であるが、凸帯は低く断面形がＭ字状で幅広である。５は２㎝あたりのハケメ本数が16本と非常に細かい。外面は幅約４㎝の押圧痕が観察できる。板状工具による圧痕で、いわゆる底部調整である。内面はヨコハケが施される。以上３点の円筒埴輪は胎土、色調、焼成、調整においていずれも異なっている。

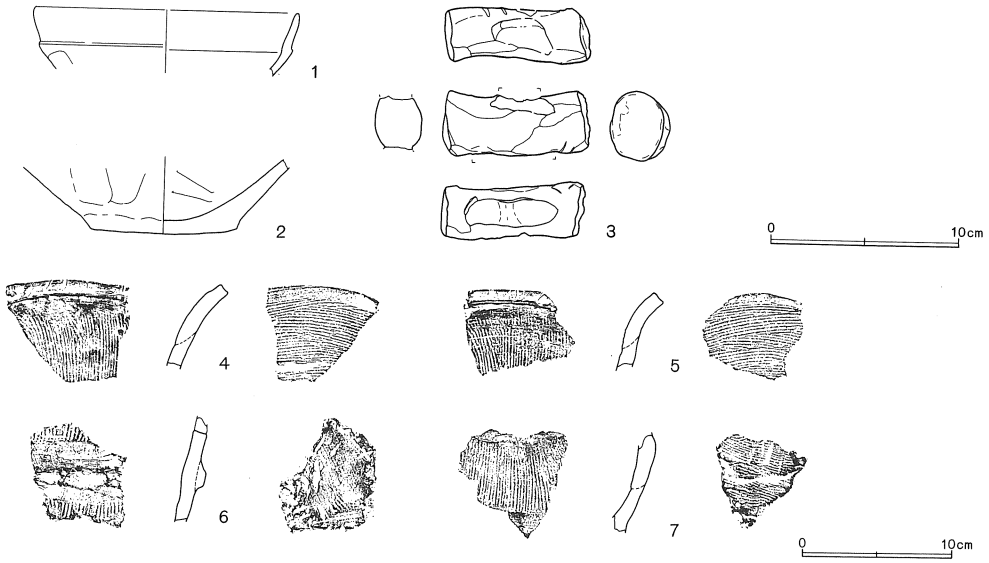


S S 18
1　明褐色土層　ローム粒・黒色土粒を若干含む、均質でしまっている。
2　黒褐色土層　ロームブロックを多く含む、ややしまっている。
3　ローム崩土層　ロームが大きくブロック状に崩壊している。

第51図　第18号墳跡

第19号墳跡

18号墳の北西、15号墳の北東に位置する。ブリッジは西方向を向き、21号墳の向きに近い。平面形は正円とは言いがたくやや南北に長い。たぶん後世の溝、攪乱などによる変形と思われるが、北西を除き直線的な部分が多く、墳丘裾はまるで亀甲のような形状を呈している。本墳は18号墳同様、周囲が溝により破壊されている。ブリッジ付近には25、26、31号溝が走り、東側では24号溝の上端と本墳周溝外側の上端とが完全に一致しており、あたかも溝が古墳の周溝を利用しているように見てとれる。また、24号溝は、本墳から離れたところでは直線的に掘られているのに対し、本墳を切る部分では大きくカーブを描いている。これは溝が掘られた段階ではまだ墳丘がかなり残存していて、溝を回り込んで掘らざるをえなかった事を示していると推定される。同様なことは26、31号溝についても言えることだろう。周溝は全体に浅く、ブリッジ右側部分以外は10㎝前後である。



第52図　第19号墳跡出土遺物

遺物は16、18号墳と同じくきわめて少ない。1は土師器の坏。小破片ではあるが復元すると口径は14.3㎝を計る。他の古墳から出土している坏と比べると器形が若干異なり、やや内湾する低い口縁は外反するというよりも外傾していると言うべきかもしれない。いずれにしても他の坏とは系譜が違う遺物と考えられる。2は甕もしくは壺の底部である。調整が比較的雑なので前者の可能性が高い。3は家型埴輪の堅魚木である。断面は楕円形を呈し、長径の方を上下にして立てる。上面には半円状の剝離痕があり、なんらかの部品が接続していたようである。棟側の下面には浅い2条の凹凸が認められ、取り付いていた家の棟は2本の棒状の表現をとっていたことを示すものである。4、5は円筒埴輪の口縁部破片。いずれも口唇が若干凹んでいる。6の凸帯は低いが断面形は端正な台形を呈する。7は湾曲の強い埴輪片で、内面のハケメ処理等からは形象埴輪ではないようであるが、その形は通常の円筒埴輪とは異なる。朝顔形円筒埴輪の一部かとも思われたが、それにしては傾き、直径とも不自然である。ここでは便宜上円筒埴輪として扱った。

ＳＳ19

1　灰色がかった黒褐色土　やや砂質微粒、かたい(新しい堆積)。

2a　暗 褐 色 土　ロームブロック２～８cm大、ローム粒、多量に混じる(整地土か)遺物多し。

2b　暗 褐 色 土　2aよりローム少ない、黒色土もブロック状ではない。自然堆積に近い、整地土か。

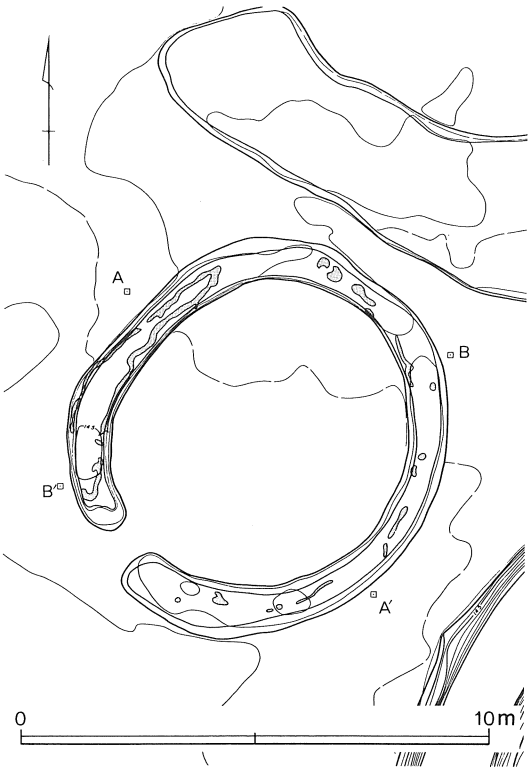
3　ローム崩土　黒褐色土が混在するロームの二次堆積。

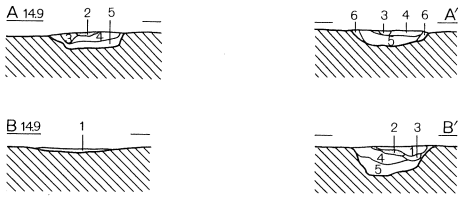
4　黒 褐 色 土　ローム粒若干含む、軟、溝の堆積、ＳＳ15の周溝内溝よりは新と考えられる。

5　黒 褐 色 土　４よりローム粒多し、軟、溝の堆積、ＳＳ15の周溝内溝よりは新と考えられる。

第53図　第19号墳跡

第20号墳跡

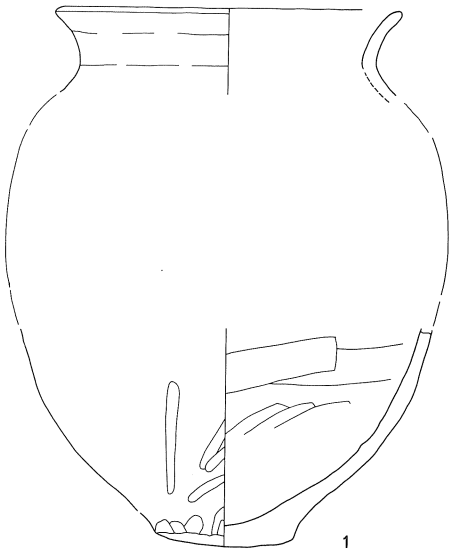


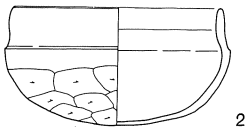


ＳＳ20

1	黒褐色土層	若干灰色、火山灰・ローム・黒色土などが入り混じる、軟質。
2	火山灰層	砂質で均質、灰色を呈する、厚い部分で３cm堆積、ＦＡか。
3	黒褐色土層	１cm大以下のローム粒・ブロックが全体に混じる、やや軟質。
4	黒褐色土層	粒状のロームが霜降り状に混じる、やや軟質。
5	暗褐色土層	ロームブロック・ローム粒が大量に混じる、ややしまっている。
6	ローム崩土層	若干黒ずみ、軟質。

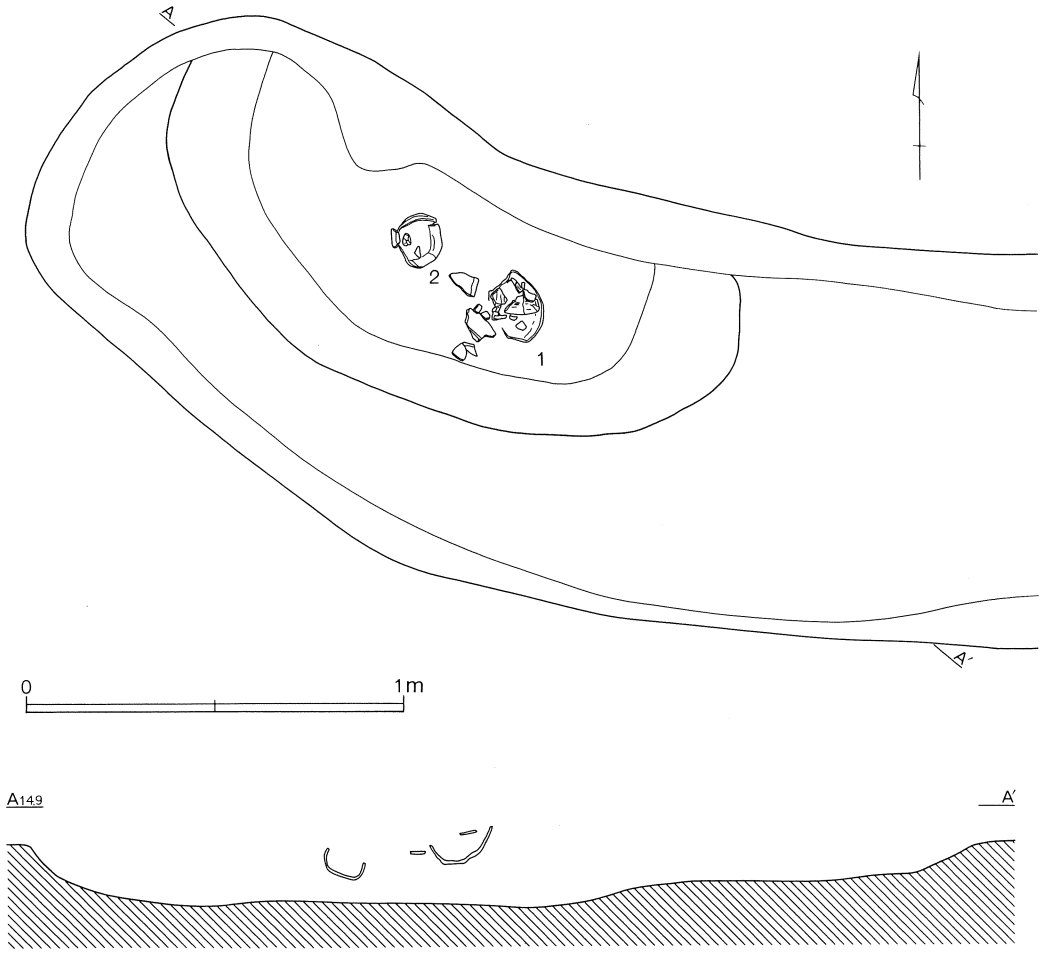
第54図　第20号墳跡





0　10cm

第55図　第20号墳跡出土遺物



第56図　第20号墳跡遺物出土状況

17号墳、18号墳の間に位置する。造営の順序はむしろ本墳の方が古い。墳丘の長径6.8m、短径6.0mやや楕円形の平面形を呈する。新屋敷遺跡A、B両区を通じて最も小さい。ブリッジは南西方向に向く。ブリッジの左右、特に左側の周溝は掘り込みが深く約30cmで、壁も直に近い。対してブリッジの反対側の周溝は掘り込みが浅い。さらにこのブリッジの左右周溝内には浅く掘られた窪みがある。遺構の確認段階からすでに周溝の覆土中に灰色の砂質土が分布していることが認められていたが、精査したところ周溝のほぼ全域に分布していることがわかった（第54図網かけ部分）。特に西側で厚く堆積し、面というよりは細長いブロック状に、あたかも吹きだまりのように堆積していた。厚いところでは約3cmを計る。この土は、分析の結果FAであることが確認された。

出土遺物には埴輪は全く認められず、出土したのは土器2点のみである。1、2ともにブリッジ右側の周溝内の窪みから出土。底面より9cmほど浮いた状態で検出されている。1は土師器の甕。胴部下半に黒斑あり。2は土師器の坏。身は深めで底部は薄く削られる。口径は丸みを持ちながら若干内傾する。稜線は直線ではないがシャープである。

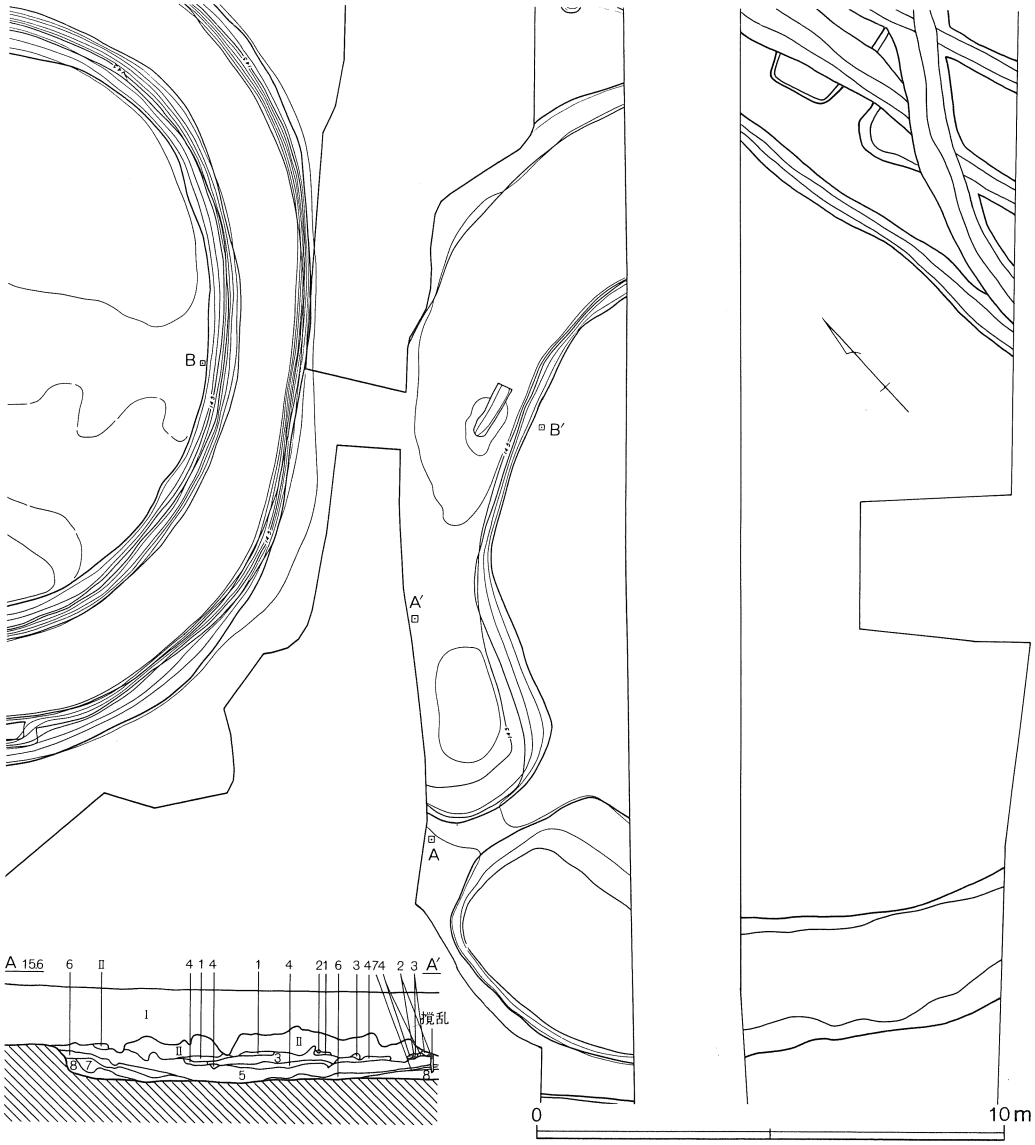
第21号墳跡

21号墳は、当事業団の調査区内では、ブリッジおよび周溝の一部が検出されただけである。しかし、鴻巣市教育委員会の1次調査において、隣接する道路部分の発掘調査を実施した際に、カーブを描く周溝らしき溝の一部が確認されていた。今回、両方の遺構実測図を合わせたところ、溝の幅、位置、方向が一致し、１基の古墳の存在が確かめられた。

墳丘の直径は推定復元をすると、およそ14.7ｍとなる。これは15、16号墳とほぼ同規模でＢ区の中では大きい方に入る。溝は深さ0.3ｍと浅く、市調査区の東側では、後世の溝と重複し、掘り方の確認は困難であった。それでも、17号墳を除く古墳の中では深いほうである。ブリッジの削り残しの幅は0.8ｍと狭いが、左側はローム土を貼り付けて拡張していた。周溝の底には赤茶けた鉄分が、面的に沈殿していた。鉄分の沈殿は、17号墳周溝底や、基準土層を調べた調査区の南コーナーの基準土層Ｃ-Ｃ′の、標高14.25ｍ付近でも観察されている。15、16号墳付近、ならびに基準土層Ｂ-Ｂ′では見られない。ところで、Ｂ区の標高は西から東へ約0.3ｍ低く、南北では差がない。ただし周溝底の標高は古墳毎に異なり、15号墳が14.5ｍ、16号墳が14.7～８ｍ、そして21号墳が14.3～４ｍである。したがって、地下水位が標高14.3ｍ付近にあったとすれば、21号墳だけに鉄分の沈殿があることは理解できようが、基準土層Ｂ-Ｂ′で鉄分が存在しない以上、これは調査区南コーナー区域の特種事情とせざるをえず、その解明については今後の調査に委ねるしかない。周溝の中ほどに41号土壙がある。前節で記したように周溝覆土が被っており、古墳時代以前、おそらくは縄文時代のＴピットと思われる。

遺物は円筒埴輪片が若干と、形象埴輪（女子、人物手、腕、馬）である。１は女子頭部。顔の正面は円盤を貼り付けたような正円である。頭部頂は斜めにカットされ、それを塞ぐように髷が貼り付く。髷は中央の屈曲が強く、直線的である。ハケメは消されずに残る。眉は長いが左右は別々で一本化されない。目は大きく切れ長。鼻も大きな三角形で、丸みはない。鼻孔が縦に２孔刻まれる。顎は若干尖る。耳穴の下に耳環の痕跡あり。首に玉飾りの表現がある。顔の輪郭や調整など細かい点では異なるものの、全体として17号墳の女子の作りと似ている。２は人物の右手。親指のみ現存するが、他の４本は一体表現であろう。手のひらに条痕がある。小沼耕地遺跡１号墳の遺物等に類例がある。３は中実の作りの腕。ソケット付近の状況から、腕は前方もしくは真下に向けていたと推定される。４は馬のたてがみ。色調は褐色を呈し、他の６点と異なる。両側面をていねいにナデてハケメを消す。５は馬の首の付け根である。粘土隆帯を貼った面繋の表現がある。２同様、小沼耕地遺跡１号墳の遺物に類例があり、それを参考に復元図を作成した。６は馬具の破片と思われるが不明。７は馬の脚であろう。直径12㎝で17号墳の馬の脚に近い。

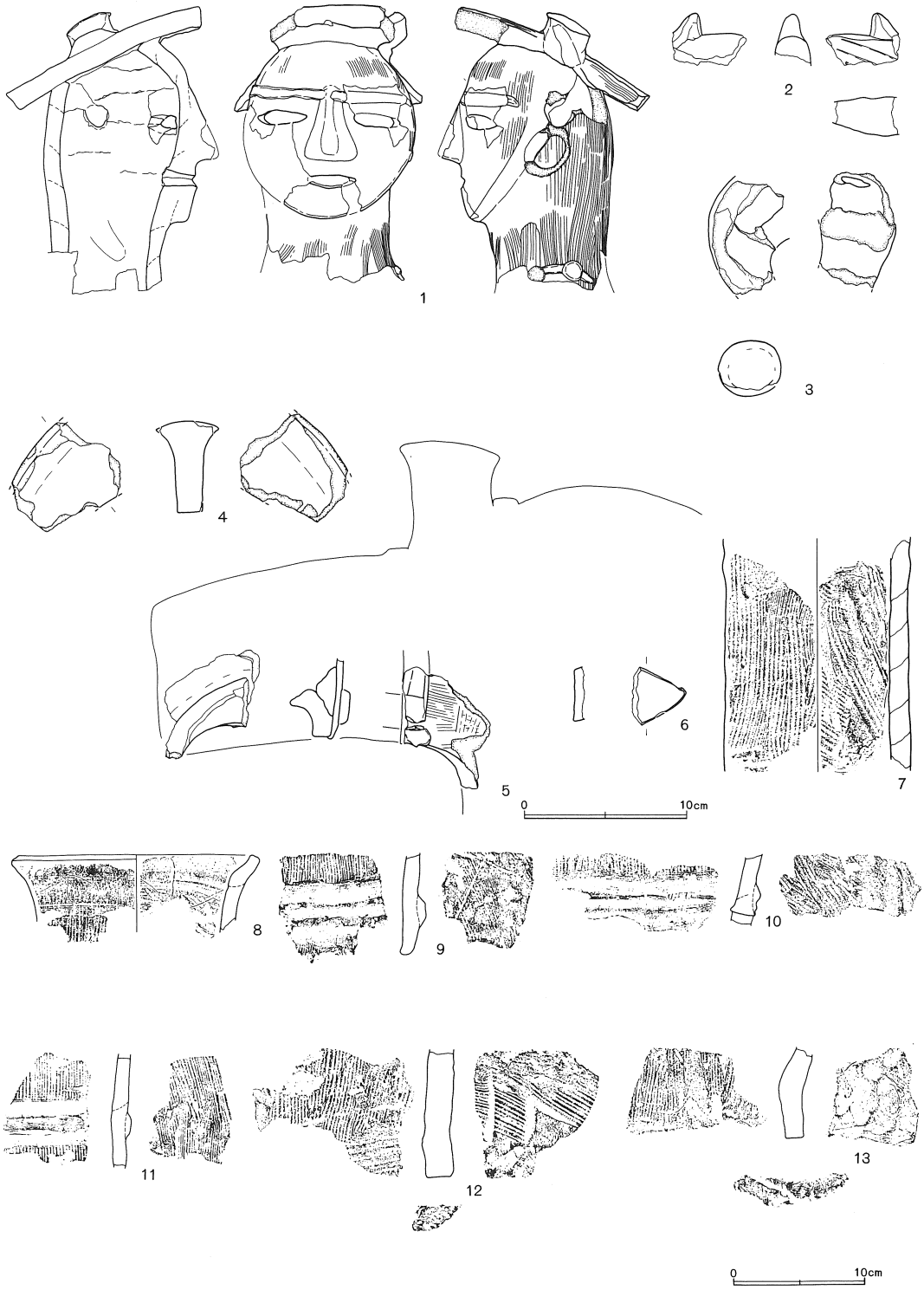
円筒埴輪は図示可能な物は少ない。８は口縁を強くヨコナデし、内面口唇付近が凹む。器表面は脆くなっている。９は内面に格子ヘラ記号がある。10は凸帯断面がＭ字。透かし穴が凸帯の下位のヨコナデを切り込んでいる。11の凸帯は低いが断面は比較的端正な台形を呈している。この資料のみ色調、焼成が異なる。12は底部。外面に、横方向に条痕が並び、叩き締めたような痕跡が観察できるが、積極的に、いわゆる底部調整と呼ぶには若干躊躇せざるをえない。底面は平に調整される。13も底部。内面ナデ調整。底面に粘土紐の接合痕が観察できる。



S S 21

Ⅰ 耕　作　土　灰褐色土
Ⅱ 耕　作　土　暗褐色土
1 黒 色 土 層　きめ細かい、しまりややあるが粘性は弱い。
2 灰 褐 色 土 層　火山灰と考えられる、浅間B軽石層。
3 赤 褐 色 土 層　ロームの酸化したものと考えられる、粘性あり、ややしまっている。
4 赤橙褐色土層　酸化鉄が上層に堆積する。
5 黒 色 土 層　炭化粒子・白色土粒を含み、ややしまっている、ローム粒子を含む。
6 灰 褐 色 土 層　黄白灰色のローム粒が混じる、ややしまっている、粘性あり。
7 赤 褐 色 土 層　酸化鉄の土壌で赤褐色を呈する、ローム粒子・白色粒子を混在（耕作土層の一部と考えられる）。
8 灰 白 色 土 層　砂質土層である。
9 黒 褐 色 土 層　ローム粒子（径0.2～1mm）及び砂粒子、ロームブロック（径1cm）を含む、しまりややもつ。
10 褐 灰 色 土 層　ローム粒子・ロームブロック（径0.5～1cm及び径3～5cm）を含む、しまりややもつ。
11 黄 褐 色 土 層　ロームブロック（径1～5cm）を主体とし黒褐色を混在、しまりもつ。
12 褐 色 土 層　きめ細かく、ややしまり弱い、ローム粒子を含む。
13 褐 灰 色 土 層　ローム粒子・粘土粒子を含み、しまり粘性もつ。
14 黄 褐 色 土 層　ローム粒子・ブロック（径0.5～1.0cm）を含む（撹乱）。
15 褐 色 土 層　きめ細かくサラサラしている、ローム粒子・ブロック（径0.5cm）を微量含む、S K 41の覆土。

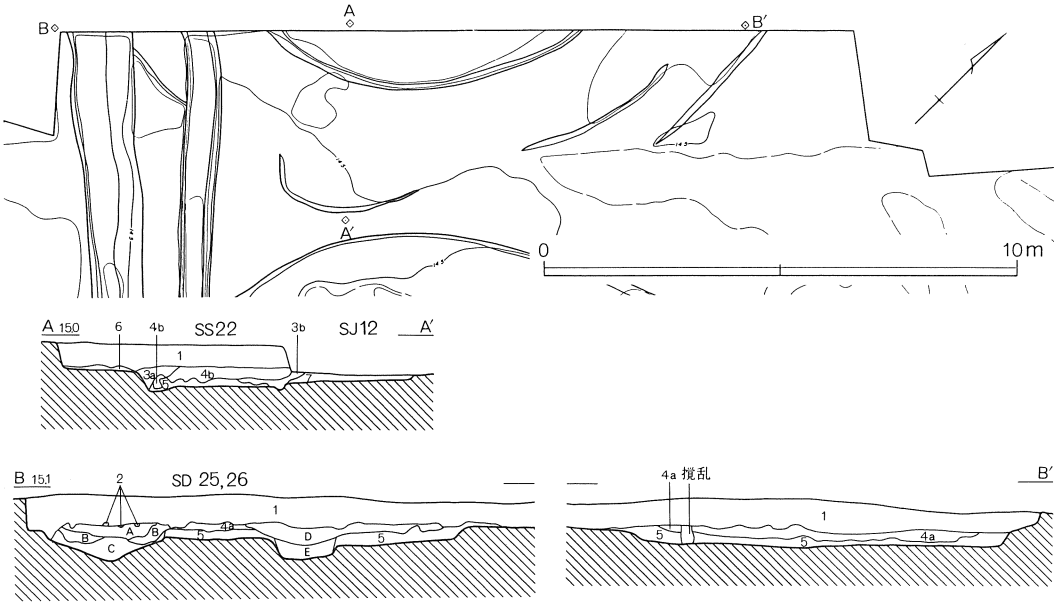
第57図　第21号墳跡



第58図　第21号墳跡出土遺物

第22号墳跡

古墳周溝の一部のみが検出された。東側は12号住居と重なり、周溝外側の上端は確認できなかったが、おそらく19号墳にきわめて接近していると思われる。北寄りのところでは周溝内にさらに溝の肩が3.6ｍほど認められたが、二重周溝のような施設とは考えがたい。墳丘側のラインは端正なカーブを示し、壁も直に立ち上がる。遺物は円筒埴輪片が若干出土しただけである。１は凸帯が工具で押し潰されている。２は凸帯の表面が剥離。３、４は粘土が充分乾ききらないうちに内面をナデている。



ＳＳ22

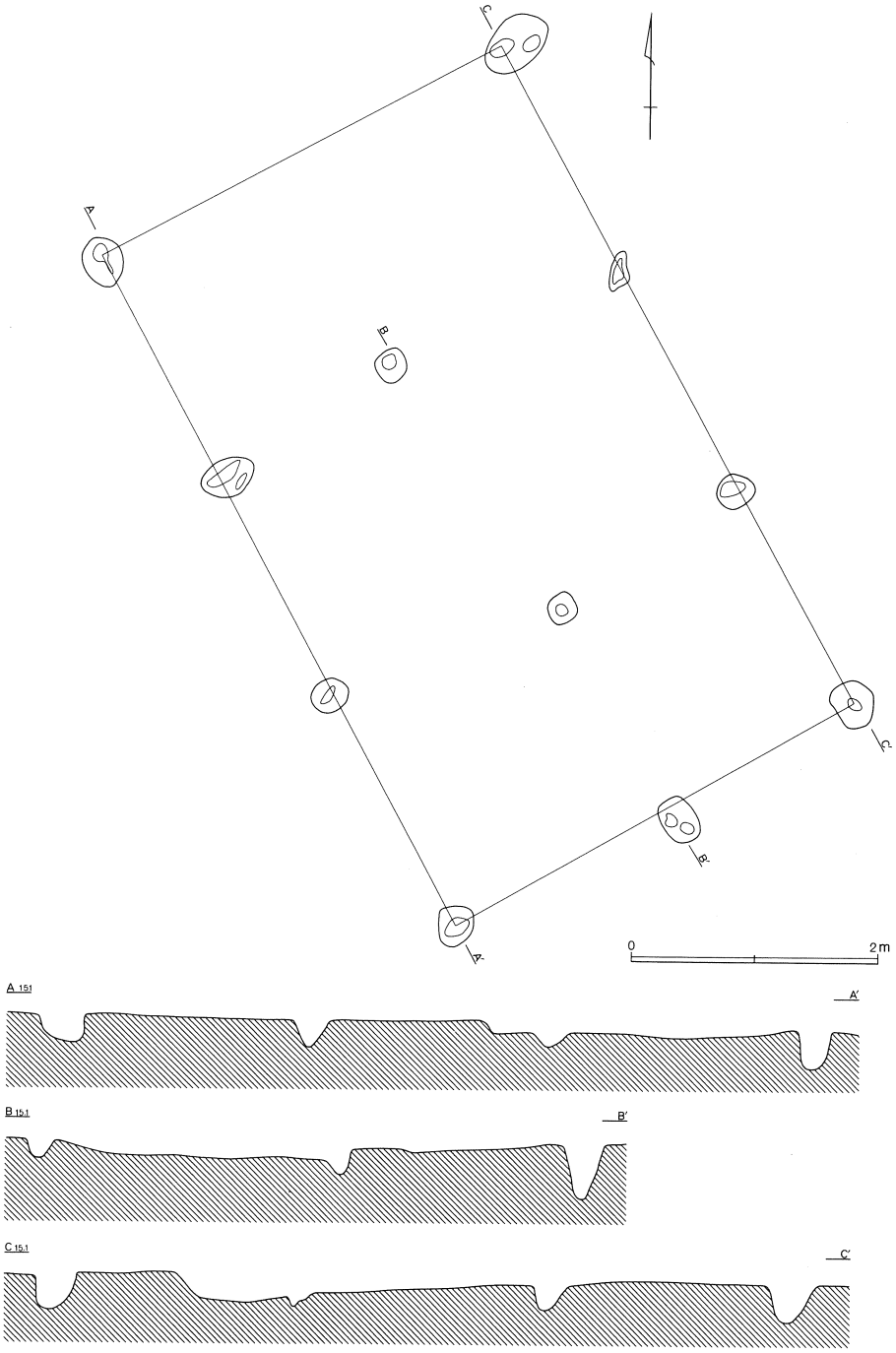
1　灰色がかった黒褐色土　やや砂質、微粒、堅い。
2　浅間Ｂ軽石層
3a　暗褐色土　ロームブロック２～８cm大、ローム粒多量に混じる、遺物多し(整地土か)。
3b　3aよりもローム少ない、黒色土もブロック状でない。自然堆積により近い(整地土か)。
4a　黒褐色土　3aに似るがロームブロック少なく、黒色土部分多い、やや軟質(整地土か)。
4b　黒褐色土層　黒色土斑、鉄分の堆積多し。
5　ローム崩土　ロームの二次堆積、黒色土が混在。
6　暗褐色土層　ローム粒が全体に混じる、比較的軟質、墳丘盛土の崩れ。
7　暗褐色土層　ロームブロック・粒を多く含む、鉄分あり、ＳＪ12の覆土。
A　黒色土層　ロームの混ざりなし、きわめて軟質、短期日の堆積、水性堆積か　25号溝
B　明黒色土層　ロームの混ざりなし、砂質、遺物少ない、短期日の堆積か　25号溝
C　黒色土層　A・B層に似る、ロームの混じりなし。　25号溝
D　褐色土層　ローム粒・炭化物粒を含む、浅間Ｂ軽石・天明パミスともに含まず。　26号溝
E　暗褐色土層　暗褐色土が混在、ローム粒含む、浅間Ｂ軽石・天明パミス共に含まず。　26号溝

第59図　第22号墳跡

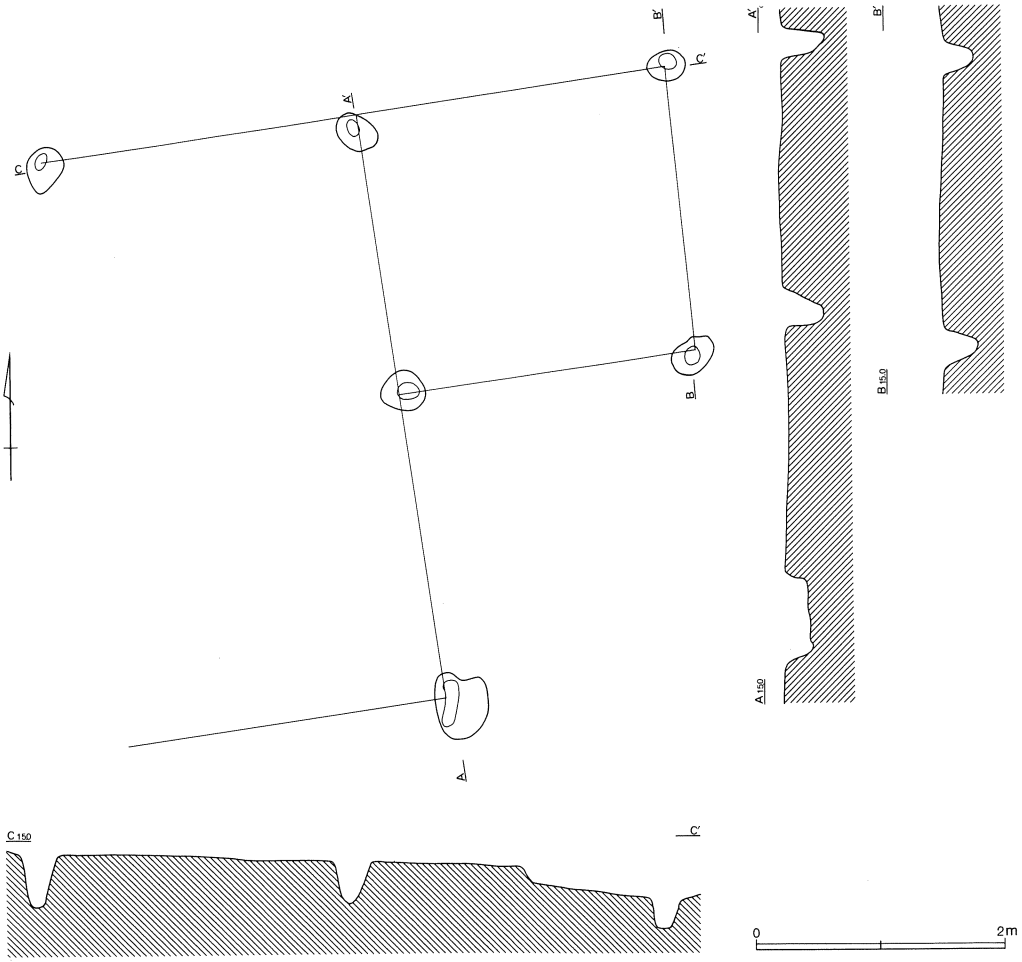
第60図　第22号墳跡出土遺物

3　鎌倉～室町時代の遺構と遺物

掘立柱建物跡



第61図　第２号掘立柱建物跡



第62図　第３号掘立柱建物跡

第２号掘立柱建物跡

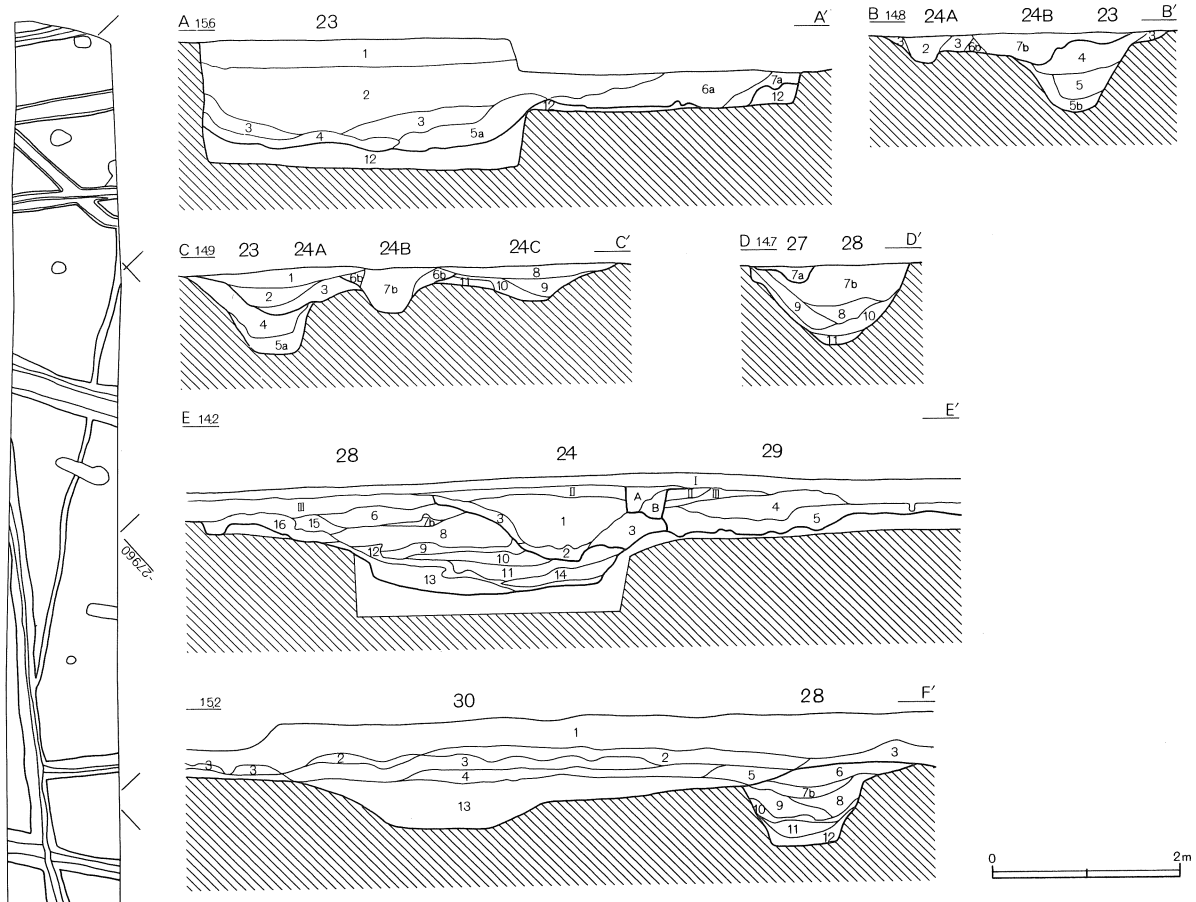
16号墳の周溝に重なって２×３間の建物跡が検出された。棟の長さは6.0m、妻の長さ3.7m。柱穴は形、掘り方とも端正ではなく、直径は0.3m前後で深さ約0.2～0.4mと一定していない。覆土は黒褐色で、近年の攪乱の覆土とは明らかに異なっていた。北西の妻側で棟を支えるべき柱穴が不明であるため、あるいは２×２間に妻側廂付きという変則的な建物か。

第３号掘立柱建物跡

15号墳の一部と重なって１間四方の付属屋を有する２間巾の建物跡が検出された。柱穴の掘り方は２号掘立柱建物よりは整っている。妻の長さは4.7m、付属屋は一辺が2.3～2.4mと一定でない。古墳のブリッジ付近にも数多くのピットがあるが、これらとの関係は把握できなかった。

この２棟は棟方向は異なるものの23号溝を挟むように建てられているので、ほぼ同時期に溝、建物は存在していたとみなしてよいだろう。

SD 29
SD30
SD 28
SD 27
SD 24
SD 26
SD 25
SD 31
SD 23
SD33
SD32
SD 37
SD 34
SD 35
SD 36
SD38
6960
6980
6940
6920
6900
0
20m



S D23

1　褐色土層　(耕作土層)
2　暗褐色土層　きめ粗雑、ローム粒・炭化粒子を混在。
3　暗褐色土層　2に比べやや茶褐色を呈し明るい、きめ粗雑。ローム粒・ブロック(1～2cm)・炭化粒子混在。
4　暗褐色土層　ローム粒・ブロック(径1～3cm)を多く含む。しまり、粘性ややもつ。
5a　褐色土層　ローム粒子・ブロック(1～3cm)をやや多く混在。粘性をもつ。
5b　褐色土層　5a層よりローム粒・ブロックが少ない。
6a　明褐色土層　ローム粒子・ブロック(1～3cm)を多く含む。粘性強い。
7a　褐色土層　4に比べローム粒子は不均質に混在するがかなり多い。ロームブロック(径1～3cm)を多く含む。
12　黒褐色土層　きめ細かく、ローム粒・炭化物粒を含む、粘性弱い。

S D24A

1　灰褐色土層　白色土粒子を含み、微量のローム粒を混在。
2　灰褐色土層　1層に似る、やや粘性あり。
3　暗灰褐色土層　1層に似る、ローム粒を多く含む。

S D24B

6b　黄褐色土層　ローム粒・ブロックを混在、しまっている。
7b　灰褐色土層　ローム粒・白色粒を含む。

S D24C

8　灰褐色土層　ローム粒・炭化物粒・微量の焼土粒を含む。
9　暗灰褐色土層　ローム粒・炭化物粒をやや多く含む。
10　灰褐色土層　ローム微粒を均一に含む。
11　黄褐色土層　ローム粒・ブロックを多く含む。

S D24

1　褐色土層　しまっている、きめ細かい、ローム粒・炭化物粒含む。
2　褐色土層　粘性あり、ローム粒を含む。
3　褐色土層　2層に似る、ロームブロックやや多い。

S D27

7a　褐色土層　ローム粒は不均一に混在するが多い。

S D28

6　黄褐色土層　ローム粒・ブロック(径2～5cm)を含む。
7b　黒褐色土層　粘性弱い、ローム粒を均一に含む。
8　黄褐色土層　ローム粒多い、ブロック(径1～3cm)を含む。
9　黄褐色土層　ローム粒・ブロック(径3～10cm)を含む。
10　黄褐色土層　きめ細かく、8層に似る、ロームは希少。
11　黄褐色土層　ハードロームブロック(径2～5cm)が主体。
12　黒褐色土層　きめ細かく、10層に似る、粒性あり。
13　黄褐色土層　ロームが主体、粒性強い。
14　黄褐色土層　ロームブロック・粒子多く含む、12層が混じる。
15　茶褐色土層　ローム粒を含む、粘性弱い。
16　茶褐色土層　15層よりもロームブロックが多い。

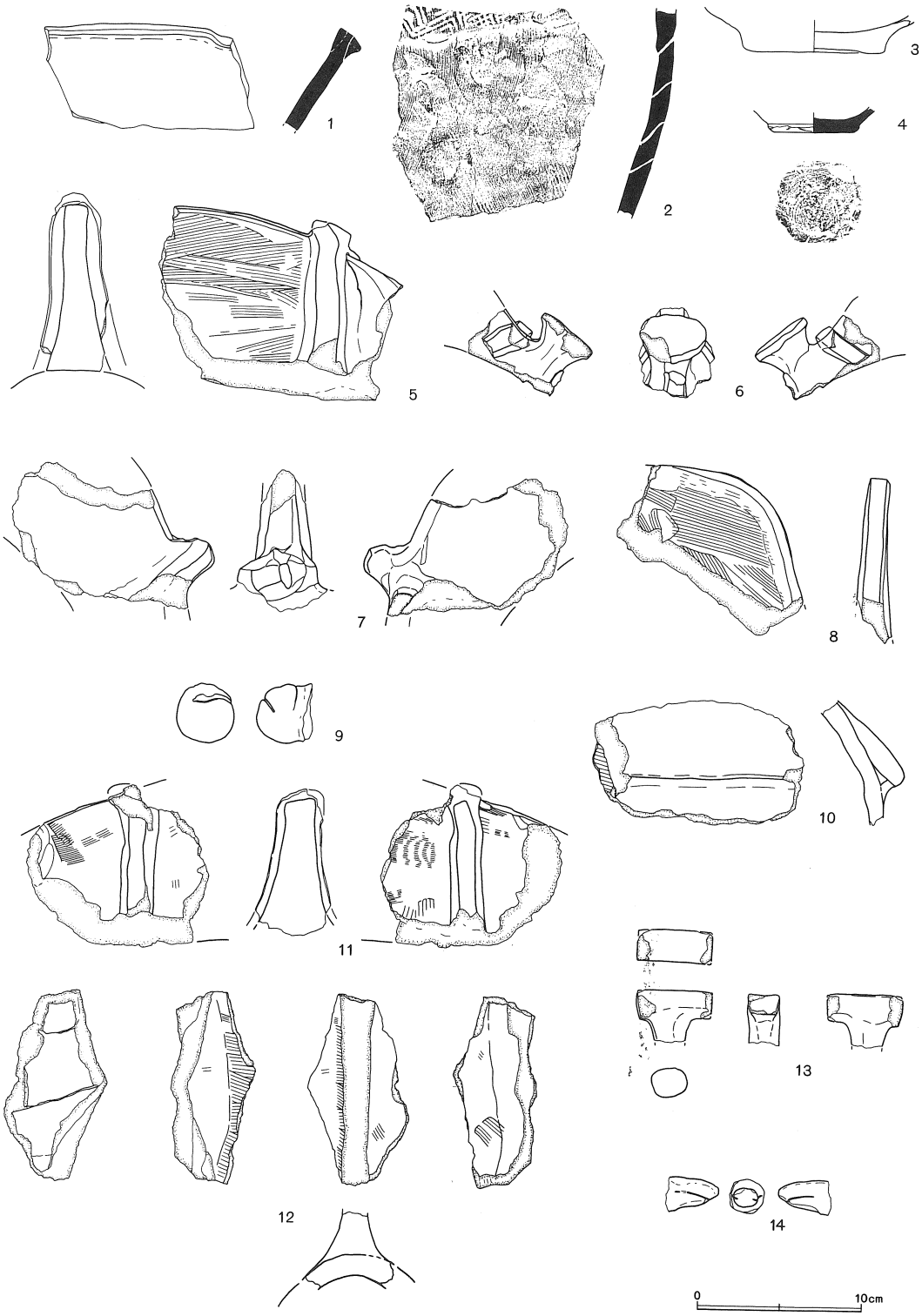
S D29

4　暗褐色土層　きめ細かく、しまっている、ローム粒を均一に含む。
5　暗褐色土層　ローム粒・ブロック(径3～10cm)を含む。

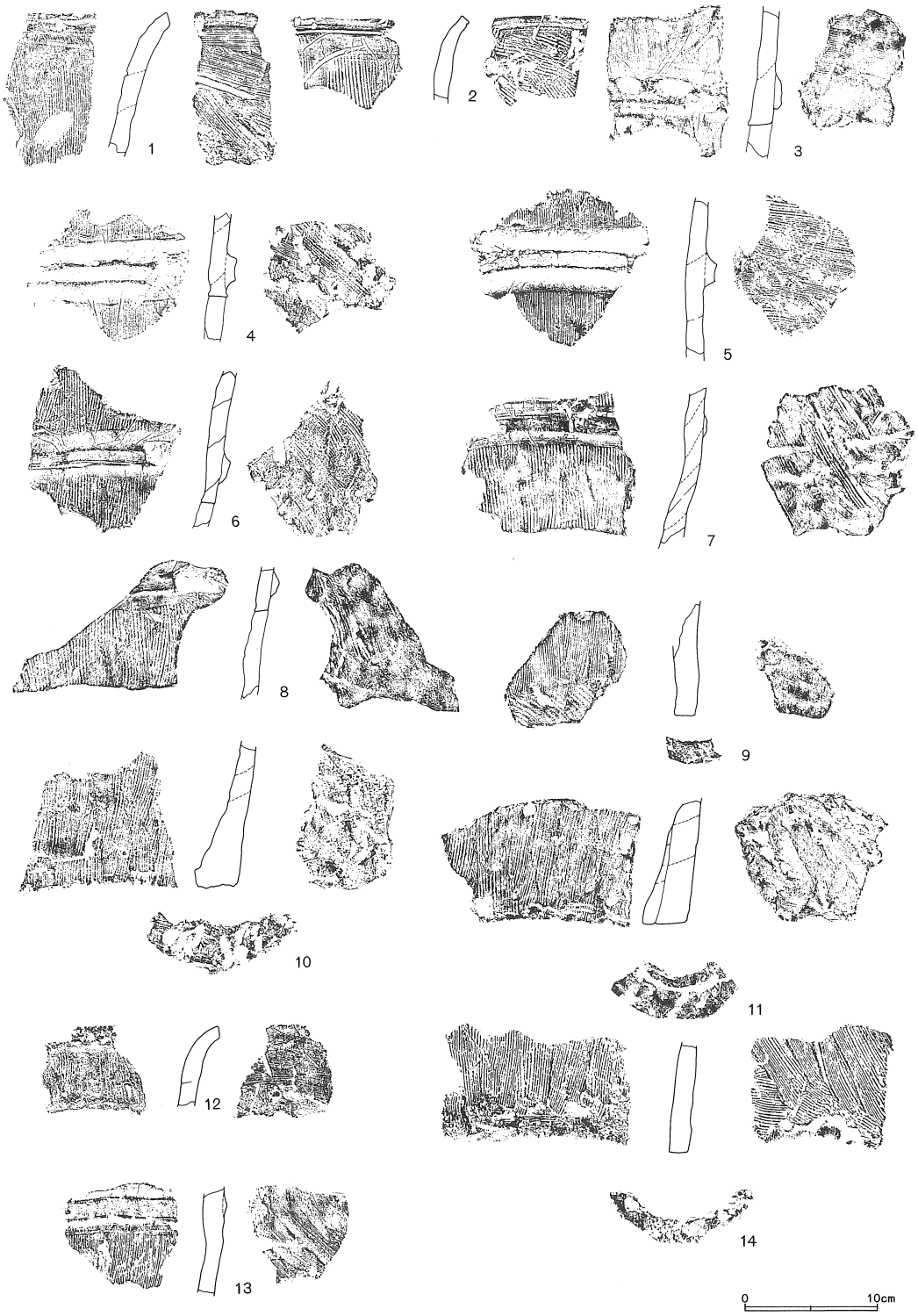
S D30

1　茶褐色土層　耕作土。
2　灰褐色土層　耕作土、きめ粗雑でザラザラしている。
3　暗灰褐色土層　2層を斑状に含む、ローム粒混在。
4　黄褐色土層　ローム粒・ブロック(径1～3cm)を多く含む、整地土か(墳丘盛土の崩れか)。
5　黄褐色土層　ローム粒・ブロック(径3～5cm)を含む。

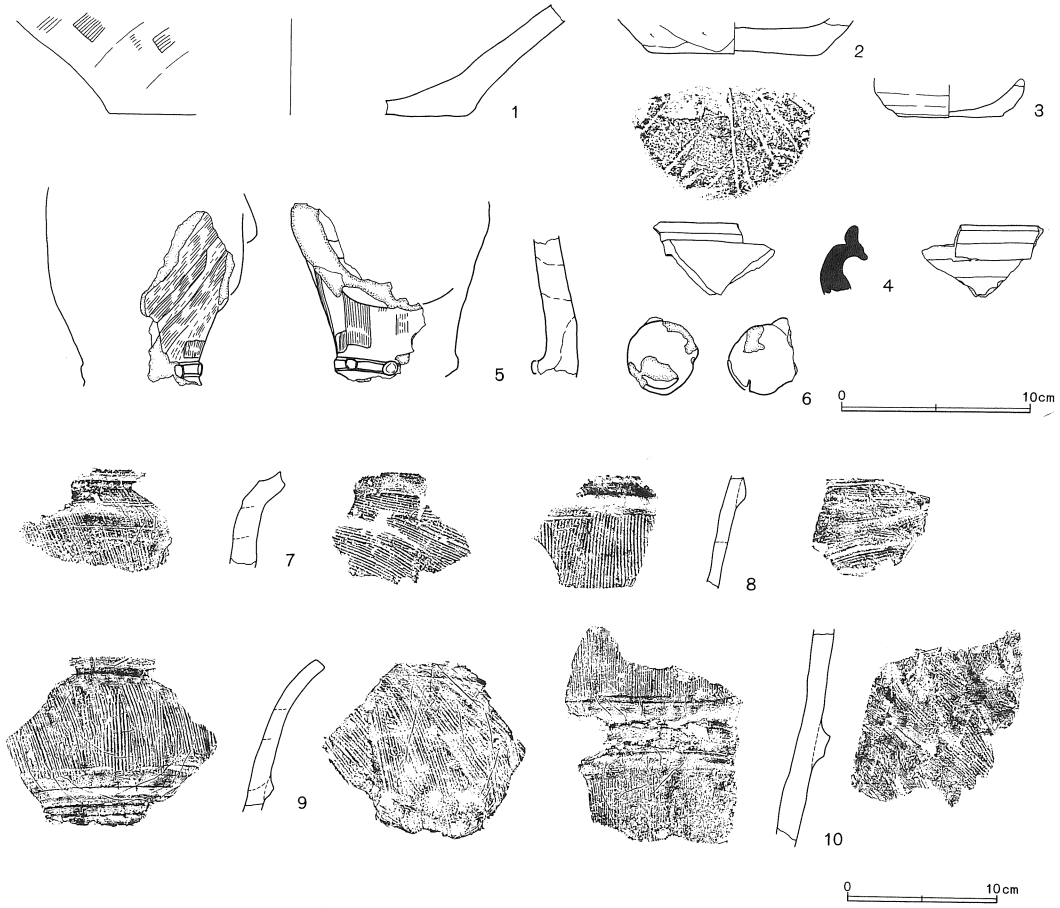
第63図　溝跡全体図



第64図　第23・24号溝跡出土遺物（1）



第65図　第23・24号溝跡出土遺物（2）



第66図　第25・26・28・34号溝跡出土遺物

溝跡

調査区を分割するような形で合計16本の溝が走っていることが確認された。いずれも覆土は黒褐色土を主体とし、断面の形も逆台形のものが多い。溝の方向によりいくつかのグループ分けが可能である。すなわち、23、25、26、28、31がほぼ同じ方向で、27、29が平行し、さらに24の一部と30とが並んでいる。また、切り合いもいくつかみられ、土層の断面観察からは次の3点の新旧関係が確認できた。①、23号溝は24号溝より古い。②、28号溝は24号溝よりも古い。③、28号溝は27、30号溝よりも古い。以上のことから何時期かにわたる溝の掘削があったことは確かである。

23号溝は15号墳南側の墳丘と周溝を切り、18号墳の北をかすめて19号墳との間で鍵形に曲がり、さらに18号墳の周溝を切っている。この18号墳のところでは周溝のカーブの影響により若干平面形が湾曲している。特にこの場所では馬などの形象埴輪片の出土が目についた。断面形はほぼ逆台形で、底面はフラットに近い。わずかではあるが東に向かって傾斜しており、溜まった雨水等は西から東へ流れたものと推定される。

第24号溝は基本的に3条の掘り方が確認された。部分的に分別できないところもあるが少なくとも３時期に及ぶ掘り直しがあったと思われる。19号墳の周溝にかかる部分では周溝の一部を利用し

ており、平面形も大きく湾曲する。19号墳のところで鍵形に分岐し、西端は23号溝のコーナーに接続し、途中に細長いバイパスの溝がある。断面形はほぼ逆台形で、北に向かって傾斜している。

25号・26号溝は平行して22号墳と19号墳の周溝を切って掘られている。25号溝は断面が浅い凹み状である。19号墳周溝内でプランが不明になる。26号溝は19号墳のブリッジを壊して、31号溝に合流する。断面形は箱形である。底面の高低差はほとんどないが、状況から判断して雨水等は31号墳に流れ込むと思われる。

27号溝はきわめて浅く、深さは約0.1m。溝中に丸杭が1本残存していたが遺構に伴うものかどうかは不明である。28号溝を斜めにきる。

28号溝は23号溝と同じく深さ1mを越えている。断面形も基本的には逆台形状を呈している。27号溝付近では壁が一部オーバーハングしているが、ある時期に崩落したものかもしれない。

29号溝は調査区壁すなわち北側の道路とほぼ平行して走るが、土層断面観察では農事試験場時代の溝と思われる攪乱（第63図E-E′面のA・B層）により切られているので、近年の遺構とはみなしがたい。

30号溝は28号溝を切る。調査区内で確認できたのは16m足らずであるが、鴻巣市教育委員会の調査区においては38m程の続き部分が検出されている。

31号溝は23号墳の北側半分の周溝内を、まるで墳丘を迂回するかのように掘られている。断面は箱型で幅は1mに満たない。理由は不明だが23号墳のブリッジから掘られ始め、最終的には古墳の外で屈曲し23号溝にぶつかる。23号溝が31号溝の付け替えなのか、あるいは23号溝に31号溝が合流するのかは判断に苦しむ。しかし、31号溝は明らかに墳丘を意識しているのに対し、23号溝はあたかも墳丘という障害物がなきがごとくに掘られている。したがって、ここでは31号溝の方をより古い時期の溝と把握しておきたい。

32号溝は15号墳内で検出された4号井戸に接続すると考えられる溝である。溝の断面形はU字状を呈し、深さ0.15m前後ときわめて浅い。古墳の周溝と切り合っており、覆土も顕著な相違が認められず、さらには31号溝とも重なっているため、井戸との関係は今一つ摑みがたい。

33、34、35、36、37、38号溝はいずれも幅0.8m前後で断面形は箱型を呈し、深さは0.15mと浅い。覆土は黒色土で古墳の覆土とは異なるが、他の溝とは大きな相違はない。多くが何ケ所かで分断されている。34号と38号溝は同一の溝かもしれない。いずれにしても23～32号溝とは時期が異なるものと推定される。

出土遺物は大半の溝で差異はない。古墳からの流れ込みと考えられる埴輪片と鎌倉および室町時代の陶磁器片が中心である。出土量は全体に少なく、溝すべての遺物をまとめても整理箱で2箱分程度である。

23号溝の出土遺物（第64図1～10　第65図1～11）

1は口縁に片口の様な作りのある鉢である。釉薬はかけられていない焼き締めの陶器である。外面はケズリ。内面は平滑で擂り目は施されない。器表面に若干ガラス質の浮きだしが見られる。2は軟質焼成の陶器である。外面にはハケメ調整。胴部接合部分の外面に格子、直線からなる押印らしき叩きの痕跡がある。3は土師器の甕か壺の底部。作りはあまりていねいではない。底部外面はわ

ずかに凹む。4は須恵器の坏の底部。回転糸切り痕の上に棒状の工具の傷が見られる。5は馬のたてがみである。鞍の前輪に接する。6はたてがみと結束されたまえがみ部分である。15号墳の例とは異なり角状の部分と板状の部分とが一体の作りになっている。7もたてがみ部分で5と同様に前輪に接続すると推定される。5とは異なり、両面ともハケメをていねいにナデ消している。8は鞍の覆輪。割れ口の幅は1.5㎝。9は鈴の剝落。スリットは狭い。10は復元すると径が40～50㎝の大型の形象埴輪であるが、何であるのかは不明。外表面はていねいにハケメを消す。円筒埴輪では、1～3にヘラ記号が残る。1のヘラ記号は内面で幅0.5㎝、深さ0.3㎝、断面が三角形である。格子を表すか。2.3は外面につけられ、おそらく×印だろう。1の内面口唇付近は凹む。2は同じく内面口唇付近に凹線がある。3は凸帯がだれている。4、5の凸帯は断面M字だが突出は高い。この二つはハケメが細かくかつ全体にていねいな作りである。7は外面に黒斑がある。8は凸帯がだれ気味で、透かし穴は縦に長い。9は外面下端に板目の圧痕があり、いわゆる底部調整である。10は底面に棒状の工具痕がある。11は粘土紐巻き上げの状況がよくわかる破片。

24号溝の出土遺物（第64図11～14、第65図12～14）

11は馬のたてがみ。肉厚で、剝離底面の幅は3.5㎝。12は楯と思われる。粘土紐を巻き上げた筒状の本体に翼状の粘土板を貼り付けている。13は何かの把の一部か。柄と思われる断面は円形、端部は長方形である。14は形状不明。円錐の先を平にカットし、その両側に切り込みを入れる。猪などの動物ミニチュアの鼻づらか。円筒埴輪では12の内面口唇付近が凹む。13は凸帯がきわめて低い。14は底部端外面に、不明瞭ながら工具による叩き締めが観察できる。底部調整と捉えておきたい。底面は荒れている。

25号溝の出土遺物（第66図1～3、5、7、8）

1は陶器の浅鉢。外面にハケメあり、内面には擂り目などはない。底が薄い。2は土師器甕の底部か。木葉痕がある。外面を荒く削っている。3はいわゆる“かわらけ”に属すると思われる土師器の小皿。磨耗しているため、底部の切り離しは不明。5は人物埴輪の首。粘土は厚い。首に玉飾りを表現している。ハケメがよく残っている。焼成、色調などは17、21号墳例に似ている。下げみづらがないので、女子であろう。7は器壁が厚い。17号墳例に通じる。口唇および内面口唇付近が凹む。8は凸帯は低いが断面は台形。15号墳的な作りである。

26号溝（第66図9）28号溝（第66図4、6）34号溝（第66図10）の出土遺物

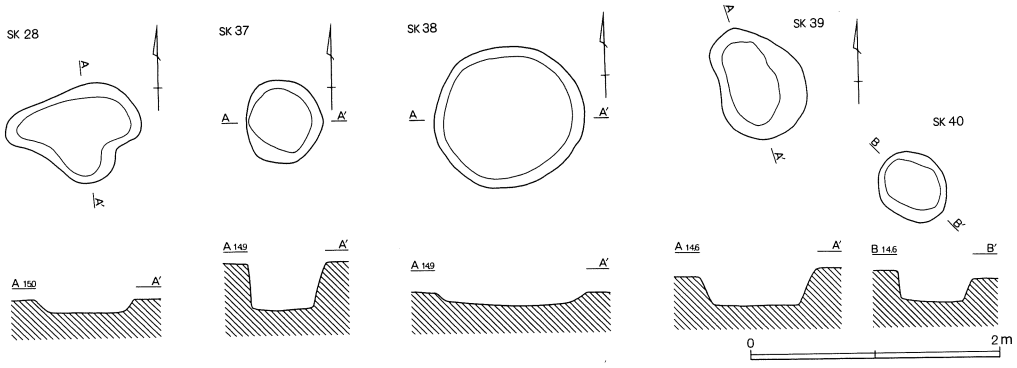
出土遺物は少なく、図示できたのは数点だけである。9は口縁が緩やかに外反する。凸帯は低いがていねいな作りである。外面のハケメは縦に二重に重なっているように観察できるが、凸帯貼り付け後のいわゆる二次タテハケとするには疑問が残る。4は陶器の甕の口縁である。口縁は力強く立ち上がる。常滑産。6は馬形埴輪の鈴である。スリットは浅く短い。10は凸帯の幅が広く断面形M字で比較的端正。ハケメは細かい。

以上の出土遺物から、溝の年代を決めるのは難しいが、少なくとも近世陶磁器の混入は認められないことから、中世に置くことは妥当と思われる。25、28号溝から出土している陶磁器や後述する表採陶磁器から、おおよそ13世紀末～14、15世紀初めごろという年代を与えておきたい。

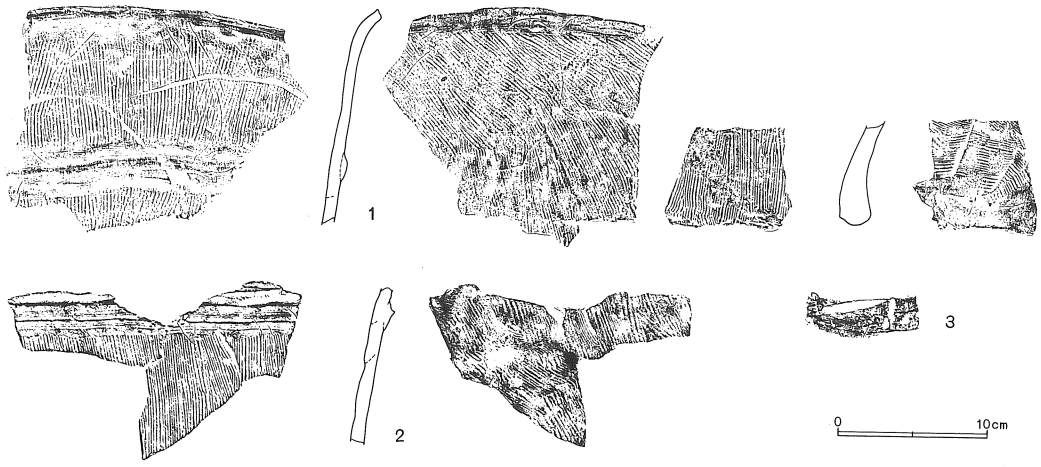
土壙

調査区内において不整形の土壙が5基検出された。覆土は溝等の覆土に似る。小さいもので直径0.6m、大きいもので1.2mを測る。深さは0.1～0.3m。1基を除き遺物はない。

28号土壙は不整形な楕円形で2号掘立柱建物の北で検出された。遺物は埴輪片が数点出土。1は他の例と比べるときわめて器肉が薄い。外面横方向にヘラ記号がある。15号墳などの×印のものとはタッチが微妙に異なる。凸帯は丸みを帯び、断面台形からはほど遠い。2と3は色調、焼成、ハケメなどが同じであり、同一固体である。2の凸帯は断面が三角形を呈し、低い。3は底部下端が外側に強く張る。内面は断続するヨコハケ調整。底面に棒状の工具痕あり。調査時には28号土壙は埴輪棺を埋設した墓壙かとも考えたが、今一つ決め手を欠く。37号土壙は15号墳と16号墳の中間で検出された。深さ0.3mとやや深い。38号土壙は17号墳と20号墳の間にある。整った円形である。覆土はしまりが弱く、あるいは近現代の攪乱かも知れない。39号、40号は18号墳の周溝内、23号溝の肩に並ぶ。壁が直立し、深さ0.2m前後。並んではいるが、両者の関係や性格は不明。



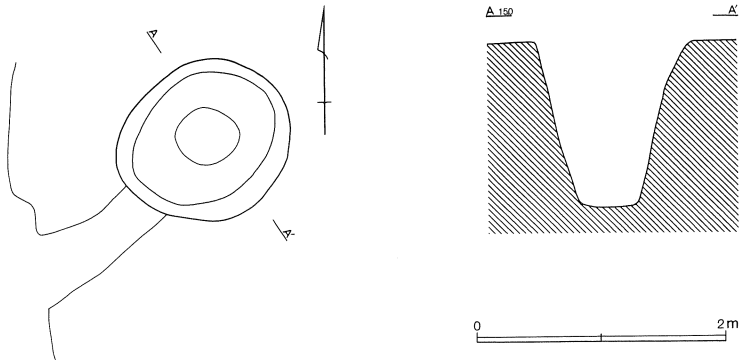
第67図　土壙



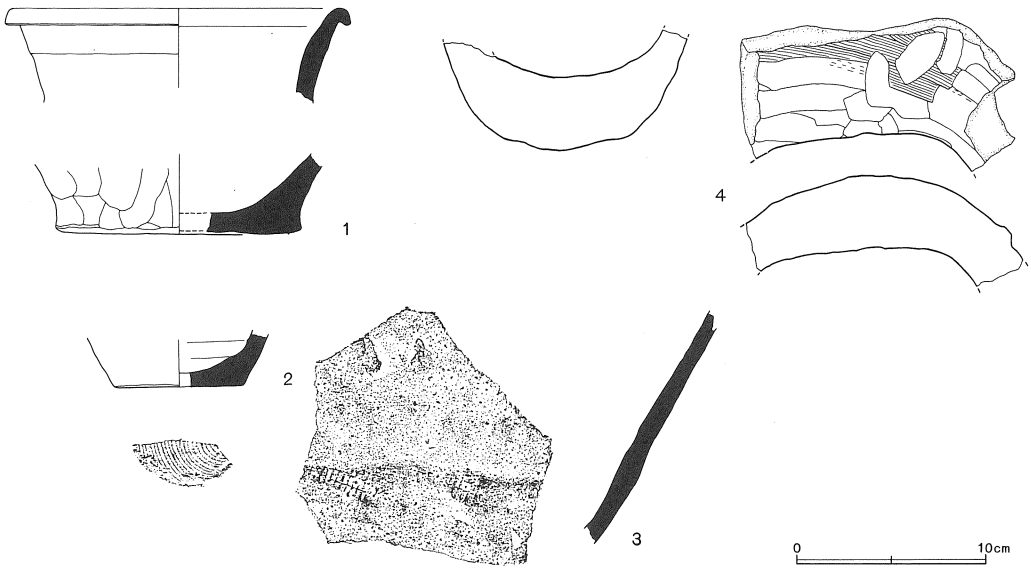
第68図　第28号土壙出土遺物

第４号井戸跡

15号墳のブリッジ左側で墳丘を掘り込んだ井戸跡が検出された。平面は東西に若干長い楕円形。直径は上端1.2ｍ、底面で0.5ｍである。深さ約1.3ｍと浅い。素掘りの井戸で、桝囲い等の装置はない。調査時にも底面から水が湧いてきた。南西の部分から幅約0.4ｍの浅い溝が接続するが、井戸との関係では、覆土も変わらず切り合いは確認できなかった。この溝は大きさ、方向が同じであることから32号溝につながる溝と推定される。井戸の中ほどから遺物が若干出土している。１は陶器の口縁と底部だが、同一固体。折り返し口縁で、外面はざらつく。内面は平滑。底部外面は雑なナデ。２は須恵器の瓶状の容器底部。回転糸切り離し。３は陶器甕の胴部破片。格子状の叩き痕がある。４は厚いが、動物埴輪の腹部であろう。胎土、色調、厚さ等で15号墳の例とは異質である。



第69図　第４号井戸跡

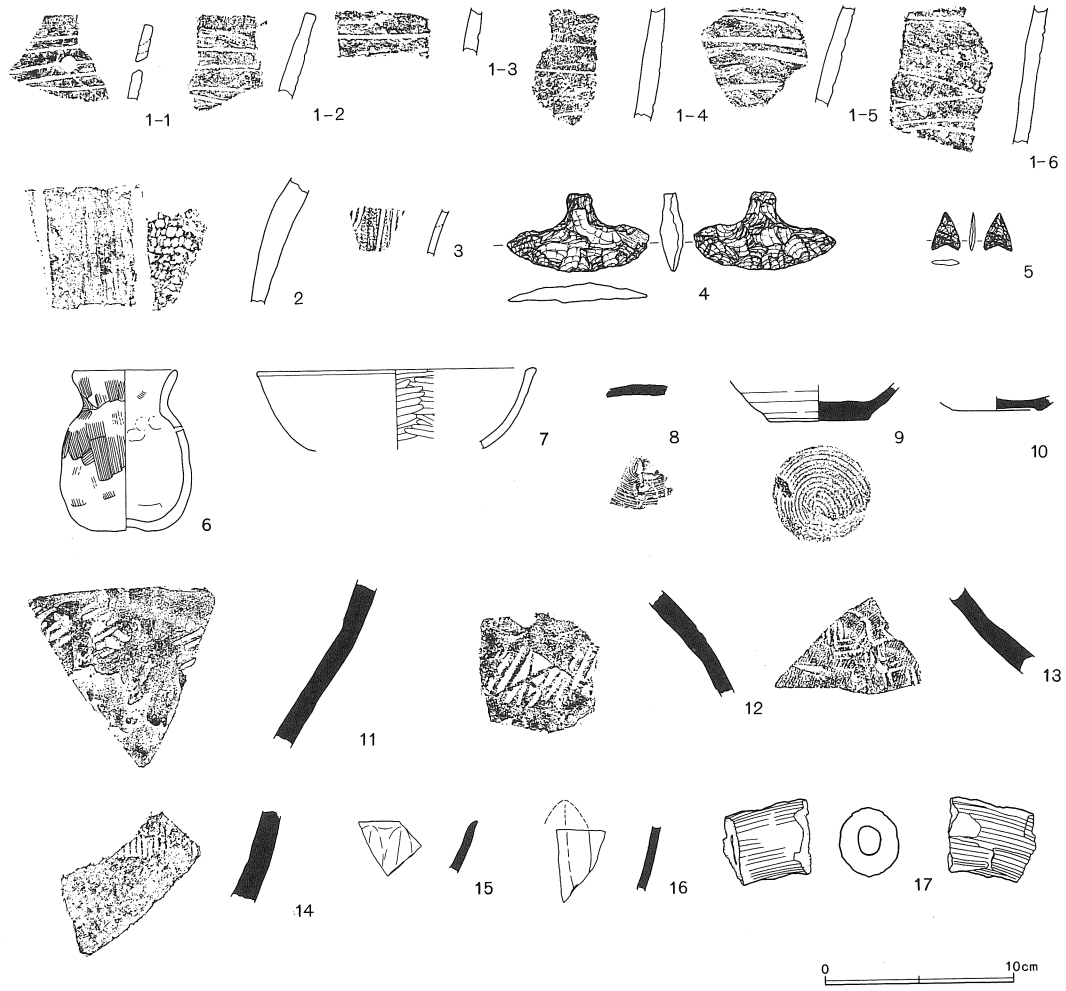


第70図　第４号井戸跡出土遺物

グリッド出土および表採

遺構から出土する遺物は、必ずしも遺構の属する時代と同一であるとは限らない。明らかに時代の異なる遺物で、前節までにおいて取り上げなかったものと表採遺物について以下に報告する。

1は縄文時代早期の土器。1-1は19号墳近辺、1-2～6は15号墳近辺より出土した。2は縄文時代中期の土器。21号墳近辺より出土。3は縄文時代後期の土器、器壁が薄い。19号墳近辺より出土。4はチャート製の石匙、16号墳近辺の遺構確認面で採集した。5はチャート製の石鏃、W－32区から出土。6はハケメ調整がある古墳時代前期のミニチュア土器。15号墳から出土。7は平安時代の内黒土器。15号墳周溝から出土。8、9は平安時代の須恵器坏の底部、白色針状物質を含む。いずれも17号墳周溝出土。10～14は中世陶器。10は削りだし高台の陶器、21号墳周溝より出土。11～13は15号墳周溝より出土。14は21号墳周溝より出土。4片とも押印がある。15、16は青磁蓮弁文碗片で、蓮弁は鎬蓮弁。ともに表採。17は人物埴輪の腕。中空で15号墳的な作りである。表採。



第71図　グリッド出土および表採

第１表　土器観察表

遺構名	番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色調	焼成
12号住居	1	土師器	不明				長石　微砂粒　黒色輝石	明褐色	良
15号墳	1	土師器	坏	13.1	5.3		赤色土粒	暗赤褐色	良
15号墳	2	土師器	坏	12	5.8		白色微砂粒　赤色土粒	褐色	良
15号墳	3	土師器	坏	11	5.1		白色鉱物　赤色土粒　石英	明褐色	良
15号墳	4	土師器	坏	12.5	5.3		石英	褐色	良
15号墳	5	土師器	甕	16.9			長石　石英　白色砂粒	赤褐色	軟
15号墳	6	土師器	壺か甕			5.4	長石　石英　赤色スコリア	褐色	やや軟
15号墳	7	須恵器	坏	9.7	3.5		黒色の斑状物質　長石	灰色	良
15号墳	8	須恵器	大甕	(21)	(46.7)		長石微粒	灰色	堅緻
16号墳	1	土師器	坏	13			赤色スコリア　石英　長石	褐色	やや軟
16号墳	2	土師器	壺か甕			12.7	石英　雲母　砂粒多く含む	暗褐色	悪い
17号墳	1	土師器	甕	12.4	17.9	6.5	長石　赤色スコリア　砂粒	褐色	良
17号墳	2	土師器	坏	12.6	4.6		長石　砂粒	褐色	良
17号墳	3	土師器	坏	13	4.5		砂粒　石英	褐色	良
17号墳	4	土師器	坏	11.6			針状物質　長石	暗褐色	良
18号墳	1	土師器	坏	(13.2)			微砂粒	褐色	良
19号墳	1	土師器	坏	(14.3)			微砂粒	淡褐色	やや軟
19号墳	2	土師器	甕			8	長石　赤色スコリア　砂粒	淡褐色	やや軟
20号墳	1	土師器	甕	18.6			石英　砂粒	淡褐色	やや軟
20号墳	1	土師器	甕			7.5	長石　石英　砂粒	黄褐色	やや軟
20号墳	2	土師器	坏	11.3	6.2		長石　赤色スコリア　砂粒	褐色	良
23号溝	1	軟質陶器	鍋か				長石　砂粒	暗茶褐色	堅緻
23号溝	2	陶器					砂粒若干	灰色	良
23号溝	3	土師器	甕か				赤色スコリア　砂粒	褐色	良
23号溝	4	須恵器	坏				混入物ほとんどなし	灰色	良
25号溝	1	軟質陶器	甕か			(19.2)	堅緻な胎質、混入物少ない	暗赤褐色	やや軟
25号溝	2	土師器	甕			9	砂粒多し　長石	明褐色	やや軟
25号溝	3	土師器	坏			5.6	赤色スコリア多し	明褐色	軟
28号溝	4	陶器	甕				白色砂粒	茶褐色	堅緻
４号井戸	1	陶器		18.5		13.2	長石	灰黒色	良
４号井戸	2	須恵器	瓶			7	きわめて堅緻　密	灰色	良
４号井戸	3	陶器					長石　黒色鉱物粒	灰黒色	良
表採	1-1～6	縄分土器	深鉢				長石　石英含む	明褐色	良
表採	2	縄文土器	深鉢				黒色輝石　微砂粒	褐色	良
表採	3	縄文土器	深鉢				赤色スコリア	褐色	良
表採	6	手捏ね土器		5.6	8.6		白色針状物質	明褐色	やや軟
表採	7	内黒土器	碗	(15)			石英　長石	褐色	やや軟

備　　考	挿図番号	番号
内面ヘラナデ　外面　丁寧なヘラミガキ	第８図	1
内部底面をヘラで調整　口唇は凹む	第12図	1
口唇　外側にふくらみを持つ　口縁と身の境の陵線はシャープに削り出される	第12図	2
口唇がフラットに削られる	第12図	3
口唇などシャープな作り	第12図	4
器表面が荒れているため砂粒が目立つ	第12図	5
胴部下位から上へ器壁両面を粘土で補強	第12図	6
胎土に砂粒が目立つ　東海産だろうが湖西ではない　口径が小さい	第12図	7
内面は細かな青海波の当て具痕跡をナデ消す　外面は木目と直交する溝を刻んだ叩き板で全面を叩く　部分的に横方向に工具によるナデ　器壁が極めて薄い　東海産か	第12図	8
口唇はフラット　口縁部は若干外反する	第37図	1
器表面が激しく摩滅している	第37図	2
外面・内面ともに比較的丁寧なナデ・ヘラナデ　残存率45％	第41図	1
口唇がフラット、陵線がシャープ	第41図	2
口唇はフラット　口縁は若干外反する　陵線はシャープ　ケズリによる砂粒移動が顕著	第41図	3
内面と口縁部外面に赤彩	第41図	4
口唇がフラット　外面、陵線がシャープ　残存率10％以下	第50図	1
口縁は外傾する　口唇はフラットではない　残存率10％	第52図	1
内面　ヘラナデ　外面も荒いヘラナデ	第52図	2
口唇付近は丸みを帯びる	第55図	1
胴部下半に黒斑　器表面は内外面ともに荒く成形時の凸凹残る	第55図	1
口縁は直立に近い　口唇は丸みをおびる	第55図	2
常滑産か	第64図	1
外面に細かいハケメ調整と叩き目あり　内面はあれている	第64図	2
若干底部が凹む	第64図	3
回転糸切り離し　底部周辺は工具痕が目立つ	第64図	4
外面はハケメ状工具による調整後、ナデ消す	第66図	1
底部に木葉痕　体部外面は荒いケズリ	第66図	2
極端に底部が薄い　口縁が直立　底部糸切り？	第66図	3
口縁は強く張り出し、直立する　常滑産	第66図	4
器表面が焼成時不良により泡立っている	第70図	1
回転糸切り	第70図	2
格子文押印　常滑産	第70図	3
田戸下層式土器　非常に堅い焼成　沈線文ならびに貝殻腹縁文　口唇はフラット	第71図	1-1～6
加曽利ＥⅢ式土器　縄文は復節ＲＬＲ　内面を丁寧にみがく	第71図	2
堀の内Ⅱ式か　縄文は単節ＬＲ　器壁は薄い	第71図	3
外面はハケメ調整を一部ナデ消す　内面は丁寧にナデ	第71図	6
内面は黒色処理	第71図	7

遺構名	番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色調	焼成
表採	8	須恵器	坏				白色針状物質	灰色	良
表採	9	須恵器	坏			5.5	白色針状物質　白色微砂粒	灰色	良
表採	10	陶器					白色土粒	黄灰色	やや軟
表採	11	陶器	甕胴部				均質、混入物ほとんどなし	灰色	良
表採	12	陶器	甕肩部				均質、混入物ほとんどなし	灰色	良
表採	13	陶器	甕肩部				均質、混入物ほとんどなし	灰色	軟
表採	14	陶器					白色鉱物粒	灰色	良
表採	15	青磁	碗				緻密な磁胎	青緑色	良
表採	16	青磁	碗				均質な磁胎	暗黄緑色	良

第２表　　円筒埴輪観察表

遺構名	番号	胎　　土	色調	焼成	外面調整　本/２㎝	内面調整　本/２㎝
15号墳	1	赤色スコリア　砂粒　長石	褐色	良	タテハケ　８本	ナナメハケ　８本　ナデ
15号墳	2	赤色スコリア　砂粒　長石	褐色	良	タテハケ　７本	ナナメハケ　９本　ナデ
15号墳	3	赤色スコリア	褐色	良	タテハケ　８本	ナナメハケ　８本
15号墳	4	赤色スコリア　長石	褐色	良	タテハケ　９本	ナナメハケ　９本
15号墳	5	赤色スコリア　砂粒	淡褐色	良	タテハケ　9本　ナデ	ナナメハケ　９本　ナデ
15号墳	6	赤色スコリア	暗褐色	良	タテハケ　11本	ヨコ・ナナメハケ　13本
15号墳	7	赤色スコリア	褐色	良	タテハケ　13本	ヨコ・ナナメハケ　11本
15号墳	8	赤色スコリア　長石	暗褐色	良	タテハケ　11本	ヨコ・ナナメハケ　11本
15号墳	9	赤色スコリア　長石	暗褐色	良	タテハケ　７本	ナナメハケ　９本
15号墳	10	赤色スコリア　砂粒　長石	褐色	良	タテハケ　９本	ナナメハケ　８本
15号墳	11	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　９本	ナナメハケ　10本
15号墳	12	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　８本	ナナメハケ　10本
15号墳	13	砂粒　赤色スコリア	暗褐色	良	タテハケ　９本	ナナメハケ　９本
15号墳	14	砂粒　赤色スコリア	褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　11本
15号墳	15	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　８本	ナナメハケ　９本
15号墳	16	砂粒　黒色輝石	褐色	良	タテハケ　９本	ナナメハケ　10本
15号墳	17	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　12本	ナナメハケ　14本　ナデ
15号墳	18	赤色スコリア　砂粒　黒色輝石	褐色	良	タテハケ　９本	ナナメハケ　12本
15号墳	19	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　９本	ナナメハケ　９本
15号墳	20	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　11本	ナナメハケ　11本
15号墳	21	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　８本	ナナメハケ後ナデ
15号墳	22	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　８本	ナナメハケ　９本　ナデ
15号墳	23	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　本数不明	ナナメハケ　本数不明
15号墳	24	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　12本	ナナメハケ　13本　ナデ
15号墳	25	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　13本	ナナメハケ　12本　ナデ
15号墳	26	砂粒	赤褐色	良	タテハケ　13本	ナナメハケ　13本　ナデ
15号墳	27	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　９本	ナナメハケ後ナデ

備　　考	挿図番号	番号
回転糸切り　比企産　底部周縁を打ち欠く	第71図	8
回転糸切り後未調整	第71図	9
削りだし高台　瀬戸・美濃産	第71図	10
叩き締めの平行文押印　渥美産？	第71図	11
常滑産？　縦・横・斜・直線の押印文	第71図	12
外面にハケメ状痕跡あり　内面は荒れている　常滑か渥美産	第71図	13
平行叩き文様あり　常滑産	第71図	14
鎬蓮弁文　龍泉窯系	第71図	15
鎬蓮弁文は若干肉厚で、陵線も認められる。　龍泉窯系	第71図	16

備　　考	挿図番号	番号
底部内面ハケメ調整後ナデ　器表面剝離著しい	第14図	1
内面下半部ハケメ調整後ナデ　二段目横方向に黒斑	第14図	2
縦方向に補修の跡あり　ヘラ記号×	第14図	3
ヘラ記号×	第14図	4
凸帯はシャープさにかける	第15図	5
内面ヨコハケは断続的　凸帯は突出しているが波を打つ	第15図	6
内面ヨコハケは断続的　凸帯は突出しているが波を打つ　二段目は膨らみを持つ　ヘラ記号傘	第15図	7
内面ヨコハケは断続的　ヘラ記号傘	第15図	8
ヘラ記号×	第16図	9
ヘラ記号×	第16図	10
	第16図	11
凸帯はシャープさにかける	第16図	12
ヘラ記号×	第16図	13
ヘラ記号×	第16図	14
	第16図	15
	第16図	16
凸帯は端正で突出は高い	第17図	17
	第17図	18
	第17図	19
ヘラ記号×	第17図	20
	第17図	21
	第17図	22
器表面の磨耗が激しい	第17図	23
	第17図	24
	第17図	25
	第17図	26
	第17図	27

遺構名	番号	胎　　土	色調	焼成	外面調整　本/2㎝	内面調整　本/2㎝
15号墳	28	砂粒	褐色	良	タテハケ　9本	タテハケ　10本　ナデ
15号墳	29	砂粒	褐色	良	タテハケ　9本	ナデ
15号墳	30	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　9本	ナデ
15号墳	31	赤色スコリア　長石	褐色	良	タテハケ　8本	タテハケ　10本　ナデ
15号墳	32	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　8本	ナデ
15号墳	33	赤色スコリア　砂粒	明褐色	良	ナデ	ナナメハケ
15号墳	34	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　10本	ヨコハケ　12本
15号墳	35	赤色スコリア　長石	黄褐色	良	タテハケ　9本	ヨコ・ナナメハケ　9本
15号墳	36	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　8本	ナナメ・ヨコハケ　9本
15号墳	37	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　9本
15号墳	38	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　9本	ヨコハケ　10本
15号墳	39	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　9本	ハケメ調整後ヨコナデ
15号墳	40	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテ・ナナメハケ　9本	ナナメハケ　8本　ナデ
15号墳	41	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	ナナメハケ　9本	ナナメハケ　9本　ナデ
15号墳	42	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　8本	ヨコハケ　9本
15号墳	42	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　9本	ハケメ調整後ヨコナデ
15号墳	42	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　9本　ナデ
15号墳	43	砂粒	暗灰褐色	良	ナナメ・ヨコハケ　9本	ハケメ調整後ヨコナデ
15号墳	44	砂粒	暗灰褐色	良	ナナメ・ヨコハケ　9本	ハケメ調整後ヨコナデ
15号墳	45	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　11本
15号墳	46	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　10本
15号墳	47	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　10本
15号墳	48	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　9本
15号墳	49	砂粒　黒色輝石	暗褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　11本
15号墳	50	赤色スコリア　長石　砂粒	暗褐色	良	タテハケ　10本	タテ・ナナメハケ　11本
15号墳	51	赤色スコリア　長石　砂粒	褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　10本
15号墳	52	赤色スコリア　砂粒	暗褐色	良	タテハケ　11本	ナナメハケ　9本
15号墳	53	赤色スコリア　砂粒　黒色輝石	暗茶褐色	良	タテハケ　9本	ナナメ・ヨコハケ　8本
15号墳	54	砂粒　赤色スコリア　長石　黒色輝石	明褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　10本
15号墳	55	赤色スコリア　砂粒　長石　黒色輝石	褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　10本
15号墳	56	赤色スコリア　砂粒　黒色輝石	褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　9本
15号墳	57	赤色スコリア　長石　砂粒	褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　12本
15号墳	58	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　10本
15号墳	59	赤色スコリア　長石　黒色輝石	褐色	良	タテハケ　8本	ナナメハケ　11本
15号墳	60	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　8本	ナナメハケ　9本
15号墳	61	長石　砂粒	褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　10本
15号墳	62	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　10本
15号墳	63	砂粒	暗褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　10本
15号墳	64	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　10本
15号墳	65	赤色スコリア	褐色	良	タテハケ　9本	タテハケ　11本

備　　考	挿図番号	番号
底面に工具痕あり	第17図	28
	第17図	29
器壁薄く２枚に分離	第17図	30
	第17図	31
	第17図	32
底面に指の痕	第17図	33
朝顔　内面ヨコハケは断続的	第18図	34
朝顔　器表面剝離著しい	第18図	35
朝顔	第18図	36
朝顔	第18図	37
朝顔	第18図	38
朝顔	第18図	39
朝顔　内面は丁寧にナデが施されている	第18図	40
朝顔	第18図	41
朝顔	第19図	42
朝顔	第19図	42
朝顔	第19図	42
朝顔	第19図	43
朝顔	第19図	44
ヘラ記号×	第20図	45
ヘラ記号×	第20図	46
横縦のユビナデ後　×印のヘラ描き	第20図	47
ヘラ記号×	第20図	48
ヘラ記号×	第20図	49
ヘラ記号×	第20図	50
ヘラ記号×	第20図	51
ヘラ記号×	第20図	52
ヘラ記号×	第20図	53
ヘラ記号×	第20図	54
ヘラ記号×	第20図	55
ヘラ記号×	第20図	56
ヘラ記号×	第20図	57
ヘラ記号×	第20図	58
ヘラ記号×	第20図	59
ヘラ記号×	第20図	60
ヘラ記号×	第20図	61
ヘラ記号×	第20図	62
ヘラ記号×	第20図	63
ヘラ記号×	第20図	64
ヘラ記号×	第20図	65

遺構名	番号	胎　　土	色調	焼成	外面調整　本/2㎝	内面調整　本/2㎝
15号墳	66	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　10本
15号墳	67	赤色スコリア	褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　10本
15号墳	68	砂粒　黒色輝石　赤色スコリア	暗褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　11本
15号墳	69	赤色スコリア	暗褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　9本
15号墳	70	赤色スコリア　砂粒	暗褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　9本
15号墳	71	赤色スコリア　長石　砂粒	暗褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　9本
15号墳	72	砂粒　黒色輝石	暗褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　12本
15号墳	73	赤色スコリア　砂粒	暗褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　9本
15号墳	74	赤色スコリア　長石　砂粒	暗褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　10本
15号墳	75	黒色輝石　砂粒	暗褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　12本
15号墳	76	砂粒　長石　赤色スコリア	暗褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　11本
15号墳	77	砂粒　赤色スコリア	暗褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　9本
15号墳	78	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　11本
15号墳	79	赤色スコリア　砂粒　黒色輝石	暗褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　11本
15号墳	80	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　11本
15号墳	81	砂粒　赤色スコリア	暗褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　11本
15号墳	82	砂粒　赤色スコリア	明褐色	やや悪い	タテハケ　9本	ナナメハケ　13本
15号墳	83	砂粒　長石　赤色スコリア	褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　11本
16号墳	3	砂粒　黒色輝石　赤色スコリア	褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　9本
16号墳	4	赤色スコリア　砂粒	明褐色	良	タテハケ　13本	ナナメハケ　13本
16号墳	5	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　9本	ナデ
17号墳	1	赤色スコリア　黒色輝石	赤褐色	良	ナナメ・タテハケ　11本	ヨコハケ　11本ユビナデ
17号墳	2	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　9本	ヨコハケ　9本
17号墳	3	赤色スコリア　砂粒　長石	赤褐色	良	タテハケ　15本	ヨコハケ　12本
17号墳	4	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　14本	ナナメ・ヨコハケ　12本
17号墳	5	砂粒	赤褐色	良	タテハケ　14本	ナナメ・ヨコハケ　15本
17号墳	6	赤色スコリア　砂粒　長石	赤褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　14本
17号墳	7	赤色スコリア　砂粒　黒色輝石	赤褐色	良	タテハケ　15本	ナナメ・ヨコハケ　15本
17号墳	8	砂粒　赤色スコリア	赤褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　9本
17号墳	9	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　17本	ヨコ・ナナメハケ　17本
17号墳	10	砂粒　赤色スコリア	赤褐色	良	タテハケ　15本	ヨコハケ　13本
17号墳	11	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　16本	ヨコハケ　15本
17号墳	12	砂粒	赤褐色	良	タテハケ　16本	ナナメハケ　16本
17号墳	13	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　14本	ヨコハケ　16本
17号墳	14	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　15本	ナナメハケ　13本　ナデ
17号墳	15	砂粒　黒色輝石	赤褐色	良	タテハケ　15本	ナナメハケ　16本
17号墳	16	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　16本	ナナメハケ　14本
17号墳	17	赤色スコリア　砂粒　黒色輝石	褐色	良	タテハケ　14本	ナナメハケ　13本　ナデ
17号墳	18	砂粒	黒灰色	悪い	タテハケ　15本	ナナメハケ　14本
17号墳	19	砂粒	黒灰色	悪い	タテハケ　17本	ナナメハケ　16本

備　　考	挿図番号	番号
ヘラ記号×	第20図	66
ヘラ記号×	第21図	67
ヘラ記号×	第21図	68
ヘラ記号×	第21図	69
ヘラ記号×	第21図	70
ヘラ記号×	第21図	71
ヘラ記号×	第21図	72
ヘラ記号×	第21図	73
ヘラ記号×	第21図	74
ヘラ記号×	第21図	75
ヘラ記号×	第21図	76
ヘラ記号×	第21図	77
ヘラ記号×	第21図	78
ヘラ記号×	第21図	79
ヘラ記号×	第21図	80
ヘラ記号×	第21図	81
ヘラ記号×	第21図	82
ヘラ記号×	第21図	83
	第37図	3
凸帯の突出大きい	第37図	4
底面に工具痕	第37図	5
大型の円筒　口径36.0㎝　外面調整は部分的に段の中間でナナメハケ後タテハケ	第42図	1
大型の円筒　口径34.5㎝	第42図	2
外面にヘラ記号傘	第42図	3
外面にヘラ記号傘　口縁強いナデ	第42図	4
内面にヘラ記号格子	第42図	5
内面器表面の剝離が激しい	第43図	6
凸帯断面M字　突出は低い	第43図	7
	第43図	8
口縁強いナデ	第43図	9
口縁強いナデ	第43図	10
口縁強いナデ	第43図	11
	第43図	12
口縁強いナデ	第43図	13
	第44図	14
ヘラ記号格子	第44図	15
	第44図	16
	第44図	17
劣化し、もろくなっている	第44図	18
劣化し、もろくなっている　凸帯M字	第44図	19

遺構名	番号	胎　　土	色調	焼成	外面調整　本/2㎝	内面調整　本/2㎝
17号墳	20	砂粒	黒灰色	悪い	タテハケ　16本	ナナメハケ　15本
17号墳	21	砂粒	黒灰色	悪い	タテハケ　17本	ナナメハケ　17本
17号墳	22	砂粒	黒灰色	悪い	タテハケ　16本	ナナメハケ　13本
17号墳	23	砂粒	黒灰色	悪い	タテハケ　15本	ナナメハケ後ナデ
17号墳	24	砂粒	黒灰色	悪い	タテハケ　15本	タテハケ　15本
17号墳	25	砂粒	黒灰色	悪い	タテハケ　15本	ヨコハケ　14本
17号墳	26	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　11本	ナナメ・ヨコハケ　15本
17号墳	27	砂粒　赤色スコリア	赤褐色	良	タテハケ　15本	ナナメハケ　14本
17号墳	28	砂粒　赤色スコリア	赤褐色	良	タテハケ　本数不明	ヨコハケ　15本　ナデ
17号墳	29	砂粒　赤色スコリア	赤褐色	良	タテハケ　12本	ナナメハケ　10本
17号墳	30	砂粒　赤色スコリア	赤褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　10本
17号墳	31	砂粒　赤色スコリア	赤褐色	良	タテハケ　12本	ナナメハケ　12本
17号墳	32	砂粒　赤色スコリア	赤褐色	良	タテハケ　12本	ナナメハケ　14本
17号墳	33	黒色輝石　砂粒　赤色スコリア	赤褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　12本
17号墳	34	赤色スコリア　白色土粒子　砂粒	褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　8本
17号墳	35	赤色スコリア　砂粒　長石	褐色	良	タテハケ　11本	ナナメ・ヨコハケ　13本
17号墳	36	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	やや悪い	タテハケ　8本	ヨコハケ　10本
17号墳	37	砂粒　黒色輝石	赤褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　10本
17号墳	38	砂粒　赤色スコリア	赤褐色	良	タテハケ　8本	ナナメハケ　8本
17号墳	39	砂粒　長石　赤色スコリア　黒色輝石	赤褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　10本
17号墳	40	砂粒　赤色スコリア	赤褐色	良	タテハケ　11本	ナナメハケ　12本
17号墳	41	砂粒	赤褐色	良	タテハケ　14本	ナナメ・ヨコハケ　15本
17号墳	42	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　13本	ナナメハケ　14本
17号墳	43	砂粒　赤色スコリア	赤褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ後ナデ
17号墳	44	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　12本	ナナメハケ　10本　ナデ
17号墳	45	砂粒　赤色スコリア　黒色輝石	赤褐色	良	タテハケ　12本	ナナメハケ　10本
17号墳	46	砂粒　赤色スコリア　長石　黒色輝石	褐色	良	タテハケ　12本	ナナメハケ　9本
17号墳	47	赤色スコリア　砂粒　黒色輝石	赤褐色	良	タテハケ　17本	ナナメハケ　17本
18号墳	3	赤色スコリア　砂粒　黒色輝石	赤褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　11本
18号墳	4	砂粒　赤色スコリア　黒色輝石	赤褐色	悪い	タテハケ　13本	ナナメハケ　11本
18号墳	5	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　16本	ヨコハケ　16本
19号墳	4	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　11本	ヨコハケ　9本
19号墳	5	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　10本	ヨコハケ　10本
19号墳	6	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　10本	ヨコハケ　11本
19号墳	7	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ後ナデ
21号墳	8	赤色スコリア　砂粒　黒色輝石	赤褐色	良	タテハケ　8本	ヨコハケ　8本
21号墳	9	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　11本	ナナメハケ　14本
21号墳	10	砂粒　赤色スコリア	赤褐色	良	タテハケ　8本	ナナメハケ　8本
21号墳	11	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　11本	ナナメハケ　11本
21号墳	12	砂粒　赤色スコリア　黒色輝石	赤褐色	良	タテハケ　7本	ナナメハケ　7本

備　　考	挿図番号	番号
劣化し、もろくなっている　凸帯M字	第44図	20
劣化し、もろくなっている　ヘラ記号格子	第44図	21
劣化し、もろくなっている	第44図	22
劣化し、もろくなっている	第44図	23
劣化し、もろくなっている	第44図	24
劣化し、もろくなっている	第44図	25
ヘラ記号傘印	第44図	26
	第45図	27
	第45図	28
内面にヘラ記号格子	第45図	29
	第45図	30
	第45図	31
	第45図	32
ヘラ記号格子	第45図	33
内面にヘラ記号格子	第45図	34
	第45図	35
胎土及び焼成が悪く、器表面が荒れて黄色化している	第45図	36
内面にヘラ記号格子	第45図	37
	第45図	38
内面にヘラ記号格子	第46図	39
	第46図	40
朝顔　凸帯は端正　突出も高い	第46図	41
朝顔	第46図	42
底面に指の跡	第46図	43
ハケ調整後一部をナデ調整　底面は平滑に調整	第46図	44
ハケ調整後一部をナデ調整　底面は平滑に調整	第46図	45
底面に指の痕跡	第46図	46
	第46図	47
	第50図	3
器表面剝離激しい	第50図	4
内面ヨコハケは断続的　外面　押圧による底部調整	第50図	5
	第52図	4
	第52図	5
	第52図	6
全体に暖くカーブする　円筒かどうかも疑問	第52図	7
口縁のナデは強い	第58図	8
内面ヘラ記号格子	第58図	9
	第58図	10
	第58図	11
底部外面に板押圧状の圧痕らしきものあり　底部調整か　底面は平滑に調整	第58図	12

遺構名	番号	胎　　土	色調	焼成	外面調整　本/2㎝	内面調整　本/2㎝
21号墳	13	砂粒　黒色輝石	赤褐色	良	タテハケ　9本	ナデ
22号墳	1	砂粒	暗褐色	良	タテハケ　8本	ナナメハケ　11本
22号墳	2	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　本数不明	ナナメハケ　8本
22号墳	3	砂粒	淡褐色	良	タテハケ　10本	ナデ
22号墳	4	砂粒	褐色	良	タテハケ　11本	ナナメハケ後ナデ
23号溝	1	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　13本	ナナメハケ　17本
23号溝	2	砂粒　赤色スコリア	褐色	良	タテハケ　8本	ナナメハケ　11本
23号溝	3	砂粒　赤色スコリア	赤褐色	良	タテハケ　16本	ヨコハケ　15本
23号溝	4	砂粒　赤色スコリア	褐色	良	タテハケ　17本	ナナメハケ　13本
23号溝	5	砂粒　赤色スコリア	赤褐色	良	タテハケ　17本	ナナメハケ　13本
23号溝	6	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　11本	ナナメハケ　13本
23号溝	7	赤色スコリア　砂粒	明褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　12本
23号溝	8	赤色スコリア　砂粒	褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　12本　ナデ
23号溝	9	砂粒	褐色	良	タテハケ　13本	ナナメハケ　?
23号溝	10	砂粒　赤色スコリア　黒色輝石	赤褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ後ナデ
23号溝	11	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　12本	ナナメハケ後ナデ
24号溝	12	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　12本	ヨコハケ　17本
24号溝	13	砂粒　赤色スコリア	赤褐色	良	タテハケ　18本	ナナメハケ　22本
24号溝	14	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　13本	ナナメハケ　12本
25号溝	7	赤色スコリア	赤褐色	良	タテハケ　12本	ナナメハケ　11本
25号溝	8	赤色スコリア　砂粒	明褐色	良	タテハケ　9本	ナナメハケ　12本
26号溝	9	砂粒　赤色スコリア	褐色	良	タテハケ　11本	ナナメハケ　12本
34号溝	10	赤色スコリア　砂粒	赤褐色	良	タテハケ　17本	ナナメハケ　19本
28号土壙	1	砂粒	淡褐色	良	タテハケ　10本	ナナメハケ　10本
28号土壙	2	砂粒　赤色スコリア	明褐色	良	タテハケ　14本	ナナメハケ　10本
28号土壙	3	砂粒　赤色スコリア	明褐色	良	タテハケ　11本	ヨコハケ　12本

第3表　　形象埴輪観察表

遺構名	番号	種別	部　位	胎　　土	色　　調	焼成
15号墳	84	女子	上半身	細砂を少量含む	褐色	良
15号墳	85	女子	頭	砂粒　赤色スコリア	褐色	良
15号墳	86	女子	髷	微砂粒	褐色	良
15号墳	87	人物？	耳飾り？	微砂粒	褐色	良
15号墳	88	人物	首飾り？	微砂粒	褐色	良
15号墳	89	人物	首飾り	微砂粒	褐色	良
15号墳	90	人物	首飾り	微砂粒	褐色	良
15号墳	91	人物	結紐	微砂粒	暗褐色	軟
15号墳	92	女子？	腰	砂粒　赤色スコリア　黒色輝石	褐色	良
15号墳	93	女子	足	砂粒	褐色	良

備　　考	挿図番号	番号
底面に粘土紐輪積み状況がそのまま観察できる	第58図	13
凸帯を押し潰す	第60図	1
	第60図	2
	第60図	3
	第60図	4
内面にヘラ記号	第65図	1
ヘラ記号×	第65図	2
外面にヘラ記号	第65図	3
凸帯はややM字　突出は高い	第65図	4
凸帯はややM字　突出は高い	第65図	5
	第65図	6
下半に黒斑あり	第65図	7
	第65図	8
外面　板状工具の押圧による底部調整　内面　ナデ	第65図	9
底面に工具？痕跡	第65図	10
	第65図	11
内面ヨコハケは断続的	第65図	12
	第65図	13
底部外面を押圧調整	第65図	14
	第66図	7
15号墳の資料に似ている	第66図	8
外面　タテハケが重なる	第66図	9
凸帯の突出は高い	第66図	10
きわめて器壁が薄い　外面にヘラ記号	第68図	1
凸帯の断面は三角形	第68図	2
内面ヨコハケは断続的　底面に棒状の工具痕あり	第68図	3

備　　考	挿図番号	番号
髷は板状の方形粘土を頭の上に貼り付ける坏を捧げる表現　周溝に沿って仰向けで出土	第25図	84
坏を捧げる女子と同じ作り　耳飾りあり	第26図	85
表面はハケメをナデ消している	第26図	86
107馬近く	第26図	87
94女子近く	第26図	88
93近く	第26図	89
94女子近く	第26図	90
96付近	第26図	91
腰紐の表現あり	第26図	92
裳裾と上衣裾の表現あり　裸足	第26図	93

遺構名	番号	種別	部　位	胎　　土	色　　調	焼成
15号墳	94	女子？	上半身	砂粒　赤色スコリア	褐色	良
15号墳	95	女子？	半身	砂粒　赤色スコリア	褐色	良
15号墳	96	男子	胴（彈琴像）	砂粒　赤色スコリア	暗褐色	やや悪い
15号墳	97	刀？	把頭？	白色微砂粒	暗褐色	やや軟
15号墳	98	男子	頭	砂粒　赤色スコリア　黒色輝石	暗褐色	やや悪い
15号墳	99	男子	頭	砂粒　赤色スコリア	暗褐色	やや悪い
15号墳	100	人物	左腕	赤色スコリア	褐色	良
15号墳	101	人物	左肩腕	赤色スコリア　微砂粒	暗褐色　破面黄色化	良
15号墳	102	人物	左腕	長石微粒	褐色	良
15号墳	103	人物	右腕	赤色スコリア　長石	暗褐色　破面黄色化	良
15号墳	104	人物	右手	赤色スコリア　長石	暗褐色	良
15号墳	105	人物	右足	赤色スコリア　長石	暗褐色	良
15号墳	106	人物	基部周縁	赤色スコリア	褐色	良
15号墳	107	馬		赤色スコリア　砂粒	褐色	良
15号墳	108	馬	たてがみ	長石　砂粒	褐色	良
15号墳	109	馬	耳	微砂粒	褐色	良
15号墳	110	馬具	f字鏡板	長石　微砂粒	褐色	良
15号墳	111	馬具	f字鏡板	赤色スコリア　長石	褐色	良
15号墳	112	馬具	鈴（馬に付着）	微砂粒	褐色	良
15号墳	113	馬具	鈴（馬に付着）	微砂粒	褐色	良
15号墳	114	馬具	鈴（馬に付着）	微砂粒	褐色	良
15号墳	115	馬具	鈴（馬に付着）	微砂粒	褐色	良
15号墳	116	馬具	鈴（馬に付着）	微砂粒	褐色	良
15号墳	117	馬具	鈴（馬に付着）	微砂粒	褐色	良
15号墳	118	馬具	鈴（馬に付着）	微砂粒	褐色	良
15号墳	119	猪		砂粒　黒色輝石　赤色スコリア	暗褐色	良
15号墳	120	鹿	頭	長石　微砂粒	赤みをおびた褐色	良
15号墳	121	鹿？	脚	砂粒　赤色スコリア	褐色	良
15号墳	122	犬		砂粒　赤色スコリア	褐色	良
15号墳	123	三環鈴		長石　砂粒	赤褐色	良
17号墳	48	女子	上半身	砂粒　赤色スコリア	暗褐色	良
17号墳	49	人物	右手	白色微砂粒若干	赤褐色	良
17号墳	50	馬具	鏡板（右側）	小砂粒	赤みおびた褐色	良
17号墳	51	馬具	鏡板（左側）	小砂粒	赤みおびた褐色	良
17号墳	52	馬具	障泥	長石　白色微砂粒	暗赤褐色	良
17号墳	53	馬具	鈴	白色微砂粒	暗赤褐色	堅緻
17号墳	54	馬具？		微砂粒　赤色スコリア	淡褐色	良
17号墳	55	馬	脚	砂粒　赤色スコリア	赤褐色	良
18号墳	2	馬具	障泥（右側）	長石　微砂粒	赤褐色	良
19号墳	3	家	堅魚木	微小砂粒	暗褐色	良

備　　考	挿図番号	番号
身体に装飾表現はなし　棒の長さ　8.2㎝　直径1.5㎝　棒の頭の長さ　2㎝　直径　2㎝	第27図	94
座位　背中側のみ出土	第27図	95
足結表現　膝の上に琴を乗せる　琴の弦は6本刻線　鈴・玉等の装飾はない　垂髪の痕跡なし	第28図	96
側面に剝離痕あり	第28図	97
二つの山形の冠をかぶる　鉢巻の表現	第29図	98
帽子の表現あり　表面は剝落が激しく黄色に変色している	第29図	99
指は一本づつ貼り付ける　中空作り　2枚を合わせる　腕の取り付けは下方に手先を下げる	第30図	100
腕は下方に下げる　中空	第30図	101
腕はわずかに前方下方に手先を向ける　中空	第30図	102
中空　粘土2枚あわせ　甲に小さな粘土粒貼り付くが　非意図的である	第30図	103
甲の厚みの変化　指の太さ　親指付近の割れ方等から右手	第30図	104
かかとが剝離している　足首前側は直線的	第30図	105
粘土紐を3本使い成形　表面はナデ　裏面は調整なし　粘土紐が見える	第30図	106
全身にハケ調整残る　ハケメ　8本／2㎝　鞍の前輪のハケメ　13本／2㎝	第31図	107
縦に粘土をあわせて成形　頭との接合面は軸に対して斜め　ユビとヘラで形を作り出す	第32図	108
円筒状に作り、差し込み、先端をすぼませている	第32図	109
鋲23個を貼り付け　先端に向かい薄く鋭くなる　裏面接合部は凹む　全長　10.3　厚さ　0.7	第32図	110
左側の鏡板　粘土玉を貼り付けて鋲止め表現	第32図	111
スリットは巾0.1㎝　鋭い工具で切り込む　径3.6	第32図	112
スリットは巾0.1㎝　鋭い工具で切り込む　径3.5	第32図	113
スリットは巾0.1㎝　鋭い工具で切り込む　径3.6	第32図	114
スリットは巾0.1㎝　鋭い工具で切り込む　他の鈴と違い鈴本体に面的な剝離はない　径3.6	第32図	115
スリットは巾0.1㎝　鋭い工具で切り込む　径3.1	第32図	116
スリットは巾0.1㎝　鋭い工具で切り込む　径3.0	第32図	117
スリットは巾0.1㎝　鋭い工具で切り込む　径3.2	第32図	118
顔は偏平な円筒　口は左右両側をヘラ切り　尻に穿孔　牙の表現なし　ハケメ　8本／2㎝	第33図	119
鼻先から眉間に白色塗彩　耳は差し込み　目は正円　顔は巾約1.5㎝の粘土紐を巻いて作る	第34図	120
直径・巾ともに犬・猪の脚より若干大きい	第34図	121
巻尾　頭部の破片は皆無　全面にハケ調整　ハケメ　9本／2㎝　首下と尻に穿孔	第34図	122
胎土・焼成・色調ともに他の埴輪と同一　直径　リング　6.5　鈴　6.0　丸　1.7	第35図	123
腕と胸ハケメ擦り消す　鼻孔は工具で刻む　頭部上面を切り髷を接続　髷上面にハケメ一部残る	第47図	48
腕の剝離の角度から考えると上方に手を持ち上げている　親指剝離　全面を丁寧にナデ	第47図	49
鋲剝落	第47図	50
鋲の表現はへん平な粘土粒貼り付け	第47図	51
粘土のこね方が悪いのか2枚に割れる	第47図	52
スリットの切り込みは鋭い	第47図	53
縁あり　鋲は表現されず	第47図	54
ハケメ　9本／2㎝	第47図	55
外面　ナデ調整　所々ハケメ残る	第50図	2
棟側の剝離痕は2つの凹みがある　天側の剝離痕は半円に近い　長さ　7.9　直径　2.5	第52図	3

遺構名	番号	種別	部　位	胎　　土	色　　調	焼成
21号墳	1	女子	頭	砂粒　黒色輝石　赤色スコリア	赤褐色	良
21号墳	2	人物	右手	白色鉱物	赤褐色	良
21号墳	3	人物	腕	微小白砂粒	赤褐色	良
21号墳	4	馬	たてがみ	砂粒多し	褐色	良
21号墳	5	馬	顎　首	白色土粒	赤褐色	良
21号墳	6	馬具？		白色微粒	赤褐色	良
21号墳	7	馬	脚	赤色スコリア　砂粒　黒色輝石	褐色	良
23号溝	5	馬	たてがみ	長石　白色鉱物粒	赤褐色	良
23号溝	6	馬	まえがみ	黒色輝石　白色微砂粒	暗褐色	良
23号溝	7	馬	たてがみ	白色鉱物粒　赤色スコリア	赤褐色	良
23号溝	8	馬具	鞍　覆輪	砂粒多し　赤色スコリア	赤褐色	良
23号溝	9	馬具	鈴	白色鉱物粒	褐色	良
23号溝	10	不明		長石　砂粒　赤色スコリア	褐色	やや悪い
24号溝	11	馬	たてがみ	赤色スコリア	赤褐色	良
24号溝	12	楯		赤色スコリア　微砂粒	褐色	良
24号溝	13	不明		微砂粒　長石	褐色	良
24号溝	14	不明		長石	褐色	良
25号溝	5	人物	首	黒色輝色　赤色スコリア　微砂粒	褐色～赤褐色	良
28号溝	6	馬具	鈴	砂粒	淡赤褐色	良
4号井戸	4	動物	動物の腹	砂粒多し	赤褐色	やや悪い
表採	17	人物	腕	微砂粒	褐色	良

第4表　石製品観察表

遺構	番号	種別	石　質	色調	備　　考	挿図番号	番号
表採	4	石匙	チャート	灰黒色	つまみが若干割れている	第71図	4
表採	5	石鏃	チャート	灰黒色	凹基無茎鏃　完形	第71図	5
17号墳	5	紡錘車	滑石	灰色	タテ方向に丁寧に磨く　底面が若干凸になる	第41図	5

備　　考	挿図番号	番号
比較的丸顔　鼻孔は鋭利な工具で刻む　髷上面にハケメ残る	第58図	1
手の平をヘラ状工具で調整　親指は円錐状粘土を貼り付け	第58図	2
中空ではない	第58図	3
両側面を丁寧にナデ調整	第58図	4
手鋼が剝落している	第58図	5
17号墳と同様のもの　鋲留表現はなし	第58図	6
タテハケ　9本／2㎝　ナナメハケ　7本／2㎝	第58図	7
ハケ調整後ナデ　紐帯は角粘土貼り付け	第64図	5
まえがみとたてがみの間に紐帯の表現あり	第64図	6
鞍前輪接続部分　たてがみ両面とも丁寧にナデ	第64図	7
縁を丁寧にナデる	第64図	8
細い粘土紐を巻き付けて接着	第64図	9
形態不明　身の外面をハケ調整後粘土を張り巡らして形成　外面は丁寧にヨコナデ　内面ハケメ	第64図	10
ハケ調整は巾の大小　2種あり	第64図	11
ハケ調整後丁寧にナデ	第64図	12
長さ4.6　巾2.0の角形に断面楕円形の軸が直角に貼り付く	第64図	13
何らかの形象埴輪に付随する　動物の口のような切り込みあり	第64図	14
顎が若干残っている　首に玉飾り	第66図	5
磨滅が激しい	第66図	6
脇腹はナデがまばらでハケメ残る	第70図	4
中空	第71図	17

Ⅴ　自然科学的分析

新屋敷遺跡Ｂ区のローム層序と古墳構築年代

パリノ・サーヴェイ株式会社

１．はじめに

鴻巣市新屋敷遺跡は、大宮台地のほぼ北西端部上に位置する。調査区は南西側のＡ区（警察署建設用地）と北東側のＢ区（保健所建設用地）に分けられて発掘調査が行われ、両区合わせて16基の５～６世紀頃と考えられている古墳や、平安時代の住居跡が検出された。本遺跡の至近には埴輪窯跡である生出塚遺跡があり、ここで製作されたと考えられる埴輪が本遺跡でも出土している。

発掘調査が進められる中で、遺跡の立地する台地の表層の堆積層である褐色火山灰土（いわゆるローム）層の断面が作成され、旧石器時代の遺物包含層の存否確認が行われている。遺跡が位置する大宮台地北西部付近では、旧石器時代遺跡の調査例が少なく、ローム層の層序対比が行われた例もあまりない。すなわち、今後旧石器時代の遺跡が発掘された場合に、その遺物の出土層準を客観的に対比できる資料が不足している状態といえる。このような状況から、本遺跡においてローム層序の確立を行うこととなった。

以上のような経過から、本報告はＢ区において作成されたローム層の地層断面について指標テフラと重鉱物組成の層位的変化を調べることにより、層序対比を行う。また、６世紀代とみられる古墳周溝の覆土中より採取されたテフラの同定を行い、指標テフラと対比することにより、この古墳の年代資料を得る。

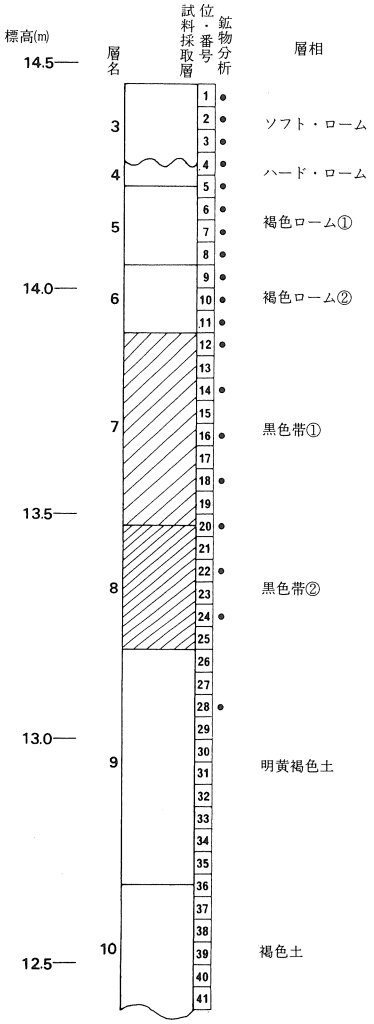
２．遺跡付近の地形・地質概要

大宮台地の地形・地質については堀口（1986）に詳しい。以下本文では同著に従う。大宮台地は地形的に、鴻巣市から桶川市にかけての北西部および安行市付近の南東部の一段高い部分とそれ以外の地域の低い部分とにわけられる。高い部分は、武蔵野段丘Ⅰ面に対比され、低い部分は武蔵野段丘Ⅱ面に対比されている。

武蔵野段丘Ⅰ面は、古東京湾の堆積物である砂層およびシルト層からなる東京層が構成する地形面であり、その上位に火山灰質粘土層、火山灰層シルト質砂層、硬砂層、風成の下末吉ローム層上部、武蔵野・立川ローム層の順に各地層がのっている。火山灰質粘土層中には御岳第一軽石層（Ｐｍ-１）が認められていることから、この粘土層は武蔵野台地の成増面で認められる板橋粘土層に対比されている。武蔵野段丘Ⅱ面は、武蔵野段丘Ⅰ面が河川により侵食されて形成された地形面であり、侵食面堆積物と考えられる砂層の上位に粘土層と武蔵野・立川ローム層が整合に堆積する。

上記の記載から、武蔵野段丘Ⅰ面は東京都の武蔵野台地の区分におけるＭ１面に対比され、およそ８万年前の離水年代が考えられ、一方、武蔵野段丘Ⅱ面は同区分におけるＭ２面に対比されおよそ６万年前の離水年代が考えられる。(久保，1988)。

遺跡の立地する付近の台地は、南西側を荒川低地、北東側を元荒川の作る低地で区切られ、南西側が高く北東側が低くなっている。地形図によれば、南西側の台地の崖端は比較的急傾斜になって



第72図　B区Ⅴ-35 深掘の横式柱状図および鉱物分析試料採取位置

いるが北東側は東西から穏やかに傾斜しており崖端はほとんど見られずに低地に移行している。南西側の高い部分は、上述の武蔵野段丘Ⅰ面に対比され、北東側の低い部分は武蔵野段丘Ⅱ面に対比される。両地形面の境界は、堀口（1986）ではおよそ標高20ｍの等高線に沿ってひかれていることから、鴻巣駅周辺の市街地は武蔵野段丘Ⅰ面の上にあり、国道17号線がほぼ地形面の北東側に広がる低地下には台地が埋没していることが確認されており（堀口，1986)、調査区の傾斜した地形も台地が低地内に続いていることを示唆している。このような遺跡付近の地形は、加須村付近に沈降の中心を持つ地殻の沈降運動によるものと考えられている（堀口，1981)。

3．試料

層序対比のための試料は、Ｂ区Ⅴ-35深掘断面より採取された。この断面は、ソフトローム層（３層）を最上層とし、褐色土層とされている10層まで分層された（図１)。本文でもこの層位区分に従う。３層とその下位の地層との境界は非常に乱れており、４層、５層、６層はその間を水平方向に分層されたものであるので部分的にブロック状になっている。６層の下位の７層と８層は黒色帯で上下の層よりも暗い色調を呈する。

試料は、３層上限より10層まで、厚さ５㎝で連続採取した。採取した点数は、試料番号１～41までの41点であるが、いたひの重要度と予想されるテフラの産状から図１に示す19点の試料を選択し、分析を行った。また、古墳周溝については、ＳＳ-20土層セクションＡ－Ａ′およびＢ－Ｂ′より各１点づつ採取された試料とＳＳ-21ベルト内より採取された試料１点、さらにＳＳ-20の別地点より採取された試料１点の合計４点についてテフラ分析を行った。

4．分析方法

層序対比にはテフラ層を鍵層として用いるのが最も有効な手段である。しかし、一般に大宮台地の立川・武蔵野ローム層では、地層断面中に肉眼で認めることのできるテフラ層に乏しいことが多い。そのような場合には、土壌中に混交する細粒テフラを分析により検出し、その降灰層準を推定する方法と重鉱物組成の層位的変化を鍵に用いる方法とが有効である。本遺跡のローム層断面においてもテフラを肉眼で認めることができなかったために、これらの手法を用いて層序対比を行う。

試料の処理手順は以下の通りである。

試料約40ｇに水を加え超音波洗浄装置により分散、＃250の分析篩を用いて水洗し、粒径1/16㎜以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4㎜－1/8㎜の砂分をテトラブロモエタン（比重約2.96）により重液分離、重鉱物の同定と軽鉱物中における火山ガラスの計数を行った。

重鉱物の同定の際に不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とした。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。また、火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は厚手平板状あるいは比較的大きな気泡持つ塊状、軽石型は小気泡を非常に多く持つ塊状および繊維束状のものとする。

古墳の周溝試料については、適量を蒸発皿にとり水を加え泥水にした状態で小型超音波洗浄装置により分散、上澄みを流す。この操作を繰り返して得られた砂分を乾燥、実体顕微鏡下で観察し、テフラの本質物質である軽石、スコリア、火山ガラス、遊離結晶の産状を調べる。

５．分析結果

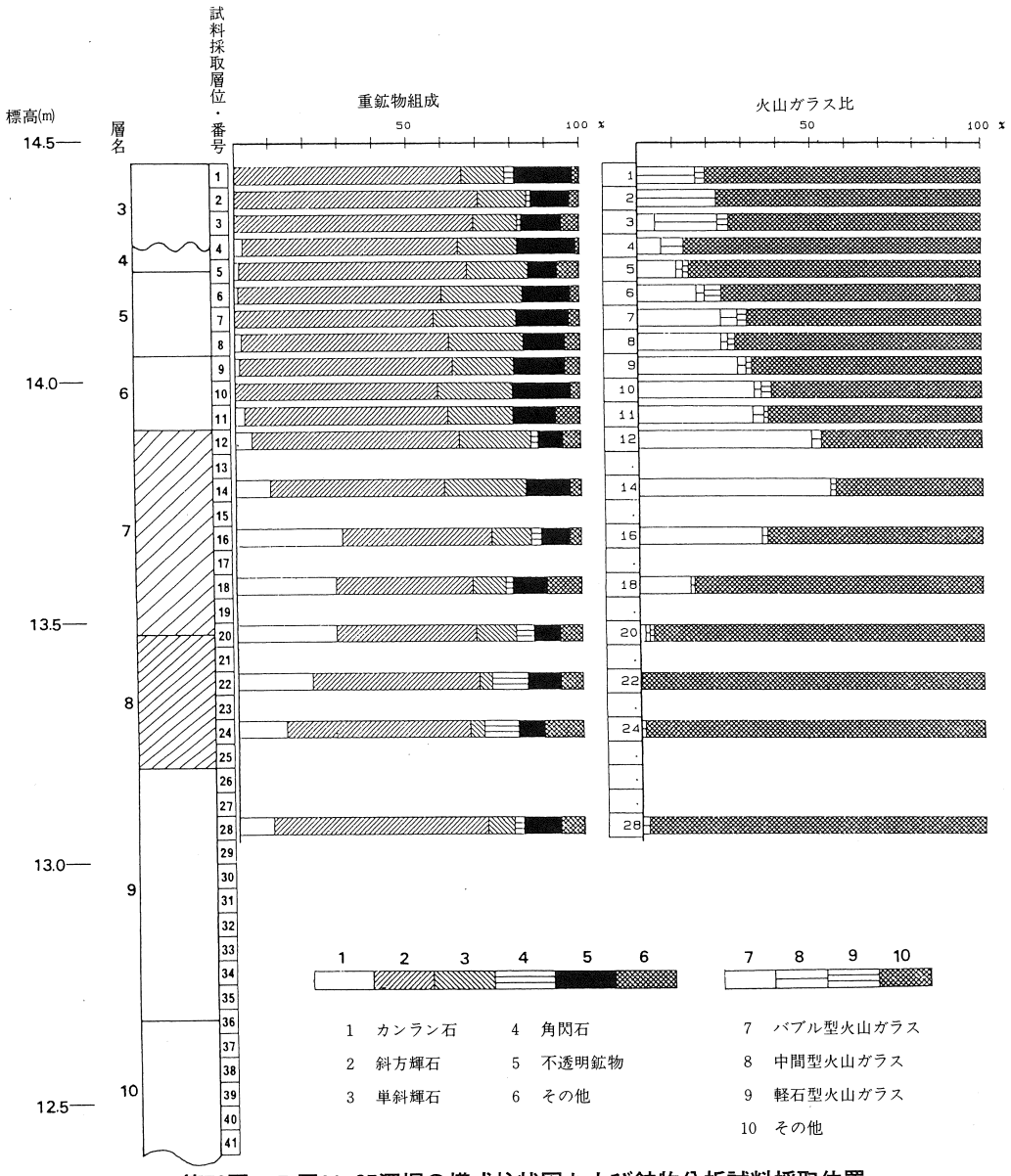
(1)　ローム層序

ａ）重鉱物組成

重鉱物組成は、カンラン石、斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物の４つの鉱物が主体となっており、これらに少量の門閃石が試料によっては少量含まれている（表１、図３）。これらの鉱物の量比の層位的変化は、次のような特徴を示す。カンラン石は、試料番号28では少量であるが、上位に向かって増加し、試料番号20までこの傾向は続く。試料番号20～16の層位では量比にほとんど変化はな

表５　Ｂ区Ｖ-35深掘断面試料の重鉱物組成および火山ガラス比

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	重鉱物固定粒数	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計粒数
1	0	165	31	7	42	5	250	2	42	7	199	250
2	0	177	35	3	28	7	250	2	57	2	189	250
3	0	173	32	3	29	13	250	13	45	8	184	250
4	6	156	43	0	42	3	250	17	16	2	215	250
5	4	165	44	1	21	15	250	28	5	4	213	250
6	3	147	59	0	34	7	250	43	6	12	189	250
7	2	144	60	0	38	6	250	60	12	7	171	250
8	5	150	54	1	30	10	250	60	5	5	180	250
9	4	154	44	0	37	11	250	72	6	4	168	250
10	1	147	54	2	42	4	250	84	5	7	154	250
11	7	147	47	1	31	17	250	83	8	3	156	250
12	12	150	52	5	18	13	250	125	7	1	117	250
14	25	126	59	0	32	8	250	138	0	4	108	250
16	77	108	29	7	20	9	250	89	4	1	156	250
18	72	99	24	5	125	25	250	37	3	1	209	250
20	72	101	29	13	19	16	250	4	3	3	240	250
22	54	121	9	26	24	16	250	1	2	0	247	250
24	35	133	10	25	19	28	250	1	3	0	246	250
28	25	155	19	7	27	17	250	0	5	0	245	250



第73図　B区V-35深掘の模式柱状図および鉱物分析試料採取位置

く、試料番号16から上位で減少する。試料番号11より上位では、カンラン石は微量かほとんど含まれない。斜方輝石の量比の層位的変化は、カンラン石とほぼ逆の傾向を示し、試料番号11より上位では重鉱物の主体をなす。単斜輝石は全体的に量比が少なく、前記2鉱物に比べてその層位的変化は明瞭ではない。しかし、試料番号14～6に多いことが読み取れる。不透明鉱物は単斜輝石よりさらに少量で、指標となるような量比の層位的変化を認めることができない。角閃石は、試料番号24～22でやや多い傾向を示す。

b）火山ガラス比

火山ガラスは、バブル型と中間型の二つの形態が主に認められ、試料によっては微量の軽石型が

含まれる。主な二形態の火山ガラスの量比には、層位的な変化が認められる。すなわち、バブル型火山ガラスは、下位より見て試料番号20から微量出始め、試料番号14に向かって急激に増加、試料番号14で極大となりそれより上位では比較的緩やかな減少傾向を示し、試料番号３では少量、それより上位の試料ではほとんど含まれない。中間型火山ガラスは、ほとんど全層位から検出されるが、試料番号３～１では特徴的な濃集が認められる。

(2) 古墳周溝の試料について

a) ＳＳ-20土層セクションＡ－Ａ′およびＢ－Ｂ′試料およびＳＳ-20別地点試料

洗い出された砂分の状況は、３点の試料ともほぼ同様である。砂分中には、最大径約0.5㎜でよく粒径のそろった白色の軽石が多量に含まれる。ただし、Ｂ－Ｂ′試料の方が軽石の量がやや少ない。軽石は、発泡が不良であり、角閃石の斑晶を包有するものも認められる。また、角閃石や斜方輝石、単斜輝石からなる遊離結晶も多く含まれる。これらの特徴から、２点の試料に含まれる多量の軽石や遊離結晶は、６世紀の榛名山の活動により噴出したテフラに由来すると考えられる。６世紀の榛名山のテフラは、６世紀初頭の榛名二ツ岳渋川テフラ（Ｈｒ-ＦＡ）と６世紀中葉の榛名二ツ岳伊香保テフラ（Ｈｒ-ＦＰ）の２つのテフラがあることが知られている（町田・新井，1992)。前者は二ツ岳火山灰（ＦＡ：新井，1979）とよばれる降下火山灰を伴うテフラであり、後者は従来二ツ岳軽石（ＦＰ：新井，1979）とよばれる降下軽石を伴うテフラである。給源に比較的近い地域であれば、両者はその層相から明瞭に区別できるが、本遺跡程度に離れた地域では、両者の区別は難しい。しかし、Ｈｒ-ＦＡの分布域は東方および南方に広く、Ｈｒ-ＦＰの分布域は北東方向にその主軸がある。この分布域と本遺跡の位置を考慮すれば、試料中に含まれる軽石はＨｒ-ＦＡに由来する可能性が高い。

b) ＳＳ-21ベルト内試料

砂分中には、多量の軽石と遊離結晶および中量の岩片が含まれる。軽石は、最大径約２㎜で灰褐色を呈し、発泡はやや良好、斜方輝石を包有するものも認められる。遊離結晶は、ほとんど斜方輝石と単斜輝石とからなり、岩片は暗灰色の安山岩である。これらの特徴から試料中に含まれる軽石や遊離結晶は、浅間Ｂテフラ（Ａｓ-Ｂ）に由来すると考えられる。Ａｓ-Ｂは、平安時代末期の天仁元年（1108年）の浅間火山の活動により噴出したテフラである（新井，1979)。

６．考察

(1) ローム層中の指標テフラとその降灰層準

試料番号14（７層）で量比の極大となるバブル型火山ガラスは、その産出層位と形態から姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ：町田・新井，1976）に由来すると考えられる。ＡＴは、鹿児島県の姶良カルデラを給源とし、今から約2.1～2.2万年前に噴出したとされている（町田・新井，1976)。ところで、土壌中に特定テフラが混交して産出する場合、テフラ最濃集部の下限がそのテフラの下降層準に一致する場合が多い（早津，1988)。これに従えば本遺跡のＡＴの降灰層準は、試料番号18～16付近すなわち７層中下部と考えられる。

一方、試料番号３～１（３層）に濃集する中間型火山ガラスは、その産出層位と形態から、立川

ローム最上部ガラス質火山灰（ＵＧ：山崎，1978）に由来すると考えられる。ＵＧの給源は浅間火山と考えられ、北関東における指標テフラである浅間板鼻黄色軽石（Ａｓ－ＹＰ：新井，1962；1971）の細粒部である可能性が指摘されている（町田ほか，1984）。また、その降灰年代は、約1.2万年前とされている（町田・新井，1992）。本遺跡のＵＧの降灰層準は、上記ＡＴの場合と同様に考えれば試料番号３すなわち３層下部に推定することができる。

(2) ローム層層序の確立

当社における大宮大地北西部でのローム層の分析例は、本遺跡至近にある中三谷遺跡、桶川市提灯木山遺跡、およびやや南方になるが伊奈町大山遺跡の３例がある。また、大宮大地南部の浦和市周辺のローム層の分析例も数例ある。これらの例では、いずれもローム層最上部にソフトローム層、その下位に褐色のローム層を挟んで暗色帯が認められ、どこの暗色帯も上部層と下部層の２層に分けられている。また、いずれも鉱物分析等によりＡＴとＵＧの降灰層準が推定されている。これらの共通する層相と指標テフラの降灰相準とから、対比の指標となる重鉱物組成の層位的変化を２層準に見出すことができた。そのうち下位の指標は、本遺跡試料番号22～20（８層）にみられたカンラン石の上位に向かっての増加から安定に変わる層準（以下単にカンラン石層準とよぶ）である。この層準はどの遺跡でもＡＴの下位にあり、多くの遺跡では暗色帯の下部層の下部付近にある。本遺跡では、この層準は暗色帯の下部層に相当する８層の上部に認められており、他の遺跡よりも暗色帯との層位関係が上位側にずれている傾向がうかがえる。上位の指標は、本遺跡試料番号14～６（７層～５層）にみられる単斜輝石の量比の極大層準である（以下単斜輝石層準とする）。本分析結果ではその変化はあまり明瞭ではないが、他の遺跡では比較的明瞭に量比の極大が認められ、よい指標となっている。単斜輝石層準はＡＴの上位にあり、暗色帯上部層上限から直上にあることが多い。本断面で対比指標となり得る極大層準は、試料番号14～12付近の暗色帯上部層である７層上部にあるとみられるが、暗色帯との層位関係は他の遺跡に比べてやや下位にずれている。以上の２つの指標とＡＴおよびＵＧの降灰層準を合わせた４つの指標は、浦和市周辺のローム層にも認められることから、大宮台地のほぼ全域にわたる対比指標になる可能性がある。ここで、本遺跡、中三谷遺跡、提灯木山遺跡、大山遺跡の順に、４つの指標がそれぞれどの層準にあるかを記載することで大宮台地の層序対比とする。

ＵＧ層準：どの遺跡もソフトローム層（本遺跡では３層）とよばれる層の中下部

単斜輝石層準：暗色帯上部層（７層）の上部―同層上限―同層層界―同層直上

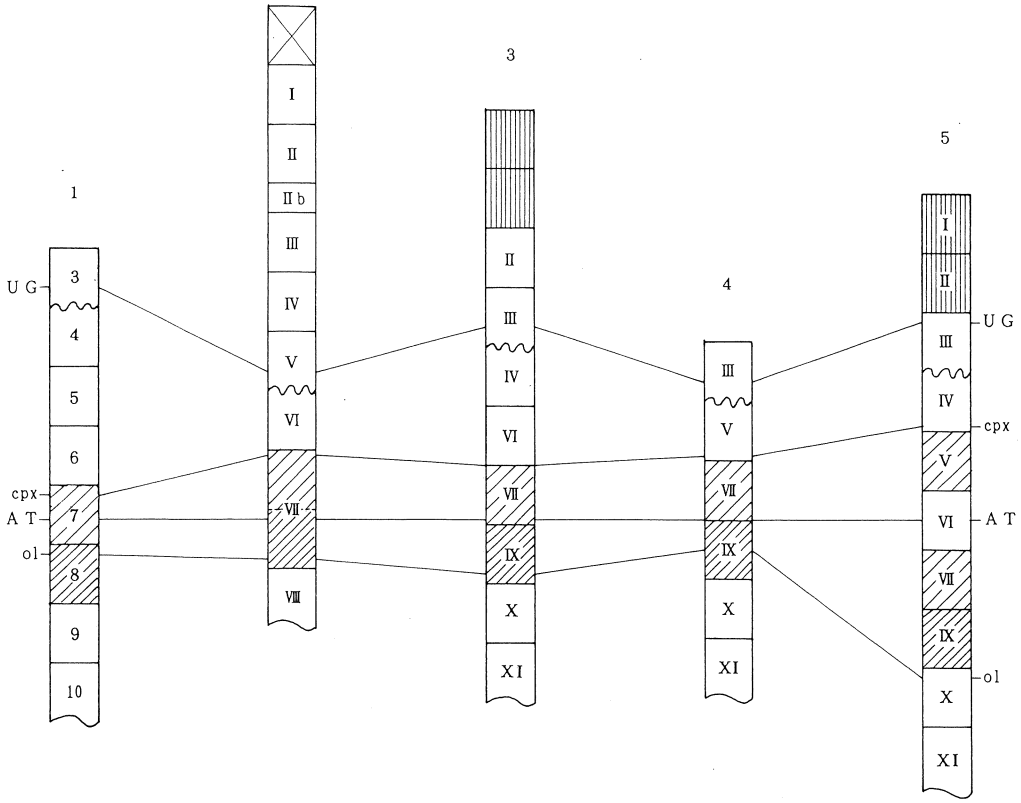
ＡＴ層準：暗色帯上部層（７層）中下部―暗色帯下部層上部―暗色帯上部層下限―暗色帯上部層と下部層層界

カンラン石層準：暗色帯下部層（８層）上部―同層下部―同層下部―同層中部

(3) 武蔵野台地との対比

立川ローム層の模式地は武蔵野台地であり、ここにおける層序は旧石器時代の一つの年代基準ともなっている。したがって、武蔵野台地との層序対比は、今後旧石器時代の遺物や遺構が本遺跡周辺で検出された場合に、その時代・時期を推定する上で有効である。

上記の指標のうちＡＴとＵＧの降灰層準は、そのまま武蔵野台地との対比指標となる。また、当



（1．B区V－35グリッド、2．鴻巣市中三谷、3．桶川市提灯木山、4．伊奈町大山、5．武蔵野台地。柱状図は模式。UG：UG層準、AT：AT層準、cpx：単斜輝石層準、ol：カンラン石層準。）

第74図　各地点の層序対比

社の武蔵野台地での分析例から、武蔵野台地の立川ローム層におけるいわゆる標準層序のX層（以下特に“X層”とする。他の数字においても同様の意味で用いる）上部付近にカンラン石層準に相当する重鉱物組成の変化が認められる。さらに、武蔵野台地の立川ローム層に共通してみられる第1暗色帯（BBI）上限付近の輝石の極大（小林ほか，1971）は、層位的に上記の単斜輝石層準に相当する可能性がある。これらのことから、本遺跡と武蔵野台地とは次のように対比される。上位より、UG層準から3層は“Ⅲ層”、4～6層・7層最上部は“Ⅳ層”、7層上部“V層”、7層中部は“Ⅵ層”、7層下部～8層上部は“Ⅶ・Ⅸ層”、8層中部以下は“X層”以下に対比される。

以上のローム層の対比は、どれもおおよその目安という程度であり、例えば数cm以下の中での層位的な上下を議論できるものではない。ローム層の母材となっている砕屑物は、火山灰が噴火により一時的に降下堆積したものでなく、主として噴火地点周辺から風塵として移動し再堆積したものと考えられている（中村，1970；早川，1986；早津，1988）。したがって、その堆積過程において、小規模な再堆積や削剝は比較的頻繁に繰り返されていたであろうし、堆積後も生物などによる攪乱があったと考えられる。今後もローム層の対比を行う場合には、このような砕屑物を対比の指標としていることを考慮して、その精度を評価する必要がある。

(4) 古墳の構築年代

ＳＳ-20の周溝の埋積土層中にＨｒ-ＦＡに由来する軽石が濃集していたことは、この古墳の周溝の埋積がＨｒ-ＦＡ降灰以前に始まったことを示す可能性が高い。したがって、ＳＳ-20の構築年代は、Ｈｒ-ＦＡの降灰以前すなわち６世紀初頭よりも古いと考えられる。また、ＳＳ-21の周溝の埋積土層中にはＡｓ-Ｂの本質物質の濃集が認められたが、これも上記と同様、ＳＳ-21はＡｓ－Ｂ降灰以前に周溝の埋積が始まったことになる。ただし、これだけでは、1108年よりどれくらい以前に構築されたのかはわからない。今後Ａｓ-Ｂよりも下位に指標テフラが検出されれば、古墳の構築年代により近い年代に迫ることができるであろう。また、今回の古墳は墳丘の削平が進んでいたため墳丘直下の旧表土試料を得ることはできなかったが、今後墳丘の遺存の良い古墳が調査される際には、墳丘下の旧表土中に含まれるテフラの確認を行うことで構築年代をより絞り込める可能性がある。

文献

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p．１－79．

新井房夫（1971）北関東ロームと石器包含層―特に前期旧石器文化層の諸問題．第四紀研究，10,p.317－329．

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代遺構の指標テフラ層．考古学ジャーナル，157，p.41－52．

早川由紀夫（1986）火山灰土の成因と堆積速度．火山，二集，31，p.131．

早津賢治（1988）テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロノロジー――ＡＴにまつわる議論に関係して―．考古学研究，34，p.18－32．

堀口万吉（1981）関東平野中央部における考古遺跡の埋没と地殻変動．地質学論集，20，p.79－94．

堀口万吉（1986）Ⅱ　埼玉県の地形と地質．新編埼玉県史　別編３　自然，p.7－74,埼玉県．

小林達夫・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男（1971）野川先土器時代遺跡の研究．第四紀研究,10，p.231－252．

久保純子（1988）相模野台地・武蔵野台地を刻む谷の地形―風成テフラを供給された名残川の谷地形―．地理学評論，61，p.25－48．

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰―姶良Tn火山灰の発見とその意義―．科学，46，p.339－347．

町田　洋・新井房夫（1992）「火山灰アトラス」．276p.，東大出版．

町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学―考古学研究と関係するテフラのカタログ―．渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」，p.865－928．

中村一明（1970）ローム層の堆積と噴火活動．軽石学雑誌，３，p．１－７．

山崎晴雄（1978）立川断層とその第四紀後期の運動．第四紀研究，16，p.231－246．

Ⅵ　考　察

はじめに

新屋敷遺跡Ｂ区においては、古墳跡をめぐる遺物・遺構が主体をなしている。特に、小円墳ながら15号墳では特徴ある埴輪が出土するなど、比較的良好な遺物に恵まれている。また、古墳群の在り方にしても、規則的なまとまりがみられ、群形成の具体相が把握できそうである。ここでは、本遺跡Ｂ区の調査・資料整理の過程で、浮かび上がってきた問題点を拾いだしておきたい。

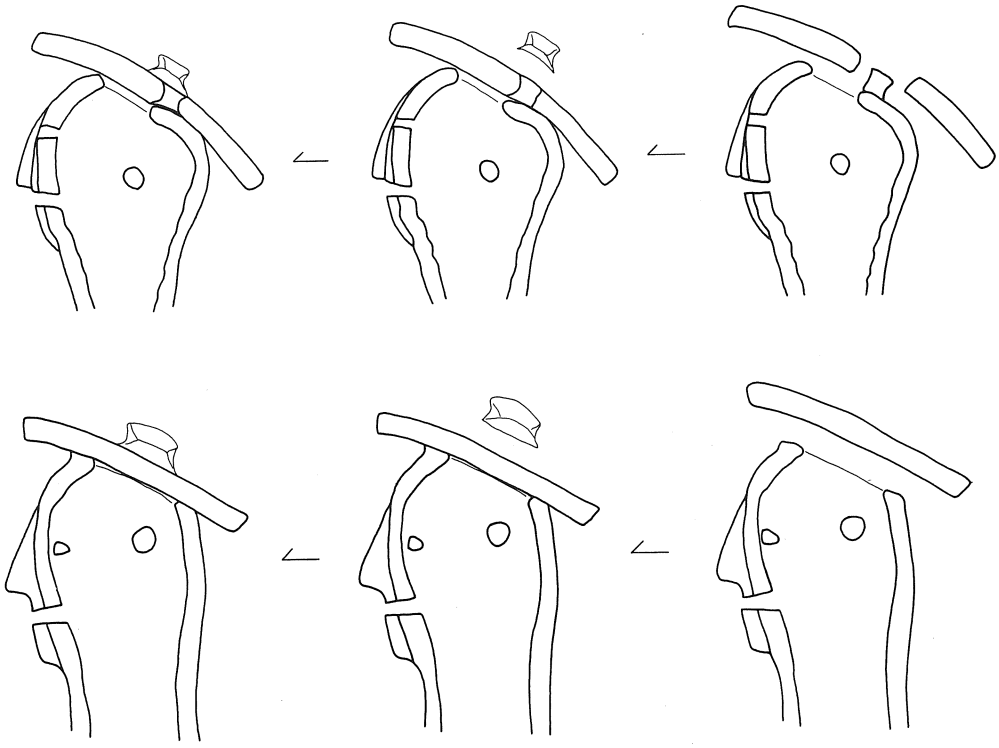
Ⅰ．複数種の円筒埴輪について

古墳に樹立された埴輪には、一種類ではなく何種類かの製品が混在する例があることは周知の事実であろう。本遺跡15号墳でも前述のとうり４タイプが確認された。そういった現象をどう理解するかについては、二つの考え方が提起されている。一つは追加説である。主体部が複数ある古墳や、周溝内の数ケ所から土器群等が検出され、墓前祭祀が数回行なわれたと推定される場合に、埴輪も追加、もしくは差し替えが行なわれたとする考え方である。県内の古墳では行田市稲荷山古墳、熊谷市鎧塚古墳などが類例となる。もう一つは複数供給説とでも称すべきもので、樹立は古墳築造時のみの一回に限られるが、埴輪の供給元が一ケ所ではなく複数の工房から搬入されたとする考え方である。例としては藤井寺市岡古墳が挙げられる。岡古墳では、埋葬主体は割竹形木棺が収められた粘土槨1基のみであるのに対して、円筒埴輪は３種類が検出された。調査者はそれを三つの埴輪工人集団が関与したと捉えている。大阪市長原85号墳においても、家形埴輪の分析により３群以上の工人グループの存在が予測されている。また、京都府ヒル塚古墳では主体部２基と円筒埴輪２種類があるものの、埴輪には編年上大きな年代差は認められず、これらの円筒埴輪は、蛍光Ｘ線分析によって、産地が異なることが明らかにされている。このようにまだまだ分析例は少なく、年代差、地域差、埴輪の樹立位置の相違といったものも考慮すべきで、いまだ断定は難しい。しかしながら、本遺跡15号墳を見た場合、円筒埴輪のタイプの相違は17号墳の埴輪との違いほどは隔たりが認められないこと、土器においても、出土位置から複数回の墓前祭祀が予想されるものの、型式的には一つにまとめられること等から、ここでは後者の複数供給説の立場をとりたい。

ところで、埴輪を分別する際、胎土・色調・焼成・調整痕等の違いを基準にするが、色調と焼成に関しては、一回の操業でも窯内の温度、焔の具合で様々に変化することが、羽曳野市野々上１号窯で確かめられている。また、調整痕ではハケメの本数を問題にするが、写真図版28に掲載したように、一回の調整に幅のことなるハケメが同時に刻まれている資料があり、注意を要する。

第６表　新屋敷遺跡Ｂ区出土埴輪の新古対照

項　　目	古式（15号墳）	新式（17号墳等）
色　　調	褐色　暗褐色	赤褐色
円筒　厚さ	0.8～1.3㎝	1.5～1.8㎝
口縁	ヨコナデ弱く、外面にハケメ残る	ヨコナデ強く、外面のハケメ消える
ヘラ記号	×　傘	傘　格子
ハケメ本数	８～９本／２㎝が多い	14～15本／２㎝が多い
形象　大きさ	小型	大型



第75図　埴輪製作技法模式図

Ⅱ．Ｂ区出土埴輪の新古

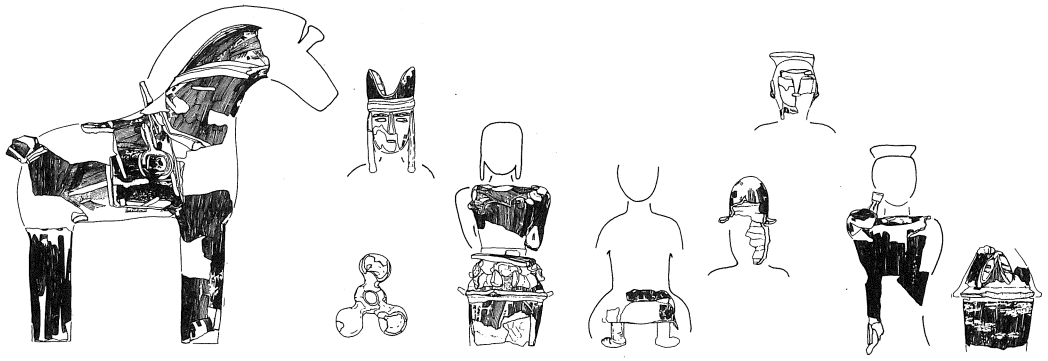
Ｂ区の古墳から出土した埴輪は二つに大別することができる。なおかつそれは年代差をも反映していると推定される。その違いを型式差と見做すには、対象とする時間と空間を広げ、より高次元から論じる必要があるが、本報告においてはそこまでの分析は物理的に不可能であるため、ここでは単に１遺跡内における遺物のタイプの相違と捉えることとし、古式・新式と呼ぶことにしたい。古式の埴輪は15号墳例に代表される。他に出土点数は少ないものの16号墳例も含まれると予想される。対して新式の埴輪は17号墳例がこれにあたる。18、19、21号墳例も新式の範疇であろう。両者の特徴については第６表にまとめた。円筒・形象共に色調・器壁の厚さが、円筒では特に、口縁の調整等が大きな違いとなっている。形象では人物、動物いずれも新式の方が古式よりもひとまわり大きい。表された種類も、資料が希少で断言はしがたいが、楯、家等が古式には認めれられないことが指摘できる。最も顕著な相違は、比較的数量に恵まれた女子頭部の成形技法の違いに現われている（第75図）。上段に示した古式の頭は全体に丸みを持ち、頭頂のかなり上まで粘土紐を巻き上げている。髷の接着は独特で、はじめに短い粘土紐を支点として置き、その前後に粘土板を接合する。髷の微妙な前後のバランスを表現するために、こういうやり方をとるのであろうか。理由は今一つ不明である。下段の新式の場合は、後頭部に丸みはなく、全体に円筒状を呈している。頭頂はすっぱりと工具で切られ、一枚板の髷が穴を塞ぐように貼り付けられる。顔面の粘土による肉盛り

も、古式では見られたが、新式では行なわれない。このように全体として、新式の方が簡略的な製作技法をとっており、印象の上でも新式より古式の方がリアリティを感じさせる。

Ⅲ．15号墳の形象埴輪

前章で報告したように、15号墳からはバラエティに富んだ形象埴輪が検出された。特に人物埴輪は顕著である。まず、弾琴像埴輪であるが、第７表の出土地一覧で明らかなように、県内で４例目の資料となった。15号墳例は６弦であり、岡部町白山古墳のものと同じで、しかもこの二つに限られる。脚を曲げた胡座像である点も白山、川本町船山古墳、行田市瓦塚古墳例等と共通している。15号墳を除く３例の内、瓦塚は明確ではないが、白山、船山の２例は二山形状の冠を被っている。15号墳で検出された同様の男子頭部は残念ながら、弾琴の胴体に接続しないことを報告で触れた。が、これら４例が多くの点で似通っていることを考えると、おそらく失われている頭部にもこのような冠があったものと思われる。ただし、その場合、背中に垂髪の痕跡がないことが問題にはなる。いずれにしても二山形の冠は弾琴奏者に関連する被りものなのであろう。

次に、類例の少ないものとしては、祭祀具と推定される棒状の道具を持つ女子が挙げられる。この棒状の道具は、四ツ竹と誤認されたり、太鼓の桴や巻物ではないかとされてきた。類例としては県内では上里町編笠塚古墳、川本町畠山字箱崎、生野山古墳群にある。県外では、群馬県赤堀町下触石山、真岡市亀山大塚古墳、和歌山市井辺八幡山古墳から出土している。この内、井辺八幡山例以外は、すべて右手で棒を持ち、前方に掲げている。その棒の形状は筒形で、長さは握り拳の0.9～1.5倍程度の短いものである。左手は生野山、下触石山、亀山大塚では、何も持たずに内側に曲げて、腹部あたりまで下げている。編笠塚例も左手に持ち物はない。15号墳例もおそらくは同様と思われる。下触石山例は襷掛け表現と首に玉飾りがあり、巫女と推定される。編笠塚、生野山例も首、手首に玉飾りがあるが、亀山大塚や15号墳には装飾、衣服の顕著な表現はない。なお、井辺八幡山例のみは男子像と推定される。この井辺八幡山例は他と比べると異質で、まず、左右両方の手に棒を持っており、それも単なる円筒ではなく、下端がすぼまり上端が膨らみを持っている。長さも他の例よりは若干長く、形の上では、群馬県境町上武士出土の太鼓を打つ人物が持っている桴に近い。したがって、この１例のみは、太鼓の桴そのものを表現しているものかもしれない。ところで、15号墳例の棒も、単なる円筒ではなく微妙な太さの変化が付けられ、先端には平らな頭が作り

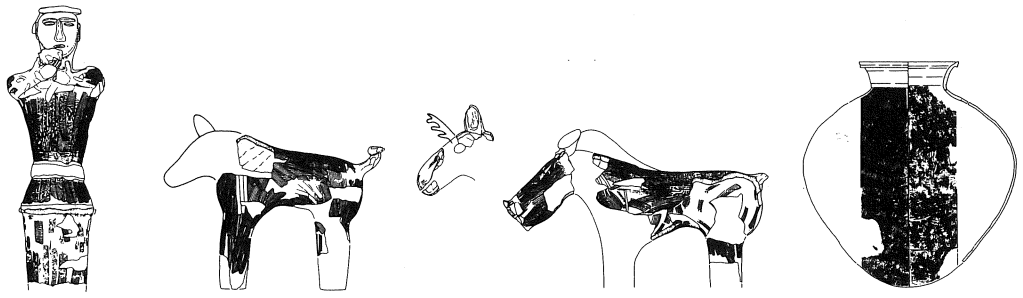


出される。ただし、上武士例のような丸みをもたず、桴のたんぽの表現とは見做しがたい。長さにしても、握り拳2つ分程度であり、打つ道具とするには短かすぎるのではないだろうか。

以上の類例から判断すると、このタイプの人物埴輪は、1、立ち姿の女子で、しかも身分は特定せず、2、桴ではない短筒状の道具を右手に持って前方に掲げ、3、左手は下げて腹部辺りに置いている。ということになる。では、一体この人物は何をしているのだろう。手がかりは、棒状の道具である。だが、すくなくとも現段階で出土している木製品や土製品、金属器の中から、相当するものを見いだすことは難しい。祭祀遺物として有頭棒状品なるものがあるが、それも用途に関して説明できるものではない。残念ながら、ここでは、解からないものを記述するときの常套手段として、“なんらかの祭祀”の一部を表現した埴輪である、という見解に留めておきたい。

15号墳の形象埴輪は、原位置を留めず、本来の樹立位置は遺物の平面分布から推定せざるを得ない。遺物は、別個体が重なっていたり、逆に一個体が広い範囲に飛び散っていたりと、かならずしも整然と分布しているわけではなく、前章で触れた出土位置の把握も、一つの復原案に過ぎない。しかし、たとえば須恵器の甕の破片が馬形埴輪の周辺に出土することはないし、また、猪や犬の破片が弾琴像の破片と重なって検出されているわけでもない。遺物の出土は、ある程度の分布の傾向を示しており、それが元の位置を反映していると考えることは可能であろう。そういった前提の上に立って、古墳に向かって見た場合の形象埴輪の配置について、第76図に想定図を示しておく。

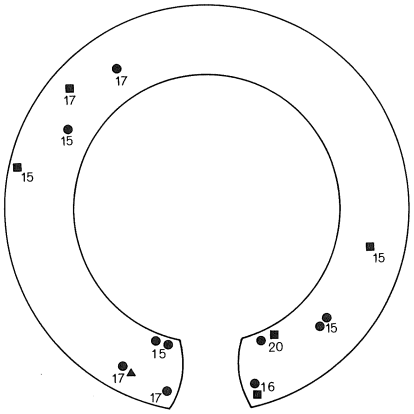
形象埴輪の解釈に関しては、様々な意見が出されているが、ここではそれらについて検討する余裕はない。ただし、形象埴輪が何らかの祭祀や事象を反映するものと考える視点に立つと、15号墳の資料はきわめて良好な例であると思われる。すなわち、これらの埴輪列は「供献」と「奏音」を含むいくつかのグループから成り立つと解釈できるのである。具体的には、供献グループとしては、須恵器大甕、狩猟を表現したと思われる犬、鹿、猪の小動物群、そして坏を捧げる女子があげられる。対して、奏音グループでは、弾琴像と鳴りものという点を重視しての三環鈴を指摘したい。他の埴輪に関しては、なにぶん全体像が解かる資料が少ないので、具体的に言いきれない歯痒さがあるが、上述のように棒を持つ人物が、おそらく儀礼的な行為を行なっていると考えられるし、座る女子や冠の男子も供献のグループとは少し性格が異なると思われる。いずれにしても個別には明確な役割分担があることは確かであり、全体として、葬送儀礼を表現するものと考えたい。



第76図　埴輪等樹立状況想定図

Ⅳ．土器の出土位置

新屋敷Ｂ区では、古墳周溝内から土器が数点出土しており、構成する土器の種類、量においてやや貧弱ではあるものの墓前祭祀であろうと考えた。また、その出土位置に関してはある程度のパターン化ができそうである。第77図に主要な土器の出土位置をまとめたが、ブリッジの両側と、古墳を時計に見立てた場合の10時および５時付近に集中している。ブリッジ両側のものは正面を意識していると考えられ、特に20号墳例は小沼耕地１号墳の前方部くびれ部の出土と共通する。



第77図　土器等の出土位置図

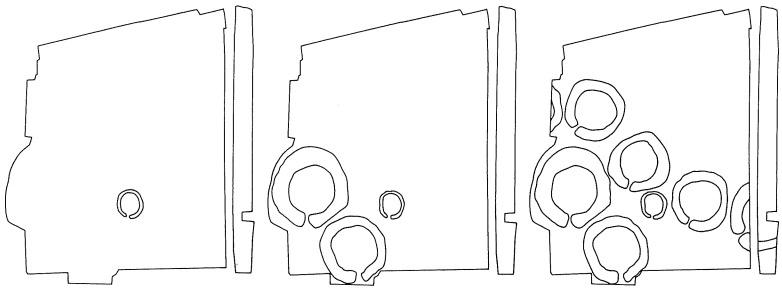
なお、小沼耕地では前方部前面にも１群が認められた。10時方向の土器群は埴輪列尻もしくは埴輪列に接している。これらは熊谷市鎧塚古墳の第一次墓前祭祀に似ている。５時方向については15号墳のみである。古墳の裏手と考えられる12時から３時までと、埴輪列のある７～９時付近には出土が確認されていない。前者の場合は古墳の裏手にあたること、後者では埴輪列を避けていることが想定される。墓前祭祀そのものの実態も明らかではなく、しかも周溝に残った遺物だけで類推するのは限界があるが、少なくとも祭祀場所の選定には、ある程度の規制があったと考えられる。

Ⅴ．古墳の造営年代

Ｂ区の古墳の造営時期に関しては、大量に出土している埴輪、残存状況のよい土器、周溝内に積もった火山灰などからある程度推定が可能である。埴輪においては、供給元である生出塚遺跡の資料と対照させたところ、15号墳のものなどは、操業時期の比較的早い段階の窯から出土した埴輪に、共通する点の多いことが解かった。時期的には６世紀の前葉ごろという推定を得た。

次に土器では、15号墳の須恵器大甕が、東海産であろうという予測の基に報告書等を調べた結果、湖西市西笠子64号窯から出土している甕の一つに、形、調整の特徴などが似ている例があり、これは６世紀第３～４四半期の年代が与えられていた。現物を実見していないため、確証性には欠けるが、本遺跡の方が、口縁の形態や内面当て具の痕跡が古い様相を呈しているので、時期的には若干遡るかもしれない。土師器では15、16、17、20号墳から、完形に近い模倣坏が数点出土している。この内、15～17号墳例は、系譜を同じくすると考えられ、型式的には15、16号墳のものが17号墳のものに先行すると判断される。20号墳例は、前者と系譜が異なっているものと思われるが、これらの中では、形態的に最も古い様相を見せていると捉えてよいだろう。実年代に関しては、近年の鬼高式土器の諸研究に照らしてみて、15～17号墳の坏を６世紀前半代に置くことができる。20号墳の坏は相対的に、同じく前半代の早い時期もしくは６世紀初頭の位置に留めたい。

18、19号墳からも土師器の破片が出土している。上記の資料とは系譜も異なるようであり、かつ小破片で、出土状況も安定していないため、確実な年代推定の根拠とはなりがたいが、少なくとも17号墳例を遡るものではないと思われる。



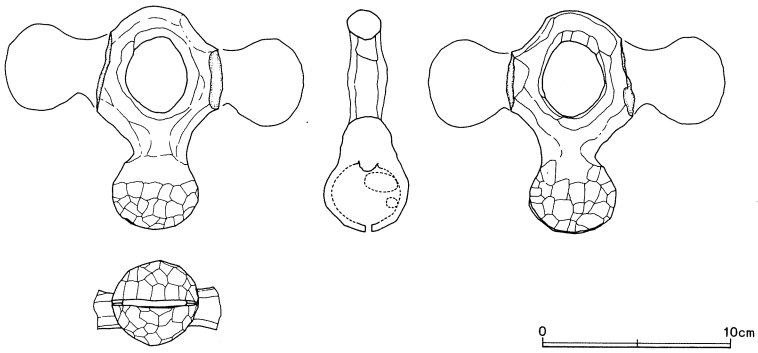
第78図　古墳造営順列図

火山灰については、前章の科学分析の報告によって、20号墳周溝内にあった火山灰がFAであるとの結論を得ている。したがって20号墳の造営時期は、火山灰の降下年代とされている5世紀末の直前に求めることができよう。なお、土師器、火山灰ともに、周溝底より10㎝を超える上位のレベルから検出されており、いずれも古墳造営よりは時期が下る。21号墳でも火山灰の分析を行なったが、FAは確認されず、採集試料は天仁元年（1108）降下の浅間Bであることが確認された。しかも前章で述べたように、17号墳では、主にこの浅間Bの上から形象埴輪が検出されている。

さて、以上の検討結果および埴輪の新古関係から、B区の古墳造営の順序は大きく分けて3段階に把握できる。まず、20号墳が最も古く、ついで15、16号墳が造られ、17、18、21、19、22号墳が相前後して継続すると考えられる。その期間は5世紀末から6世紀前半代の比較的短い期間である。平面位置関係を第78図に示したが、ブリッジの方向によってもいくつかのまとまりが見受けられる。すなわち［20、15、16号］、［17、18号］、［19、21号］が各々方向を同じくしている。これも造営の順序を反映しているのではないだろうか。遺構間の切り合いは全く見られず、平面位置で見るかぎり、20号墳を核として連綿と古墳が造られていった状況が窺われるのである。

Ⅵ. 大型円筒埴輪について

17号墳から直径30㎝を超える大型の円筒埴輪が2本検出されている。何をもって大型とするかについては基準は決めがたいが、山崎武氏は、生出塚窯跡の埴輪で5条凸帯以上の円筒を、それ以下のものと区別して捉えられている。17号墳の凸帯もおそらく5条もしくはそれ以上であると推定され、B区の古墳から一般的に出土する2条凸帯の円筒とは明らかに違っている。その大きさ、凸帯数は埼玉古墳群中の埴輪にも共通するものがあり、これら大型の円筒埴輪は、本来は首長墓クラスの古墳に使用が限定されていたのではないだろうか。県内では神川町諏訪の木古墳において、通常の円筒埴輪列の中に6条凸帯の大型円筒埴輪が現存で3本検出されている。古墳は直径14ｍの円墳で17号墳とほぼ同規模であり、大型円筒の配置も一定間隔をおいて樹立されているなど共通する点が多い。すくなくとも大型円筒は、古墳を巡る埴輪列の中に規則的に配置されていることから、意図的に使われたことは確かであり、17号墳では楯形埴輪を欠いていることなどを考えると、理由は不明だが、その代用的な役割と見做すことも可能ではないだろうか。



第79図　三環鈴形埴輪（伝我孫子出土）

Ⅶ. 三環鈴形埴輪

15号墳から出土している三環鈴形の形象埴輪は、ほとんど類例の知られていない遺物である。大きさは埼玉稲荷山古墳出土の三環鈴に比べるとひとまわり大きく、鈴は中空でしかも中には丸すら入れてあった。埴輪とはあくまでも人・物等をシンボライズしたものと規定するならば、それ自体が実際に鳴り物として機能するという事実はきわめて不可思議であると言える。調査担当者の間でも、「埴輪」ではなく、「土製模造品」とすべきではないかとの意見も出たほどである。

類例としては東京国立博物館所蔵遺物の中に、我孫子市出土とされる資料が一点のみある（第79図）。新屋敷と比べるとひとまわり小型で、鈴も非均等配置で中空。丸は土製ではなく、丸みを帯びた小石が大小二粒認められる。成形、ケズリ等の調整もていねいである。全体としてみて、我孫子資料のほうが15号墳のものより古い型式であると言えよう。三環鈴についてはそれが馬具であるのか、あるいは祭祀具であるのか、いまだ用途が不明であるが、両例とも剝落痕は認められないことから、馬形埴輪に接着されていたとは考えられない。出土位置からみても馬形埴輪と三環鈴形埴輪は地点が離れている。ただし唯一、三次市緑山古墳出土の馬形埴輪の尻に２個、あたかも鈴杏葉のごとくに三環鈴が表現されているので、一概に馬具説を否定することもできない。さらなる検討は、今後の資料の増加を待ってからの課題としておきたい。

参考・引用文献

若松良一　同一古墳における円筒埴輪の多様性の分析　法政考古学　7　1982
藤井寺市教育委員会　岡古墳　1989
（財）大阪市文化財協会　長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅱ　1990
八幡市教育委員会　ヒル塚古墳発掘調査概報　1990
羽曳野市教育委員会　古市遺跡群Ⅲ　1981
静岡県湖西市教育委員会　西笠子第64号窯跡発掘調査報告書　1987
特集・鬼高式土器の諸問題　考古学ジャーナル　342　1992
山崎武　鴻巣市生出塚遺跡　埋文さいたま　10　1992
埼玉県文化財保護課　児玉郡市文化財担当者会　児玉郡市における埋蔵文化財の成果と概要　1992
石山勲　九州出土の環鈴について　古代探叢　1980
広島県教育委員会　緑岩古墳　1983

第７表　埴輪弾琴像一覧

No	出　土　地	絃孔	突起	絃	共鳴槽の表現	弾き方	備　考
1	福島県泉崎村　原山1号墳	1	5	4	無	爪弾き	琴頭に円文
2	群馬県前橋市朝倉	2	(4)	4	有	爪弾き	
3	群馬県境町　天神山古墳	(1)	?	?	有	?	
4	栃木県真岡市　鶏塚古墳	(5)	?	5	無	?	琴頭に鈴
5	栃木県佐野市羽田	(1)	?	4	有	?	
6	茨城県岩瀬町	(4)	5	4	無	爪弾き	
7	伝・茨城県岩瀬町	(1)	6	5	有	爪弾き	
8	伝・茨城県大子町	5	5	5	無	爪弾き	
9	埼玉県川本町　舟山古墳	1	5	4	無	爪弾き	
10	埼玉県岡部町　白山古墳	1	(7)	6	無	爪弾き	
11	埼玉県行田市　瓦塚古墳	1	5	4	無	撥弾き	
12	埼玉県鴻巣市　新屋敷15号墳	1	6	6	無	?	
13	千葉県芝山町　殿部田1号墳	(4)	5	4	無	撥弾き	琴柱の表現あり
14	千葉県横芝町　姫塚古墳	(4)	?	4	無	?	琴柱の表現あり
15	神奈川県横須賀市　蓼原古墳	1	4	4	無	撥弾き	
16	大阪府	1	?	5	無	?	

※（　）は復元・推定した数

第８表　埴輪琴一覧

（弾琴像からの剝離を含む）

No	出　土　地	絃孔	突起	絃	共鳴槽の表現	備　考
1	伝・群馬県	1	5	5	有	
2	茨城県茨城町駒形	1	(5)	5	無	
3	茨城県筑波郡	1	(5)	5	無	
4	埼玉県行田市　稲荷山古墳	?	4	4	無	
5	埼玉県行田市　瓦塚古墳	?	6	5	無	
6	埼玉県行田市　奥の山古墳	1	?	4	無	
7	福岡県八女市　岩戸山古墳	?	?	5	無	琴柱の表現あり
8	出土地不明（「写真・登呂遺跡」に写真掲載）	1	4	5	無	

※（　）は復元・推定した数

（田中貴美江）

参考・引用文献

朝日新聞大阪本社企画部・大阪文化財センター　1988　『日本列島発掘展』
今井　道郎　1960　「和琴考」　『国学院雑誌』第61巻第６号
大場　磐雄　1973　「菅生発見の『やまとごと』上」　『どるめん』第１号
大場　磐雄　1974　「菅生発見の『やまとごと』下」　『どるめん』第２号
萩　美津夫　1977　『日本古代音楽史論』　吉川弘文館
橿原考古学研究所附属博物館　1982　『特別展　音の考古学　古代の響』
黒沢　隆朝　1956　『楽器の歴史』　音楽の友社
埼玉県教育委員会　1980　『埼玉稲荷山古墳』
埼玉県立博物館　1991　『特別展音のかたち　展示図録』
埼玉県立さきたま資料館　1986　『瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第４集
佐田　茂　1972　「沖ノ島発見の雛形琴について(1)」『西日本文化』第82号
佐田　茂　1972　「沖ノ島発見の雛形琴について(2)」『西日本文化』第83号
佐田　茂　1980　「古代琴雑考」『考古学雑誌』第66巻第１号
佐藤行哉・後藤守一　1931　「鶏塚古墳発見の埴輪」『考古学雑誌』第21号第９号
芝山はにわ博物館　1973　『芝山古墳群　殿塚・姫塚・木戸前１号墳・鮭のはにわ』
椙山　林繼　1980　「『やまとごと』の系譜」『国学院雑誌』第81巻第１号
滝口　宏　「千葉県芝山古墳群調査速報」『古代』第19・20号合併号
土浦市立博物館　1990　『常陸の埴輪―埴輪が語る古墳時代の常陸―』
東京国立博物館　1980　『図録目録―古墳時代遺物篇（関東Ⅰ）』便利堂
濱名　徳永　1980　『上総殿部田古墳・宝馬古墳』　芝山はにわ博物館
林　謙三　1958　「和琴の形態の発育経過について」『書陵部紀要』第10号
福島県教育委員会　1982　『原山１号墳発掘調査概報』
福島県立博物館　1988　『企画展　東国の埴輪』
ブリヂストン美術館　1958　『日本の美　はにわ展』
三木　文雄　1956　『埴輪の美しさ』　朝日新聞社
水野　正好　1977　「埴輪弾琴像幻想」　『月刊文化財』第169号
水野　正好　1978　「埴輪に見る琴の三種の構造」　『滋賀文化財だより』第13号
水野　正好　1979　「『琴歌譜』以前のコト」　『季刊邦楽』第18号
水野　正好　1979　「日本古代琴資料集成」　『奈良大学紀要』第８号
水野　正好　1980　「琴の誕生とその展開」　『考古学雑誌』第66巻第１号
森　豊　　1958　『写真・登呂遺跡』　社会思想社
森　豊　　1973　『弥生の琴』　第三文明社
安岡　路洋　1962　「男子弾琴埴輪について」　『埼玉文化月報』第120号
横須賀市教育委員会　1987　『蓼原　神明地区埋蔵文化財調査報告(1)』
吉川　英史　1979　「原始時代のコトについて考える」　『季刊邦楽』第18号

第９表　埼玉県形象埴輪出土遺跡地名表

【北足立】

番号	遺跡名	所在地	遺構概要（m）	種類・数量	文献
1	白幡本宿２号墳	浦和市白幡	円　墳　11.2	女１	1
2	白鍬塚山古墳	〃　白鍬	円　墳　30	人物・家１・盾２	2
3	東養寺古墳	川口市東本郷	円　墳	男１	3
4	南原１号墳	戸田市戸田南町	円　墳　16	男１・女１	4
5	一夜塚古墳	朝霞市岡３丁目	円　墳　50	女１	5・6
6	柊塚古墳	〃　〃	前方後円墳　60	人物・大刀・馬	6・7
7	井刈古墳	大宮市三橋４丁目	前方後円墳	女２・馬２	8・9
8	稲荷塚古墳	〃　〃	円　墳　35	男１・馬１	〃・〃
9	大宮西高校校庭	〃　〃	不　明	男２	〃・〃
10	三橋４丁目515番地	〃　〃	不　明	人物・馬	9
11	山王塚古墳	〃　〃	円　墳	男１	8
12	東宮下出土品	〃　東宮下	不　明	男（幾何学文様、鹿・弓の絵画）２	10
13	馬室埴輪窯跡	鴻巣市原馬室	埴輪窯　10基	男1・家2・大刀1・靫1・盾2・矛2・馬3	11・12・13
14	箕田古墳群	〃　箕田	不　明	男３	14
15	〃　２号墳	〃　〃	円　墳　32	人物１	〃
16	生出塚２号墳	〃　東３丁目	円　墳	家２・馬	15
17	〃　３号墳	〃　〃	円　墳　11	男２・大刀１・馬２	〃
18	〃　５号墳	〃　〃	円　墳　16	男１・家１・大刀２・靫１・矛１	〃
19	〃　６号墳	〃　〃	円　墳　18.4	男１・女２・馬（騎馬人物）３	16
20	生出塚埴輪窯跡	〃　〃	埴輪窯　38基	男（武人・文人）13・女（巫女）6・家6・蓋3・翳1・大刀9・靫2・鞆3・矛1・馬20・水鳥1・鹿1	14・15・16
21	新屋敷15号墳	〃　東４丁目	円　墳　14.3	男（弾琴）3・女4・馬1・鹿1・猪1・犬1・三環鈴1	本報告書
22	〃　17号墳	〃　〃	円　墳　12.7	女・馬	〃
23	〃　18号墳	〃　〃	円　墳　11.5	馬	〃
24	〃　19号墳	〃　〃	円　墳　12.8	家	〃
25	〃　21号墳	〃　〃	円　墳　14.7	女・馬	〃
26	笠原古墳群	〃　笠原	古墳跡	男２・馬１	14・17
27	川田谷字樋詰	桶川市川田谷	不　明	男３	18
28	〃　字若宮	〃　〃	不　明	男４・女２・大刀１・馬２	19・20・21
29	〃　字前原	〃　〃	不　明	馬１	〃・〃
30	ひさご塚古墳	〃　〃	前方後円墳　41	男１・女１	22
31	中井１号墳	北本市高尾	円　墳　20	男１・女１・家・馬	23・24

【入　間】

番号	遺跡名	所在地	遺構概要（m）	種類・数量	文献
32	西原古墳	川越市下小坂	前方後円墳　33	男２・馬２	25
33	下小坂４号墳	〃　〃	前方後円墳　30	人物	〃
34	南大塚４号墳	〃　豊田	前方後円墳　36	男6・女2・家1・大刀3・靫1・鞆1・矛2・馬2	26
35	古谷上字蔵根215	〃　古谷上	不　明	男２・女１・馬２	19
36	三福寺３号墳	坂戸市小山	円　墳　16	女１・馬１	27・147
37	塚の越１号墳	〃　〃	前方後円墳	男（正装・盾持人）３・女２・馬２	28

【比　企】

番号	遺跡名	所在地	遺構概要（m）	種類・数量	文献
38	三千塚古墳群	東松山市大谷	不明	男7・女（巫女椅座像）2・馬（裸馬）1	29・30・31
39	弁天塚古墳	〃　〃	前方後円墳　37	男2・鞆2・馬	29
40	長塚古墳	〃　〃	前方後円墳　37	靫1	〃
41	聖天台古墳群	〃　東平	円墳　15	男（舞踊）1・馬1	5
42	岩鼻2号墳	〃　松山	造出付円墳　30	人物	32
43	〃　3号墳	〃　〃	円墳　19	男（水鳥を冠した人物）1・馬1	33
44	おくま山古墳	〃　古凍	前方後円墳　62	男（盾持人）4	5
45	下道添古墳	〃　〃	造出付円墳　24.5	女1・盾1・鶏1	34
46	古凍根岸裏4号墳	〃　〃	円墳　31	男2・大刀1	35
47	〃　7号墳	〃　〃	円墳　17.6	男2・女（巫女）1	〃
48	柏崎字名所352	〃　柏崎	不明	男1・馬2	19
49	若宮八幡古墳	〃　石橋	円墳　30	人物・靫	36
50	下唐子出土品	〃　下唐子	不明	槍1	19
51	諏訪山古墳群	〃　西本宿	不明	男（正装男子全身像）1	33
52	諏訪山33号墳	〃　〃	円墳　29	蓋？・甲冑？	36
53	高坂出土品	〃　高坂	不明	男（顔をゆがめた男）1	5
54	代正寺9号墳	〃　宮鼻	円墳　17	女（壺を捧持する巫女）2・馬1	37
55	〃　15号墳	〃　〃	円墳　16	男・女・大刀1・鞆1・盾2・馬2	〃
56	桜山埴輪窯跡	〃　田木	埴輪窯　17基	男8・女2・家2・高坏3・甕1・大刀2・靫2・鞆1・盾2・馬10・犬1	38
57	屋田5号墳	嵐山町川島	円墳　19	男4・家2・大刀1・靫1・盾1・矛1・馬2	39
58	古里古墳群	〃　古里	不明	男（靫負人）2	5
59	古里駒込1号墳	〃　〃	円墳　20	人物・家1・馬	40
60	稲荷塚古墳	川島町下小見野	不明	馬1	41
61	和名埴輪窯跡	吉見町和名	埴輪窯　4基	馬	42
62	和名字沼下出土品	〃　〃	不明	男2・女1	19
63	月輪古墳群	滑川町月輪	不明	男2・馬1	31・43
64	寺前2号墳	〃　福田	円墳	人物・馬	44
65	福田出土品	〃　〃	不明	男1	31・43

【秩　父】

番号	遺跡名	所在地	遺構概要（m）	種類・数量	文献
66	矢那瀬出土品	長瀞町矢那瀬	不明	男1	45
67	原谷字刈屋出土品	皆野町原谷	不明	家1	46・47

【児　玉】

番号	遺跡名	所在地	遺構概要（m）	種類・数量	文献
68	公卿塚古墳	本庄市北堀	造出付円墳　65	家・囲・甲冑・盾	48
69	御手長山古墳	〃　小島	円墳　42	男2・家2・馬	49
70	石神境古墳	〃　〃	円墳　16	男1・女2・家2・馬1	50・51
71	三杢山7号墳	〃　〃	前方後円墳　29	人物・馬	52

番号	遺跡名	所在地	遺構概要（m）	種類・数量	文献
72	蛭子塚１号墳	本庄市小島	円　墳	家	51
73	塚合41号墳	〃　台町	円　墳　11	家１	53
74	せきね古墳	〃　中央３丁目	不　明	女１・馬１	54
75	諏訪町出土品	〃　諏訪町	不　明	翳１・盾１	55
76	赤坂埴輪窯跡	〃　西五十子	埴輪窯	家・馬	56
77	宥勝寺北裏埴輪窯	〃　前山	埴輪窯　３基	人物・家・靱・翳１・大刀２・馬１	56・57
78	金鑽神社古墳	児玉町入浅見	円　墳　67.6	器財？	48
79	長沖１号墳	〃　長沖	円　墳　16	男１・馬２	58
80	〃　８号墳	〃　〃	前方後円墳 26.3	男１・女１・靱１・馬１	〃
81	〃 21号墳	〃　〃	円　墳　26	人物・馬	〃
82	〃 22号墳	〃　〃	円　墳　22	男１・馬１	〃
83	〃 23号墳	〃　〃	円　墳　20	家１・靱１	〃
84	〃 25号墳	〃　〃	前方後円墳　40	男１	〃
85	生野山古墳群	児玉町・美里町	不　明	男（武人）１・女１・鹿１	45・59・60
86	〃　９号墳	〃・〃	円　墳　42	人物・器財・馬	60
87	〃　12号墳	〃・〃	円　墳　17	人物	〃
88	〃　15号墳	〃・〃	円　墳　20	人物	〃
89	〃　16号墳	〃・〃	前方後円墳　52	器財	〃
90	〃　65号墳	〃・〃	円　墳　27	器財・動物	〃
91	八幡山埴輪窯跡	〃　八幡山	埴輪窯　２基	女・翳・馬・鳥	61
92	庚申塚古墳	〃　秋山	円　墳　34	人物・盾・馬	62
93	旧金屋村南金屋	〃　金屋	円　墳	家１	47・63
94	〃　長神	〃　〃	不　明	家１	47
95	旧東児玉村十條	〃　十條	不　明	女（巫女）１	64
96	大御堂稲荷塚古墳	上里町大御堂	円　墳　24.6	人物２・靱１	65
97	編笠塚古墳	〃　〃	円　墳　18	男・馬	66
98	寺浦１号墳	〃　長浜	円　墳　14	男（四ッ竹）１・女（舞踊）３・馬１	５・67
99	原田２号墳	〃　帯刀	円　墳　18	人物３・馬３	67
100	帯刀１号墳	〃　〃	円　墳　30	男（盾持人）２・女１	〃
101	〃 98号墳	〃　〃	円　墳　25	人物・馬	68
102	熊野神社古墳	〃　堤	円　墳	人物・馬１	69
103	広木大町１号墳	美里町広木	円　墳	男２	70
104	〃　８号墳	〃　〃	前方後円墳 38.5	人物	〃
105	〃　９号墳	〃　〃	前方後円墳　43	人物	〃
106	〃　11号墳	〃　〃	円　墳	人物	〃
107	〃　２号墳	〃　〃	円　墳　18	人物３・家１・靱２・鞆２・盾１・馬１	71
108	〃　４号墳	〃　〃	円　墳　11.8	人物・大刀・靱２・鞆１・矛１・馬２	〃
109	〃　５号墳	〃　〃	円　墳　17.4	女１・靱２・馬	〃
110	〃　７号墳	〃　〃	円　墳　14.4	靱２・馬１	〃
111	〃　11号墳	〃　〃	円　墳　13.7	男2・大刀3・靱8・鞆4・盾1・矛2・馬1	〃
112	〃　12号墳	〃　〃	円　墳　20	鞆１	〃
113	〃　14号墳	〃　〃	円　墳　10.3	人物１・靱１・馬２	〃
114	〃　15号墳	〃　〃	円　墳　11.5	男１・女１・鞆１・馬２	〃
115	〃　18号墳	〃　〃	円　墳　14	人物３・家１・馬１	〃

番号	遺跡名	所在地	遺構概要（m）	種類・数量	文献
116	広木大町21号墳	美里町広木	円墳 12	人物1・家1・馬1	71
117	〃 24号墳	〃 〃	円墳 7.5	人物1・鞆・馬	〃
118	〃 25号墳	〃 〃	円墳 11.3	人物2・家1・馬1	〃
119	〃 26号墳	〃 〃	円墳 17	鞆1	〃
120	〃 27号墳	〃 〃	円墳 18.5	女1・靫1・馬1	〃
121	〃 28号墳	〃 〃	円墳 12	馬1	〃
122	〃 31号墳	〃 〃	円墳 13.2	男2・女1・馬	〃
123	〃 40号墳	〃 〃	前方後円墳 43	男3	〃
124	〃 41号墳	〃 〃	円墳 19	男2・女1・馬1	〃
125	後山王5号墳	〃 〃	円墳	人物・馬・鳥（小型）	55
126	一本松古墳	〃 猪俣	円墳 30	靫4・馬2	72
127	塚本山1号墳	〃 下児玉	円墳 25	大刀	73
128	〃 15号墳	〃 〃	円墳 20	家1	〃
129	志渡川古墳	〃 駒衣	円墳 40	家・短甲（草摺）	68
130	白石2号墳	〃 白石	円墳 15.5	女1	74
131	〃 3号墳	〃 〃	前方後円墳 32.5	人物・翳1・帽子1・大刀1・靫1・矛1	〃
132	十条出土品	〃 十条	不明	男（盾持人）1	75
133	旧大沢村出土品	〃 大沢	不明	男（正装男子全身象）1	76
134	美里町出土品	〃	不明	男（正装男子全身象）1	19
135	北塚原2号墳	神川町新里	円墳 14.8	人物・靫・馬	77
136	〃 3号墳	〃 〃	円墳 16.5	人物・家2・大刀・靫	〃
137	〃 4号墳	〃 〃	円墳 17.5	人物・靫	〃
138	〃 5号墳	〃 〃	円墳 12.5	人物	〃
139	〃 6号墳	〃 〃	円墳 11	人物・大刀・靫	〃
140	〃 7号墳	〃 〃	円墳 15.2	人物・盾・馬	〃
141	〃 8号墳	〃 〃	円墳 15.5	靫	〃
142	〃 9号墳	〃 〃	前方後円墳 37	男2・女1・大刀・靫・盾・馬・鶏1	〃
143	〃 11号墳	〃 〃	円墳	人物・盾	〃
144	〃 12号墳	〃 〃	円墳 19	人物・馬	〃
145	城戸野古墳群	〃 新宿	不明	家1	47
146	〃 1号墳	〃 〃	円墳 12	男・女・大刀・靫1	78
147	〃 2号墳	〃 〃	円墳 13	男・女・家・大刀2・靫2・馬	〃
148	十二ケ谷戸3号墳	〃 十二ケ谷戸	円墳 18	人物3・大刀2・靫・馬	〃
149	〃 4号墳	〃 〃	円墳 17	馬3	〃
150	〃 10号墳	〃 〃	円墳 17	人物2・大刀・靫・馬	〃
151	〃 15号墳	〃 〃	円墳 18	男2・女1・帽子1・大刀3・靫4・馬2・鶏1	〃
152	諏訪ノ木古墳	〃 元阿保	円墳 14	男・女（女陰の表現）・大刀・靫・馬	79・80
153	関口字池上出土品	〃 関口	不明	男（武人全身像）1	19
154	関口出土品	〃 〃	不明	女（頭に壺をのせる女）1	81・82
155	神川町出土品	〃	不明	鷹1	19

【大　里】

番号	遺跡名	所在地	遺構概要（m）	種類・数量	文献
156	鎧塚古墳	熊谷市上中条	前方後円墳　43	人物	83
157	上中条出土品	〃　〃	不　明	男(短甲武人) 5・女1・馬（飾馬）1	19・30・84
158	女塚1号墳	〃　今井	前方後円墳　46	男(弾琴・武人・楽人・盾持人・丸帽) 5	85
159	〃 2号墳	〃　〃	円　墳　23.5	男2・馬3・鹿1・猪1	〃
160	三ケ尻林4号墳	〃　三ケ尻	円　墳　26.5	男7・家3・大刀3・靫2・馬3	86
161	天神前遺跡	〃　石原		人物・器財・動物	87
162	東別府出土品	〃　東別府	不　明	男（農夫）1	88・89
163	割山埴輪窯跡	深谷市上野台	埴輪窯　20基	男1・家2・翳1・大刀2・靫10・盾5・矛4・馬5	90・91・92
164	木ノ本浅間山古墳	〃　原郷	不　明	人物1	93
165	上敷免1127出土品	〃　上敷免	不　明	男4	19・94
166	上敷免出土品	〃　〃	不　明	男3・女3・馬1	〃・〃
167	上増田6号墳	〃　上増田	円　墳　15	馬	95
168	〃 12号墳	〃　〃	円　墳　13	人物	〃
169	〃 字西浦759	〃　〃	不　明	男1・女1・馬1	19
170	萱場443出土品	〃　萱場	不　明	男1・女1・馬	〃
171	上江袋出土品	妻沼町上江袋	不　明	男1・鞆1・馬1	96
172	用土出土品	寄居町用土	不　明	人物・家1・馬1	97
173	千光寺1号墳	岡部町山崎	前方後円墳 28.1	男3・女1・靫1・盾1・馬	98
174	山崎山出土品	〃　〃	不　明	男1・女1・家2・馬1	99
175	白山5号墳	〃　岡新田	円　墳	男（琴断片）	100・101
176	〃 12号墳	〃　〃	円　墳	女（瓢を捧持する巫女）	100
177	〃 17号墳	〃　〃	前方後円墳　28	男（弾琴）	100・101
178	下稲荷塚古墳	〃　山河	円　墳	男3・家2・馬1	47・102
179	本郷出土品	〃　本郷	不　明	男1・翳1	45
180	四十坂出土品	〃　四十坂	不　明	男（舞踊）1・女（四ッ竹）1	5
181	円山2号墳	大里村箕輪	円　墳　17	男1・女1・翳2・帽子2・靫2	41・103
182	〃 3号墳	〃　〃	円　墳　17	人物	〃・〃
183	冑山字北谷出土品	〃　冑山	不　明	男2	103
184	甲山周辺古墳	〃　〃	円　墳　20	男1	〃
185	冑山字大境出土品	〃　〃	不　明	男1	〃
186	野原古墳群	江南町野原	不　明	男（武人）1・鞆1	45・104
187	野原古墳	〃　〃	前方後円墳　40	男(舞踊)5・女2・翳2・大刀1・矛1・馬2	105・106
188	権現坂埴輪窯跡	〃　千代	埴輪窯　3基	人物（戟を持つ盾持人）・靫・馬	107・108
189	姥ケ沢埴輪窯跡	〃　〃	埴輪窯　8基	人物・家・大刀・馬・鹿	109
190	小原出土品	〃　小原	不　明	男（武人全身像）1	97
191	黒田1号墳	花園町黒田	円　墳　17.5	女1	110
192	〃 2号墳	〃　〃	前方後円墳　33	男1・馬2	110・111
193	〃 4号墳	〃　〃	円　墳　18	男	110
194	〃 6号墳	〃　〃	円　墳　17	人物・靫1・馬	〃
195	〃 9号墳	〃　〃	円　墳　12	人物・馬	〃
196	〃 10号墳	〃　〃	円　墳　14	人物・靫	〃
197	〃 11号墳	〃　〃	円　墳　18	人物・帽子1・靫2	〃
198	〃 15号墳	〃　〃	円　墳　12	女1	〃

番号	遺跡名	所在地	遺構概要（m）	種類・数量	文献
199	黒田17号墳	花園町黒田	円墳 22	人物・大刀２・馬２	110・112
200	小前田１号墳	〃 小前田	円墳 13	靫１	113
201	〃 ２号墳	〃 〃	前方後円墳 30	男１・家１・盾３	113・114
202	〃 ６号墳	〃 〃	円墳 15	男１・女１・靫２・馬１	113
203	〃 ８号墳	〃 〃	円墳 15	男１・女１・馬１	〃
204	〃 ９号墳	〃 〃	円墳 17	男２・女２・馬１	〃
205	〃 10号墳	〃 〃	円墳 18	男３・女４・靫５・馬２	〃
206	〃 11号墳	〃 〃	円墳 12.3	男１・女３・盾	〃
207	〃 12号墳	〃 〃	円墳 12	人物・馬１	〃
208	〃 15号墳	〃 〃	円墳 14	男２	〃
209	上ノ城出土品	〃 上ノ城	不明	家１	47・63
210	見目１号墳	川本町田中	円墳 19	女１	115
211	舟山古墳	〃 畠山	不明	男（弾琴）１・家１・馬１	116
212	箱崎古墳群	〃 〃	不明	男２・鞆１	〃
213	〃 ３号墳	〃 〃	円墳 17	人物・翳１・靫２・盾１・馬	117
214	箱崎182-1出土品	〃 〃	不明	人物・家・馬	19
215	富士ノ腰261・263	〃 〃	不明	家１・靫１	〃

【北埼玉】

番号	遺跡名	所在地	遺構概要（m）	種類・数量	文献
216	埼玉古墳群	行田市埼玉	不明	白鳥１	45
217	稲荷山古墳	〃 〃	前方後円墳 120	男(弾琴・武人・盾持人・靫負人)12・女（巫女）２・家３・盾２・馬２・猪１	118
218	丸墓山古墳	〃 〃	円墳 105	人物・大刀・靫・盾	119
219	二子山古墳	〃 〃	前方後円墳 135	男・女・蓋１・靫・盾・馬・水鳥１	120
220	瓦塚古墳	〃 〃	前方後円墳 71	男(弾琴・盾持人・舞踊）・女(巫女）・家２・大刀１・盾３・馬３・水鳥２・鹿１・犬１	121・122・123・124
221	愛宕山古墳	〃 〃	前方後円墳 53	男(弾琴・武人)3・家・蓋1・大刀3・盾・馬	125
222	奥の山古墳	〃 〃	前方後円墳 66.5	男（弾琴・騎馬）・女・家・大刀・靫・馬・鹿	126
223	中の山古墳	〃 〃	前方後円墳 79.2	壺形埴輪（須恵質）	〃
224	天王山古墳	〃 〃	円墳 27	男１	119
225	梅塚古墳	〃 〃	円墳 23.5	男１・大刀・馬	〃
226	埼玉４号墳	〃 〃	円墳 17.5	人物・馬	〃
227	埼玉５号墳	〃 〃	円墳 26	人物・家・馬	〃
228	酒巻１号墳	〃 酒巻	前方後円墳 50	馬３	41
229	〃 ６号墳	〃 〃	前方後円墳 15	人物１・馬	127・128
230	〃 ８号墳	〃 〃	前方後円墳 27	人物２・馬３	〃・〃
231	〃 10号墳	〃 〃	円墳 9	家	128
232	〃 14号墳	〃 〃	円墳 42	男(正装男子・力士・馬曳)7・女3・翳3・大刀7・靫7・馬(旗を立てた飾馬・裸馬)4	129
233	〃 15号墳	〃 〃	前方後円墳 34.2	人物3・家1・大刀4・靫2・鞆2・盾2・馬1	130
234	〃 17号墳	〃 〃	円墳	靫１	131
235	〃 19号墳	〃 〃	不明	人物１・馬１	〃

番号	遺跡名	所在地	遺構概要（m）	種類・数量	文献
236	斎条5号墳	行田市斎条	円墳 19	人物・家・馬	132
237	三方(宝)塚古墳	〃 藤原町	前方後円墳 58	人物・馬	133
238	北大竹遺跡2号墳	〃 〃	円墳	人物6・馬2	〃
239	鶴ケ塚古墳	加須市樋遣川	円墳 15	靫1	134・135
240	大越古墳群	〃 大越	不明	男2・女1	〃・〃
241	保呂羽堂古墳	羽生市上羽生	円墳 21	男1	136
242	尾崎古墳群	〃 中尾崎	不明	女1	〃
243	発戸1393出土品	〃 発戸	不明	女1・馬1	19
244	小沼耕地1号墳	騎西町上種足	前方後円墳 39	男·女4·家·盾7·馬2·水鳥3·鹿1·猪1·犬1	137
245	南河原字町出土品	南河原村南河原	不明	男2	19

【南埼玉】

番号	遺跡名	所在地	遺構概要（m）	種類・数量	文献
246	内牧4号墳	春日部市内牧	方墳 20	男1	138
247	浄安寺境内古墳	岩槻市本町5丁目	不明	人物2	139
248	栢間古墳群	菖蒲町下栢間	不明	男1・女3	140
249	東浦古墳	〃 小林	前方後円墳 55	馬	141

【追　加】

番号	遺跡名	所在地	遺構概要（m）	種類・数量	文献
250	牛塚山6号墳	坂戸市小沼	円墳 27	人物・馬1	142
251	天神塚古墳	皆野町金崎	円墳 15.6	人物	143
252	森西1号墳	本庄市下野堂	円墳 20	人物・鳥	144
253	山の神古墳	〃 小島	円墳 40	人物・馬	〃
254	後山王3号墳	美里町広木	円墳	人物・靫・大刀・馬	145
255	後山王16号墳	〃 〃	円墳	人物・馬	〃
256	大仏二子塚古墳	〃 大仏	前方後円墳 43	馬	146
257	白岩銚子塚古墳	神川町白岩	前方後円墳 46	器財・馬	143

（大谷　徹）

文献一覧

1．庄野靖寿 1980『白幡本宿遺跡』埼玉県遺跡発掘調査報告書第29集
2．宮崎由利江 1989『白鍬宮腰遺跡発掘調査報告書(第2次)』浦和市遺跡調査会報告書第123集
3．川口市 1986『川口市史』考古編
4．塩野 博・伊藤和彦 1970『南原(高知原)遺跡』戸田市文化財調査報告3
5．若松良一 1988『はにわ人の世界』埼玉県立さきたま資料館
6．朝霞市 1989『朝霞市史』通史編
7．野沢 均 1992『柊塚古墳』朝霞市教育委員会
8．大宮市 1968『大宮市史』第1巻

9．笹森紀己子 1987「稲荷塚古墳周溝確認調査報告」大宮市文化財調査報告第23集
10．笹森紀己子 1988「付編　大宮市東宮下出土の埴輪について」『中里遺跡・篠山遺跡』大宮市遺跡調査会
11．塩野 博・増田逸朗・駒宮史朗 1978『馬室埴輪窯跡群』埼玉県埋蔵文化財調査報告第７集
12．山崎 武 1992『埼玉遺指定史跡馬室埴輪窯跡環境整備報告書』
13．山崎 武 1992『鴻巣市遺跡群 Ⅷ』
14．鴻巣市 1989『鴻巣市史』資料編１　考古
15．山崎 武他 1981『生出塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会報告書第２集
16．山崎 武・岡田賢治 1987『鴻巣市遺跡群Ⅱ 生出塚遺跡（Ａ地点）』鴻巣市文化財調査報告第２集
17．塩野 博 1964「鴻巣市笠原発見の埴輪―形象埴輪の特異な出土の一例―」『埼玉研究』第９号
18．和田千吉 1904「武蔵北足立郡樋詰の埴輪土偶」『考古界』第３編第９号
19．東京国立博物館 1986『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇（関東Ⅲ）
20．桶川市 1979『桶川市史』第２巻
21．八木奘三郎 1897「常武両国発見の埴輪に就いて」『東京人類学会雑誌』第12巻 第131･137号
22．塩野 博 1969『川田谷ひさご塚古墳』桶川町文化財調査報告２
23．横川好富 1972『中井１号古墳発掘調査報告』北本市の埋蔵文化財
24．北本市 1990『北本市史』第３巻上 自然原始編
25．川越市 1972『川越市史』第１巻 原始古代編
26．小泉 功・田中 信 1988『南大塚古墳群』川越市遺跡調査会
27．今井 堯・橋口尚武 1988「坂戸市入西石塚と出土遺物の研究」『坂戸風土記』第14号
28．昼間孝志 1991『塚の越遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第101集
29．金井塚良一編 1976『北武蔵考古学資料図鑑』
30．大野雲外・柴田常恵 1903「図版考説」『東京人類学雑誌』第18巻第207号
31．金井塚良一 1983「県立博物館が収蔵・保管する比企郡出土の形象埴輪について」『埼玉県立博物館紀要』10
32．宮島秀夫 1989『岩鼻遺跡』東松山市文化財調査報告書第18集
33．東松山市 1981『東松山市史』資料編第１巻 原始･古代･中世 遺跡･遺構･遺物編
34．坂野和信 1987『下道添遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集
35．村田健二 1984『古凍根岸裏遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第37集
36．若松良一・山川守男・金子彰男 1987『諏訪山33号墳の研究』
37．鈴木孝之 1991『代正寺・大西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第110集
38．水村孝行・岡村和子 1982『桜山窯跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第７集
39．今井 宏 1984『屋田・寺ノ台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第32集
40．植木 弘 1987『古里古墳群』嵐山町遺跡調査会報告２
41．埼玉県 1982『新編 埼玉県史』資料編２ 原始･古代 弥生･古墳
42．吉見町 1988『吉見町史』上巻
43．滑川村 1984『滑川村史』通史編
44．高柳 茂 1986『寺前古墳群・大道古墳』滑川町文化財調査報告第３集
45．埼玉県立博物館 1984『杖刀人とその時代』
46．後藤守一 1931「埴輪家の研究」(2)『人類学雑誌』第46巻第12号
47．後藤守一 1933「埴輪家の研究」『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』
48．埼玉県史編さん室 1986『埼玉県古式古墳調査報告書』
49．長谷川 勇 1978『埼玉県本庄市御手長山古墳発掘調査報告書』本庄市教育委員会
50．本庄市 1986『本庄市史』通史編
51．増田一裕 1989『埼玉県本庄市旭・小島古墳群発掘調査報告書 Ⅱ』
52．大東今日子 1984『本庄遺跡発掘調査報告書―夏目遺跡・三杢山７号墳―』
本庄市埋蔵文化財調査報告第６集
53．菅谷浩之 1979『本庄市塚合古墳調査報告書』本庄市教育委員会
54．佐藤好司 1988「本庄市内出土の埴輪」『本庄市歴史民俗資料館紀要』第２号
55．本庄市歴史民俗資料館 1986『埴輪展―本庄付近の埴輪と副葬品―』
56．本庄市 1976『本庄市史』資料編

57. 橋本博文 1980『宥勝寺北裏遺跡』宥勝寺裏遺跡調査会
58. 山崎 武他 1980『長沖古墳群』児玉町文化財調査報告書第1集
59. 西口正純 1992「伝児玉町生野山古墳群出土の動物埴輪（鹿）」『埼玉県立博物館紀要』17
60. 菅谷浩之・駒宮史朗 1973「児玉町・美里村生野山古墳群発掘調査概要」『第6回遺跡発掘調査報告会』発表要旨
61. 柳 進 1961『児玉町八幡山埴輪焼場窯跡発掘報告書』
62. 菅谷浩之他 1990『秋山古墳群—庚申塚古墳・諏訪山古墳の調査—』児玉町史資料調査報告　古代第2集
63. 大場磐雄 1931「埴輪三件」『考古学雑誌』第21巻第2号
64. 後藤守一 1942「所謂袈裟衣着用埴輪について」『日本古代文化研究』
65. 菅谷浩之 1970『大御堂稲荷塚古墳調査報告書』上里村教育委員会
66. 丸山 修 1992「上里町編笠塚古墳の調査」『第25回 遺跡発掘調査報告会』発表要旨
67. 上里町 1992『上里町史』
68. 佐藤好司 1985「児玉地域における埴輪の様相」『埴輪の変遷—普遍性と地域性—』
69. 塩野 博・山崎 武 1985「埼玉県」第17回埋蔵文化財研究会『形象埴輪の出土状況』≪資料≫
70. 菅谷浩之・笹森健一 1975『広木大町古墳群発掘調査概報』
71. 小渕良樹 1980『広木大町古墳群』埼玉県遺跡調査報告第40集
72. 中村倉司 1980『一本松古墳』埼玉県遺跡調査会報告第39集
73. 増田逸朗他 1977『塚本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集
74. 長滝歳康 1991『白石古墳群・羽黒山古墳群』美里町遺跡発掘調査報告書第7集
75. 埼玉県立博物館 1977『埼玉県立博物館展示解説』歴史Ⅰ
76. 柴田常恵 1912「武蔵国児玉郡大沢村発見の埴輪土偶」『人類学雑誌』第28巻第4号
77. 柳田敏司・増田逸朗 1971「北塚原古墳群発掘調査概要」『第4回 埼玉県遺跡発掘報告会』発表要旨
78. 菅谷浩之・増田逸朗 1973『青柳古墳群発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第19集
79. 本庄市歴史民俗資料館 1990『児玉郡市最新出土品展』
80. 埼玉県教育委員会 1990『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和63年度
81. 柴田常恵 1905「上野武蔵の古墳及び先史遺跡」『東京人類学会雑誌』第20巻233号
82. 柴田常恵 1905「武蔵国児玉郡丹生村関口発見埴輪土偶」『東京人類学会雑誌』第21巻第235号
83. 寺社下 博 1981『鎧塚古墳』昭和55年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
84. 淡 崖 1887「埴輪の事」『東京人類学会雑誌』第2巻第11号
85. 寺社下 博 1983『めづか』昭和57年度熊谷市埋蔵文化財調査報告
86. 小久保 徹・剣持和夫 1983『三ケ尻天王・三ケ尻林(1)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集
87. 埼玉県教育委員会 1992『埼玉県埋蔵文化財調査年報』平成2年度
88. 埼玉県教育委員会 1984『埼玉県指定文化財調査報告書』第14集
89. 杉崎茂樹 1988「県指定『農夫埴輪』について」『調査研究報告』第1号 埼玉県立さきたま資料館
90. 小沢国平 1964『割山埴輪窯遺跡』深谷市教育委員会
91. 今泉泰之 1981『割山遺跡』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
92. 関 義則・田中正夫 1982『割山遺跡（第3次）』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
93. 深谷市 1969『深谷市史』
94. 和田千吉 1912「武蔵国大里郡上敷免発掘の埴輪」『考古学雑誌』第2巻第6号
95. 澤出晃越・古池晋禄 1991『明戸南部遺跡群Ⅰ』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第29集
96. 妻沼町 1977『妻沼町誌』
97. 国学院大学 1977『考古学資料館要覧 1976 関東の古墳文化』
98. 増田逸朗 1975『千光寺』埼玉県遺跡調査会報告第27集
99. 流山市立博物館 1985『埴輪—流山の古墳文化を考える—』流山市立博物館企画展調査研究報告書3
100. 柳田敏司・菅谷浩之 1974「岡部町白山遺跡第2次調査」『第7回 遺跡発掘調査報告会』発表要旨
101. 宮崎まゆみ 1989「埴輪に表現された楽器についての調査概要—その1 弾きもの まとめ—」『武蔵野音楽大学研究紀要』第21号
102. 八木奘三郎・和田千吉・原田正彦 1902「武蔵国大里郡本郷村古墳調査報告」『東京人類学会雑誌』第17巻第193号

103. 大里村 1990『大里村史』通史編
104. 城前喜英 1977「江南村野原古墳群出土の鞆型埴輪」『いにしえ』創刊号 立正大学古代文化研究会
105. 柳田敏司 1962「おどる埴輪を出土した前方後円墳について」『埼玉研究』第6号
106. 亀井正道 1978「踊る埴輪出土の古墳とその遺物」『ミュージアム』第310号
107. 小沢国平 1964「江南・権現山埴輪窯跡」『台地研究』第14号
108. 塚田良道・新井 端 1992「人物埴輪と大陸文化」『考古学ジャール』No.349
109. 新井 端 1991「江南町千代遺跡群(姥ケ沢埴輪窯跡群) の調査」『第24回 遺跡発掘調査報告会』発表要旨
110. 塩野 博・小久保 徹 1975『埼玉県花園村黒田古墳群』
111. 小久保 徹・杉崎茂樹・若松良一・田中正夫 1988「県内主要古墳の調査(Ⅰ)」『調査研究報告』第1号 埼玉県立さきたま資料館
112. 酒井清治 1984『台耕地(Ⅱ)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第33集
113. 瀧瀬芳之 1986『小前田古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第58集
114. 瀧瀬芳之 1992「小前田2号墳出土の盾形埴輪」『研究紀要』第9号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
115. 塩野 博 1981「見目古墳群とその出土遺物」『埼玉考古』第19号
116. 川本町 1989『川本町史』通史編
117. 松村 篤 1992『箱崎古墳群第3号墳・渕ノ上遺跡発掘調査報告書』川本町教育委員会
118. 斎藤 忠他 1985『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会
119. 杉崎茂樹 1988『丸墓山古墳・埼玉1～7号墳・将軍山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第6集
120. 杉崎茂樹 1987『二子山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第5集
121. 杉崎茂樹 1986『瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第4集
122. 若松良一 1992『二子山古墳・瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第8集
123. 若松良一・日高 慎 1992「形象埴輪の配置と復原される葬送儀礼(上)—埼玉瓦塚古墳の場合を中心に—」『調査研究報告』第5号 埼玉県立さきたま資料館
124. 若松良一 1992「再生の祀りと人物埴輪—埴輪群像は殯を再現している—」『東アジアの古代文化』72号
125. 杉崎茂樹 1985『愛宕山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第3集
126. 中島利治 1989『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第7集
127. 斎藤国夫 1982『行田市北西遺跡群発掘調査報告書—池守遺跡・小敷田遺跡・酒巻古墳群—』
128. 塚田良道 1987『酒巻古墳群 昭和58年度～昭和60年度発掘調査報告書』行田市教育委員会
129. 中島洋一 1988『酒巻古墳群 昭和61年度～昭和62年度発掘調査報告書』行田市教育委員会
130. 中島洋一 1989『酒巻15号墳・稲荷通遺跡』行田市教育委員会
131. 中島洋一 1989『酒巻古墳群 昭和62年度～昭和63年度発掘調査報告書』行田市教育委員会
132. 行田市教育委員会 1964『斎条5号墳発掘調査報告—水田下にある特異な古墳—』
133. 中島洋一 1991「北大竹遺跡(若小玉古墳群)調査」『第24回 遺跡発掘調査報告会』発表要旨
134. 加須市 1981『加須市史』通史編
135. 加須市 1984『加須市史』資料編Ⅰ 原始・古代 中世・近世
136. 羽生市 1971『羽生市史』上巻
137. 田中正夫 1991『小沼耕地遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第100集
138. 春日部市 1988『春日部市史』第1巻 考古資料編
139. 岩槻市 1983『岩槻市史』考古史料編
140. 塩野 博 1977「天王山塚古墳について」『埼玉考古』第16号
141. 埼玉県教育委員会 1987『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和61年度
142. 坂戸市 1992『坂戸市史』古代史料編
143. 県立さきたま資料館・学芸課 1992「古墳群詳細分布調査 試掘・測量調査の報告」『調査研究報告』第5号
144. 長瀧歳康・田村誠・太田博之・佐藤好司 1992「児玉地域の古墳時代遺跡の発掘調査概要—古墳を中心として—」『児玉郡市における埋蔵文化財の成果と概要』
145. 美里町教育委員会 長瀧歳康氏御教示
146. 本庄高等学校考古学部 1975『いぶき—児玉郡及び周辺地域における前方後円墳の研究—』第8・9号